

# 九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— Ⅲ —

福岡県八女郡広川町所在遺跡群の調査

1 9 7 2

福岡県教育委員会

# 九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— III —

福岡県八女郡広川町所在遺跡群の調査

昭和47年1月

福岡県教育委員会

## 序

九州縦貫自動車道建設予定地内における埋蔵文化財の発掘調査は、3年目にはいっていますが、工事の着工も各地で行なわれ、いっそう緊迫した毎日であります。そうした状況のなかで、このほどようやく、報告書の第3冊目を公刊することになりました。この報告書は、1970年と1971年の2年にわたって実施しました八女郡広川町所在の群集墳の調査報告を内容とするものであります。そのほかの遺跡に関する報告書も続刊するべく努力いたします。学問研究に、教育に、本報告書を活用いただければ幸甚です。

発刊にあたり、本文中に記名した方々をはじめ、種々の協力をいただいた関係各位に深い感謝を捧げます。

昭和47年1月31日

福岡県教育委員会  
教育長 森 田 實

## 例 言

1. この報告書は、九州縦貫高速自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち、1970（昭和45）年と1971（昭和46）年にわたって発掘した八女郡広川町所在の埋蔵文化財の調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託事業として、福岡県教育委員会が実施した。その際、東海大学をはじめ各大学機関の協力もえた。
3. 本書の執筆はつぎのとおりである。
 

I	.....	西谷 正
II	.....	西谷 正
III	.....	栗原和彦
IV	.....	西谷正・石山勲・川述昭人
V	.....	西谷正・佐田茂・松本肇・石山勲・川述昭人・酒井仁夫・森田勉
VI	.....	高山 純
VII	.....	石山 勲・川述昭人
VIII	.....	石山 勲
IX	.....	佐田 茂・松本 肇
4. 石材の鑑定には、西南学院大学学術研究所所長の唐木田芳文教授をわずらわした。
5. 1970（昭和45）年に行なった九州縦貫道関係の調査は、主として、川述昭人氏の多大の援助を受けて、小川浩一郎主事・加藤久嘉主事と、西谷正・栗原和彦・石山勲・酒井仁夫各技師があたった。
6. 本書の編集は、西谷正が担当した。



## 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告一Ⅲ一

## 福岡県八女郡広川町所在遺跡群の調査

## 目 次

I	は し が き	1
II	八女郡広川町所在遺跡群の位置	5
III	鈴ヶ山遺跡の調査	9
IV	鈴ヶ山古墳群の調査	11
	1 調査の経過	11
	2 鈴ヶ山1号墳	15
	3 鈴ヶ山2号墳	40
	4 鈴ヶ山古墳群採集須恵器・土師器	66
	5 小 結	73
V	山の前古墳群の調査	75
	1 調査の経過	75
	2 山の前1号墳	81
	3 山の前2号墳	105
	4 山の前3号墳	132
	5 小 結	160
VI	平原遺跡の調査	162
	1 はじめに	162
	2 調査の経過	162
	3 縄文時代の遺物	163
	4 古墳時代の遺構と遺物	168
	5 結 語	173
VII	平原古墳群の調査	175
	1 調査の経過	175
	2 平原古墳群	176

3	平原 5 号墳	176
4	平原 3 号墳	180
5	平原 1 号墳	183
6	小 結	183
VIII	鈴ヶ山・山の前両古墳群出土須恵器にみられる篋記号について	189
IX	九州複室構造横穴式石室地名表	194

# 図 版 目 次

本文対照頁

P L . 1	(1) 鈴ヶ山古墳群遠景 (西谷正撮影) .....	5
	(2) 鈴ヶ山1号墳全景 (西谷撮影) .....	15
	(3) 鈴ヶ山2号墳全景 (西谷撮影) .....	38
P L . 2	(1) 鈴ヶ山1号墳石室と墓道 (西谷撮影) .....	16
	(2) 鈴ヶ山1号墳石室と墓壙 (西谷撮影) .....	17
P L . 3	(1) 鈴ヶ山1号墳石室全景 西から (西谷撮影) .....	17
	(2) 鈴ヶ山1号墳石室全景 東から (西谷撮影) .....	17
P L . 4	(1) 鈴ヶ山1号墳羨道閉塞状況 (西谷撮影) .....	18
	(2) 鈴ヶ山1号墳後室玄門 (西谷撮影) .....	18
P L . 5	(1) 鈴ヶ山1号墳前室全景 (石山勲撮影) .....	18
	(2) 鈴ヶ山1号墳後室敷石と北側壁 (石山撮影) .....	18
P L . 6	鈴ヶ山1号墳須恵器 (西谷撮影) .....	24
P L . 7	鈴ヶ山1号墳須恵器 (西谷撮影) .....	24
P L . 8	鈴ヶ山1号墳土師器 (西谷撮影) .....	32
P L . 9	(1) 鈴ヶ山1号墳耳環 (西谷撮影) .....	21
	(2) 鈴ヶ山1号墳鉸具など (西谷撮影) .....	23
P L . 10	(1) 鈴ヶ山1号墳鉄鍬 (西谷撮影) .....	21
	(2) 鈴ヶ山1号墳鏝 (西谷撮影) .....	21
P L . 11	(1) 鈴ヶ山2号墳石室と墓道 (西谷撮影) .....	40
	(2) 鈴ヶ山2号墳石室全景 (西谷撮影) .....	40
P L . 12	(1) 鈴ヶ山2号墳羨道閉塞状況 (西谷撮影) .....	41
	(2) 鈴ヶ山2号墳後室玄門 (西谷撮影) .....	41
P L . 13	(1) 鈴ヶ山2号墳前室と羨道閉塞 (西谷撮影) .....	41
	(2) 鈴ヶ山2号墳麓火葬墓 (西谷撮影) .....	66
P L . 14	鈴ヶ山2号墳須恵器 (西谷撮影) .....	42
P L . 15	鈴ヶ山2号墳須恵器 (西谷撮影) .....	42
P L . 16	鈴ヶ山2号墳須恵器 (川述昭人撮影) .....	43
P L . 17	鈴ヶ山2号墳須恵器 (川述撮影) .....	43
P L . 18	鈴ヶ山2号墳須恵器・土師器 (川述撮影) .....	60
P L . 19	(1) 鈴ヶ山2号墳鉄鍬・鉄刀子 (西谷撮影) .....	64
	(2) 鈴ヶ山2号墳鉄小刀・鏝・鉄斧・鉄刀子 (西谷撮影) .....	64
P L . 20	(1) 鈴ヶ山2号墳座金具・耳環・鉸具 (西谷撮影) .....	64

	(2) 鈴ヶ山2号墳鏝など(西谷撮影) .....	65
P L. 21	(1) 鈴ヶ山2号墳鉸具など(西谷撮影) .....	65
	(2) 鈴ヶ山2号墳轡など(西谷撮影) .....	65
P L. 22	(1) 山の前古墳群遠景 西南から(西谷撮影) .....	5
	(2) 山の前古墳群遠景 南から(西谷撮影) .....	5
	(3) 山の前古墳群近景 東南から(西谷撮影) .....	6
P L. 23	(1) 山の前1号墳全景 北東から(西谷撮影) .....	81
	(2) 山の前1号墳全景 北東から(西谷撮影) .....	81
P L. 24	(1) 山の前1号墳石室全景 南から(西谷撮影) .....	81
	(2) 山の前1号墳石室全景 北から(西谷撮影) .....	85
P L. 25	山の前1号墳須恵器(西谷撮影) .....	89
P L. 26	山の前1号墳須恵器・土師器(西谷撮影) .....	95
P L. 27	(1) 山の前1号墳鉄鏝(西谷撮影) .....	101
	(2) 山の前1号墳鉄鏝・鉄刀子など(西谷撮影) .....	101
P L. 28	(1) 山の前1号墳雲珠・辻金具(西谷撮影) .....	98
	(2) 山の前1号墳杏葉など(西谷撮影) .....	98
P L. 29	(1) 山の前1号墳兵庫鎖・鏝など(西谷撮影) .....	99
	(2) 山の前1号墳鉸具など(西谷撮影) .....	99
P L. 30	(1) 山の前1号墳留金具など(西谷撮影) .....	99
	(2) 山の前1号墳耳環・空玉(西谷撮影) .....	96
	(3) 山の前1号墳管玉・小玉(西谷撮影) .....	96
	(4) 山の前1号墳小玉(西谷撮影) .....	96
P L. 31	(1) 山の前2号墳全景(西谷撮影) .....	105
	(2) 山の前2号墳発掘後の全景(西谷撮影) .....	105
P L. 32	山の前2号墳石室全景(西谷撮影) .....	106
P L. 33	(1) 山の前2号墳石室と墓壙(西谷撮影) .....	106
	(2) 山の前2号墳遺物出土状況(西谷撮影) .....	107
P L. 34	山の前2号墳須恵器(西谷撮影) .....	109
P L. 35	山の前2号墳須恵器(川述撮影) .....	111
P L. 36	山の前2号墳須恵器・土師器(西谷撮影) .....	120
P L. 37	(1) 山の前2号墳鉄鏝(西谷撮影) .....	123
	(2) 山の前2号墳鉄鏝(西谷撮影) .....	123
P L. 38	(1) 山の前2号墳轡(西谷撮影) .....	126
	(2) 山の前2号墳鉸具・轡など(西谷撮影) .....	125
P L. 39	(1) 山の前2号墳鉄小刀・鉄刀子(西谷撮影) .....	125

	(2) 山の前2号墳耳環 (西谷撮影) .....	127
	(3) 山の前2号墳小玉 (西谷撮影) .....	127
	(4) 山の前2号墳紡錘車 (西谷撮影) .....	127
P L. 40	(1) 山の前3号墳遠景 (西谷撮影) .....	133
	(2) 山の前3号墳全景 (西谷撮影) .....	133
P L. 41	(1) 山の前3号墳石室全景 (西谷撮影) .....	134
	(2) 山の前3号墳石室全景 (西谷撮影) .....	134
P L. 42	(1) 山の前3号墳石室全景 (西谷撮影) .....	135
	(2) 山の前3号墳石室全景 (西谷撮影) .....	135
P L. 43	山の前3号墳石室全景 北から (西谷撮影) .....	135
P L. 44	(1) 山の前3号墳大石室全景 (西谷撮影) .....	137
	(2) 山の前3号墳小石室全景 (西谷撮影) .....	136
P L. 45	(1) 山の前3号墳石室前面の敷石と須恵器出土状況 (西谷撮影) .....	138
	(2) 山の前3号墳大石室床面遺物出土状況 (西谷撮影) .....	139
P L. 46	(1) 山の前3号墳小石室前面須恵器出土状況 (西谷撮影) .....	138
	(2) 山の前3号墳大石室銅釦出土状況 (西谷撮影) .....	141
P L. 47	山の前3号墳須恵器 (川述撮影) .....	143
P L. 48	山の前3号墳須恵器 (川述撮影) .....	144
P L. 49	山の前3号墳須恵器 (川述撮影) .....	145
P L. 50	山の前3号墳土師器 (西谷撮影) .....	156
P L. 51	(1) 山の前3号墳鉄鏃 (西谷撮影) .....	141
	(2) 山の前3号墳鉄刀子 (西谷撮影) .....	141
	(3) 山の前3号墳耳環 (西谷撮影) .....	141
	(4) 山の前3号墳小玉 (西谷撮影) .....	141
P L. 52	(1) 山の前3号墳小石室鉄刀子 (西谷撮影) .....	141
	(2) 山の前3号墳鉄鏃・耳環 (西谷撮影) .....	141
	(3) 平原3号墳小玉 (西谷撮影) .....	182
P L. 53	山の前1号墳からみた平原遺跡全景 (西谷撮影) .....	162
P L. 54	(1) 平原遺跡全景 西から (高山純撮影) .....	162
	(2) 平原遺跡全景 北から (高山撮影) .....	162
P L. 55	(1) 平原遺跡2号住居跡 (高山撮影) .....	172
	(2) 平原遺跡土器出土状況 (高山撮影) .....	171
P L. 56	(1) 平原遺跡1号住居跡 (高山撮影) .....	171
	(2) 平原遺跡鉄鏃出土状況 (高山撮影) .....	170
P L. 57	(1) 平原7号墳石室発掘の経過① (高山撮影) .....	172

	(2) 平原7号墳石室発掘の経過② (高山撮影) .....	172
P L. 58	(1) 平原7号墳石室発掘の経過③ (高山撮影) .....	172
	(2) 平原7号墳石室発掘の経過④ (高山撮影) .....	172
P L. 59	(1) 平原7号墳石室発掘の経過⑤ (高山撮影) .....	173
	(2) 平原7号墳石室発掘の経過⑥ (高山撮影) .....	173
P L. 60	(1) 平原古墳群遠景 南から (西谷撮影) .....	176
	(2) 平原古墳群近景 南から (西谷撮影) .....	176
P L. 61	(1) 平原1号墳全景 (西谷撮影) .....	183
	(2) 平原1号墳盗掘撤去後の全景 (西谷撮影) .....	183
P L. 62	平原1号墳旧地表と墓壙 西から (西谷撮影) .....	183
	(2) 平原1号墳墓壙 東から (西谷撮影) .....	183
P L. 63	(1) 平原3号墳全景 (西谷撮影) .....	180
	(2) 平原3号墳石室と墓壙 (西谷撮影) .....	180
P L. 64	(1) 平原3号墳旧地表と墓壙 西から (西谷撮影) .....	181
	(2) 平原3号墳石室と墓壙 東から (西谷撮影) .....	181
P L. 65	(1) 平原5号墳全景 (西谷撮影) .....	176
	(2) 平原5号墳旧地表と石室 (西谷撮影) .....	176
P L. 66	(1) 平原5号墳石室と墓壙 南から (西谷撮影) .....	177
	(2) 平原5号墳石室全景 北から (西谷撮影) .....	177
P L. 67	(1) 平原5号墳石室全景 西から (石山撮影) .....	178
	(2) 平原5号墳石室全景 東から (石山撮影) .....	178
P L. 68	(1) 平原5号墳石室全景 北から (石山撮影) .....	179
	(2) 平原5号墳石室玄門と側壁 南から (石山撮影) .....	179

## 挿 図 目 次

Fig. 1	九州縦貫道と古墳群の位置 (西谷正作成) .....	3
Fig. 2	古墳群の位置 (西谷作成) .....	6
Fig. 3	古墳群の位置 (西谷作成) .....	7
Fig. 4	鈴ヶ山遺跡須恵器・土師器 (栗原和彦実測製図) .....	9
Fig. 5	鈴ヶ山遺跡群分布図 (西谷作成) .....	10
Fig. 6	鈴ヶ山1号墳調査状況 (西谷撮影) .....	12
Fig. 7	鈴ヶ山2号墳調査状況 (川述昭人撮影) .....	13
Fig. 8	鈴ヶ山1号墳地形実測図 (西谷・川述実測, 西谷製図) .....	16
Fig. 9	鈴ヶ山1号墳墳丘と石室実測図 (西谷・川述実測, 西谷製図) .....	17

Fig. 10	鈴ヶ山1号墳羨道・前室実測図（石山実測製図）	18
Fig. 11	鈴ヶ山1号墳前室耳環出土状況（石山撮影）	20
Fig. 12	鈴ヶ山1号墳装身具・武器・工具・馬具実測図（石山実測製図）	22
Fig. 13	鈴ヶ山1号墳須恵器実測図①（石山実測製図）	25
Fig. 14	鈴ヶ山1号墳須恵器実測図②（石山実測製図）	26
Fig. 15	鈴ヶ山1号墳須恵器実測図③（石山実測製図）	27
Fig. 16	鈴ヶ山1号墳須恵器実測図④（石山実測製図）	28
Fig. 17	鈴ヶ山1号墳須恵器実測図⑤（石山実測製図）	29
Fig. 18	鈴ヶ山1号墳須恵器実測図⑥（石山実測製図）	30
Fig. 19	鈴ヶ山1号墳須恵器ヘラ記号拓影（石山手拓）	31
Fig. 20	鈴ヶ山1号墳土師器実測図①（石山実測製図）	33
Fig. 21	鈴ヶ山1号墳土師器実測図②（石山実測製図）	34
Fig. 22	鈴ヶ山1号墳石室構築図（石山作成）	36
Fig. 23	鈴ヶ山2号墳地形実測図（西谷・川述実測，西谷製図）	38
Fig. 24	鈴ヶ山2号墳墳丘と石室実測図（西谷・川述実測，西谷製図）	39
Fig. 25	鈴ヶ山2号墳須恵器実測図①（川述実測製図）	43
Fig. 26	鈴ヶ山2号墳須恵器実測図②（川述実測製図）	45
Fig. 27	鈴ヶ山2号墳須恵器実測図③（川述実測製図）	47
Fig. 28	鈴ヶ山2号墳須恵器実測図④（川述実測製図）	48
Fig. 29	鈴ヶ山2号墳須恵器実測図⑤（川述実測製図）	51
Fig. 30	鈴ヶ山2号墳須恵器実測図⑥（川述実測製図）	53
Fig. 31	鈴ヶ山2号墳須恵器実測図⑦（川述実測製図）	55
Fig. 32	鈴ヶ山2号墳須恵器実測図⑧（川述実測製図）	57
Fig. 33	鈴ヶ山2号墳須恵器実測図⑨（川述実測製図）	58
Fig. 34	鈴ヶ山2号墳土師器実測図①（川述実測製図）	61
Fig. 35	鈴ヶ山2号墳土師器実測図②（川述実測製図）	62
Fig. 36	鈴ヶ山2号墳装身具・武器・工具など実測図（石山実測製図）	64
Fig. 37	鈴ヶ山2号墳馬具実測図（石山実測製図）	64—65
Fig. 38	鈴ヶ山2号墳麓火葬墓須恵器実測図（川述実測製図）	66
Fig. 39	鈴ヶ山2号墳麓火葬墓実測図（西谷実測製図）	67
Fig. 40	鈴ヶ山古墳群採集須恵器実測図（川述実測製図）	68
Fig. 41	鈴ヶ山古墳群採集須恵器・土師器実測図（川述実測製図）	71
Fig. 42	山の前1号墳調査状況（西谷撮影）	76
Fig. 43	山の前2号墳調査状況（西谷撮影）	77
Fig. 44	山の前3号墳調査状況（西谷撮影）	78

Fig. 45	山の前1・2号墳地形実測図(松本肇・西谷・川述実測, 西谷製図) .....	82
Fig. 46	山の前1・2号墳墳丘と石室実測図(松本・西谷・川述実測, 西谷製図) .....	83
Fig. 47	山の前古墳群分布図(西谷作成) .....	84
Fig. 48	山の前1号墳墓壙と側壁(西谷撮影) .....	85
Fig. 49	山の前1号墳前室床面須恵器出土状況(西谷撮影) .....	86
Fig. 50	山の前1号墳遺物出土状況実測図(森田勉・川述実測, 西谷撮影) .....	86—87
Fig. 51	山の前1号墳須恵器実測図①(森田実測製図) .....	89
Fig. 52	山の前1号墳須恵器実測図②(森田実測製図) .....	91
Fig. 53	山の前1号墳須恵器ヘラ記号拓影(森田手拓) .....	93
Fig. 54	山の前1号墳土師器実測図(松本実測製図) .....	95
Fig. 55	山の前1号墳装身具実測図(西谷・中岡昇実測, 西谷製図) .....	96
Fig. 56	山の前1号墳馬具実測図(西谷・中岡実測, 西谷製図) .....	98
Fig. 57	山の前1号墳馬具その他実測図(西谷・中岡実測, 西谷製図) .....	99
Fig. 58	山の前1号墳武器実測図(川述・中岡実測, 西谷製図) .....	101
Fig. 59	山の前1号墳石器実測図(酒井仁夫実測製図) .....	103
Fig. 60	山の前2号墳遺物出土状況実測図(佐田茂・松本実測, 西谷製図) .....	107
Fig. 61	山の前2号墳遺物出土状況(西谷撮影) .....	108
Fig. 62	山の前2号墳須恵器実測図①(川述実測製図) .....	109
Fig. 63	山の前2号墳須恵器実測図②(川述実測製図) .....	111
Fig. 64	山の前2号墳須恵器実測図③(川述実測製図) .....	114
Fig. 65	山の前2号墳須恵器実測図④(川述実測製図) .....	117
Fig. 66	山の前2号墳須恵器ヘラ記号拓影(石山手拓) .....	119
Fig. 67	山の前2号墳土師器実測図(川述実測製図) .....	121
Fig. 68	山の前2号墳武器実測図(川述実測製図) .....	123
Fig. 69	山の前2号墳馬具その他実測図(川述実測製図) .....	125
Fig. 70	山の前2号墳馬具実測図(川述実測製図) .....	126
Fig. 71	山の前2号墳装身具実測図(川述実測製図) .....	127
Fig. 72	山の前3号墳大石室墳丘土層図(西谷実測, 石山製図) .....	133
Fig. 73	山の前3号墳地形実測図(西谷・川述実測, 西谷製図) .....	134
Fig. 74	山の前3号墳墳丘と石室実測図(西谷・川述実測, 西谷製図) .....	135
Fig. 75	山の前3号墳小石室閉塞石実測図(川述実測, 石山製図) .....	137
Fig. 76	山の前3号墳小石室遺物出土状況実測図(川述実測, 西谷製図) .....	138
Fig. 77	山の前3号墳大石室遺物出土状況実測図(西谷・石山実測, 石山製図) .....	139
Fig. 78	山の前3号墳小・大石室装身具・武器その他実測図(石山実測製図) .....	140—141
Fig. 79	山の前3号墳須恵器実測図①(石山実測製図) .....	143



Fig. 80	山の前3号墳須恵器実測図②(川述実測製図) .....	144
Fig. 81	山の前3号墳須恵器実測図③(川述実測製図) .....	146
Fig. 82	山の前3号墳須恵器実測図④(石山実測製図) .....	149
Fig. 83	山の前3号墳須恵器実測図⑤(石山実測製図) .....	150
Fig. 84	山の前3号墳須恵器実測図⑥(石山実測製図) .....	151
Fig. 85	山の前3号墳須恵器実測図⑦(石山・高橋章実測, 石山製図) .....	152
Fig. 86	山の前3号墳須恵器実測図⑧(石山実測製図) .....	152—153
Fig. 87	山の前3号墳須恵器実測図⑨(石山実測製図) .....	154
Fig. 88	山の前3号墳須恵器実測図⑩(石山実測製図) .....	154—155
Fig. 89	山の前3号墳須恵器実測図⑪(石山実測製図) .....	155
Fig. 90	山の前3号墳土師器実測図①(川述実測製図) .....	156
Fig. 91	山の前3号墳土師器実測図②(川述実測製図) .....	158
Fig. 92	平原遺跡D 2—H 2 東壁断面実測図(高山純実測製図) .....	162—163
Fig. 93	平原遺跡遺構配置図(高山実測製図) .....	163
Fig. 94	平原遺跡石器実測図①(井上裕弘実測製図) .....	164
Fig. 95	平原遺跡石器実測図②(井上実測製図) .....	165
Fig. 96	平原遺跡石器実測図③(井上実測製図) .....	166
Fig. 97	平原遺跡石器実測図④(井上実測製図) .....	167
Fig. 98	平原遺跡石器実測図⑤(井上実測製図) .....	167
Fig. 99	平原遺跡石器実測図⑥(井上実測製図) .....	168
Fig. 100	平原遺跡土器実測図(井上実測製図) .....	169
Fig. 101	平原遺跡土製品・鉄器・ガラス玉実測図(井上実測製図) .....	170
Fig. 102	平原遺跡1号住居跡実測図(高山実測製図) .....	171
Fig. 103	平原遺跡2号住居跡実測図(高山実測製図) .....	172
Fig. 104	平原古墳群分布図(石山作成) .....	174—175
Fig. 105	平原古墳群遺構配置図(西谷・川述実測, 石山製図) .....	177
Fig. 106	平原5号墳構造実測図(西谷・川述・石山実測, 石山製図) .....	178
Fig. 107	平原5号墳閉塞石断面実測図(石山実測製図) .....	179
Fig. 108	平原3号墳構造実測図(西谷・川述実測, 石山製図) .....	181
Fig. 109	平原3号墳須恵器実測図(石山実測製図) .....	182
Fig. 110	平原3号墳ガラス玉実測図(川述実測製図) .....	182
Fig. 111	平原1号墳構造実測図(西谷・川述実測, 石山製図) .....	184
Fig. 112	鈴ヶ山2号墳・山の前3号墳の須恵器ヘラ記号拓影(石山手拓) .....	190

## 付 図 目 次

Fig. ①	鈴ヶ山1号墳石室実測図・墳丘断面実測図（西谷正・石山勲・川述昭人・酒井仁夫実測，石山製図）	16
Fig. ②	鈴ヶ山2号墳石室実測図（西谷・川述実測，西谷製図）	38
Fig. ③	鈴ヶ山2号墳墳丘断面実測図（西谷・川述実測，西谷製図）	40
Fig. ④	山の前1号墳石室実測図（川述・森田勉実測，西谷製図）	81
Fig. ⑤	山の前1号墳墳丘断面実測図（西谷・松本肇実測，西谷製図）	81
Fig. ⑥	山の前2号墳石室実測図（佐田茂・松本実測，西谷製図）	105
Fig. ⑦	山の前2号墳墳丘断面実測図（西谷・松本・佐田実測，西谷製図）	105
Fig. ⑧	山の前3号墳石室実測図（西谷・川述実測，石山製図）	133
Fig. ⑨	山の前3号墳墳丘断面実測図（西谷・石山・川述実測，石山製図）	133
Fig. ⑩	山の前3号墳大石室実測図（西谷実測，石山製図）	137
Fig. ⑪	山の前3号墳小石室実測図（川述実測，石山製図）	136
Fig. ⑫	平原1号墳実測図（西谷・川述実測，石山製図）	183
Fig. ⑬	平原3号墳実測図（西谷・川述実測，石山製図）	180
Fig. ⑭	平原5号墳石室実測図（石山実測製図）	176
Fig. ⑮	平原5号墳墳丘断面実測図（石山実測製図）	176
Fig. ⑯	平原7号墳石室実測図（高山純実測製図）	172

## 表 目 次

Tab. 1	遺跡一覧表（西谷正作成）	1
Tab. 2	調査一覧表（西谷作成）	4
Tab. 3	鈴ヶ山1号墳耳環計測表（石山勲作成）	21
Tab. 4	鈴ヶ山1号墳須恵器法量分布表（石山作成）	23
Tab. 5	鈴ヶ山1号墳ミニチュア土器計測表（石山作成）	34
Tab. 6	鈴ヶ山2号墳須恵器計測表（川述昭人作成）	59
Tab. 7	山の前1号墳ヘラ記号番号・土器実測図番号対照表（森田勉作成）	94
Tab. 8	山の前1号墳管玉計測表（西谷・中岡昇作成）	96
Tab. 9	山の前1号墳丸玉計測表（西谷・中岡作成）	97
Tab. 10	山の前2号墳須恵器計測表（川述作成）	118
Tab. 11	山の前2号墳耳環計測表（川述作成）	128
Tab. 12	山の前3号墳大石室耳環計測表（石山作成）	141

Tab. 13	山の前3号墳大石室鉄鏃計測表（石山作成）	141
Tab. 14	山の前3号墳大石室短刀計測表（石山作成）	141
Tab. 15	山の前3号墳須恵器計測表（石山作成）	147
Tab. 16	平原3号墳ガラス玉計測表（川述作成）	183
Tab. 17	平原古墳群石室規模一覧表（石山作成）	186
Tab. 18	須恵器ヘラ記号一覧表（石山作成）	189

# I は し が き

九州縦貫高速自動車道建設に伴う発掘調査の経緯は、1970年（昭和45）3月に発刊した『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—I—』のなかで、くわしく記述している。ここで報告する遺跡は、1970年の3月に調査した山の前1・2号墳、5月～7月にかけて調査した鈴ヶ山古墳群、7月に調査した平原遺跡、そして、10月～11月に調査した平原古墳群と山の前3号墳である。これらの遺跡は、1970年前後4回にわたって発掘調査したものであるが、八女郡の同じ広川町に所在することや、ほぼ同じ年代を示すことなどから1冊にまとめて公刊することにした。

番号	遺 跡 名	所 在 地
追1	鈴ヶ山1号墳	福岡県八女郡広川町大字新代字鈴ヶ山 1279
追2	鈴ヶ山2号墳	福岡県八女郡広川町大字新代字鈴ヶ山 1277・1278・1279
追3	鈴ヶ山遺跡	福岡県八女郡広川町大字新代字鈴ヶ山 1277—2
60	山の前1号墳	福岡県八女郡広川町大字広川 498—1・490—2
60	山の前2号墳	同上
追4	山の前3号墳	同上
61	平 原 遺 跡	福岡県八女郡広川町大字広川字平原 688・708・2680
追5	平原1号墳	福岡県八女郡広川町大字広川字鶴田414
追6	平原3号墳	同上
追7	平原5号墳	同上

Tab. 1 遺 跡 一 覧 表

調査は、福岡県教育委員会文化課の技師が主としてあつたが、平原遺跡については、東海大学の、山の前1・2号墳については、九州大学考古学研究室の協力をうけた。各遺跡のそれぞれの調査期間、担当者、協力地元教育委員会などは、次表Tab.2のとおりである。なお、石室の石材などの鑑定には、西南学院大学教授の唐木田芳文氏をわずらわした。

なお、これら遺跡の調査関係者はつぎのとおりである。

## 総括

教育長	吉 久 勝 美	教育次長	森 田 実
文化課課長	杉 原 信 彦	文化課課長補佐	岩 下 光 弘
文化課課長技術補佐	渡 辺 正 気	企画主査	藤 井 功

## 庶務会計

文化課庶務係長	赤 司 岩 雄	文化課庶務係主事	小 川 浩一郎
文化課庶務係主事	加 藤 久 嘉		

**発掘調査員**

東海大学教授	宮 本 延 人	東海大学講師	高 山 純
九州大学大学院学生	佐 田 茂	九州大学研究生	松 本 肇
	川 述 昭 人		
文化課技師	西 谷 正	文化課技師	栗 原 和 彦
文化課技師	石 山 勲	文化課技師	酒 井 仁 夫

**発掘調査補助員**

福岡教育大学学生	森 田 勉	同	光 枝 房 敏
同	江 浜 明 徳	同	筒 井 亀
同	重 住 昌 志	同	鹿 島 英 世
同	中 尾 徹		

**日本道路公団福岡支社**

支社長	川 崎 偉志夫	副支社長	松 平 肇
総務部長(前任)	後 藤 真 一	総務部長	白 石 孔 美
総務課長(前任)	森 弘 一 典	総務課長	内 野 由 夫
総務課長代理	篠 原 敬 幸	総務課員(前任)	本 宮 邦 雄
総務課員(前任)	中 野 敏 明	総務課員	瀬 戸 口 寛 治

**同久留米工事事務所**

所長	北 村 照 喜	工事長	矢 部 昌 夫
庶務課長(前任)	村 田 健 治	庶務課長	御 竿 良 彦
用地課長	石 井 芳 徳	用地課員	淵 脇 志 水
用地課員	小 池 勝 盛		

**広川町教育委員会**

教育長	中 村 二 郎	坂 井 喜平次
-----	---------	---------

**広川町役場**

建設課長	丸 山 統左右	建設課課長補佐	小 椎 尾 進
------	---------	---------	---------

**地元協力者**

野 田 俊 雄	園 田 忠
野 田 静 幸	田 中 勝 記
川 島 利 雄	

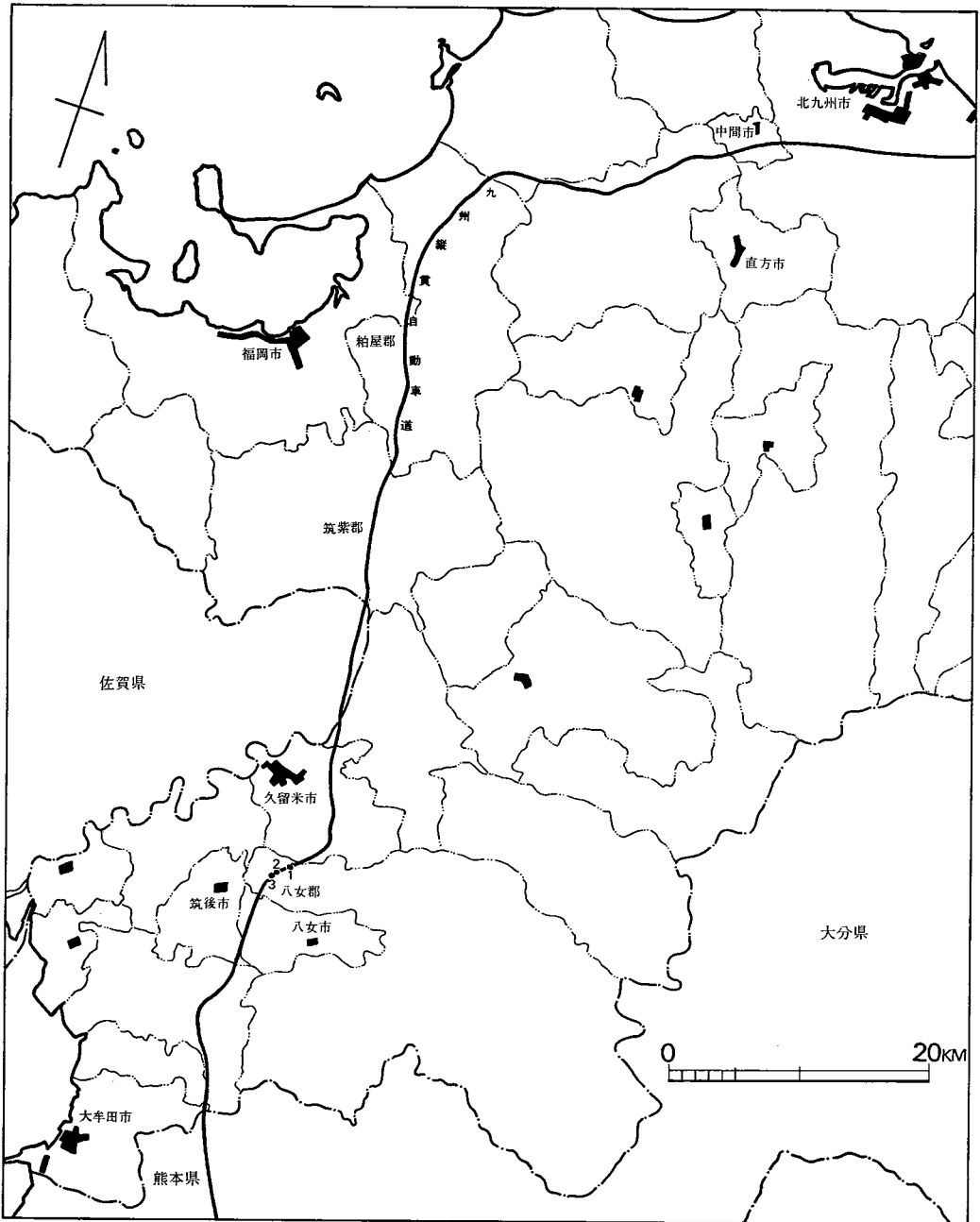


Fig. 1 九州縦貫道と古墳群の位置 (縮尺約1/54,600)

1. 鈴ヶ山古墳群    2. 山の前古墳群    3. 平原古墳群

遺 跡 名	調 査 期 間	調 査 担 当 者	調 査 補 助 員	地 元 教 育 委 員 会
鈴ヶ山1号墳 鈴ヶ山2号墳 鈴ヶ山墳跡	昭和45年 5月20日 ～ 昭和45年 7月10日	川 述 昭 人 西 谷 正 栗 原 和 彦 石 山 勲		広川町教育委員会
山の前1号墳 山の前2号墳	昭和45年 3月1日 ～ 昭和45年 3月26日	佐 田 茂 松 本 肇 川 述 昭 人 西 谷 正	福岡教育大学学生	
山の前3号墳	昭和45年 10月2日 ～ 昭和45年 11月6日	川 述 昭 人 西 谷 正 石 山 勲 栗 原 和 彦	福岡教育大学学生	
平原遺跡	昭和45年 7月20日 ～ 昭和45年 7月31日	宮 本 延 人 高 山 純 酒 井 仁 夫	東海大学学生	
平原1号墳 平原3号墳 平原5号墳	昭和45年 10月1日 ～ 昭和45年 10月31日	西 谷 正 石 山 勲 川 述 昭 人	福岡教育大学学生	

Tab. 2 調 査 一 覧 表

## II 八女郡広川町所在遺跡群の位置

福岡県八女郡広川町所在の遺跡は、こん回報告するものだけで、3か所ある。

福岡県八女郡は、筑紫平野のほぼ中央にあたり、広大な筑後平野が久留米付近で挟まってくびれるが、その東側の丘陵地帯に南接した地域にあたる。八女郡といえば、筑紫君磐井に代表される筑紫国造家の墓域として、八女丘陵の古代的景観が想起される。東西7,8 kmにわたって連なる八女丘陵には、『筑紫国風土記』逸文にみえる磐井の墳墓として比定される岩戸山古墳をはじめ、9基の前方後円墳を含む多くの古墳が营造されている。

この八女丘陵の北側で、広川が形成する幅1 km前後の沖積地を挟んで、いくつもの低い丘陵地が連続する。

平原遺跡は、そのような一つの丘陵地と、当条集落の東側の独立的な丘陵地とを結ぶ、架橋のような低い台地の上に立地する。そこは、福岡県八女郡広川町大字広川字平原 688, 708, 2680番地に属する。古墳群は広川という比較的広い大字のうち「平原」という小字にあたるので小字名をとって、「平原遺跡」とよぶことにした。

平原古墳群は、平原遺跡に混在する年代の古い平原7号墳を含めて、その東側に続く丘陵地の頂上部から傾斜面にわたって营造されている。丘陵地にあるものは、現在、6基を数える。頂上部にある平原6号墳は、規模も最大である。立地や規模を相対的に考えると、6基の群集墳のなかでは盟主的な存在である。このたびの調査対象は、九州縦貫自動車道の用地内にある3基の円墳群であって、そこは、福岡県八女郡広川町大字広川字鶴田 414番地に属する。ちなみに、平原古墳群のうち、調査しなかった他の2基の円墳の規模を列記すると、平原2号墳は直径約10.4m、平原4号墳は直径約10m、そして、平原6号墳は直径約16mである。

山の前古墳群は、やはり、一つの小独立丘陵状を呈する山丘に立地していて、平原古墳群からは、北方へ約300mのところにあたる。そこは、当条の集落からは、東方へ約600mのところにあたる。そして、福岡県八女郡広川町大字広川498-1、および、490-2番地に属する。「山の前」の小字にあたるので、小字名をとって、「山の前古墳群」と名づけた。小独立丘陵状の小丘に築造された山の前古墳群は、5基の円墳からなる。

標高約41mの丘頂に営なまれた山の前1号墳は、最高所を占めて、もっとも見晴しがよいところであって、規模も最大で、盟主的な存在である。山の前1号墳に東接し、少し低く下がって山の前2号墳がある。さらに、北に隣接して、広くてゆるやかな傾斜地に山の前3号墳が营造されている。そのほか、分布図に示すように、もう2基の円墳がみられる。いずれも盗掘をうけて内部主体がいちじるしく損傷しているようである。こん回、道路敷地にあたって、消滅



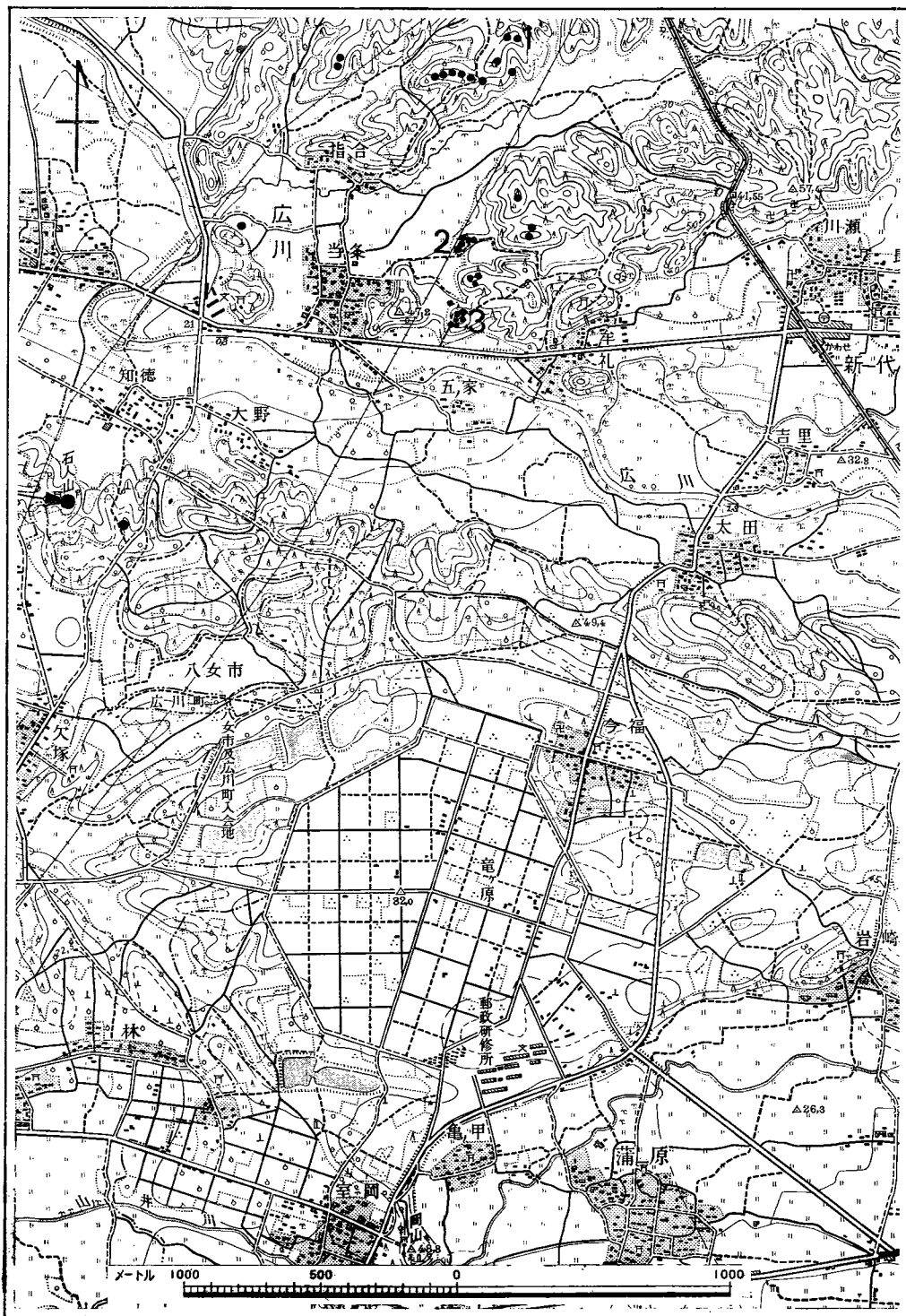


Fig. 2 古墳群の位置 (縮尺 $\frac{1}{25,000}$ ) 1. 鈴ヶ山古墳群 2. 山の前古墳群 3. 平原古墳群



Fig. 3 古墳群の位置 (縮尺 $\frac{1}{15,000}$ )

する3基の円墳について発掘調査を行なったものである。

なお、この周辺の丘陵地帯の尾根上には、円墳が点々と分布していて、この付近一帯が一大共同墓地であることがわかる。そのほとんどが、横穴式石室を内蔵するものであるが、破壊がひどい。山の前古墳群のすぐ東南の谷間には、谷間をせきとめて溜池がみられる。大正3(1914)年5月に建てられた「猪ヶ迫溜池之碑」によると、明治27(1894)年ごろに、この付近で早魃が起こったために、溜池の建設が計画され、明治30(1897)年に竣工している。このような事情を考慮すると、古墳群の盗掘も、溜池の井堰の用材採取を目的として、行なわれたことが推測される。加えて、遺跡からもっとも近い位置にある当条集落をみると、屋敷地の土台や橋に、古墳石材と同じものがある、そのための用材採取も頻繁であったことがうかがわれる。

鈴ヶ山古墳群も、上に述べたように、一大共同墓地を構成する一つの支群である。山の前古墳群から北方をみると、谷間に営なまれている狭い水田地帯を挟んで、低い丘陵地が連続する。山の前古墳群から北方約650mにあつて、東西方向に延びる丘陵の脊稜部に七つ塚といわれる円墳群がみられ、西から、姫塚・大塚という名称をもち、横穴式石室を包蔵している。そこから、さらに東北方へ約200mを測る丘陵地の一隆起部に、営造された同じような横穴式石室を内部主体とする円墳がみられた。それが鈴ヶ山1号墳と鈴ヶ山2号墳である。そこは、指合の集落から東北方へ約800mのところにあつて、それぞれ、福岡県八女郡広川町大字新代字鈴ヶ山1279番地、および、1277・1278・1279番地に属する。「鈴ヶ山」の小字にあたるので、小字名をとって、「鈴ヶ山古墳群」と名づけた。鈴ヶ山1号墳と鈴ヶ山2号墳は、ほぼ似た立地にあるが、標高約51.5mの丘頂にある鈴ヶ山1号墳は最高所を占めて、石室の構築も念入りである。ここから東へ約20mのところにある鈴ヶ山2号墳も、同じような丘頂部にあるが、鈴ヶ山1号墳よりは、若干低い位置にある。石室の玄門の用材は比較的大きい。ここから約50m西南方へ尾根つづきの脊稜部で、もう1基の円墳がみられる。この尾根を南に約80m行った、傾斜面の下縁に近い位置に、さらに1基の円墳があつて、都合、4基からなる支群を形成している。

鈴ヶ山遺跡は、古墳のある丘陵の西南麓で、水田に面したところにあたる。土地所有者の才所徳次氏から、窯跡があるという報告を得てトレンチを設定することになった。弥生式土器・土師器・須恵器など若干数量を検出したが、2次的な推積で性格は不明である。福岡県八女郡広川町大字新代字鈴ヶ山1277-2番地に属する。

こん回の九州縦貫道用地内の調査を契機として、広川町の広川から新代にわたる広大な低丘陵地帯が、大規模な群集墳地域であることが注意されるにいたったわけである。岩戸山古墳をはじめとする著名な前方後円墳を擁する八女丘陵の北方にあつて、筑紫国造家と密接な関連をもつであろう群集墳の保存とこんどの調査が期待されるのである。

(西谷 正)

### III 鈴ヶ山遺跡の調査

鈴ヶ山1・2号墳の発掘調査中の5月28日に、土地所有者の才所徳次氏によって、近くに窯跡があったことが知らされた。そこが、九州縦貫道の建設予定路線内にあることが確認されたため、県教育委員会は日本道路公団福岡支社と連絡をとり、その了解のもとに鈴ヶ山1・2号墳の調査と併行して発掘調査を実施した。

遺跡は鈴ヶ山2号墳の東南東45mほど、古墳の立地する丘陵の東南斜面の谷間にあり、すでに開墾によって旧状は失なわれていた。

発掘調査は、1970（昭和45）年6月24日と25日の2日間費した。まず、樹木を伐採した後、谷間を切断するように幅1m、長さ6mのトレンチを設定した。このトレンチによって遺構を認めたらば、拡張する計画であった。しかし、調査は窯跡であるという遺構を未確認のまま梅雨期の湧水にさまたげられ、土師器片、須恵器片などポリ袋1袋分を得て、地表下70cmほどで終了することにした。出土遺物は、ほとんどが小破片で、土層の状況は周囲の高いところからの流れ込みと判断できるものであった。

出土遺物のうち、大部分は土師器で、杯・甕・甑などがあり、少量の須恵器には、大形の甕・杯・高台付碗などである。Fig. 4は、そのうちの主なものである。

1・2は、須恵器の蓋で宝珠形つまみがつくものと思われる。3も須恵器の杯で、退化した感じの高台が貼りつけられている。4は、土師器のコップ状の土器で、外面にススの付着した部分もあるが、内面はなでつけられている。5は、把手で貼りつけたものか、はめ込んだものかはわからない。復元径22cmほどの甕であろう。この他に須恵器では、ひくい口縁をもつ杯、つまみのつかない蓋と思われるもの、内側が同心円の叩打文で外側がハケ目の甕の破片、土師器では、荒いハケ目の甕、杯と思わる小破片などがあつた。

以上が、鈴ヶ山遺跡の概要である。遺物の時期が一定していないようであるが、古墳時代終末のものが多かった。（栗原和彦）

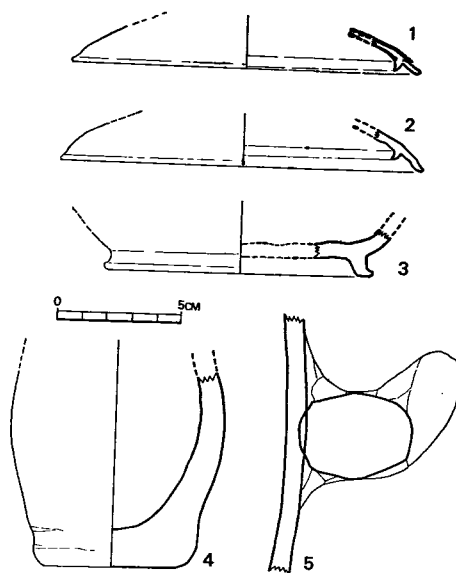


Fig. 4 鈴ヶ山遺跡須恵器・土師器（縮尺1/4）

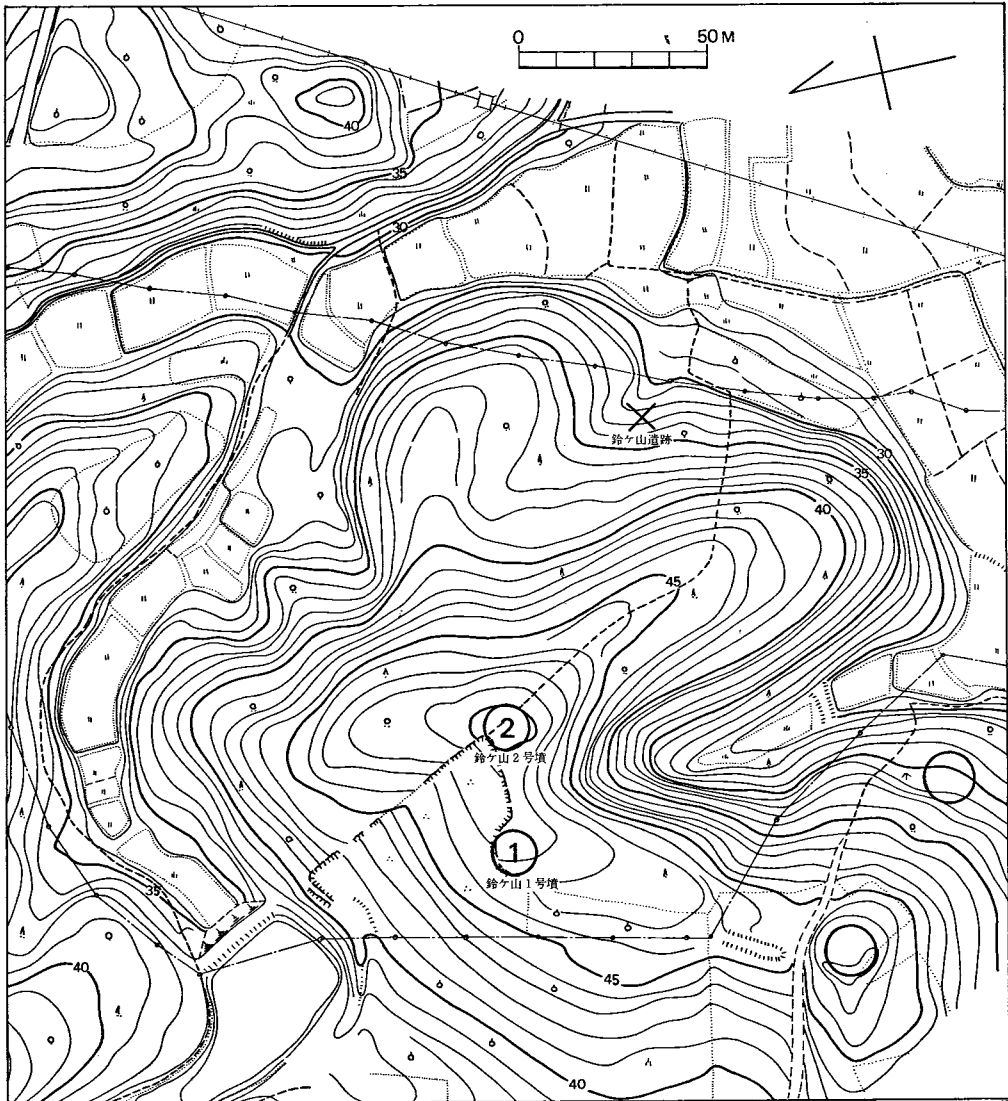


Fig. 5 鈴ヶ山遺跡群分布図 (縮尺 $\frac{1}{2,000}$ )

## IV 鈴ヶ山古墳群の調査

### 1 調査の経過

九州縦貫道が通過する広川町新代にサービスエリアが設置されることになり、その用地内の分布調査を行なったところ、2基の円墳を認めたので、追加調査を実施した。

この地域には、ほかにもいくつかの円墳が知られるので、鈴ヶ山古墳群と名づけた。そのうち、用地内に入るものは、鈴ヶ山1号墳と鈴ヶ山2号墳であった。ほぼ同時に調査を実施した。調査団は、つぎのとおりであるが、福岡県教育庁文化課技師の栗原和彦・酒井仁夫技師の来援も受けた。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	西谷 正
	同	石山 勲
		川述 昭人
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	小川 浩一郎
	同	加藤 久嘉

鈴ヶ山1号墳の調査は1970(昭和45)年5月20日から、7月10日までの延39日間を費した。以下に、調査日誌によって経過をたどってみよう。

5月20日(水) 雨のち晴。発掘用器材を現地に運搬し、発掘の準備を行なう。

5月21日(木) 晴。樹木の伐採作業を行なう。

5月22日(金) 晴。樹木の伐採作業と併行して、測量を開始する。まず、三角点から、絶対高を移動し、墳丘地形実測に入る。

5月23日(土) 小雨。天候不順のため、作業休止。

5月24日(日) 作業休止。

5月25日(月) 小雨。遠景および近景の写真撮影を行なう。

5月26日(火) 晴。発掘開始。盗掘墳の清掃から着手する。

5月27日(水) 晴。盗掘墳の清掃を続行したが、木の根が多く、作業は困難であった。

5月28日(木) 晴。盗掘墳の清掃を続行すると、墓壙(掘り方)の一部にあたったが、胴張りのある石室はいちじろしく破壊されていた。

5月29日(金) 曇。盗掘墳の清掃を進めると、副室構造の前室や羨道部が現われた。

5月30日(土) 晴。石室プランを追求する。同時に、石室の長軸と直交するトレンチを南・北に設定する。

5月31日(日) 小雨。作業休止。

6月1日(月) 曇。石室プランを追求し、底面にいたって、耳環・須恵器などを検出する。北トレンチでは地山に達する。

6月2日(火) 晴。前室および羨道部において遺物を検出。南・北トレンチを掘り上げる。



墓壇の検出 1970.6.16

Fig. 6 鈴ヶ山1号墳調査状況

6月3日(水) 晴のち雨。前室の清掃と羨道部を追求する。

6月4日(木) 雨。羨道部を迫及したが、雨が激しくなり、作業を休止する。補足資材を搬入する。

6月5日(金) 晴。羨道前方に墓道が現われる。須恵器片多数出土する。

6月6日(土) 晴。墓道を追求する。

6月7日(日) 作業休止。

6月8日(月) 晴。墓道を追求する。玄室奥壁の抜き跡を検出する。九州大学鏡山猛教授ら教官・学生2, 30名の見学者があった。

6月9日(火) 晴。墳丘の北西部を除去しはじめると、須恵器・土師器が出土する。前室の遺物を撮影して、とりあげる。

6月10日(水) 雨。作業休止。

6月11日(木) 曇のち雨。墳丘北西部の除去を続行する。玄室の奥壁抜き跡付近を追求する。午後、雨が激しくなり、作業を休止する。

6月12日(金) 曇時々小雨。墳丘北西部の除去を続行する。石室内を清掃する。

6月13日(土) 晴。石室内外を清掃した後に、石室全景を写真撮影する。

6月14日(日) 作業休止。

6月15日(月) 曇時々雨。墳丘北西部の墓壇(掘り方)を追求する。東トレンチを新たに設定する。

6月16日(火) 晴。東・南トレンチで墓壇(掘り方)を検出するとともに、墳丘北西部の盛土部分を除去する。

6月17日(水) 晴のち曇。南・北西トレンチの土層図を作成する。墳丘北西部の盛土部分を除去すると、直線的な墓壇(掘り方)線が現われる。

6月18日(木) 雨。石室北側西半部の墓壇(掘り方)を検出し終る。

6月19日(金) ~22日(月) 雨天などのため作業を休止する。

6月23日(火) 曇。南・東トレンチの土層を実測する。石室と墓壇(掘り方)の関係を示す写真を撮影する。

6月24日(水)曇時々小雨。石室平面実測のための割りつけを行なう。

6月25日(木)雨。休業休止。

6月26日(金)曇時々小雨。石室平面を実測する。トレンチ・墓壙などの平板測量を行なう。

6月27日(土)曇時々晴。石室平面実測を続行する。

6月28日(日)晴。石室平面の実測と、側面図作成のための割りつけを行なう。

6月29日(月)雨。作業休止。

6月30日(火)雨のち曇。昨日来の雨で、石室内に水がたまり、実測できないので作業を休止する。

7月1日(水)晴。石室平面の実測と側壁の割りつけを続行する。

7月2日(木)晴。石室平面図を作成する。

7月3日(金)晴。石室側壁側面を実測する。

7月4日(土)晴のち雨。側壁側面図を作成する。

7月5日(日)曇時々雨。作業休止。

7月6日(月)晴。側壁側面図を作成する。

7月7日(火)曇一時雨。側壁側面図と、墓壙断面図を作成する。

7月8日(水)晴。石室断面図を作成するいっぽう、玄門石の掘り方などを追求する。

7月9日(木)晴。墓壙の実測をもって調査を終了し、石材を採取する。あわせて、調査器材や出土遺物を運搬する。

7月10日(金)晴。鈴ヶ山古墳群周辺の分布調査を行なって、調査を終了する。

鈴ヶ山2号墳の調査は、鈴ヶ山1号墳と併行して実施したが、1970(昭和45)年5月20日から7月10日まで延38日間を費した。以下に、調査日誌によって経過をたどってみよう。

5月20日(水)雨のち晴。発掘用器材を現地に運搬し、発掘の準備を行なう。

5月21日(木)晴。樹木の伐採作業を行なう。

5月22日(金)晴。樹木の伐採作業と併行して、測量を開始する。まず、三角点から、絶対高を移動し、墳丘地形実測に入る。

5月23日(土)小雨。樹木の伐採作業を続行する。

5月24日(日)作業休止。

5月25日(月)小雨。遠景および近景の写真撮影を行なう。樹木の伐採作業を終了する。



石室の検出 1970.6.2



石材の除去 1970.6.3

Fig. 7 鈴ヶ山2号墳調査状況



- 5月26日（火）晴。地形実測を行なう。
- 5月27日（水）～28日（木）鈴ヶ山1号墳に作業を集中するため、作業を休止する。
- 5月29日（金）曇。盗掘壙の清掃をもって、発掘に着手する。
- 5月30日（土）晴。盗掘壙の清掃を続行する。
- 5月31日（日）小雨。作業休止。
- 6月1日（月）曇。玄室の側壁の一部を検出したが破壊がひどい。羨道部を追求して、表土をめくると、須恵器が多量に出土する。
- 6月2日（火）晴。石室の平面を追求する。石室の長軸に直交するトレンチを墳丘の南と北に設定する。
- 6月3日（水）晴のち雨。石室内に落ちこんだ石材を除去しつつ、玄室の平面と底面を追求する。墳丘南トレンチでは地山に達する。
- 6月4日（木）雨。作業休止。
- 6月5日（金）晴。複室構造であることがわかり、前室と羨道部の側壁、および、前室底面などを追求する。
- 6月6日（土）晴。前室および羨道前方の墓道を追求する。
- 6月7日（日）作業休止。
- 6月8日（月）晴。玄室の北側壁と底面ならびに墓道を追求する。
- 6月9日（火）晴。墳丘前面の表土を除去して、葺石の有無を検討し、須恵器を検出する。
- 6月10日（水）雨。作業休止。
- 6月11日（木）曇のち雨。前室底面および墓道を追及する。午後、雨が激しくなり、作業を休止する。
- 6月12日（金）曇時々小雨。墓道を追求する。墳丘東トレンチを設定する。その東端において、楕円形の小竪穴と、内部から歴史時代の須恵器を検出する。
- 6月13日（土）晴。石室の内外を清掃し、写真撮影を行なう。
- 6月14日（日）作業休止。
- 6月15日（月）曇時々雨。作業休止。
- 6月16日（火）晴。石室の全景写真撮影を行なう。
- 6月17日（水）～22日（月）雨天や鈴ヶ山1号墳に主力を集中したことなどの理由で、作業を休止する。
- 6月23日（火）曇。墳丘東・南・北トレンチにおいて、墓壙（掘り方）を追求する。東トレンチ内の楕円形小竪穴を掘りあげる。
- 6月24日（水）曇時々小雨。墳丘東・北トレンチで墓壙検出作業を続行し、東トレンチ内の小竪穴を実測する。午後から石室実測のための割りつけを行なう。
- 6月25日（木）雨。作業休止。
- 6月26日（金）曇時々小雨。トレンチと墓壙を平板で測量する。
- 6月27日（土）曇時々晴。墳丘東・南・北トレンチの土層図を作成し、石室実測のための割りつけを行なう。羨道閉塞石の実測に着手する。
- 6月28日（日）晴。石室平面を実測する。

- 6月29日(月)雨。作業休止。
- 6月30日(火)雨のち曇。昨日来の雨で、石室内に水がたまり、実測できないので作業を休止する。
- 7月1日(水)晴。石室平面と奥壁を実測する。側壁割りつけを行なう。
- 7月2日(木)晴。石室側面図を作成する。
- 7月3日(金)晴。石室側面図の作成を続行する。
- 7月4日(土)晴のち雨。石室側面図の作成を続行する。
- 7月5日(日)曇時々雨。玄門石の掘り方検出と実測を行なう。
- 7月6日(月)晴。前室と羨道部の側面図を作成する。
- 7月7日(火)曇一時雨。側壁側面の実測を終え、前室玄門石などの掘り方を検出する。
- 7月8日(水)晴。墓道などの実測と、石材の採取を行なって、調査を終了する。
- 7月9日(木)晴。調査器材や出土遺物を運搬する。
- 7月10日(金)晴。鈴ヶ山古墳群周辺の分布調査を行って、調査を終了する。(西谷 正)

## 2 鈴ヶ山1号墳

### 墳丘(付図Fig.①)

伐採直後のみかけの墳丘規模は、径17m前後であった(Fig.8)。Fig.8で明らかのように墳丘は盛土からなり、現存する最も厚い所でも1.15mと低いが、石室は地山深く穿たれた墓坑内に構築されているので、盛土は最小限石室上部を覆う程度で事足りたと見られる。土盛作業は入念に行なわれ、特に石室裏込にはCとDとを互層に積む。

当初の規模であるが、まず南側においては、石室中軸線より6mの地点で地山の傾斜が少しく異なり、盛土の範囲はこの屈折点までである。この傾斜の小さな変換が、墳丘構築に先行する地山整地作業によるものであるか否かは不明である。東側では、中軸線とA-A'との交点から6.6mの地点が一応墳丘裾と考えられる。北側は既に切断されており確定できないが、断面の状況は、現存部分が裾部に近いことを示している。一方、東側の裾から羨道先端までは12mであり、中軸線上に中心Oを仮設して半径6mの円を描くと、上記と矛盾しない結果が得ら

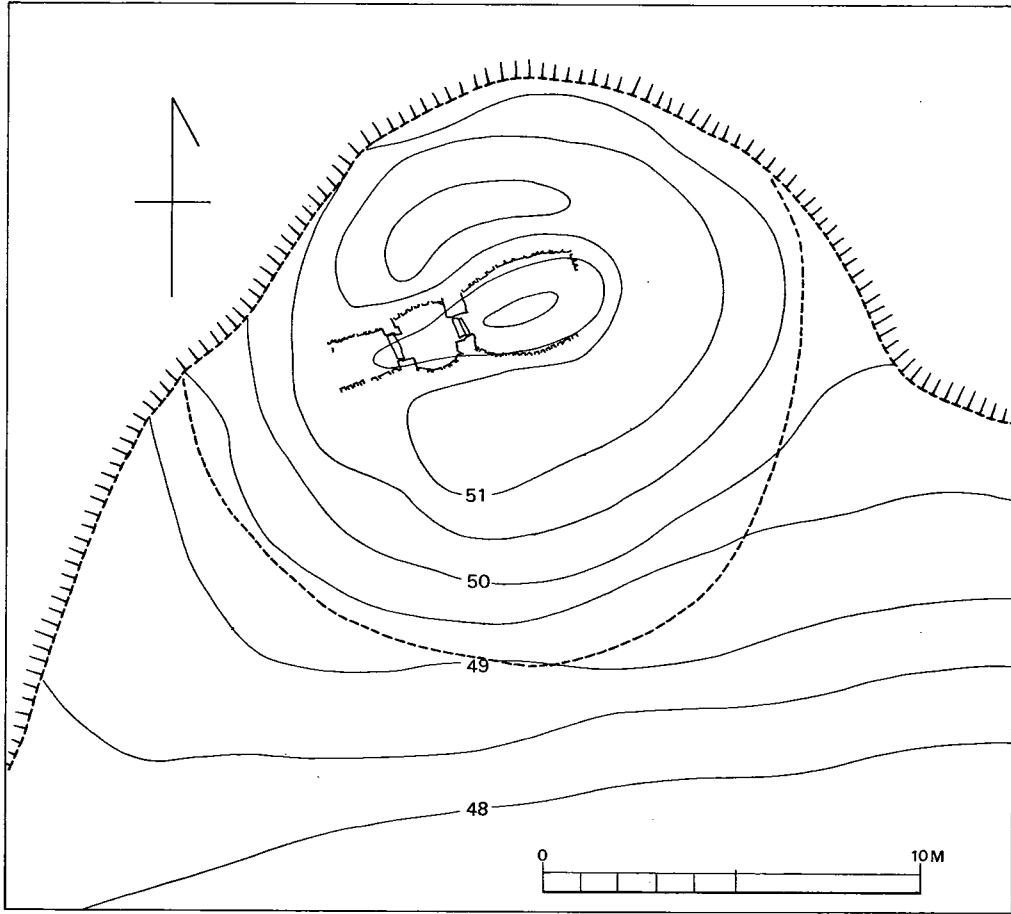


Fig. 8 鈴ヶ山1号墳地形実測図 (縮尺 $\frac{1}{200}$ )

れる。従って盛土の範囲はともかく、墳丘規模は直径12m前後と考えられる。

#### 石室 (付図Fig.①)

内部主体は、主軸を $N71^{\circ}E$ にとり、南西に開口する全長6.8mの複室式横穴式石室で、前・後室ともに胴張りを有するプランである。奥壁の位置は、墳丘中心にはない。

石室は、地山を1.4~1.6mの深さに穿ち、 $7.9 \times 4.3m$  (いずれも上端で)の長方形プランとした墓坑底に構築されているが、石室中軸線は墓坑中軸線とは一致せず、左側に偏している。墓坑奥壁の中央上部には、奥行20cm前後、幅3mにわたる落ちこみがある<sup>①</sup>。石室構築に際しては、まず奥壁の腰石 (現存せず)・各袖石を立てて石室プランの基本を決定しており、これらの石を立てるにあたっては、墓坑底をさらに一段深く掘りこみ、割石を詰めて根固めとしている。墓坑底には、坑底を水平・平坦に保ち、かつ敷石を安定させるために土が搬入されているが、その範囲は前室までである。周壁は、片岩割石小口積によって築かれているが、壁面への

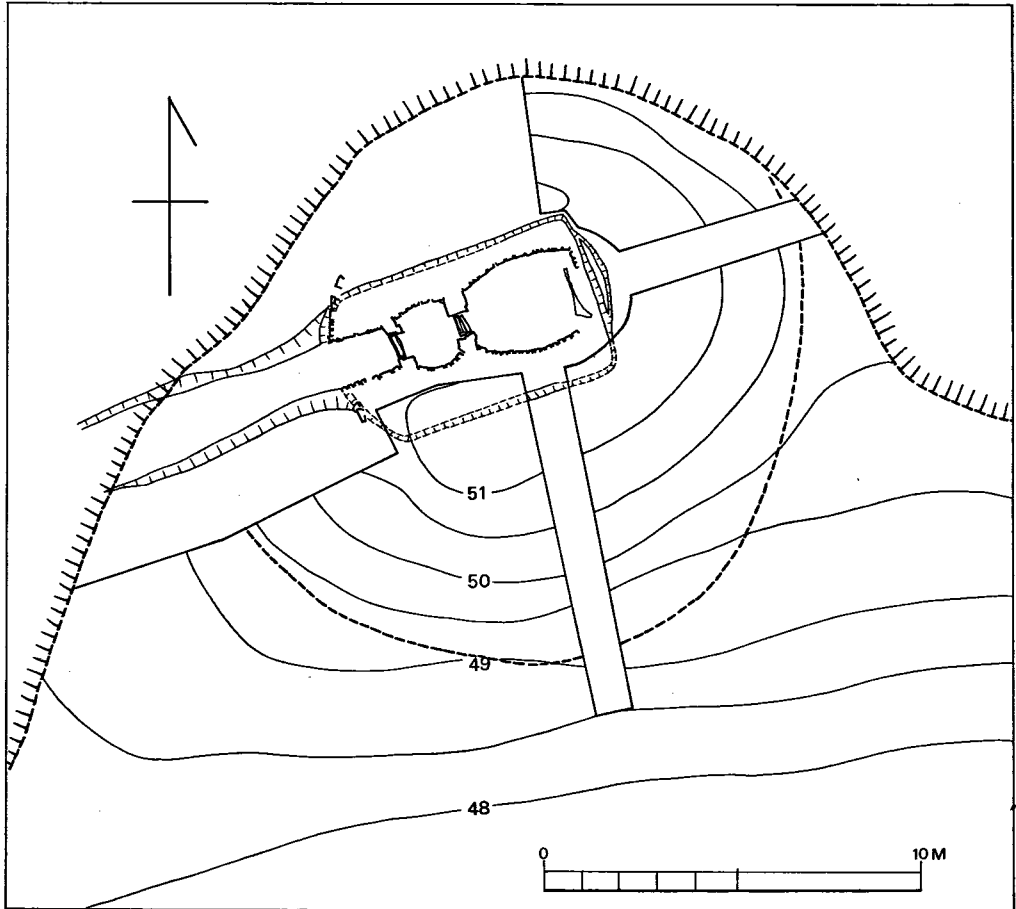


Fig. 9 鈴ヶ山1号墳墳丘・石室実測図（縮尺 $\frac{1}{200}$ ）

赤色顔料の塗彩は認められない。

後室は、長さ3mで、奥壁から1.25m付近で幅が最大となり、2.44mを測る。奥壁部幅は2m前後と見られ、玄門部寄では1.36mである。奥壁は、胴張りを有する横穴式石室に通例みられるように、中央に大石を立てて鏡石とし、両端を割石小口積としたものと見られるが、左コーナーの一部の小口積と中央部に浅い掘りこみと根固石若干とが現存するのみである。両側壁最下段の石は、他の石材と同大あるいは寧ろ稍小形のものが使用されているが、これは胴張りの緩やかな曲線を出すために選択されたものであろう。周壁の各石は、略水平に保たれているが、左壁の玄門寄では、玄門側の端が少しく下っているがこれは奥壁側から石積が行なわれたことによるのであろう。持ち送りの度合は、当然ながら中央部よりも玄室・奥壁寄の方が大きい。石を積み重ねるにあたっては、随所に割石細片を利用して各石相互の接着面積を大きくしており、まさに隙間なくの感を受ける。従って、使用された石材には、幾星霜を経ながらも、

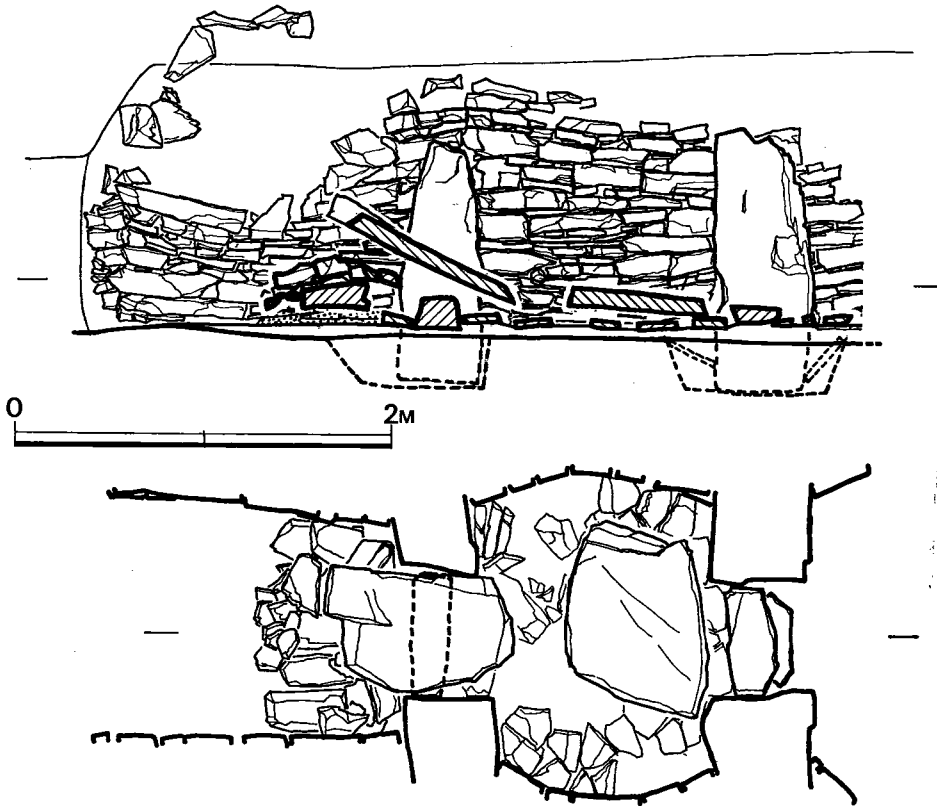


Fig. 10 鈴ヶ山1号墳羨道・前室実測図（縮尺 $\frac{1}{40}$ ）

殆ど亀裂を生じていない。側壁の現存最上段は床面より1mで、当初は2m前後の高さであったと推定される。

玄門は、左右に高さ1.08m（実高1.4m）の大石を立て、その間の床面には扁平割石2枚からなる仕切石を置く。袖石間は上部で45cm、下部で56cmと狭い。楣石は現存しないが、袖石直上に架構されていたとすれば仕切石までの高さは0.95m前後と極めて低いものとなり、後述する前室楣石より低くなり、あるいは袖石上になお数段割石が積まれたものと思われる。

前室は、玄門の仕切石と前室の仕切石との内側の長さが1.46m、幅は玄門寄で1.4m、前室袖石寄で稍狭まって1.36m、最大幅は奥壁から4.2mのところでは1.7mとなる。胴張の度合は後室のそれより強く、また左右で異なる。側壁の構築手法は後室のそれと同じく割石小口積であるが、左壁では両袖石寄に比較的大き目の石が用いられ、かつ羨門袖石寄の方が僅かに高い傾向を見せるのは、作業者が右利であったことを示すのであろうか。右壁も全体的には各石とも水平位に保たれているが、玄門袖石寄に大き目の石が用いられているのは、玄門袖石側から右

利の作業者によって石積が行なわれたことを示すと思われる。現存最上段は1.2mであり、床面には扁平割石が全面に敷かれている。

前室袖石は、左側1m(実高1.2m)、右側0.84m(実高1.1m)と玄門袖石よりひとまわり小形で、床面には厚さ19cmの石を仕切石として置く。左右とも袖石上に3~4段の小口積された割石が現存しており、当初はこれらの上に楣石が架構されていたのであろうが、現存しない。袖石間は、上部で45cm、下部で60cm強と狭い。

羨道は、前室仕切石より1.7m強続き、これは奥壁から6.8mの地点にあたる。幅は袖石寄で1.1m、先端部で1.25mと若干広がる。左壁では楣石の架構に備えてか、袖石寄の方が大き目の石が積まれている。右壁では前室のそれと全く同様であり、前室と羨道に関する限り、右壁の方が整った感を受けるのは、作業者の相違によるものであろうか。

羨道先端では、控積の先端の処理の状況を観察できた。控積先端は逆ハの字状のプランで、墓壇壁に沿って左側では長さ約1.8m強で一部墓壇外に達し、右側では1.3m弱続くが前者ほど連続性はない。墓壇外では地山直上ではなく、盛土上に置かれており、この石を露出させる意図はなかったものと思われるが、墓壇内の控積の面については、これを露出させていたと推定される。

羨道前面には、地山を幅1.9~2.4mにわたって掘り割った浅い墓道<sup>③</sup>が続き、7m強まで確認されている。傾斜面に向う先端部に行くにつれて床面は漸次下降する。

閉塞は、前室袖石・後室袖石各前面の2カ所で行なわれている。前室袖石前面に、割石群とこの上に長さ1.1m、最大幅62cm、厚10cm弱の板石(A)1枚が倒れかかっており、また玄門寄の前室床面には間層をはさんで長さ72cm、幅90cm前後、厚10cmの板石(B)1枚が倒れており(付図Fig. ⑩)、これは閉塞に伴うものと見られる。割石群は、前室仕切石から20cm強、袖石から15cm程の距離をおいて小口を揃えて積まれており、仕切石と割石群との空間に当初板石が立てられていたことを示唆し、前述の割石群は、この裏込の下部と見做される。板石A・Bについては、出土状況から上記の閉塞に伴うものとは考えられず、玄門外側での閉塞に用いられたとする方が妥当である。すなわち、Aの幅の不足、Bの長さの不足を、Bをまず袖石にもたせかけ、次にAをBにもたせかけることによってうまく処理したものであろう。この場合Aの先端は、前室側壁現存最上段よりも低くなる。

#### 遺物 (Fig. 12~22)

前・後室ともに盗掘を受け、出土遺物で原位置を保つとみられるのは皆無に近い。後室からは堆積土中から耳環3個を検出したにとどまる。前室では、中軸線から左壁にかけての床面近くから馬具・鉄鏃・鏑等の鉄器が出土している。これらを後室からの移動とする積極的理由はない。耳環 (Fig. 12-2・3) は、前室の右袖石近くの敷石上から、原位置を保つと思われる状態で出土 (Fig. 11) し、前室への遺体埋葬の可能性を示す。

羨道部では当然ながら、何らの出土遺物もみない。墓道および墓道左側（西側）肩部から墳丘西裾部にかけて——以下墳丘左側と略す——多量の須恵器・土師器・ミニチュア土器が出土した。墳丘左側では地山直上にはなく、堆積土中から検出されている。墓道内検出土器の一部には、墳丘左側から転落したものも含まれるが、大甕等の大形器種を含みながら原位置を保つものではなく、数次にわたって供献されたと思われるこれらの土器群について、セット関係・並置の規則性等を明らかにすることはできなかった。



Fig. 11 鈴ヶ山1号墳前室耳環出土状況

装身具	耳環	7	
武器	鉄鏃	多数	
	鏑	1	
工具	刀子	1	
馬具	轡	2対分	
	鉸具	5	
不明鉄器		1	
土器	須恵器	143個体以上	
	杯（蓋・身）	111個体以上	
	高杯	12個体	
	甕	4	
	平瓶	2	
	壺	1	
	短頸壺	1	
	提瓶	5	
	広口壺	3	
	合付碗	1	
	甕	3	
	土師器	高杯	
		盆	3
		壺	3

埴 1  
その他 3

耳環 (Fig. 12-1~7) いずれも、中実の銅胎に金箔を置く。計7個出土しており、各部の計測値・出土位置は、

	外 経	厚	出 土 位 置
1	18 × 17	6.5 × 4	墓道先端
2	20 × 19	6 × 4	前室袖石寄
3	21 × 20	7 × 4.5	〃
4	22 × 20	8 × 5	後室玄門付近
5	25 × 24	7 × 5.5	〃
6	26.5 × 24.5	7.5 × 6	後室
7	28 × 25	8.5 × 6	墓道石室寄黒色土中

Tab. 3 鈴ヶ山1号墳耳環計測表 (単位はミリメートル)

である。2と3とは出土状態より一対とみなされるが、これら以外は計測値が少しずつ異なり各々異なるセットに属する。従って本墳出土の耳環は6セットと思われ、一応埋葬遺体は最低6体と考えられる。<sup>④</sup>

鉄鏃 (Fig. 12-8~15) 8・9は、ともに円頭広根斧箭式に属する。<sup>⑤</sup>8は最大幅40mm、身長74mm、9はひとまわり大きく、最大幅は推定で41mm、身長78mmである。10は、広鋒両丸造三角形式に属し、最大幅24.5mm、身長48mmであり、11・12・13は片丸造棘篋被鏃箭式に属するが、11と12とでは身部の大きさが異なる。14・15は茎・篋被ともに比較的太身であり、別型式の鉄鏃に属するものと思われる。

鏢 (Fig. 12-17) 最大幅57mm、長75mm、厚4mmの倒卵形のものである。これが装着されたと思われる刀身は検出されていない。

鉄製素環鏡板付轡 (Fig. 12-26・27) 26の立聞上部は欠失している。最大幅は75mmで銜と引手の一部が銹着している。27は、最大幅82mm前後とみられ、立聞断面形も26とは異なり、別のセットに属する。

鉸具 (Fig. 12-21~23・25) 計4個体出土したが、形状・大きさは各々異なる。22は、径5×6mmの鉄棒を使用し、最大幅44mm、全長63mmである。23は、全長79mm、最大幅は52mm前後と推定される。25は、8×6mmの太さで、4例中では最大と考えられる。21は、全長72mm前後か。いずれも、刺金は、一端を折り曲げてつけられている。

引手? (Fig. 12-28) 7×8mmの太身で、両端を欠失している。

その他 18は、鏡板の一部か。19・20は、銜あるいは引手の一部と思われる。24は、鉸具とするには刺金をとりつける余裕はなく、また引手壺とも考えられない。<sup>⑥</sup>用途は不明。



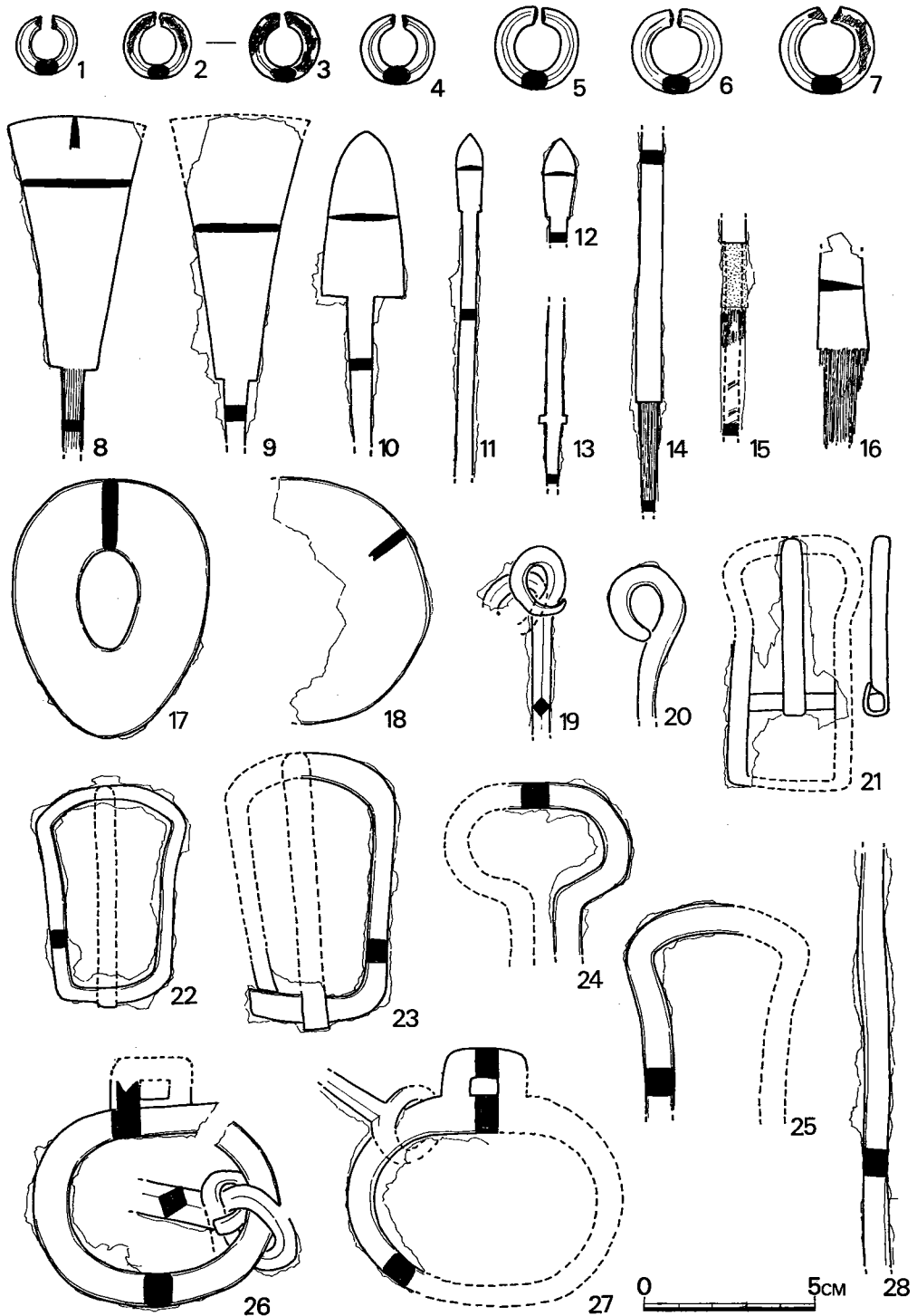


Fig. 12 鈴ヶ山1号墳装身具・武器・工具・馬具実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）

須恵器 (Fig. 13-1~Fig. 20-143)

夥しい数量である。以下出土須恵器について略述するが、図示に際しては、頂・底・体部の篋削りは破線で、カキ目調整痕は密実線でそれぞれ表わした。篋記号については、Ⅷ章にて他墳出土例と一括して取り扱うこととする。

蓋 口径および器高から、3類に大別される (Tab. 4参照—上部の×印)

I類 口径11.8~13.1cm。器高3.8~4.9cm。

II類 口径11.1~11.6cm。器高3.4~3.6cm。

III類 口径9.6~10.2cm。器高2.8~3.1cm。

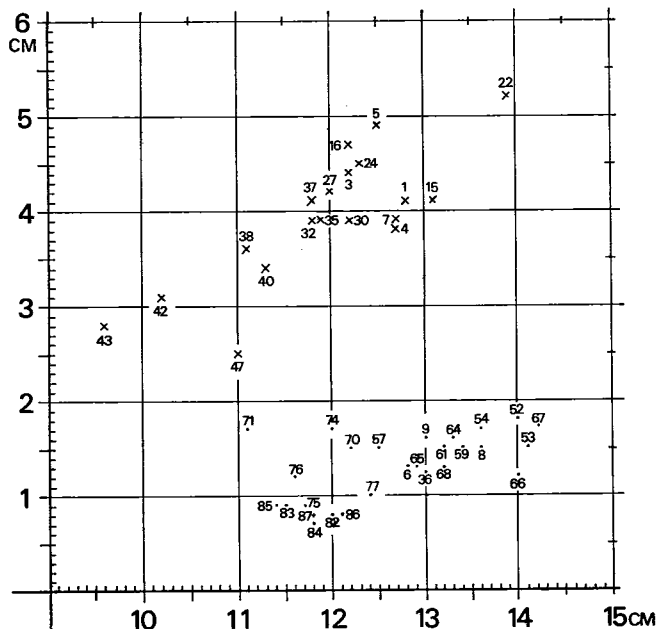
数量的には、I類が大多数を占め、II・III類は比較的少ない。また墓道内と墳丘北側とで、頻度が特に異なるという傾向はない。これは身の場合とも共通する。

I類では、口唇部の形状は多様であるが、内面がそがれ、肩部に沈線の入る例が多い。22は、もっとも器高が高く、器表は全面にわたってナデ調整が施されている。篋削り痕は不明瞭で、焼成甘く淡茶褐色を呈し、37と同様他例とは、焼成・成形ともに異なる。37の底部には、7~8mm幅の粘土紐を時計まわりに巻き上げた痕跡が明瞭に認められる。頂部は、篋削り後各方向から調整されている。焼成は甘く淡黄褐色を呈し、脆い。

II類では、口縁部が直立に近くなり、38・40では、頂部に篋削りが認められる。

III類も、II類と同様に口縁部が直立し、42では、口唇内面がそがれている。この他47は、出土品中では唯一の撮みを有する例である。カキ目調整痕は2条まわり、内面にはナデ調整が施されている。篋削りは施されず、またこれとセットとなるものは検出されていない。

形態上の相違の他に、製作技法上でも、I類では頂部から体部の半ばにまで篋削りが施されるのに対して、II・III類では頂部周辺に限られるか、あるいは全く施されないというちがいがあ



Tab. 4 鈴ヶ山1号墳須恵器量分布表

杯身 蓋と同様に、口径および蓋受け部の立上りから3類に大別される (Tab. 4 参照一下半の・印)。

I類 径12.8~14.2cm。立上り1.2~1.8cm。

II類 径11.1~12.4cm。立上り1~1.7cm。

III類 径11.4~12.1cm。立上り0.7~0.9cm。

I類は、蓋のI類とセットになるものが多く、篋削りも蓋と同様に底部から体部の半ば近くまで施されている。

II類中の71・95は、立上り自体はI類に近いが稍内傾気味であり、かつ浅い。71は、他例とは異なり、底部の篋削りは施されない。74は、浅く、立上りもI類とは趣きを異にする。76・77は、篋削りの範囲もI類に近く、焼成もまた同様であるが、稍厚手で、胎土は細粒を多く含み砂質である。

III類は立ち上りの低いグループであるが、底部の調整法に2傾向があり、78・82・84では篋削りが底部およびその周辺に施されるが、83・85・86は全く施されていない。従って、身においても既述した蓋と同様に、篋削りの範囲がI類からIII類にいたるにつれて狭まる傾向が認められる。

この他に、立ち上りが極端に高い48・49の例がある。出土数が僅少で、いずれも小片であるので口径は復元できないが、立ち上りが高い割に体部の張りは弱く、器高は低い。

高杯 (Fig. 17-89~100) 有蓋と無蓋とに分れる。前者には、89・90の2例があり、いずれもセットとなるべき蓋は検出されていない。89の脚部は現存しないが、杯部口径14.3cmで、90より深い。体部には6条の沈線が入り、極めて特徴的である。90は器高17cm前後。杯部は歪んでおり、口径15.4cm前後とみられる。篋削りも施されず、脚部に比して調整は雑である。脚部は高さ13cm、底径14.5cm。内面に絞り目あり。

無蓋の例は、91~100の10個体で、器高・脚端の形状より4類に分れる。I類は器高13~14cm前後の中形品。91は、器高14.4cm、杯部の口径11.9cm、高さ4.6cmで、底部は1cmの厚さがある。脚部は中段に2条の沈線をいれ、以上には絞り目が認められるが、カキ目調整後、指頭にてこれを消そうとしている。底径は10.2cm。92は、杯部が水平にとりつけられておらず、器高は13~13.5cmである。杯部の口径10.5cm、高さ4.4cm。5条の沈線が入り、91同様体部下半はカキ目調整がなされている。脚部底径9.8cm、内外に絞り目あり。II類は、後述するIII・IV類と同様に小形品に属するが、底径はI類を稍下まわる程度である。いずれも脚部のみしか現存せず、93の底径は9.5cmで、2条の沈線が入り、厚手である。98・99は同工であるが個体は異なる。99の底径は10cm。3者とも砂質で、焼成は甘い。III類は、II類よりさらにひとまわり小形である。94は、杯部が傾いてとりつけられており、器高は9.6~10cm。杯部口径は復元で8cm、深さ3.7cmで、体部に2条の沈線が入り、底部はカキ目調整。脚部底径7cm、内面に

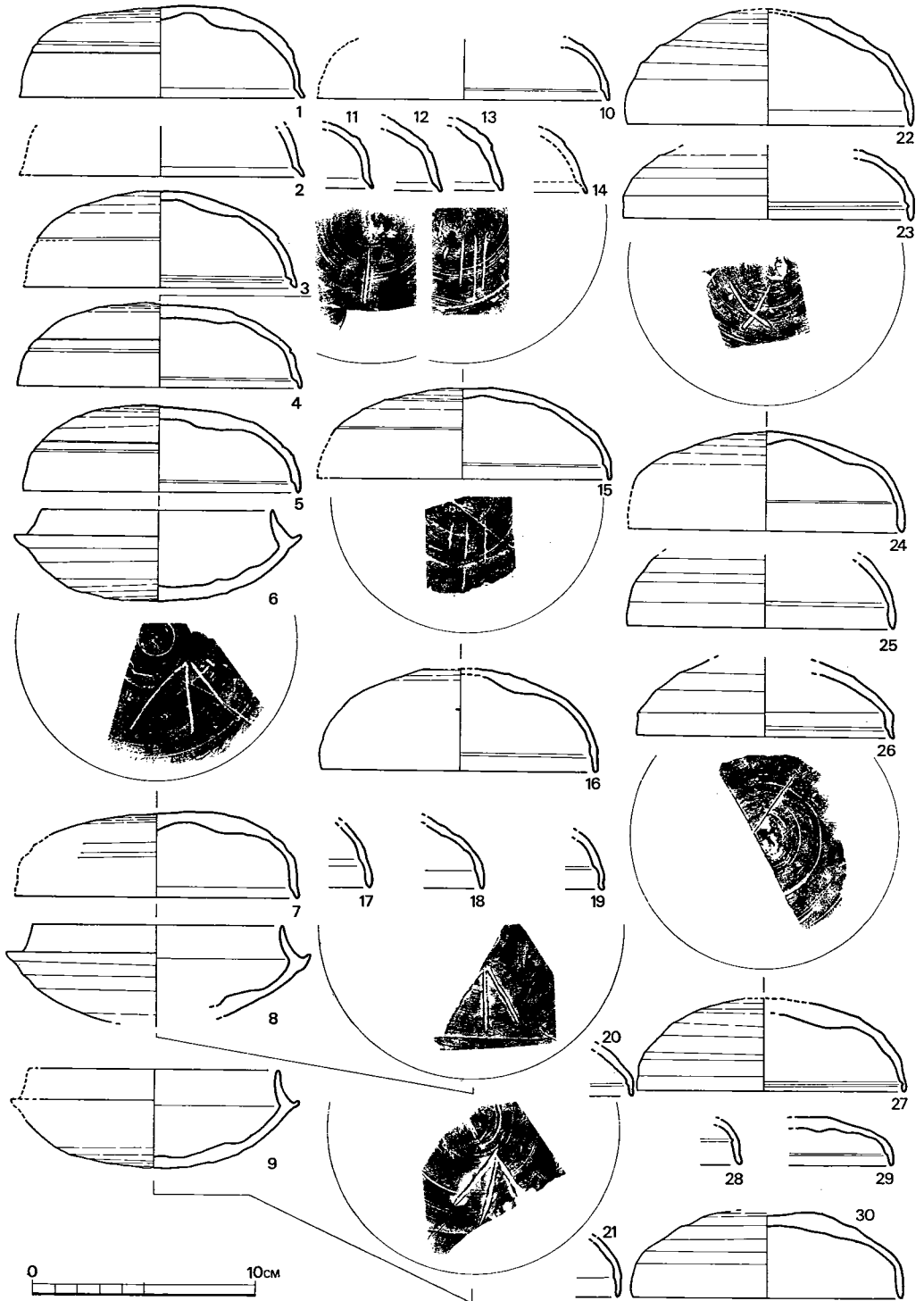


Fig. 13 鈴ヶ山1号墳須恵器実測図① (縮尺 $\frac{1}{4}$ )

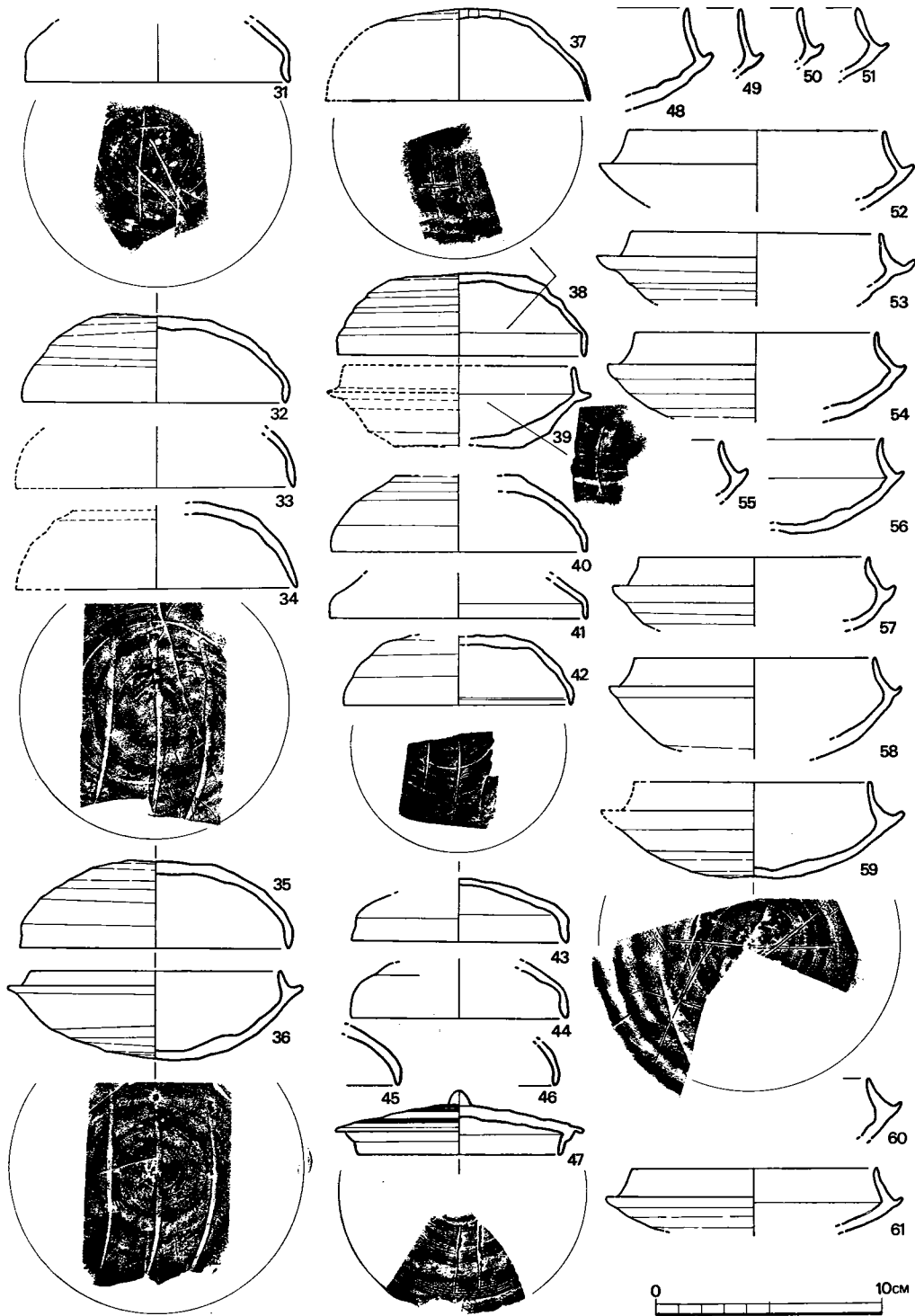


Fig. 14 鈴ヶ山1号墳須恵器実測図② (縮尺1/3)

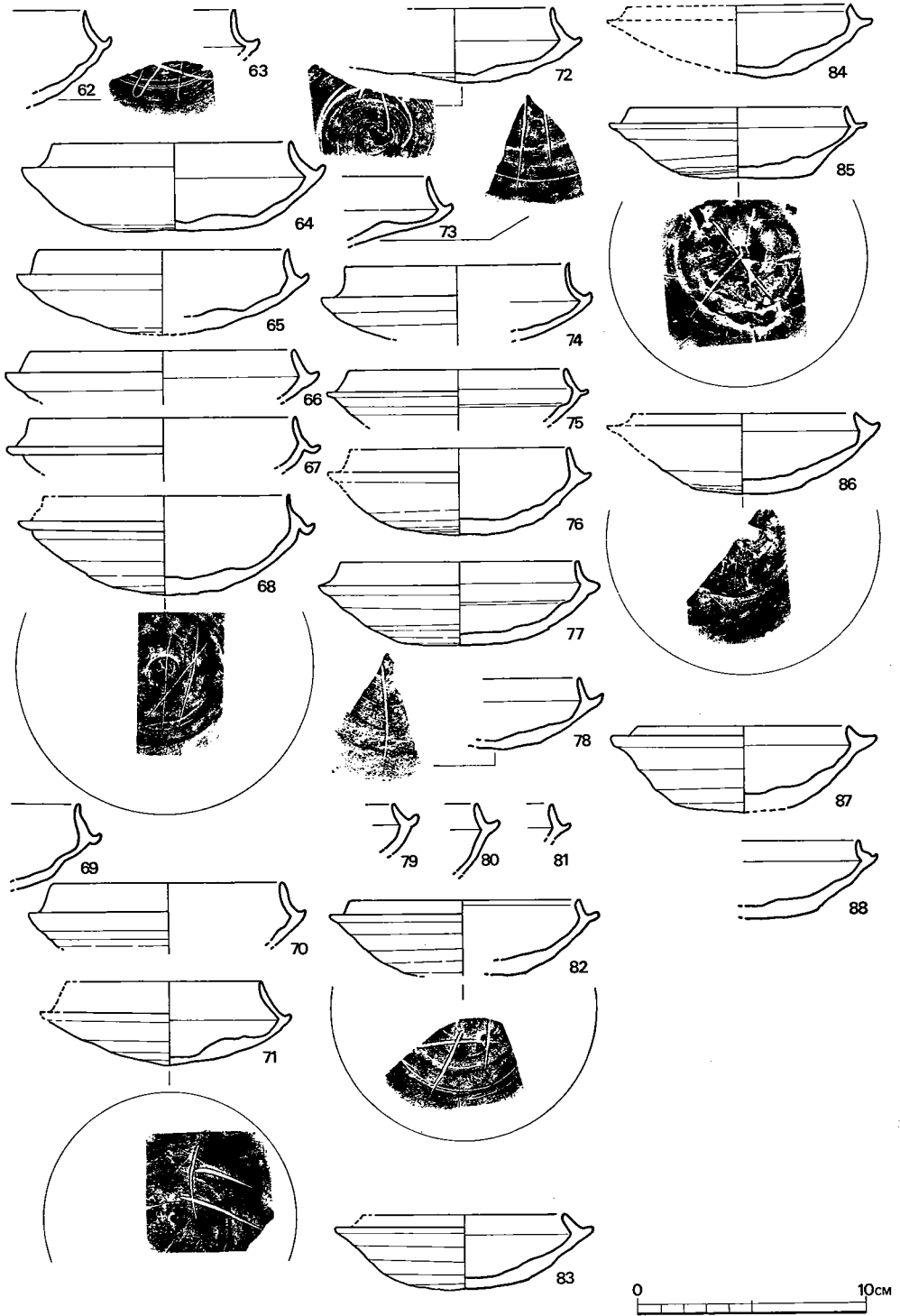


Fig. 15 鈴ヶ山1号墳須恵器実測図③ (縮尺1/3)

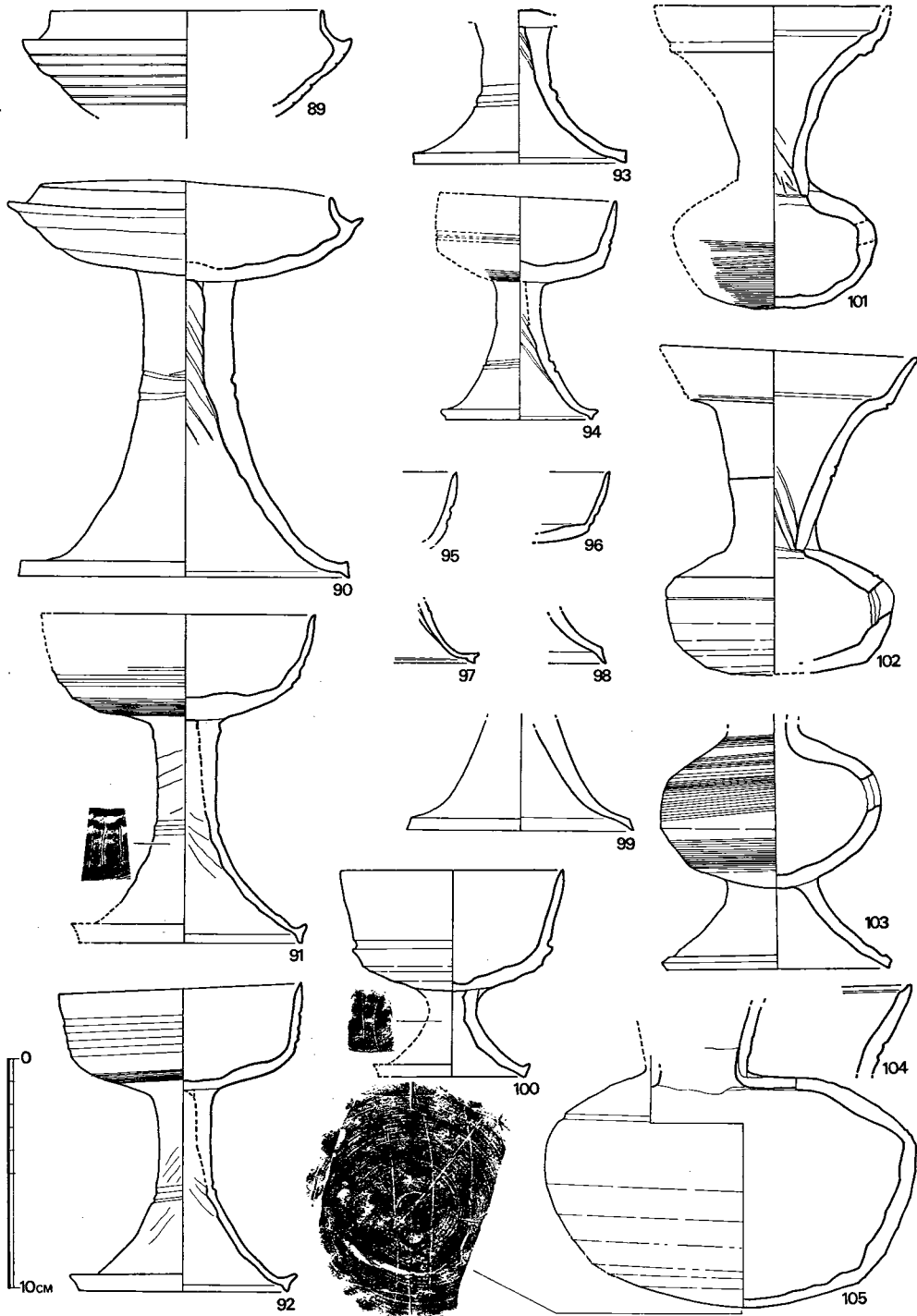


Fig. 16 鈴ヶ山1号墳須恵器実測図④ (縮尺1/4)

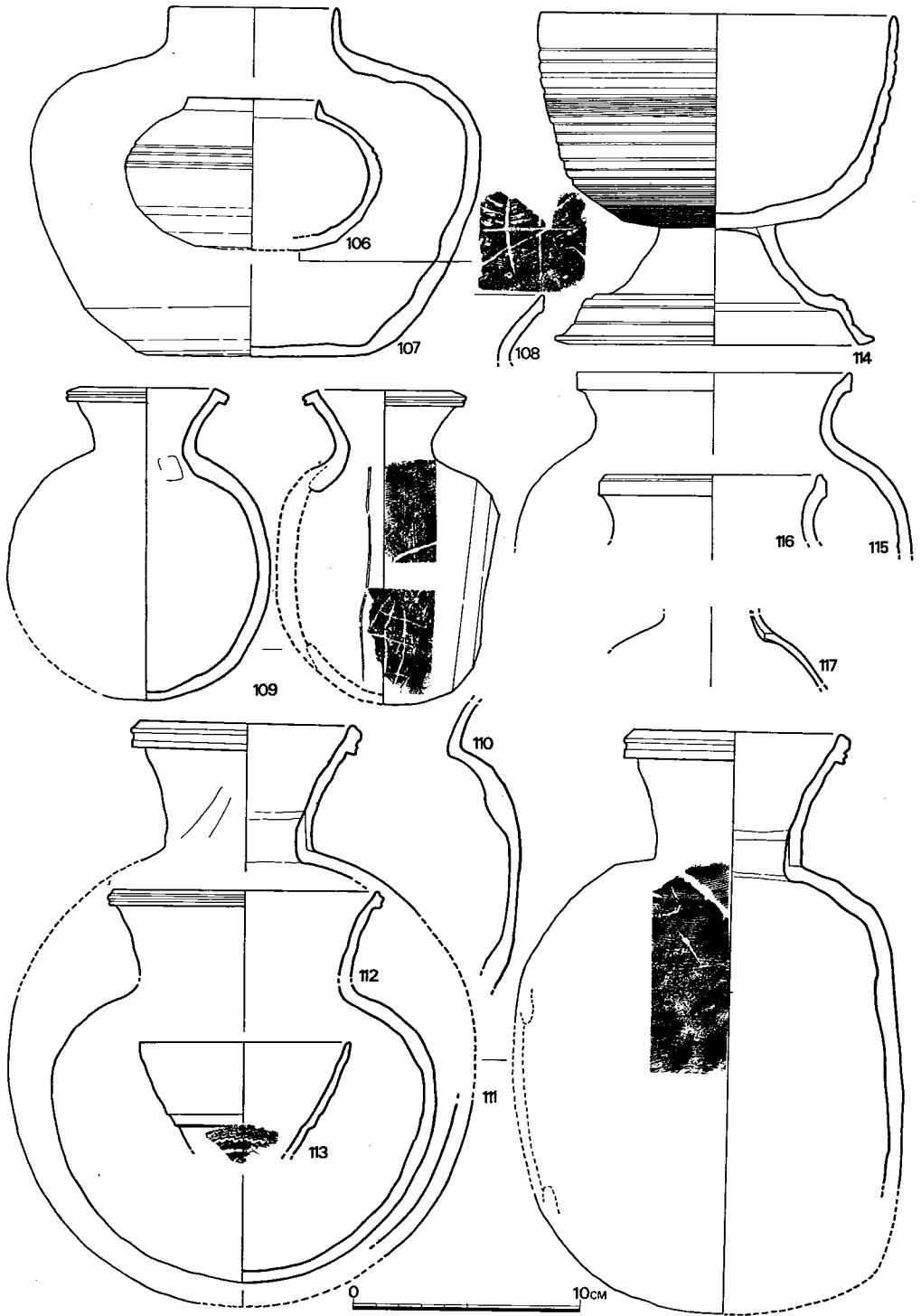


Fig. 17 鈴ヶ山1号墳須恵器実測図⑤ (縮尺 $\frac{1}{3}$ )



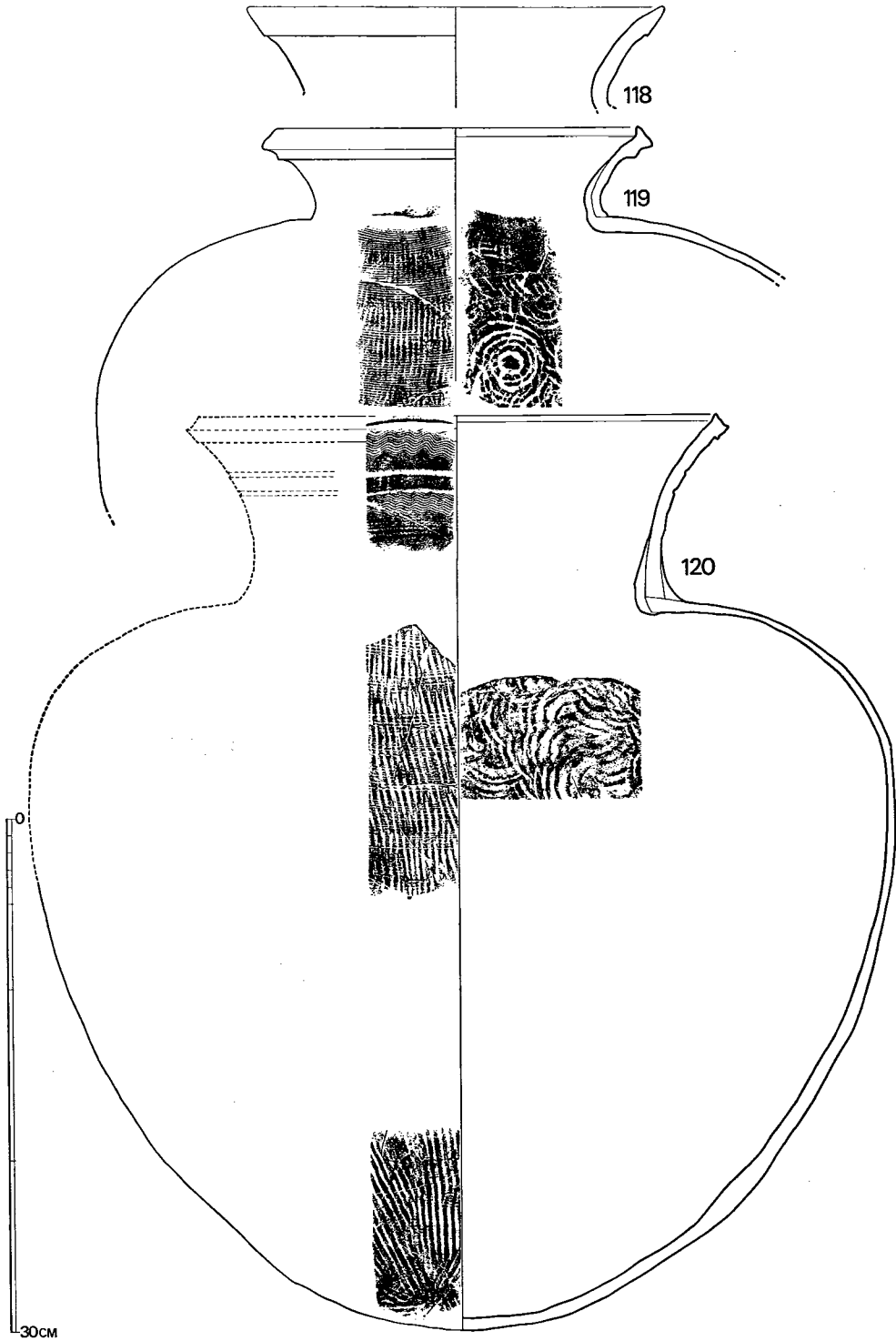


Fig. 18 鈴ヶ山1号墳須恵器実測図⑥ (縮尺 $\frac{1}{4}$ )

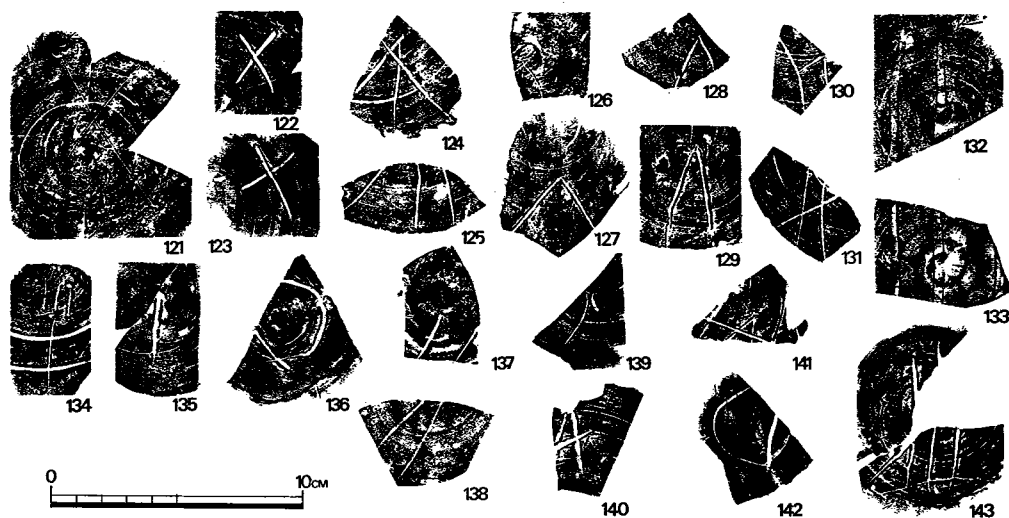


Fig. 19 鈴ヶ山1号墳須恵器ヘラ記号拓影(縮尺1/2)

紋り目あり。小形の割に厚手である。95・96は杯部のみであるが、94に近い。97は、薄手で、焼成甘く、赤褐色を呈する。図示していないが、体部に4条の沈線が入り、底部をカキ目調整した同焼成の杯部小片があり、97と同一個体に属すると見られる。IV類は、100で、器高9cmと小形であるが、杯部に口径9.8cm、深さ5.3cmと大ぶりである。脚部の復元底径は6.8cmで、焼成良好で、調整もていねいである。

壘 (Fig. 18—101~103, Fig. 19—113) 4個体出土し、103は台付である。101は器高13.2cm、口径は復元で10.3cm。胴部は、高さ5.6cm、最大径は復元で9cm。頸部内外には紋り目が認められる。胴の上半は篋削り、下半はカキ目調整が行なわれている。頸部と胴部との接合にあたっては、102と同様に、頸部を浅く嵌込み、外側から補強している点特色がある。102は、総高14.3cm、口径は復元で11.4cm。胴部最大径は10cm、高さ5.5cmで、101より稍扁平である。孔は直径12mm。胎土、焼成ともに良好である。113は、口頸部のみ。口径9.3cm。焼成は極めて甘く、赤褐色を呈する。頸部上半に楕圓波状文。103は、台付壘であるが、口頸部は失なわれている。胴部最大径9.6cm、高6.9cmで、全体をカキ目調整後、孔より下部を篋削りしている。脚は高さ4cm、底径10cm。胴部と脚部との接合にあたっては、該部に篋で刻み目を入れている。孔は直径13mm。胎土は砂質で、焼成は甘い。

平瓶 (Fig. 19—104・105) 104は、頸部のみしか現存しない。口唇内面がそがれ、器表には2条の沈線がまわる。105は、口縁部を欠く。胴部最大径は16.1cm。丸底で、一部に歪みを生じている。口頸部と胴部との接合にあたっては、穿孔後縁を曲げて立ち上らせ、この外側に別途製作の口頸部を立て、補強するという手法をとる。

短頸壺 (Fig. 19—106) 器高6.7cm、口径5.8cm、最大径11.3cm。胎土は、細粒を多く

含み砂質で、焼成も甘い。

壺 (Fig. 17—107) 器高15.4cm, 口径7.6cmで、最大径は体部上半で19.8cm。内面はていねいになでられているが、底部周辺には青海波文が若干残っている。器表肩部には叩き板の痕跡が認められ、大半から底部にかけては篋削りが施されている。有蓋であるが、蓋は現存しない。

提瓶 (Fig. 19—108~111・117) 大・小に分れる。111は、器高25.7cmの大形品である。口頸10.3cm, 胴部径, 側面最大巾は、それぞれ20.8cm, 17.4cm前後とみられる。胴部成形にあたっての粘紐巻き上げは、3回に分けて行なわれている。頸部表面に紋目あり。焼成は良好。頸部と胴部との接合法は、105の平瓶に近いが、外側からの補強はない。なお、胴部正面のカキ目の拓本はスペースの都合上側面に組み入れている。108~110・117は小形品で108は、頸部片のみである。109は、器高13.8cm, 口径7.4cm, 胴部径11.8cmで、側面最大巾は9.5cm前後。焼成不良で、赤褐色を呈する。胴部成形にあたっての粘土紐巻き上げは2回とみられる。110も焼成は極めて甘い。117は、器肉3mmと薄い。口頸部と胴部との接合にあたっては、105・111とは異なり、頸部を胴部にあけた孔の縁に立て、内側から補強するという手法がとられている。

台付碗 (Fig. 19—114) 総高14.6cmの大形品である。碗部の口径16cm, 高さ9.5cmで、脚底径14.1cm。焼成は甘く、赤褐色を呈する。脚部表面には紋目が残る。

広口壺 (Fig. 19—112・115・116) 112は、復元器高17.4cm, 同口径12.4cm, 胴部最大径16.8cm。内面は、ていねいになでられている。温度が上り過ぎ、黒色を呈し一部に自然釉が認められる。115は、復元口径12.2cm, 胎土は不良である。116は、前2者よりひとまわり小形で、復元口径は10cm。

甕 (Fig. 19—118~120) 118は、口径24.5cm。焼成甚だ甘く赤褐色を呈する。119は、口径23.8cm。頸部は118と同様無文である。焼成は余り良好でない。120は高さ53.4cmの大甕で、口径31.6cm。胴部最大径は推定で50.4cm, 頸部高11cm。肩部の厚さは4mm前後と極めて薄い。頸部上半は2条の沈線をはさんで櫛描波状文。頸部の接合にあたっては、胴部の縁に頸部をのせ、内外から補強している。胎土・焼成ともに良好である。

土師器 (Fig. 20—1~30)

高杯 (Fig. 20—1~20・22) 図示した他に4個体分の脚片がある。全体に焼成甘く、極めて脆く、残りはよくない。1は器高10cm, 復元口径12.8cm, 杯部深3.6cm 脚部底径10.3cm。5と同様に出土品中では、調整・焼成ともに良好の部類に属する。5は器高9.8cm。復元口径13.8cm, 杯部深4.7cm, 脚部底径11.3cm。7は、脚部が現存しないが、復元口径14.4cm, 深さ4cm。杯部と脚部との補強部分の厚さが目立つ。総じて内・外面に塗丹が認められるものが多いが、6・11・12・15~18では確認されていない。形状は多様であり、僅かに8と11とが同一工人の手になるかと推定される程度である。ただ補強特に外面のそれが殆ど施されない1~5と、顕著に認められる6~18とに二分されるようである。脚内面の処理では、杯部との接合部

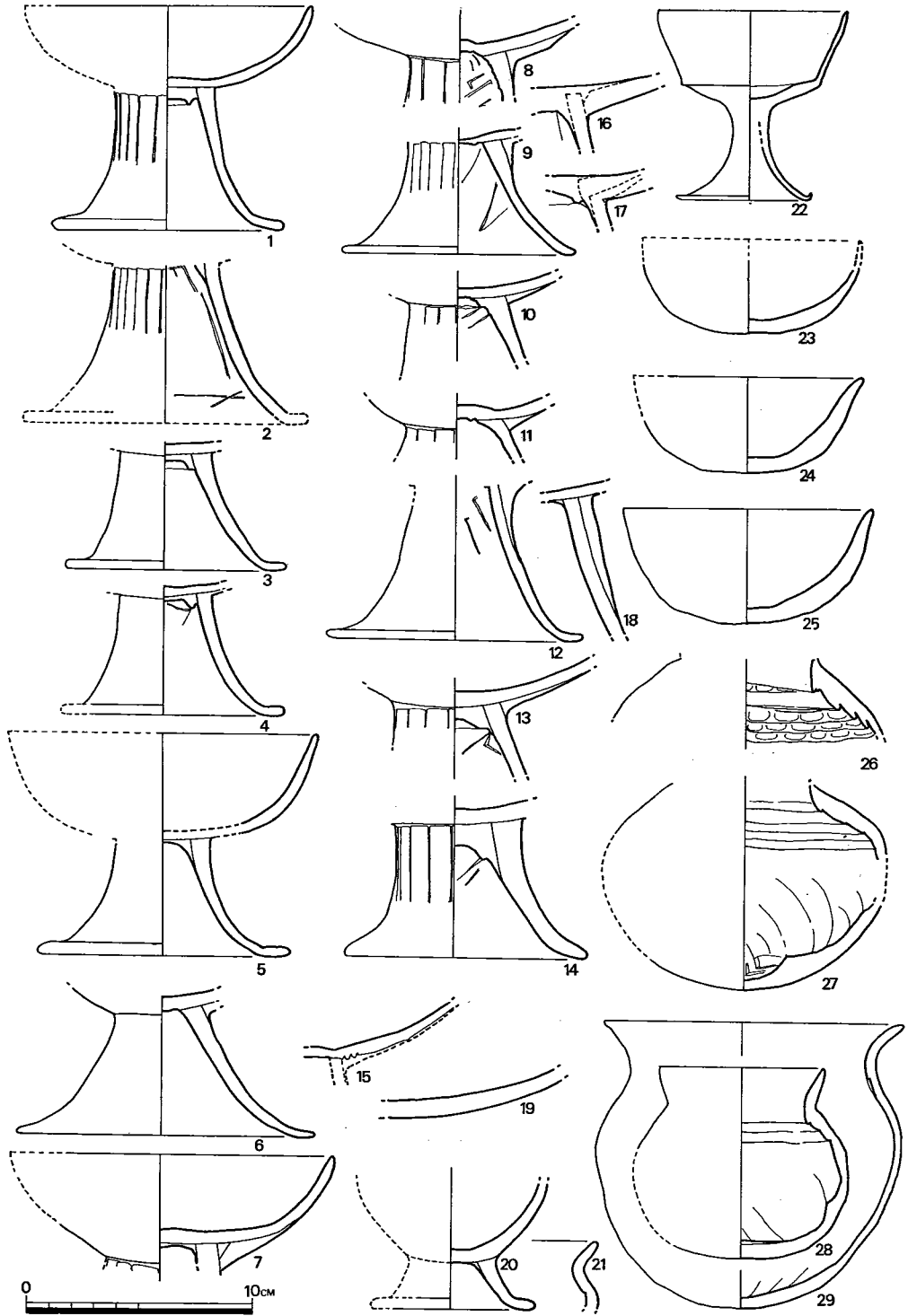


Fig. 20 鈴ヶ山1号墳土師器実測図① (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

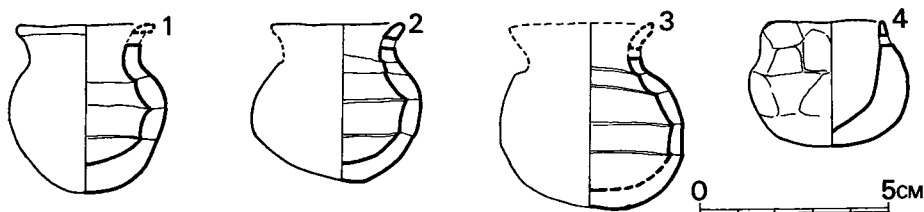


Fig. 21 鈴ヶ山1号墳土師器実測図② (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

に粘土を詰め、篋で抉るものが多い。16・17の成形法は、上記諸例とは異なり、脚の外側に杯部をとりつけ、中央の開口部に粘土を詰めて杯部の底部を形づくっている。15では、杯部の底面に3条の同心円が刻みこまれており、接合の便が図られている。22は、器高8.4cm、口径8.6cm、脚部底径6.2cm。赤褐色を呈し、非常にもろい。脚端部は他例とは異なり、稍上方へはね上る。

盃 (Fig. 20—23~25) 三者とも厚手である。23は、復元口径9.8cm、同器高4.2cm。24は、復元口径10.4cm、器高4.3cm。25は口径11.2cm、器高5.2cm。

壺 (Fig. 20—26・27・30) 26は、頸部と体部下半とを欠失する。粘土紐巻き上げの痕跡が明瞭に認められ、胎土・調整・焼成いずれも良好。塗丹あり。27は、復元胴部最大径12.6cm。26と同様肩部内面には、粘土紐巻き上げの痕跡が残る。体部下半の内側には、器肉を、工具、指頭にて抉る。塗丹の有無は不明。30は、器高12.7cmの完形品。口径13.6cm、胴部最大径13.9cm。薄手であるが、多少歪んでいる。器表の肩部以下には、全面にわたって刷毛目が認められ、内面の頸部から体部上半にかけては、篋でなで、削り、底部は指頭にてなで調整を施す。

埴 (Fig. 20—29) 器高4.3cm、口径3.8cm。胴部最大径は9.8cmか。底部内面は、いったん貼り足され、その後部分的に抉られているが、その他の成形法は、26・27と同様である。器表肩部以下は、横方何に篋削りが施される。丹塗あり。

ミニチュア土器 (Fig. 21—1~4) 1~3は、須恵器の甕か広口壺、4は短頸壺か広口壺をそれぞれ模作しているのであろう。

	器高	口径	胴部最大径		器高	口径	胴部最大径
1	4.4	(3.7)	4.2	3			4.9
2	4.2	(3.5)	4.5	4	3.3	3.2	4.3

Tab. 5 鈴ヶ山1号墳 単位はセンチメートル、( )内は復元値

いずれも頸部に1孔が器表側から穿たれており、径は1が約4mm、2・4は2mm強である。一見てづくね風に見えるが、成形にあたってはまず底部を粘土塊から指先で形づくり、これに粘土紐を数段巻き上げて胴部を完成し、これに頸部を付加するという手法がとられている。4では、内面のなでが特にいねいに行なわれている。

### 小結

本墳の構築された年代は、後述する須恵器の型式より大略6世紀後半代に比定され、これは他の遺物の示す年代観とも矛盾しない。

埋葬遺体は、耳環の出土数より6体以上が考えられ、出土須恵器・閉塞状況からみてこれらは数次にわたって追葬されたとみられる。

前室からは、武器・馬具・装身具の出土を見、またその狭小なる空間からも前室は副葬品を置くためのスペースとしての色彩が強いが、1対の耳環の出土状態は、ここへの遺体埋葬の可能性を強く注目される。その場合被葬者が成人であれば伸展葬は不可能であり、該品がこぶりなことからあるいは小児が埋葬されたのかもしれない。

供献された土器は夥しい数量にのぼり、160個以上の須恵器が検出された福岡市高崎2号墳に匹敵する。また出土数もさることながら墓道および墳丘西裾（墓道左側肩部）に限られ、石室内へは1片も供献されていないのは留意さるべきである。かかる傾向は後述する鈴ヶ山2号墳とも共通するが、前述の高崎2号墳では大甕が墓道両側の墳丘に各1個据え置かれていた他は、後・前室内に集中するのと好対照をなす。これは2墳の所在する両地域での供献のありかたの相違に基づくと思われる、今後なお検討を要しよう。他方、出土須恵器就中蓋杯・杯は、そのⅠ・Ⅱ類がⅢb型式に該当し、Ⅲ類は前2者より後出するとみられ、筑後地区での該期の窯址は未確認であるが一応第Ⅳ型式に含められよう。また、これらの須恵器のうち 甕 (Fig. 19—113) , 台付碗 (Fig. 19—114) は、本古墳群の南東、直線距離にして約5.8kmの八女市忠見区本字塚ノ谷に所在する塚ノ谷4号窯址出土品と形態・焼成ともに極めてよく似かよい、これらが同窯址からの供給品であることはほぼ間違いない。

注 ① この落ちこみは、奥壁腰石をすべり落すためのものかとも推定されるが確かでない。

② Fig. 22—1は、後・前室各側壁の弧の中心と半径とを仮に求めたものである。これによると、

後室	(L <sub>1</sub> (右) 半径—2.82m
	(L <sub>2</sub> (左) 半径—3.63m
前室	(L <sub>3</sub> (右) 半径—0.98m
	(L <sub>4</sub> (左) 半径—1.18m

となり、両室とも右壁の張り具合が強いことがわかる。またO<sub>1</sub>とO<sub>2</sub>O<sub>3</sub>とO<sub>4</sub>とは当然ながら、石室中軸線に対して対称の位置にはない。一方、胴張プランの石室の設計法については、松本浩一氏の考察があり（「横穴式石室における胴張りに関する一考察」〈古代学研究〉53, 1968年12月）、氏は這種石室設計の基準は石室全長にあるとされるが、そこで氏の作図法に従い、石室長6.8mを半径として作図したのがFig. 23—2である（スペースの都合上O<sub>5</sub>・O<sub>6</sub>は図示していない）。結論的には、氏の作図法によっては本石室の胴張りの曲線は得られない。作図上の誤差、中軸線のフレ（実測にあたっての中軸線の設定は、奥壁が完存していないので、2つの袖石の midpoint を結びこれを延長した）を考慮しても然りである。もっとも松本氏が考察に使用された石室は、全て単室横穴式

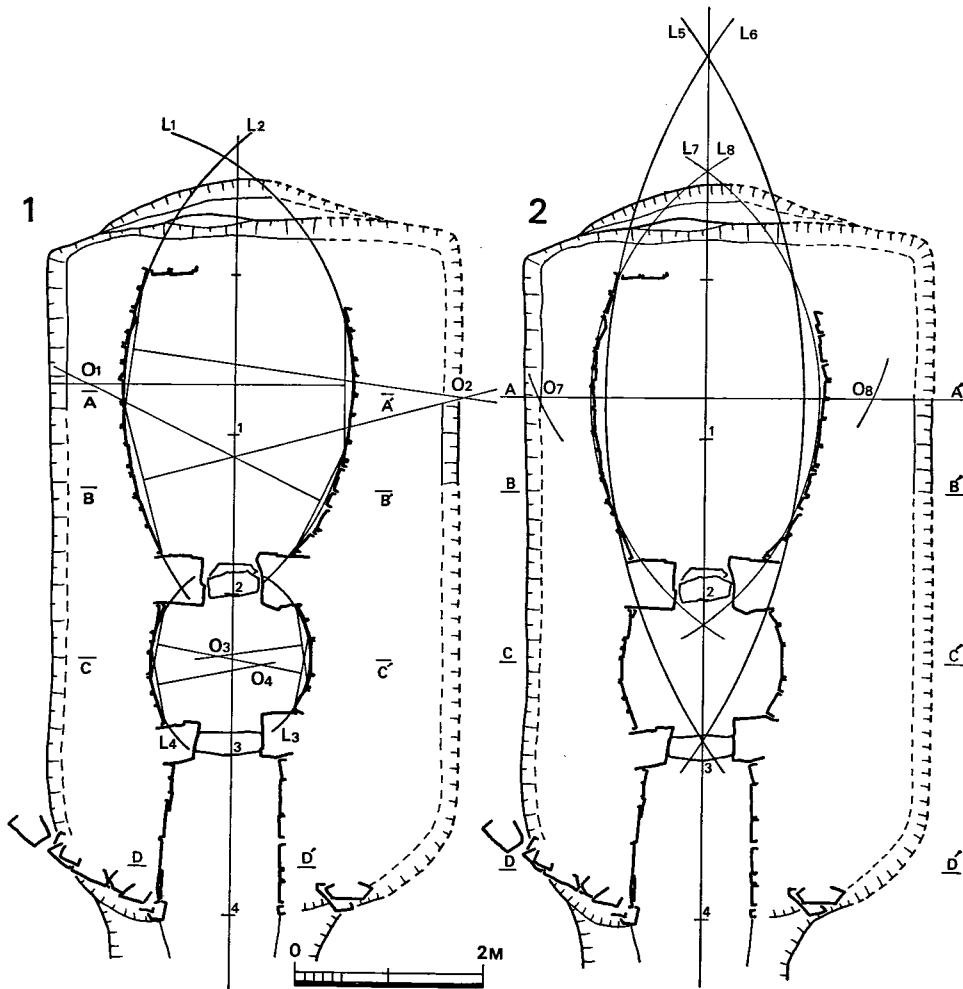


Fig. 22 鈴ヶ山1号墳石室構築図（縮尺 $\frac{1}{80}$ ）

石室である以上当然の結果ともいえる。試みに、後室長3mを半径として、松本氏の作図法に従い中心 $O_7 \cdot O_8$ を求め、描いたのが $L_7 \cdot L_8$ である。この場合はかなり側壁の弧線に近くが、右壁で最大7cm、左壁で同5cm前後のズレを生じている。腰石を使用する場合には一般的に誤差が生じ易いが、本石室のように片岩の小形割石を用いる場合には大き過ぎる誤差と思われる。本石室構築に先立ち、なんらかの設計・設計法が存在したことは当然想定されるが、胴張りの度合が一定の作図法に従って決定されたか否か、あるいは作図法の内容については現時点では不明とせざるを得ない。また、松本氏はその立論の過程で墓塚との関連についてなんら触れられていない。墓塚が存在する場合特に筑後の這種石室のように深い墓塚を有する場合には、作図上で中心を墓塚の外側に位置させることは、机上ではともかく現実には無理であろう。ここでは、奥壁から玄門仕切石外側

まで、同点から前室仕切石外側まで、同点から羨道先端までが、それぞれ3.4m、1.7mと2:1:1の比率となり、墳丘規模12mもまたこの1.7mの7倍(11.9m)に近いことを指摘するにとどめたい。

- ③ 本石室の墓道の長さは、ハカミチとしてあるいは供献のと場としての機能を果す上に必要な長さの倍以上におよぶとみられるが、これは墓道が一面では、墓塚を掘削する際に生ずる土砂の運搬路、あるいは石材の搬入路としての必要上設定されたことによるものであろう。
- ④ 6体という数字は、本石室の場合は、耳環は一応被葬者に装着されたもののみで、副葬品として納められたものではないとの前提に立つ。ただし、これは耳環の副葬を否定するものではなく、現に最近の例でも播磨・宮山古墳で、第2主体の竪穴式石室の1体の被葬者に対して、垂飾付耳飾1対、金環1対(松本正信・加藤史郎『宮山古墳発掘調査概報』1970年5月)、常陸・大生1号墳では、箱式石棺内の2体に対して、銀環1対、金?環1対の他に金環1個が検出されている(大場磐雄編『常陸大生古墳群』1971年5月)。垂飾付耳飾が検出される場合は特に他に金・銀環が伴う例が多いが、埋葬遺体数が確認されない場合では、装着品と副葬品との判別が困難である。しかし、垂飾付耳飾2対、金環1対が検出された肥後船山古墳(梅原末治「玉名郡江田舟山古墳調査報告」〈熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第1輯〉1922年)の場合、これらのうちの2対は副葬品と見做される。一方、肥前上野古墳では、各1対の耳環(銀・銅?)が装着された計4体の被葬者が確認されており(松尾禎作「佐賀県三養基郡上野古墳」〈日本考古学年報6〉1958年、鏡山猛「基山町上野古墳」〈佐賀県文化財調査報告書3〉1954年)、ここでは副葬品としての耳環は認められない。従って、垂飾付耳飾に伴出する場合はともかく、通有の金・銀環のみの場合、その出土数は遺体数堆定の一応の目安となり得るものと思われる。
- ⑤ 後藤守一「上古時代鉄鍬の年代研究」『日本古代文化研究』所収1942年
- ⑥ 駿河・瀬戸3号墳で同種の鉄器が出土している(『瀬戸古墳群』第28図110〈西駿考古学研究会調査報告1〉1968年10月。鞍金具か。
- ⑦ 浜田信也「高崎2号墳」〈今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告1〉1970年3月。
- ⑧ 小田富士雄氏編年に拠る。(石山 勲)



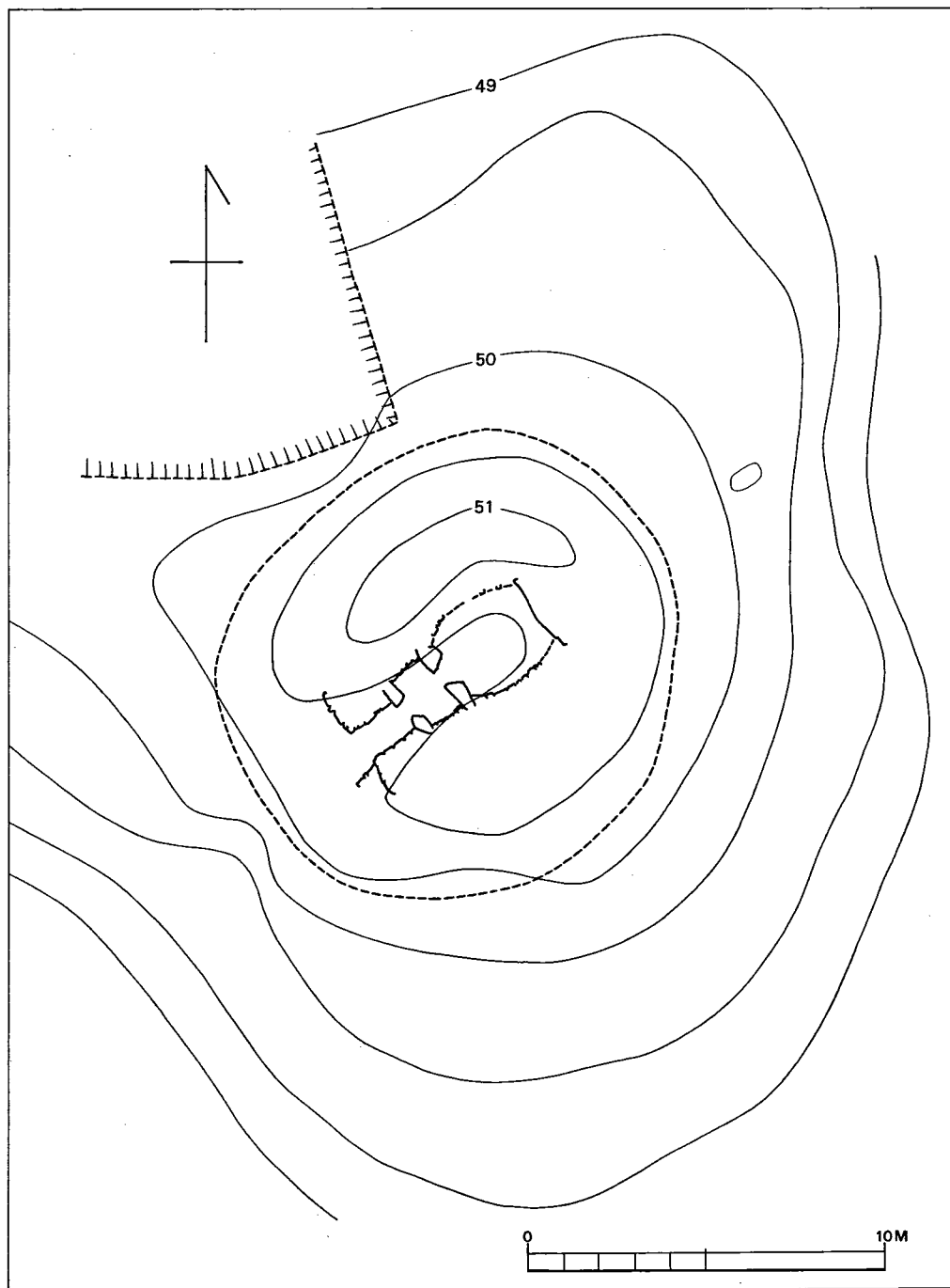


Fig. 23 鈴ヶ山2号墳地形実測図(縮尺 $\frac{1}{200}$ )

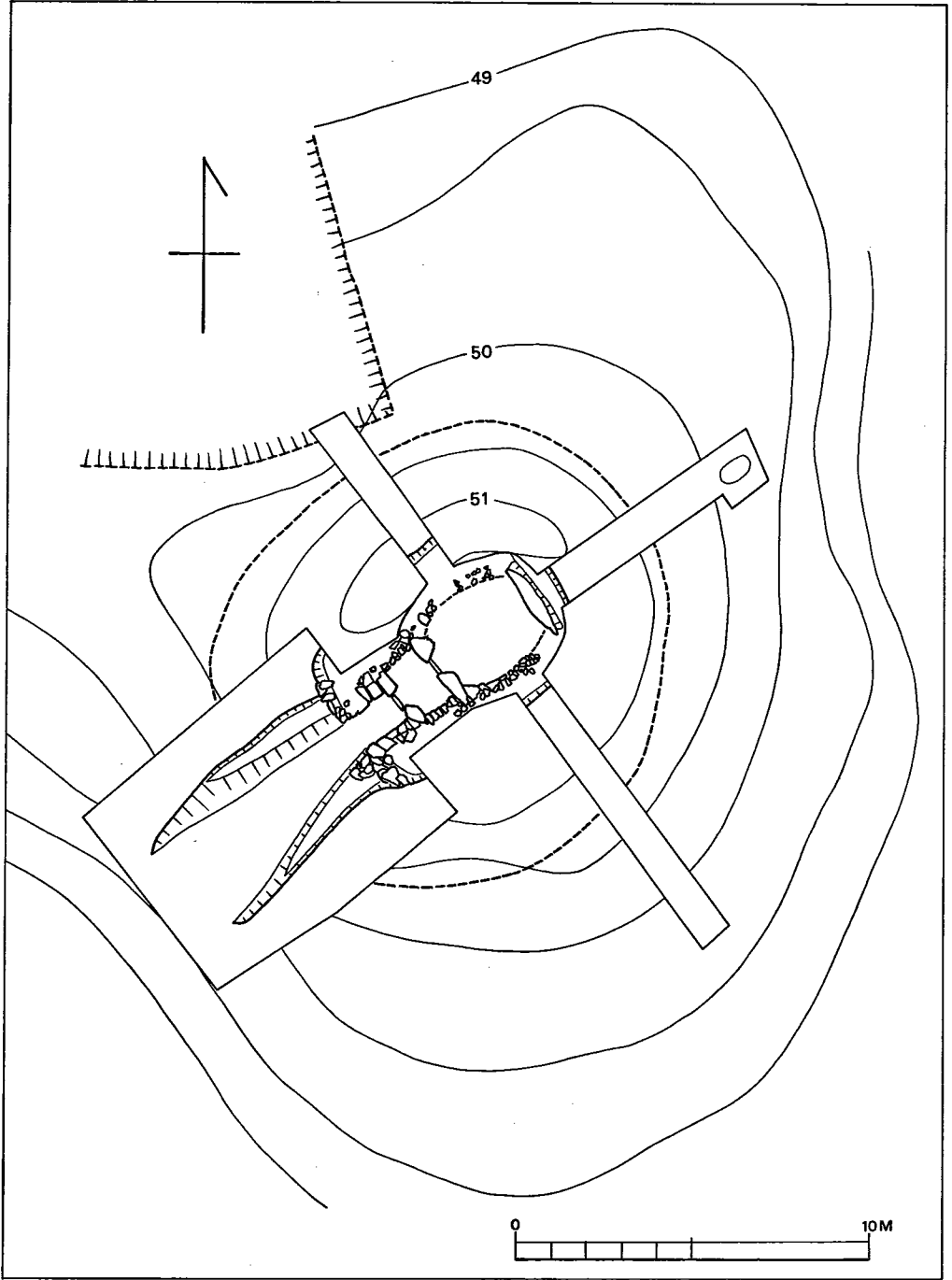


Fig. 24 鈴ヶ山 2号墳墳丘と石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{200}$ )

### 3 鈴ヶ山 2 号 墳

#### (1) 遺 構

##### 古墳の構造

鈴ヶ山 2 号墳は、山丘の脊稜部に築造された円墳である。標高約 50.2m の自然の山丘の頂上部に、墓塚を掘って構築した横穴式石室を包蔵するものであるが、石室の上半の架構は、墳丘の築成と併行して行なわれたと思われる。墳丘の盛土に先だって、周囲に溝を掘り、その周溝の内側の肩を墳丘の裾として、盛土を行なっている。この周溝は、石室の中心から、南に約 7m のところより幅約 1.2m、深さ約 0.4m、北に約 6.3m のところより幅約 1.2m、深さ約 0.6m、東に約 5.5m のところより幅約 1.5m、深さ約 0.6m の規模をもつ。西方にあたる石室前方の墓道の先端から、東方の周溝の内側肩までの距離を測ると約 16.9m、南北の周溝の内側の距離は約 13.3m を測るので、直径約 13.3~16.9m の楕円形の円墳となり、周溝の外縁まで含めると直径約 15.7~18.4m となる。ただ、墓道は、墳丘外に伸びているようでもあり、最大長径が 18.4m ということである。墳丘の築成には 10 層前後の層位が認められるが、概して石室に近いところでは、比較的小量の盛土の回を重ねる傾向がみられる。盛土の高さは、南側で約 0.7m、北側で約 0.8m、そして、東側で約 0.6m と、低い。自然の山丘の頂上部を利用し、しかも、深さ約 1.4~1.5m の深い墓塚を掘って石室を蔵置しているので、低い盛土にもかかわらず、堂々とした比較的高い墳丘のような外観を与えている。表面観察では、墳丘外縁の境を容易に判別しがたいが、ちなみに、周溝内縁からの高さを測ると、約 0.6~1.1m となる。

##### 内部主体の構造

鈴ヶ山 2 号墳の内部主体は、横穴式石室で複室構造をもつ。西方に開口するもので W38.6° S の方向を示している。石室は、長さ約 7.4m、幅約 5.4m、深さ約 1.4~1.5m の広くて深い長方形の墓塚を、自然の山丘の頂上部にうがち、そのなかに石室を構築している。墓塚ではとくに、鈴ヶ山 1 号墳と同じように、奥壁背後の塚縁が段築されていることが目立つ。石室はすでに、盗掘によって大半を失っているが、石室裏込めの状況からみると、薄い板状石材を積んでは裏込めの土砂をおくという作業をくりかえして、あたかも版築状を呈している。

玄室は前室と後室からなるが、後室の奥壁と玄門に巨大な石材を据え、その間の側壁には、板状片岩を利用している。側壁の半面は大きく円弧を描いて、胴張りの強いものである。奥壁には、約 1.5m の高さの巨石を墓塚に接して置いている。現在、1 石しか残していない。材質は、絹雲母一緑泥石片岩である。側壁の遺存状況は悪く、最下段を若干残すにすぎない。材質は、含絹雲母一緑泥石片岩などである。後室玄門石は、幅約 42cm の間隔をあけて対置させている。石室底面から 30~35cm 深く掘り込む手法は、奥壁に対すると同様である。玄門石の間には、仕切り石を敷いている。後室底面に敷石があったかどうかの判別はできなかった。北玄門

石の材質は、緑泥石片岩であるが、南のそれは含絹雲母一緑泥石片岩である。後室の長さ約3.05m、幅は奥壁際で約1.8m、後室の中心で約2.6m、玄門際で約1.85mを測る。後室の高さは、1.2m以上である。前室は、後室玄門石よりはやや小さい玄門石をもって区切られている。前室北玄門石の材質は、含絹雲母一緑泥石片岩であるが、南のそれは緑泥石片岩である。前室玄門石の幅は約0.46mで、仕切り石を置いている。前室の長さ約1.5m、幅約1.8mである。かすかに胴張りを感じるが、後室にくらべて、ずっと狭い感じを与える。底面は20cm前後の扁平な石材をもって敷設している、側壁は、板状片岩を小口積みにしたもので、高さ約30cmを遺存している。材質は含絹雲母一緑泥石片岩などである。

前室の前方に短い羨道部がつく。長さ約1.6m、幅約1.1mの短小なものであるが、高さ約0.8mと遺存状況は比較的良好である。側壁に板状片岩を使用していることは変わらない。ただ、羨道部ほぼ中央に、緑泥石片岩の巨石を立てて使用していることは珍しい。天井石の前端を支えるために、とくに使用されたものであろうか。羨道端からは、外側に、補助的な側壁が約1.4mほど伸びている。石室前端と墳丘を成形するためのものであろう。なお、前室玄門の前方で、羨道部のほぼ中央に、20cm前後の河原石をもって閉塞した状況がよく遺存している。

羨道の前方には、地山を掘りこんだ墓道ともいべき溝が、約6.7mの長さをもってやや末広がり検出できた。

なお、墳丘の東側裾部から約4mのところ、隅丸長方形の土壇を検出した。地山に掘りこまれ、長さ約80cm、幅約55cm、深さ約32cmの規模をもつ。内部に木炭が充満し、上面で須恵器の付合椀を発見した。奈良時代の火葬墓であろう。

## (2) 遺物

### 出土状況

上述してきたところで明らかのように、鈴ヶ山2号墳の石室はいちじるしく破壊されていたので、副葬品などの出土遺物の状況も当時のままではない。玄室はとくに破壊がひどく、出土遺物も耳環のほかはほとんどない。前室には、底面の各所で、鉄鏃・馬具・鉄刀子などが出土した。出土遺物のなかで大量をしめる須恵器は、羨道部前方の墓道内と、墳丘前面の表土下で出土し、いずれも、追葬時の整理品が大多数をしめるものと思われる。

なお、出土した遺物を列記すると、つぎの通りである。

- (1) 容器 須恵器  
土師器
- (2) 武器 直刀(鐔・把頭・責金具)  
刀子  
鎗  
鉄鏃

- (3) 工具 手斧鋏  
 (4) 馬具 留金具  
       壺鍔  
       鉸具  
       轡 (引手壺)  
       環  
 (6) 装身具 耳環  
 (6) その他

以下において、詳述する。(西谷正)

### 須恵器

#### 杯 蓋

I a 類 (Fig. 25-1~4) 天井部と体部の境に一条の沈線を有し、口縁部内面に段を有するものである。天井部は平坦ないしは、いくぶんくぼんだ形態で、断面は箱形を呈する。口径は1と4が12.3cm、2と3は13cm、器高は3.4cm~3.7cmを測る。色調は暗灰色を呈している。胎土には細粒ないし砂粒を含み、焼成は良好である。天井部はヘラ削りされており、残りは丁寧に横なでされている。

I b 類 (Fig. 25-5~11) 口縁部内面5mm~9mmの高さのところが突出し、稜線が入るものである。この部分外面はくぼむ。天井部は、ややとがりぎみの丸い形態である。口径は12.1cm~12.8cm、器高4cm~4.6cmを測り、10のみ復元口径11.6cmと小さい。また11の器高は3.6cmと低い。色調は5、7、9は暗灰色を、残りは灰色を呈しており、焼成はすべて良好である。胎土には砂粒ないし細粒を含む。6はロクロを静止した状態でヘラ調整しており、9のヘラ削りは一度で削りきらず何度も重ねている。11は器形がいびつである。なお9と61はセットである。

I c 類 (Fig. 25-12~18) 口縁部内面5mm~10mmの高さのところに沈線が入るものである。口縁部外面の形態は外反するものと、やや内湾ぎみのものとはあるが、外反するものが多い。天井部は丸く、b類のようなとがりはない。口径は11.1cm~12.1cm、器高は3.8cm~4.6cmを測る。色調は14は灰色、15は灰黒色、残りは暗灰色を呈しており、焼成は良好である。18は口縁部のみ灰黒色を呈する。胎土は16は細粒を含み、残りは砂粒を含んでいる。いずれも全体の1/2弱程ヘラ削りされており、18はロクロ静止の状態でヘラ削りしている。

I d 類 (Fig. 25-19, 21, 22, Fig. 26-24, 25, 27) a, b, c 類のような特徴はなく天井部から口縁部まで凹凸をもちながらも全体的に移行はなめらかなものである。全体的にみて、天井部の丸いものと扁平なものがある。口径は12cm~12.8cm、器高3.3cmを測る。色調は19、25、27は灰色、21は暗灰色、22、23は灰赤褐色を呈する。焼成はおおむね良好であるが、22、

3 鈴ヶ山2号墳

43

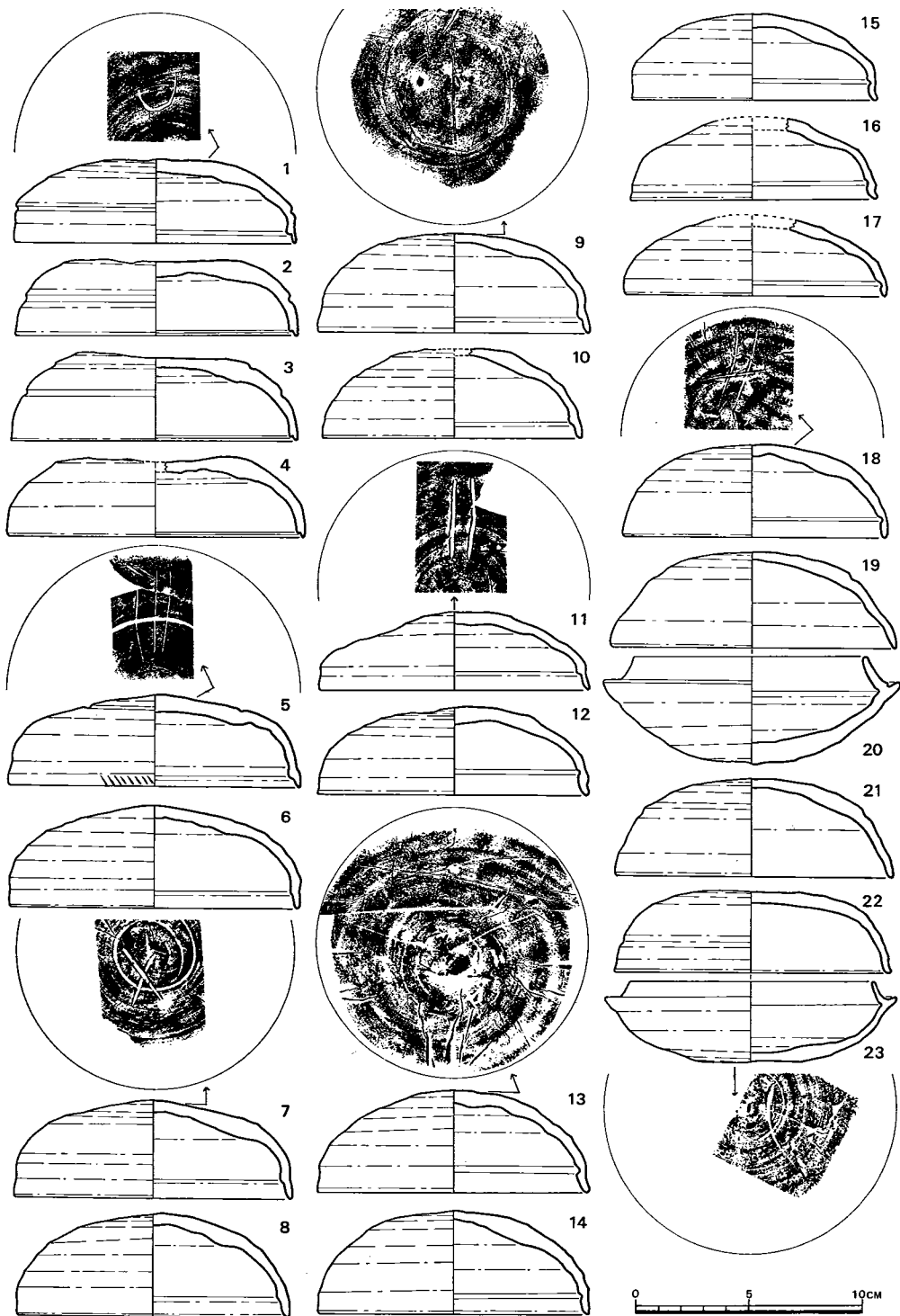


Fig. 25 鈴ヶ山2号墳須恵器実測図① (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

23, 27は不十分である。胎土は23, 25, 27は砂粒を多く含み、特に27は器面がザラザラするほどである。残りは細粒を含む。19と20, 22と23, 25と26はセットである。

I e 類 (Fig. 26—28~31) 内面天井部と口縁部の境がくぼみ、口縁は外湾ぎみに肥厚するものと口縁部は内外とも外反するものである。口径12.8cm~13cm, 器高3.6cmを測る。色調は灰黒色ないし暗灰色であり焼成は良好である。

II a 類 (Fig. 26—32, 34, 36) 天井部と体部の境はあまり明瞭でないが2.6cm以上の高さにあるもので、全体的な器形はb類と大差ない。口径は10.6cm~11.2cm, 器高3.4cm~3.9cmを測る。色調は、32は灰赤褐色、34は外面は灰黒褐色で内面は暗赤褐色である。32は33と重ねて焼いており、33を下にしている。焼成は36は良好であるが、32, 34はやや軟質である。32, 34はロクロを使用せずにヘラ整形を行っており、他はヘラ削りである。なお、32と33, 34と35はセットである。

II b 類 (Fig. 26—37~40, 42) 口縁の高さ1.3cm以下で、器形は小さくなる。40は体部に2条の沈線が入り、42は口縁部内面に浅い沈線が入る。口径は9.4cm~10cmであるが、37と38の復元口径は、少し大きい。器高は3.1cm~3.5cmを測る。色調は37と42は暗灰色、38, 39, 40は灰褐色ないし暗赤褐色を呈する。焼成は良好であり、胎土には砂粒を含んでいる。39は天井部内面にヘラ記号を有している。なお40と41はセットである。

III 類 (Fig. 26—43, 45) 蓋につまみを持ち、かえりのつくものである。43のかえりは大きく内傾する。天井部と体部は大きく湾曲し、これを境として器壁はうすどとなる。つまみ周辺には $\frac{1}{2}$ ほど櫛によるかき目が入る。身受け部には沈線が入る。色調は暗灰色であり、焼成は良好である。口径9.7cm, 最大径12cm, 器高4.5cm, かえりは6mmで口縁端より突出する。43は44とセットである。

45は天井部の一部を欠損し、つまみの形態は不明である。天井部と体部の境は段がつき、かえり端部はすどく外方へ突き出す。色調は暗赤褐色を呈しており、焼成は良い。口径は10.3cm, 最大径11.6cm, かえり6mmを測り口縁端部より突出する。

III 類 (Fig. 26—46~Fig. 28—49) 蓋にかえりを有するが、つまみはつかないものである。天井部は平坦ないしはわずかにくぼむ形態を呈する。天井部から体部への移行は直線的であり、体部と口縁部の境は、いくぶんくぼむ。かえりは端部よりわずかに外方に出る程度である。身受け部は幅が広く、落ち込みもあり端部は外方へ長くのびる。天井部はヘラ調整をしたものとそのままのものがある。色調は暗灰色であり、黄灰色の自然釉が付着する。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。口径は7.6cm~8.6cm, 最大径は10cm~10.4cm, 器高は2cm~2.3cm, かえりは0.4cm~0.7cmを測る。なお49は50とセットである。

#### 杯 身

I a 類 (Fig. 27—51) たちあがりは2.1cmと長く、細い。内傾しつつも上部はいくぶん

3 鈴ヶ山2号墳

45

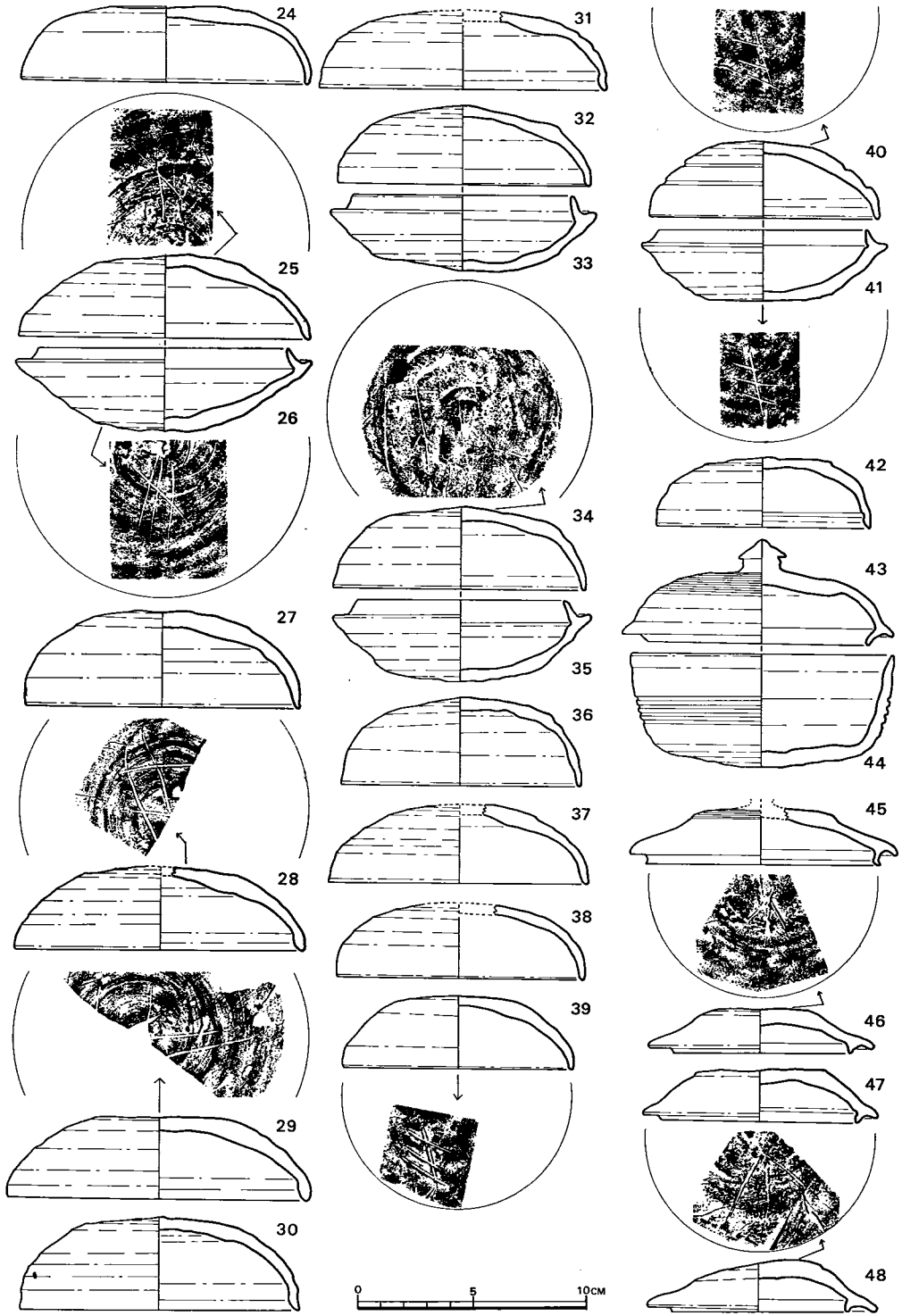


Fig. 26

鈴ヶ山2号墳須恵器実測図② (縮尺1/4)



外反する形態であり、中程はくぼみ気味につくられている。器壁はうすである。底部はヘラ整形しており丸い。色調は外面は灰色を、内面は暗灰色を呈する。焼成は堅く、胎土には砂粒を含んでいる。口径11.4cm, 最大径13.6cmを測り、器高は深い。

I b 類 (Fig. 27—52~54) たちあがりは1.6cm~2cmを測り、内傾するが、上部は外反するものもある。

52はたちあがりが高く、たちあがり基部には稜が入らない。蓋受け部に沈線が入る。口径10.4cm~11cm, 最大径12.5cm~13.2cm, 器高4.4cm~4.6cmを測り、器高はa類よりも低い。底部はヘラ削りしており、丸い。54はロクロを静止した状態でのヘラ削りを行っている。色調は灰色ないし暗灰色で、焼成は良好である。胎土にはいずれも砂粒を含んでいる。

I c 類 (Fig. 27—55~Fig. 28—68) たちあがりは1.5cm~1.8cmを測り、大きく内傾するが、中途より少し上部から直立もしくは外反する。全体的にたちあがりは細味である。口径9.6cm~11.2cm, 最大径12.2cm~13.6cm, 器高3.8cm~4.9cmといく分ひらきがある。

色調は55, 59, 62, 64が灰褐色ないし灰赤褐色を、63は灰色、58は灰黒色、残りは暗灰色を呈している。焼成は55, 64は不十分であるが、そのほかは良好である。胎土は細粒、砂粒を含んでいる。底部付近はヘラ削りされており、61, 62の削りは粗雑である。57はロクロ静止の状態ではヘラ調整されている。蓋受け部の形態は、58, 67は沈線が入る。蓋受け端部はすべて外方上へ延びる。61は9とセットである。

I d 類 (Fig. 25—20, 23, 26, Fig. 28—71~73) 23で代表される器形である。たちあがりは1cm~1.2cmで内湾する。たちあがり基部より先端部まで一様の太さであり、端部は丸くつくられる。体部の器壁はうすであり、接合部下をえぐったような形態である。蓋受け部はわずかにくぼむ程度である。20のみたちあがりは1.5cmを測る。口径は10.4cm~11.4cm, 最大径12.4cm~13.6cm, 器高3.2cm~4.8cmを測る。色調は灰色ないし暗灰色を呈しており、23のみ灰赤褐色を呈する。焼成は20, 23を除くと良好である。

I e 類 (Fig. 28—69, 70) 69はたちあがり1.2cmで基部は太いが内傾しつつ端部は細くなる。たちあがり基部には稜線が入らない。全体に厚手である。色調は灰色で、焼成不十分である。内面底部にヘラ記号を有する。口径は11cm, 最大径13.5cm, 器高4.4cmを測る。

70はたちあがり1.2cmで直線的に内傾する。接合部下方で、少し突出し、甘い稜が入る。蓋受け部に沈線が入り、端部は細い。灰黒色で焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。口径11.4cm, 最大径13.4cm, 器高4.4cmを測る。

II a 類 (Fig. 26—33, 35) たちあがり1cm~1.1cmで、短く、内傾する。たちあがり基部にはすどく稜線が入り、下方は凹凸する。底部はロクロを静止した状態でヘラ整形を行っている。33は暗赤褐色を呈し、蓋受け部先端のみ灰黒褐色となり、蓋32をかぶせて焼いたものようである。焼成は不十分である。35は外面は灰黒色で、内面は灰赤褐色を呈し、焼成は良

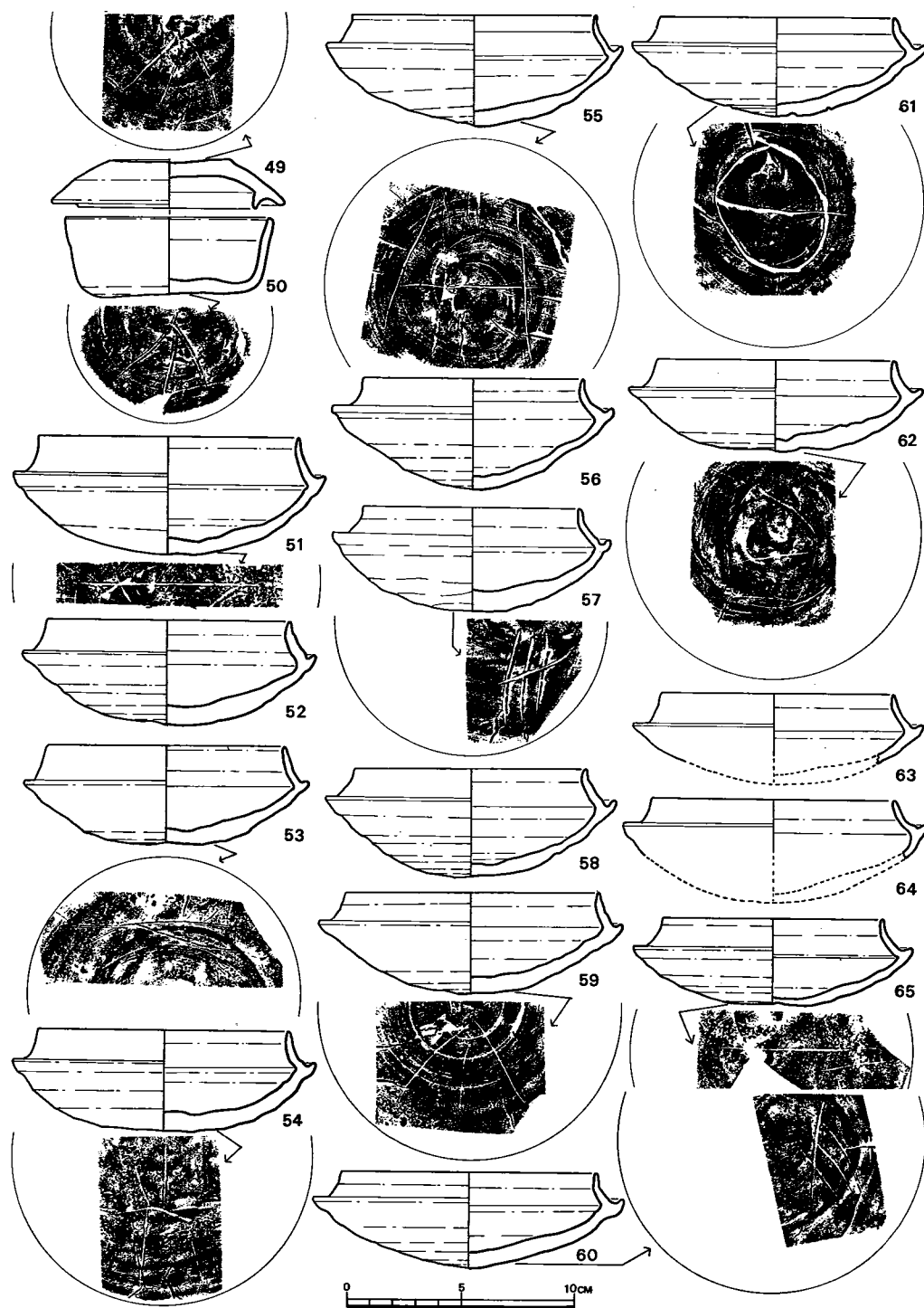


Fig. 27 鈴ヶ山2号墳須恵器実測図③ (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

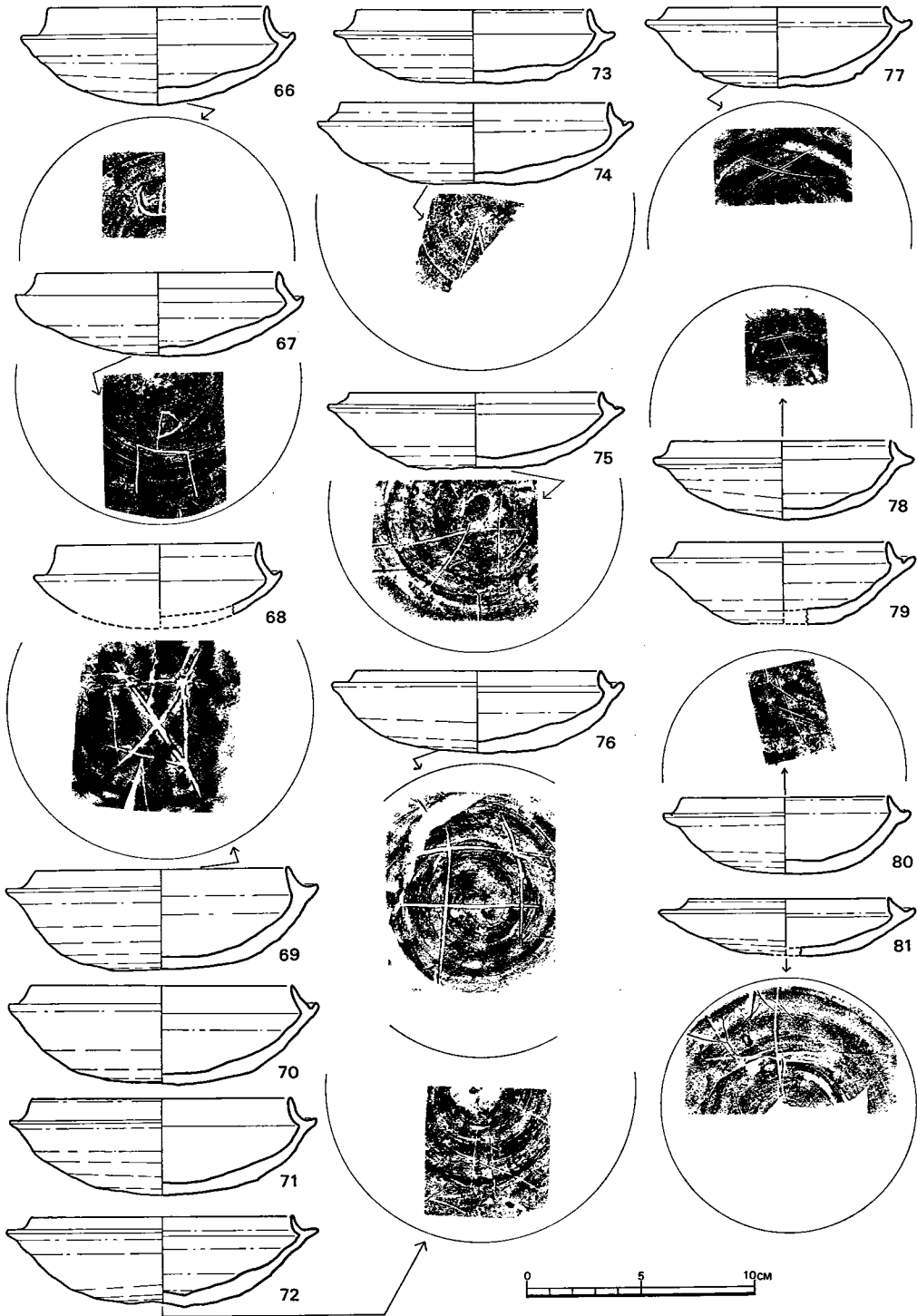


Fig. 28 鈴ヶ山2号墳須恵器実測図④ (縮尺1/3)

好である。胎土には砂粒を多数含んでいる。口径は9 cm～9.7 cm，最大径11.2 cm～11.6 cm，器高3.4 cm～3.6 cmを測る。

Ⅱ b類 (Fig. 26—41, Fig. 28—74～81) たちあがり0.7 cm～1 cmと短く，基部からほぼ直立するものと，内傾するが，途中から立つものがある。たちあがり基部に沈線が入るものと，基部直下が凹湾するものがある。蓋受け部は沈線が入るもの，落ち込みを有するもの，落ち込みのないものとさまざまである。口径は9.1 cm～10.6 cm，最大径10.8 cm～13 cm，器高2.5 cm～3.4 cmで小形化する。74は，この数値より大きい。器形は全体的に扁平化してくる。色調は41, 80は灰赤褐色ないし灰褐色，74, 78は灰色，79は灰白色，81は青灰色，残りは暗灰色とさまざまである。焼成は良好であるが79のみ軟質。胎土には砂粒を多数含んでいる。78と80は内面にヘラ記号を有する。

Ⅲ類 (Fig. 26—44) 身に蓋受けのつかないもので43とセットである。底部と体部の境には稜線は入らず，体部は内湾ぎみに外反し，口縁部内面は外反する。体部には平行沈線が4条入る。底部はヘラ削りしており，やや丸味をもつ。口径11.4 cm，器高5 cmを測る。色調は暗灰色を呈しており，焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

Ⅳ類 (Fig. 27—50) 杯の蓋49とセットである。底部は平坦であるが，わずかにくぼむ。底部から体部への移行は曲線的であり，体部はやや外反ぎみに口縁端へと延びる。口縁端部は丸い。底部と体部の境付近はヘラ削りをしているが，底部中央付近はヘラ整形を施す。口径は9 cm，器高は3.4 cmを測る。色調は暗灰色を呈している。胎土には砂粒を含んでおり，焼成は良好である。

#### 高杯蓋

I類 (Fig. 29—82) 83の蓋である。天井部は一部を欠損しているため，つまみの形態は不明である。天井部と体部の境に沈線が入り，口縁部内面は段がつく。つまみ周辺部はヘラ削り後，櫛によるかき目が入る。口径は16.2 cmを測り，器高は5 cm～6 cm程であろう。色調は外面は灰黒色で，内面は灰色を呈している。胎土に細粒を含んでおり，焼成は良好である。

#### 高杯身

I類 (Fig. 29—83, 84) 杯部の形態は杯の身I b類と同一である。83は82とセットであり，脚部を欠損している。杯部下方には，蓋と同じく，櫛によるかき目が入る。84は脚柱中央部に沈線が入って脚柱を2分している。透孔は上下3孔入る。杯部下方から脚部全体に櫛によるかき目が入る。脚端は下方に引きのばされ，脚裾にふちをつけたような形態である。83は口径13.5 cm，最大径17 cm，たちあがり1.7 cmを測り，色調は外面は暗灰色であり，内面は灰色を呈する。胎土に細粒を含み焼成は良い。84はたちあがり2 cm，口径12.4 cm，最大径15 cm，脚裾径15 cm，器高20.7 cmを測る大形品である。色調は灰赤褐色を呈する。胎土には細粒を含み，焼成は良好である。

Ⅱ類 (Fig. 29—85) 透孔が上下3孔入ることはⅠ類と変わらないがこの場合の透孔は狭く、いずれも貫通しない。脚裾は大きくひろがり、脚端部は外上方へ小さくはね上る。脚柱上部内面にはしぼり痕が観察される。杯上部は欠損しているが、無蓋高杯になるものと思われる。色調は灰白色を呈しており、焼成は不十分である。

Ⅲa類 (Fig. 29—86~88) Ⅲ類は大きさによってa, b, cに3分した。a類は器高13.8cm~14.5cmのもので、杯の身Ⅲa類に脚をつけた形態である。杯部は外反ぎみに口縁部へと延び、体部には沈線を有する。体部の沈線は平行線であり、86は3本、87, 88は6本入る。脚柱にも沈線が入り、87は平行沈線が脚柱下部に3本入り、86は螺線状に6巻ほど、88は脚柱全体に螺線状の沈線が入る。脚端部の形態は、いく分はね返るが、かえりは退化して、わずかに段がつく形態を呈するのが特徴的である。87はしぼり痕と重複するため図示はさけたが、杯下部から脚柱全体に櫛によるかき目が入り、86, 88は杯部下方にのみ櫛によるかき目が入る。口径は9.4cm~11.8cm、脚裾径9cm~10.4cm、器高13.8cm~14.5cmを測る。色調は暗灰色ないし灰黒色で焼成は良好である。胎土にはいずれも細粒を含んでいる。87は脚底内面にヘラ記号をもつ。

Ⅲb類 (Fig. 29—89, 91) 器高10.2cm~11.1cmのものである。91は脚端の形態がわずかに異り、段のつく部分が、そのまま、ないしは逆にいく分ふくらんでいる。杯部にはいずれも平行沈線が4本入るが、91のそれは沈線のように凹わんしない。脚柱中央部には平行沈線がそれぞれ2本と4本入る。杯部下方にはやはり櫛によるかき目が入る。89は脚柱上部にしぼり痕が観察できる。口径は9.4cm~9.5cm、脚裾径は7.4cm~8.3cmを測る。色調は暗灰色と灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

Ⅲc類 (Fig. 29—92) 杯上部を欠損しているが、復元器高8cm程のものである。杯部には平行沈線が入り、脚部には螺線状に沈線が入る。脚端部は外上方へ大きくはねる。復元口径8.4cm、脚裾径6cmと小形である。色調は暗灰褐色を呈しており焼きは良いがいびつである。胎土には細粒を含む。

Ⅲa類 (Fig. 29—90) 小形であるが器壁は厚である。杯部の形態は体部に沈線が入らず、体部と底部との境はかどばり、その直上に一条の沈線が入る。沈線より下方、脚部まで櫛によるかき目が入る。脚柱内面にも沈線が入る。脚部には三角形を呈する透孔が5孔入るが形はいずれも一定しない。口径9.5cm、脚裾径7.8cm、器高9.6cmを測る。色調は灰黒色を呈しているが、内外面の $\frac{1}{3}$ は灰色を呈する。焼成は良好である。

Ⅳb類 (Fig. 29—93) 脚端部のかえりはなくなり、丸く終る。脚裾径7.6cmを測る。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を多数含む。

#### 埴蓋

Ⅰb類 (Fig. 30—95) 96とセットである。体部には沈線が2本入り、口縁部は垂直に

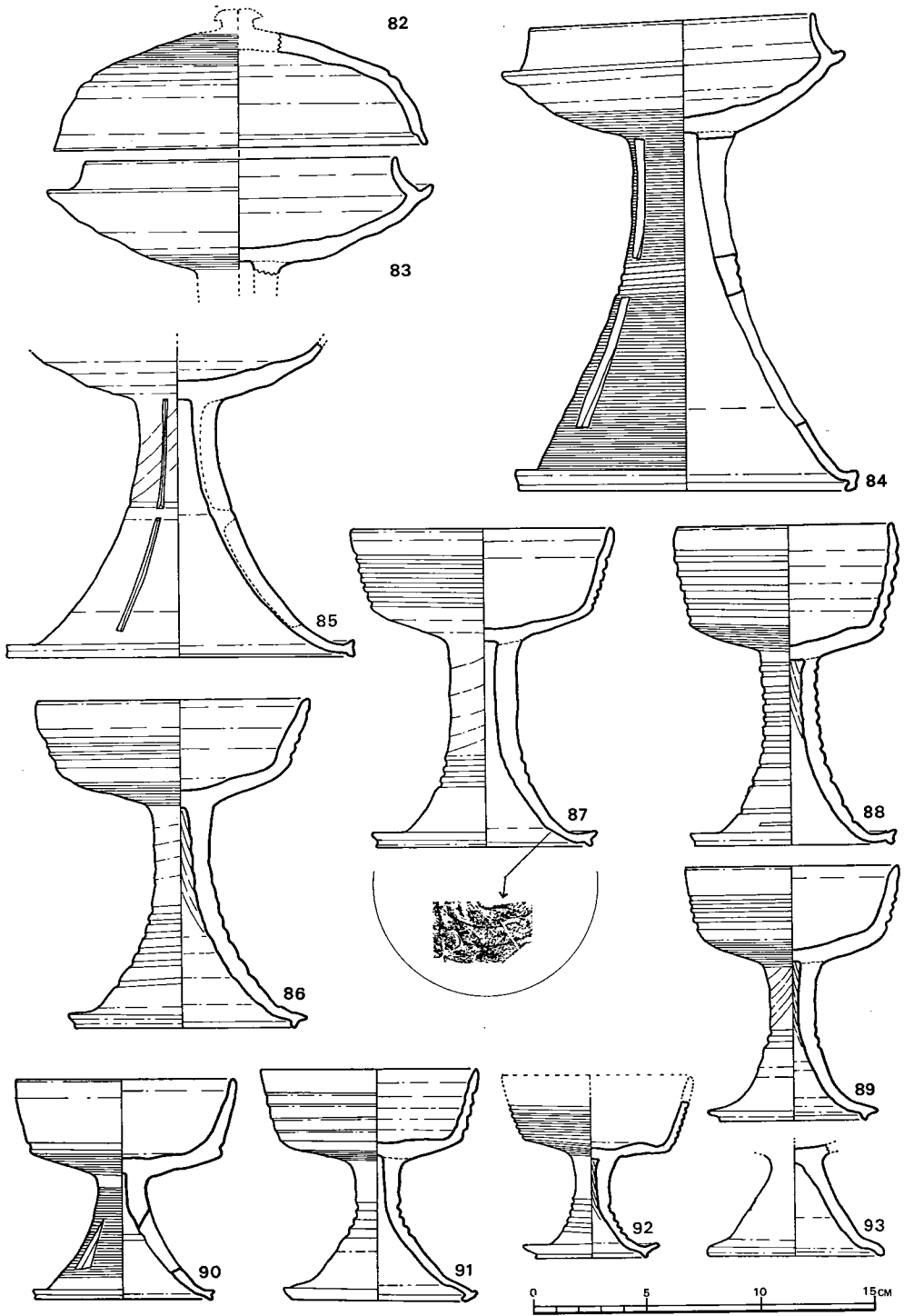


Fig. 29 鈴ヶ山2号墳須恵器実測図⑤ (縮尺1/4)

近く、口縁端部は外方へ小さく突出する。天井部はヘラ整形を施す。口径は5.6cm、器高は2cmを測る。色調は灰色を呈しており焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

#### 埴身

I a 類 (Fig. 30—94) b 類より小形である。口縁部は少し外反するが直立に近く、端部は丸い。肩部には刷毛目が入り最大径は中ほどよりやや上方に位置する。底部より胴部にかけてはヘラ調整を施す。口径は3.4cm、最大径は7.1cm、器高5cmを測る。色調は淡灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

I b 類 (Fig. 30—96) a 類より大形となる。口縁部は短く、直立する。内面では口縁部と肩部の境に稜線が入る。最大径は中ほどに位置し、この部分は最も肥厚する。内面底部はヨコナデの際の凹凸が著しく稜がつく。肩部から胴部には刷毛目が入る。底部はロクロを使用せずにヘラ削りを行う。口径4.8cm、最大径9cm、器高6cmを測る。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

II 類 (Fig. 30—97) 埴の体部に提瓶の頸を接合したような形態である。頸部は外湾し口縁端部下方はかどばり上方も小突起状にとがる。最大径は胴部中ほどに位置し頸部を除いた形態は菱形を思わせる。肩部と胴部の接合部付近は著しく肥厚し、この部分に沈線が3本入る。櫛によるかき目は胴部中程より肩部にかけて入る。底部と胴部下方はヘラ削りを施す。口径3.1cm、最大径10.7cm、器高7.8cmを測る。色調は部分的には黒変するが、灰色を呈しており焼成は良好である。胎土は精選されており良好である。

III 類 (Fig. 30—98, 99) とともに肩部から上部を欠き、大小の違いはあるが一括してとりあつかった。器形は整わず、凹凸も著しい。つくりは共に非常に粗雑であり粘土紐の巻き上げ痕なども明瞭に残っている。98は底部から胴部にかけてヘラ削りしているが雑であり、99の底部はなでで一部ヘラ削りを行う。色調は暗灰色を呈している。98は焼成不十分であり、99は胎土には大粒の砂粒を含んでおり、焼成は良い。

台付椀 (Fig. 30—100) 内外面とも凹凸著しい。接合部は内湾する。色調は一部灰黒色であるが全体的には灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

盃 (Fig. 30—101) 底部は平坦であり、体部との境には稜が入る。体部には沈線が2本入る。体部上方から口縁端部まではうすでとなり、ほぼ直立し、口縁端部は外反する。把手接合のさいに接合を良くするためのなでつけが、把手周辺に明瞭に残る。把手のとりつけは体部への沈線を入れたあとにおこなっているため把手のつく周辺はなで沈線が消されている。口径12.6cm、器高8.5cmを測る。沈線下より底部まではヘラによる整形を行う。色調は灰黒色を呈し内面は灰黒色は斑点状になる。胎土には細粒を含んでおり、焼成は良好である。底部にヘラ記号をもつ。

#### 甕

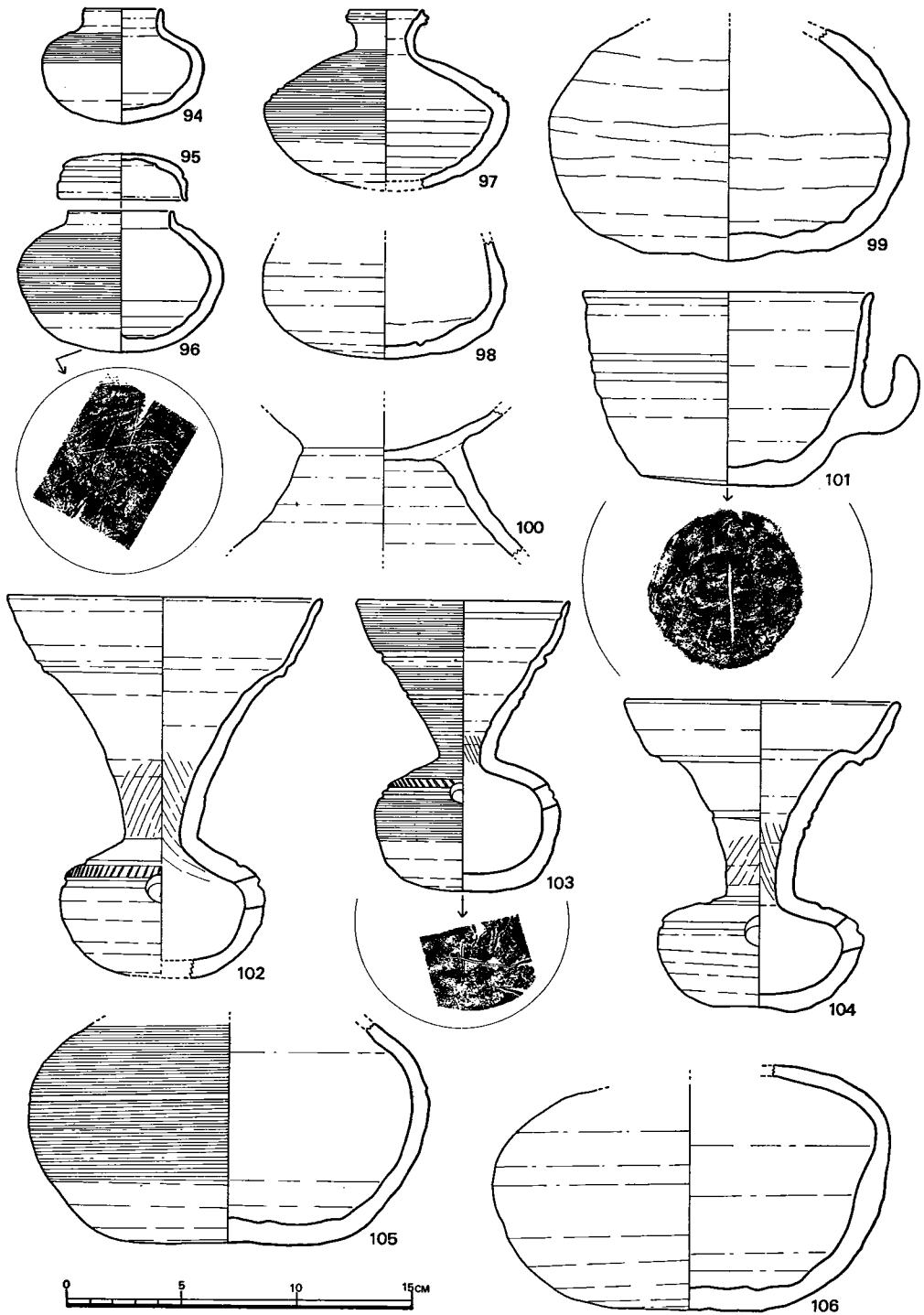


Fig. 30 鈴ヶ山2号墳須恵器実測図⑥ (縮尺1/2)



I 類 (Fig. 30—104) 頸部上端は折れまがり、大きく一段をもうけ口縁部は再び内湾ぎみに外反する。口縁端部は丸味をもつ。器壁は全体に厚手である。頸部中央には沈線が入り、球状部では肩部上方と、肩部と胴部の境に沈線が入る。胴部以下はヘラ削りを行う。頸部には内外面ともしぼり痕が明瞭であり、球状部内面には穿孔時の粘土塊が入っている。口径12cm, 胴部径9cm, 器高13.4cmを測る。色調は暗灰色であり、球状部半分と内面には灰黄色の自然釉が付着する。胎土は細粒を含み、焼成は良好である。

II a 類 (Fig. 30—102) 頸部と口縁部の境は、内面ではわずかにくぼみ、外面は小突起し稜線が入り、直上には幅の広い沈線が入る。口縁部は特にうすでとなる。肩部と胴部の境付近に櫛描き列点文が入り、その上下に沈線が入る。肩部から頸部中央まで、しぼり痕が著しい。胴部から底部まではヘラ削りしている。口径は13.6cm, 胴部径8.7cm 器高16.5cmを測る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

II b 類 (Fig. 30—103) 頸部と口縁部の境に沈線が入り、頸部は短くなる。口縁部は内湾ぎみに外反し、口縁部内面上方には沈線が入る。頸部中央にも平行沈線が2本入る。球状部では肩部に櫛描き列点文をめぐらし、その下方に沈線が2本入る。底部から胴部にかけてヘラ削りしてあり、ヘラ削りの施されない所は、口縁部まで刷毛目が入る。口径9.3cm, 胴部径8cm, 器高12.6cmを測る。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。

#### 平瓶

I 類 (Fig. 30—105, 106, Fig. 31—108) 最大径は17.4cm~17.5cmである。105は肩部から胴部にかけて刷毛目が入り、肩部と胴部の境には沈線が入る。105は灰黒色であり、焼成は良好。106は灰色であり、焼成は不十分である。108は口縁端部に沈線が入り、口径は8.4cmを測る。色調は灰色を呈しており、焼成は不十分である。

II 類 (Fig. 31—107, 109) 頸部を体部の中央部付近にもってきているのが特徴的である。頸部は胴部の大きさに比して随分小さい。肩部は最も肥厚し、内面の肩部と胴部の境には甘い稜が入る。頸部外面は、しぼり痕が観察される。肩部以下は全面をヘラ削りした上に刷毛目が入る。口径5cm, 最大径18.6cm, 器高13.3cmを測る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。109は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

III 類 (Fig. 31—110) 大形である。口縁端部は平坦面をもち、外部は沈線が2本入る。下方には更に沈線が1本入る。底部は平坦で広く、胴部は直線的に延び、肩部との境には稜線が入る。色調は灰色を呈しており、全体の1/3弱程、灰緑色の自然釉が付着する。胴部内面には同心円印文が入り、底部はなでており凹凸著しく、外面は底部から胴部中ほどまでヘラ削りしている。口径は12.1cm, 最大径26cm, 器高19.6cmを測る。焼成は堅緻であり、胴部には杯の焼けつきがみられる。

長頸壺 (Fig. 31—111) 頸部と胴部上方を残すのみである。最大径は11.8cmを測る。色

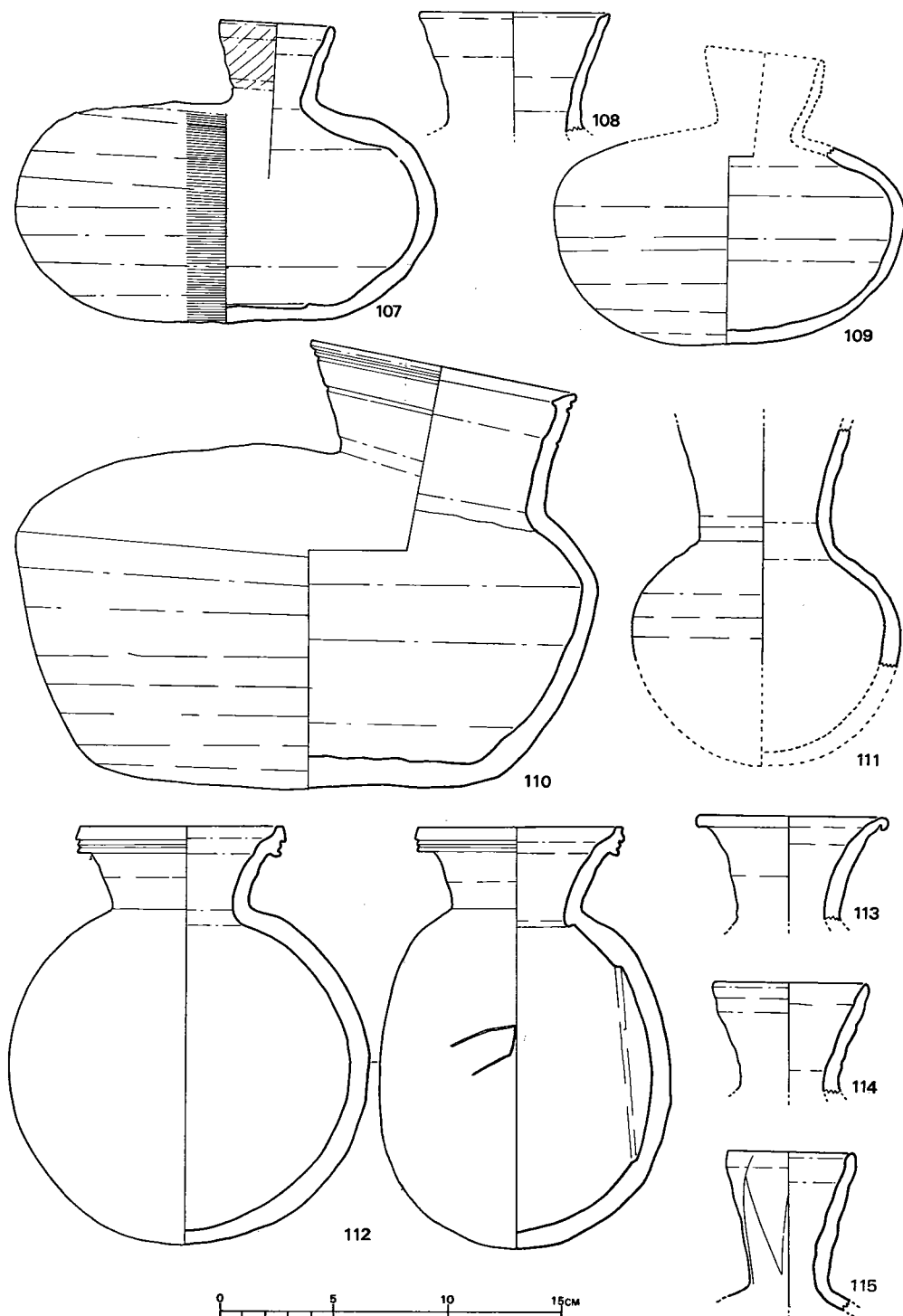


Fig. 31 鈴ヶ山2号墳須恵器実測図⑦ (縮尺1/3)

調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

#### 提瓶

I 類 (Fig. 31—112) 口縁部の上端は平坦面をもち、口縁部外面は突帯がつく。口縁部内面上方は直立する。頸部は短く、外反する。体部は正円に近く、横断面でみた背部の扁平性はあまりない。肩部から底部までは螺線状に刷毛目が入る。横断面では肩部は口縁に対して平行に、以下は垂直に刷毛目が入る。口径は9.2cm、器高は18.3cm、最大径は15.8cmを測り、横断面の最大径は12.9cmを測る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。両側面に同じヘラ記号をもつ。

II a 類 (Fig. 31—113) 頸部は内湾ぎみに外反し、口縁部は頸部をひきのばして折りまげただけである。口径は8.4cmを測る。色調は暗灰色を呈しており、灰黒色の自然釉が付着する。胎土に細粒を含み、焼成は良好である。

II b 類 (Fig. 31—114・115～Fig. 32—119) a 類にくらべて、頸部は少し長くなり、口縁部は丸くおさめる。背部はヘラ削りしており、扁平になる。118は最大径18.1cmを測り、体部には螺線状の刷毛目が入る。色調は灰黄色ないし灰黒色であり、焼成は良く、胎土には砂粒を含む。119は把手がつく。口径は7cm、器高は22.9cm、最大径は17.4cm、横断面最大径14cmを測る。灰白色を呈しており、焼成は不十分である。胎土は砂粒を含む。116は灰白色であり、焼成は不十分であるが、114、115、117は暗灰色を呈し、焼成は良好である。

II c 類 (Fig. 33—120) 頸部の接合方法が特異である。横断面では片側に寄っており、口縁に水平でなく、著しく傾く。平瓶を思わせるような形態である。口頸部はb類のつくりと同じである。把手は小さいのが装飾的に2個つく。背部はヘラ削りしており扁平である。口径は6.1cm、器高21.3cm、最大径17.6cm、横断面の最大径12.7cmを測る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

#### 甕

I 類 (Fig. 33—121, 122) 口頸部は4.7cm～5.5cmで凹凸をもって外反し、口縁部は頸部を引きのばして折りまげており、折りまげた先端は頸部外面とは接合してしまわず、わずかにあく。口径は22.8cm～24cmを測る。色調は灰黒色と暗灰色を呈しており、焼成は良好である。

II 類 (Fig. 33—123) 口頸部は3.6cmと短く、太い。口縁端部下方には凹線が入る。頸部と肩部の境には、小突起が入り、鋭い稜がつく。口径は11cmと小形である。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多数砂粒を含む。

III 類 (Fig. 33—124) 口頸部は著しく外湾する。口縁部は頸部をのばして折りまげただけである。口径は15.5cmと小さい。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

IV 類 (Fig. 33—125) 口頸部は13cmと長く、外反する。口縁部には突帯が多くつき装飾

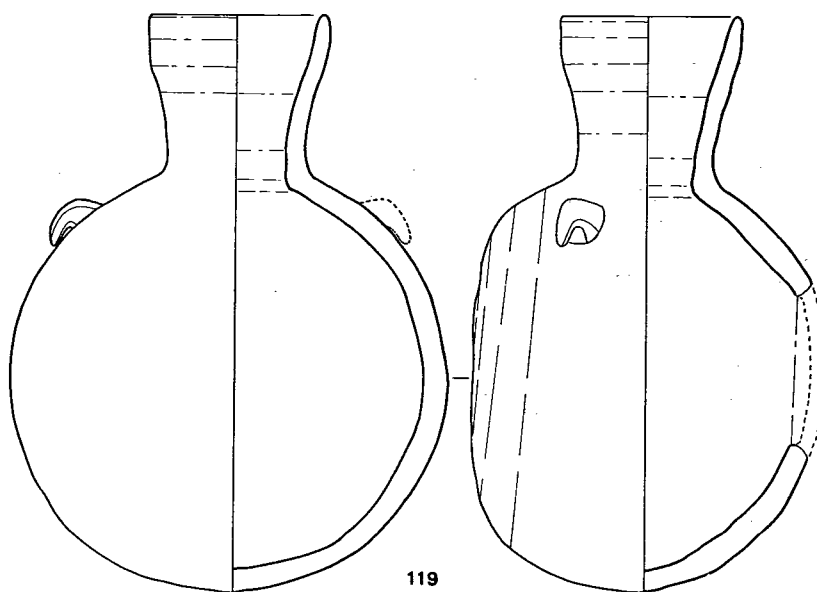
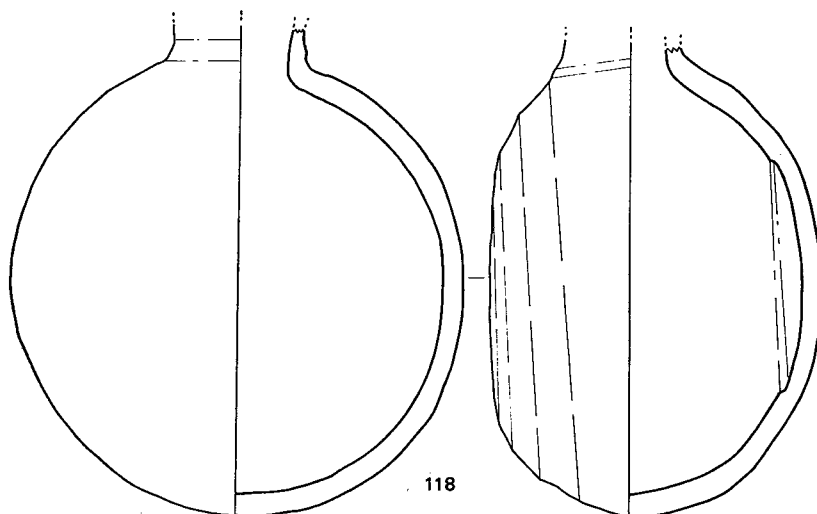
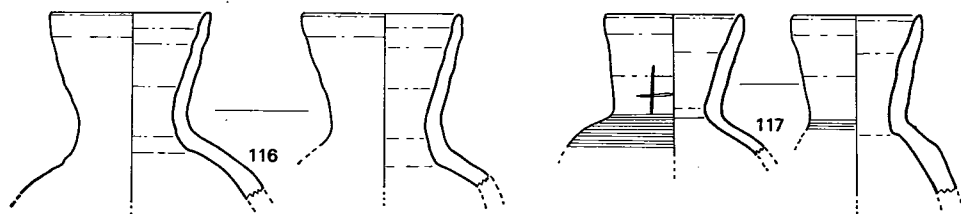


Fig. 32 鈴ヶ山2号墳須恵器実測図③ (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

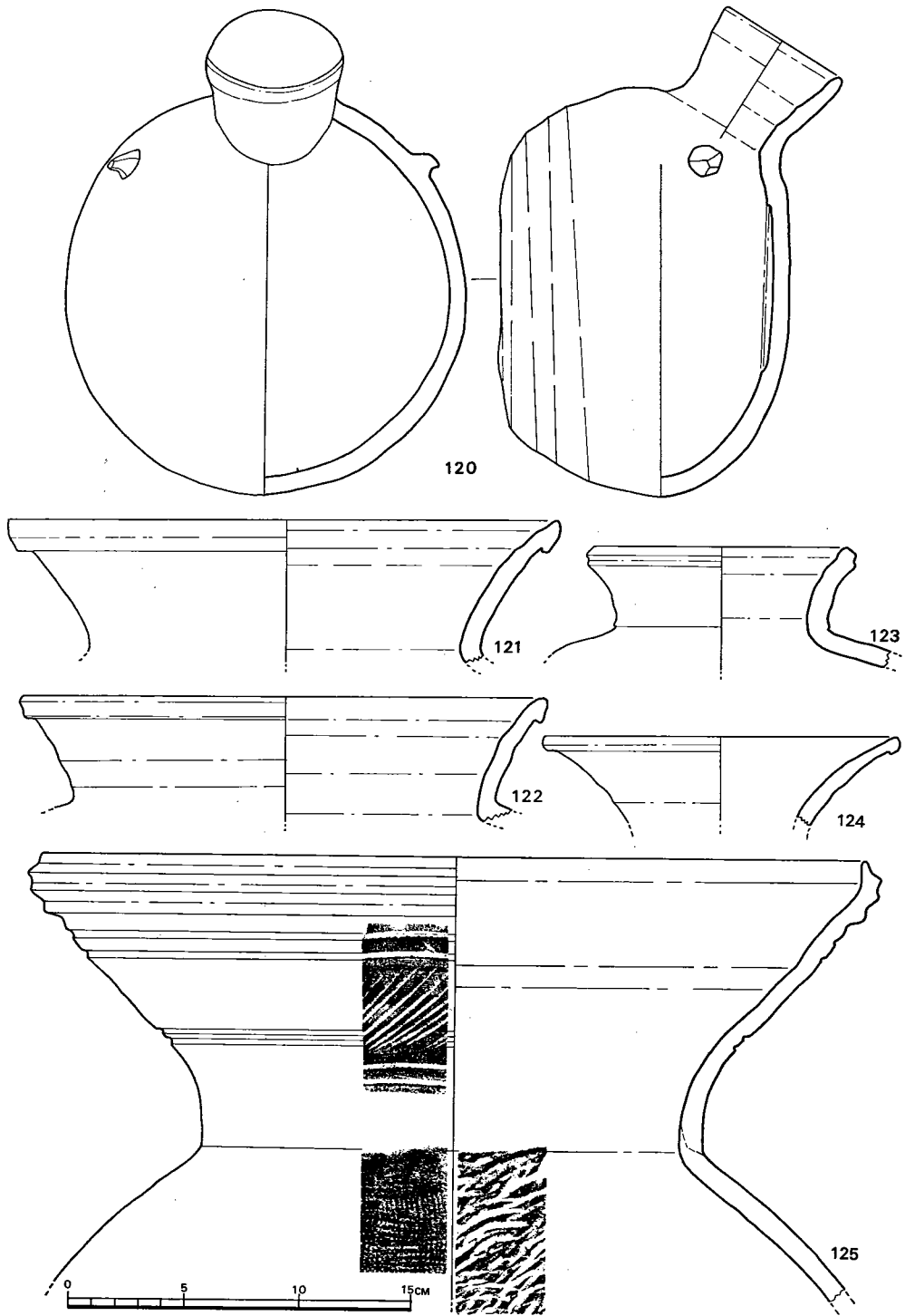


Fig. 33 鈴ヶ山2号墳須恵器実測図⑨ (縮尺 $\frac{1}{4}$ )

的である。口縁部内面は直立する。頸部中ほどと、頸部上端に沈線が2本ずつ入り、その間にはヘラ描き文が入り、頸部に装飾を添える。肩部外面には平行条線印文が入るが、いく分、すり消している。内面には同心円印文が入る。口径は36cmを測る。色調は暗赤褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

小結

鈴ヶ山2号墳から、須恵器では、杯、高杯、埴、台付椀、盆、甕、平瓶、長頸壺、提瓶、甕が出土しており、その総計は175個体以上を数え、そのうち杯は約130個体以上にのぼる。土師器では、杯、高杯、脚付埴、埴が出土しており、その総計は、40個体以上を数える。

須恵器をみても、杯の蓋はI類からIV類までに分類される。I類は、第ⅢB様式に属するもので、口縁部の形態、その他で、aからeまで5分類される。a類は、口縁部内面に古式の特徴を残しており、天井部と体部の境に沈線が入ることから考えると、第ⅢA様式に入るかも知れないが疑問である。II類は、第IV様式に属するものと思われる。I類にくらべて小形となりa、bに2分類される。III類は、蓋に身受けのかえりをもち、さらにつまみを有するものであり、第ⅢB様式に属する。IV類では身と蓋との逆転が行なわれる。即ち、蓋には身受けのかえりがつき、身には蓋受けのつかないものであり、第IV様式に属するものであろう。

杯身はI類からIV類まで分類した。I類は第ⅢB様式に属するものであり、たちあがりの形態その他でaからeまで4分類した。蓋I b類と身I c類、蓋d類と身d類との組合せが可能である。II類は第IV様式に属するもので、たちあがりの形態等で、aとbに2分類される。蓋II a類と身II a類、蓋II b類とはセットになる。b類の杯には、内面に篋記号をもつものが2個体ある。III類は、蓋のIII類43とセットであり、第ⅢB様式に属する。IV類は、蓋のIV類とセットであり、第IV様式に属

する。高杯のI類は有蓋高杯であり、長脚二段透孔が入る。I類とII類は第ⅢA様式に属する。III類は第ⅢB様式に属するもので、器型の大小によりa～cに3分類した。これらは、塚ノ谷4号窯出土の高杯のあの特徴的な形態と全く同一であり、同窯で焼かれたものと思ってよからう。

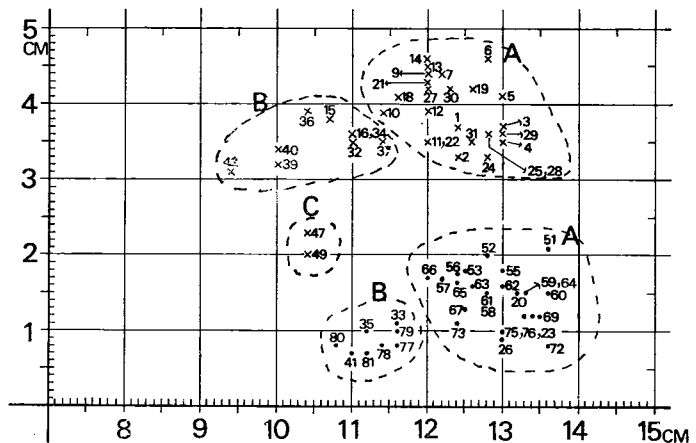


Fig. 31—112 の提瓶は、

Tab. 6 鈴ヶ山2号墳須恵器計測表

底部附近のとがりは足りないが、口縁部の形態は、乗場古墳出土品と類似しており、そのほか横断面の背部が、まだあまり平坦でないことなどから第ⅢA様式に含めてよいかも知れない。

以上のように出土土器をみると本古墳は、ⅢA様式、ⅢB様式、Ⅳ様式の土器を出土しており、少くとも3回以上の埋葬が考えられる。被葬年代は、6世紀中葉から6世紀終末にかけてのものであると言えよう。

なお、塚ノ谷窯跡群調査報告中の塚ノ谷4号窯跡出土の土器と本古墳出土の土器には、非常に似通ったものが多く、従って、本古墳には塚ノ谷4号窯から、土器の供給を受けていることは、まちがいあるまい。

Tab. 6 説明 Tab. 6は須恵器杯の蓋と身の計測値を表で表わしたものである。

×印は蓋であり、番号は実測図の番号を示す。この場合、縦軸は器高を、横軸は口径を表わす。表の如くに3つのグループに分類できよう。Aグループは口径10.4cm～13cm、器高3.3cm～4.6cmの間のものであり、これらは全て、土器型式の第ⅢB様式に比定される。Bグループは、口径9.4cm～11.4cmノ器高3.1cm～3.9cmの間のものであり、第Ⅳ様式に比定される。但し、15、16は第ⅢB様式である。Cグループは、蓋にかえりのつくもので、口径10.4cm～13cm、器高3.3cm～4.6cmの間のものであり、第Ⅳ様式に比定される。この表からは、第ⅢB様式と第Ⅳ様式は器形が小形化することがわかり、器高に比して、口径の小形化の割合が大きい。大きさの変化と共に天井部の調整にも多少の変化が見られる。即ちAグループはほとんどがヘラ削りされているのに比して、Bグループはその半数がヘラ削りをされないでおり、たとえ、ヘラ削りしていても、それは、Aグループとは違い、ロクロを静止した状態でのヘラ調整になっている。Cグループは天井部はロクロから離されて、そのままの状態である。

つぎに・印は杯の身であり、縦軸はたちあがり、横軸は最大径を表わす。これはA、Bの2グループに分類できる。Aグループは最大径12cm～14cm、たちあがり0.8cm～2.1cmの間のものであり、第ⅢB様式である。Bグループは、最大径10.8cm～11.6cm、たちあがり0.7cm～1.1cmの間であり、第Ⅳ様式のものである。たちあがりだけを見るとA、B両グループにまたがるものもあるが、最大径は第Ⅳ様式は12cmを越えていない。底部の調整法はBグループは半数近くが、ロクロを静止した状態でヘラ調整を行っており、Aグループも2、3の例があって、その点での区別は、不明瞭である。

### 土師器

#### 杯蓋

I a 類 (Fig. 34-1) 器壁は全体に一律の厚さを保ち、器形は丸い。復元口径は12.4cm、復元器高は4.5cmを測る。色調は淡赤褐色を呈しており、焼きは良い。

#### 杯身

I a 類 (Fig. 34-2) たちあがりは1.4cmほどで内傾する。外面のたちあがり上部は

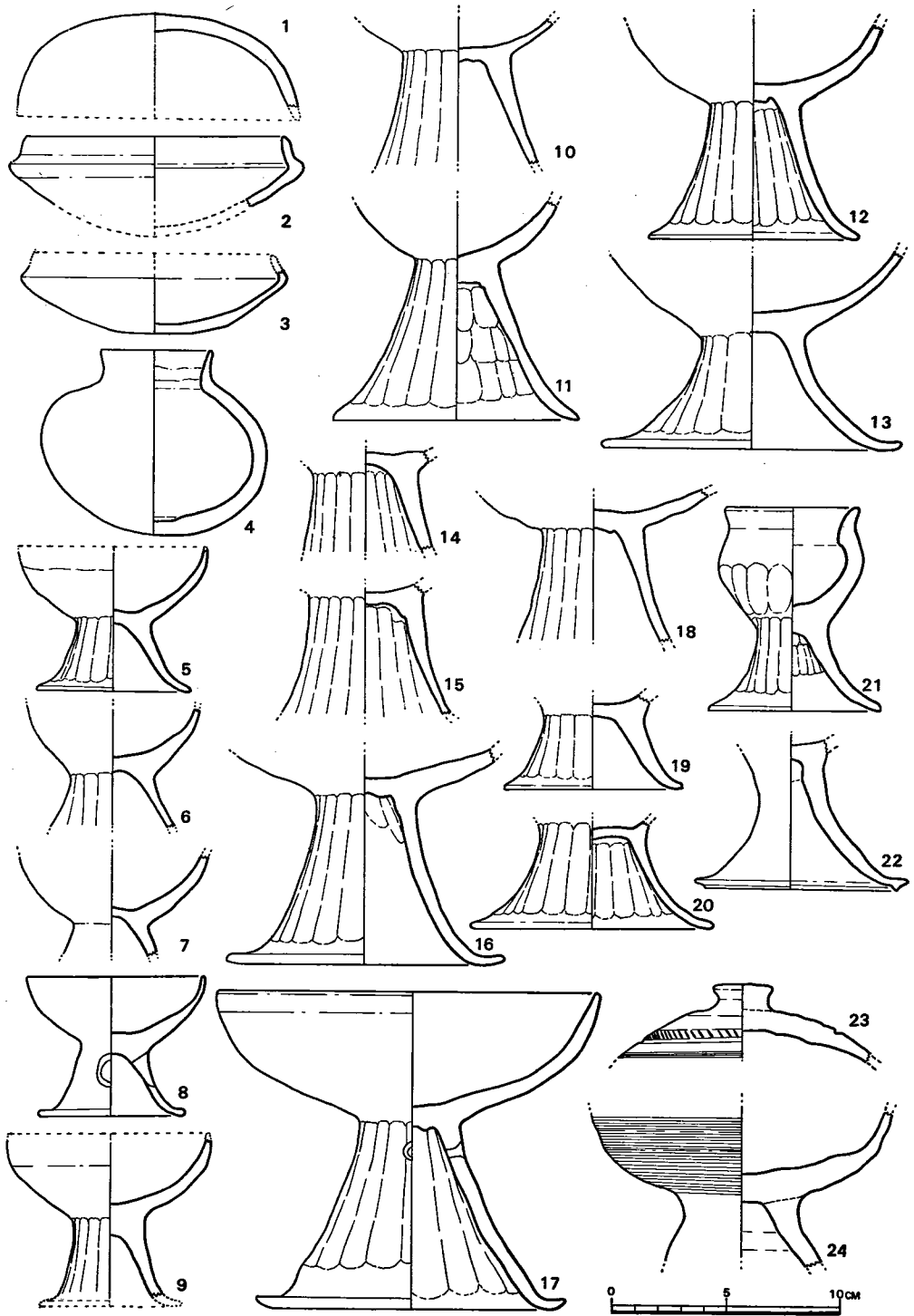


Fig. 34 鈴ヶ山2号墳土師器実測図① (縮尺 $\frac{1}{2}$ )



内傾度が大きい。蓋受け部はいく分くぼみだけである。たちあがり基部には稜線が入る。復元測定では口径は12.4cm、最大径13cmを測る。色調は褐色を呈し、焼成は軟質である。

I b類 (Fig. 34-3) a類に比して小形であり、器壁もうすである。蓋受け部はほとんど、落ち込みはなく、短い。口径10.6cm、最大径11.8cm、器高3.4cmを測る。色調は赤褐色を呈しており、焼成は軟質である。

埴 (Fig. 34-4) 口頸部は直線的に外反する。肩部との境は丸くつくられ稜は入らない。胴部はいびつであるが、器形は丸い。口縁部下はヘラ研磨されており、全面に丹塗りされる。

口径3cm、器高8.2cm、最大径9.8cmを測る。色調は赤褐色を呈しており、焼成は不十分である。

高杯

I a類

(Fig. 34-5~9)

5で代表される器形であり、最も小形のものをa類とした。杯部は内湾ぎみに外反し、口縁部は幅をせばめながら直立してくる。脚部は短い、大きく外反し、脚裾はカーブをかえて斜め下方へ折れまがる。口径は7.8cm~8.8cm、脚端部径は6.5cm~7.5cm、器高は7.8cm~8.8cmと1cmずつの差がある。8は脚中央部に不整円の孔が一つ、焼成後穿孔されている。色調は褐色ないし黄褐色を呈し、いずれも焼成不十分である。5, 6, 9は、外面にヘラ削りしてあり、また5, 6は、外面とも丹塗りしているのが認められた。

I b類 (Fig. 34-19, 20) 脚部のみであるが、a類より大きく、c類より小さいものである。杯部と脚部の接合方法は杯部と脚部を一気につくり、杯底部を最後につめるという方法である。19は脚裾径7.9cm、脚上部まで3.1cm、20は脚裾径は10.4cmと大きく脚上部まで4cmである。色調は暗褐色ないし褐色で、焼成は堅い。胎土には砂粒を含む。外面のみ丹塗りしている。

I c類 (Fig. 34-10~18) 17で代表される器形でa, bと比して、大形のものである。杯部は基部から大きく外反するが口縁部は外反度が小さくなる。脚裾は大きく折れまがるのと、なだらかに続くのがある。脚部は内外面とも、ほとんどヘラ削りしている。17は脚柱上部に焼成後、小円孔を穿っている。口径16.9cm、脚裾径13.6cm、器高14.1cmを測る。脚裾を残存するものの測定値は9.6cm~13.6cmとひらきがある。色調は黄褐色ないし褐色であり、焼成は不十分である。11, 13, 16は全面に丹塗りを、12は脚部内面を除く全面を丹塗りしている。

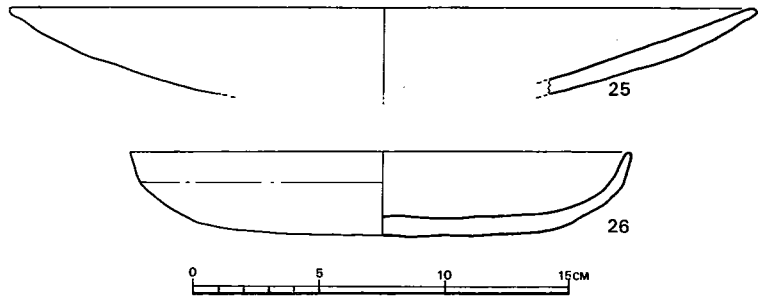


Fig. 35 鈴ヶ山2号墳土師器実測図② (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

Ⅱ類 (Fig. 34-22) 脚部のみである。脚端部は段がつく。脚裾径9.3cmを測る。器形はいびつである。黄褐色を呈しており、焼成は不十分である。胎土には砂粒を含む。

脚付埴 (Fig. 34-21) 脚部は内湾気味に外反する。最大径は胴部のやや上方にあり、口縁部は短く外反する。外面のヘラ削りは胴部から脚部までで、内面は脚部のみヘラ削りしている。口径5.9cm, 脚裾径7.5cm, 胴部径6.4cm, 器高8.9cmを測る。色調は褐色を呈しており、焼成は良い。胎土には細粒を含む。

蓋 (Fig. 34-23) 24とセットになるものと思われる。天井部の下方には沈線が1本入り、その直上部には櫛描き列点文をめぐらす。下方は櫛によるかき目が入る。色調は褐色を呈しており、焼成は不十分である。胎土には砂粒を含む。

身 (Fig. 34-24) 杯部の底部は脚部との接合を良くするために櫛で線を入れ凹凸を多くしている。接合部は大きく内湾する。杯部には櫛によるかき目が入る。

盤 (Fig. 35-26) 口径20cm, 器高2.3cmを測り浅い。口縁部と体部の境はわずかに張り、甘い稜線が入る。口縁部は直線的で、やや立ちぎみになる。色調は外面は黄褐色を、内面は赤褐色を呈しており、底部は部分的に黒変する。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

その他 (Fig. 35-25) 残存部基部から直線的に外反する。色調は褐色を呈しており、内面は丹塗りしている。焼成は良い。復元口径30cmを測る。(川述昭人)

#### 装身具・工具・武器・馬具

耳環 (Fig. 36-2・3) いずれも、中実の銅胎に金箔をおく通常の形式に属し、2は外径18×19.5mmと小形で、断面は4×7mmの長円形、3は、外径23×26mmで断面は径5mmの円形を呈する。

手斧鋏 (Fig. 36-1) 刃部の殆どを欠く。復元全長77mm, 刃部復元巾44mmと小形である。袋部は、厚さ5mm前後に展ばしてこれを外径33×21mmの長円形に曲げているが、内部に木質は認められず、柄を着装しない状態で副葬されている。

刀子 (Fig. 35-15) 関部は明瞭でなく、茎は先細りとなる。

鎗 (Fig. 35-16) 茎を有するので鎗とした。身巾11mm, 厚9mmで、鋒に近い方が僅かながら巾広となる。身と茎との境は巾17mmと広がる。

直刀 (Fig. 35-24) 茎の大半を欠く。平棟・平造で、刃わたり39.2cm, 巾28mm, かさね8mmである。関部には巾16~17mmで断面が長径32mm, 短径24mmの倒卵形を呈する縁金具が装着されている。

鐔 (Fig. 35-17~20) 4個体分検出されており、いずれも倒卵形を呈する。17は、20と同様に無窓で、全長73mm最大巾56mmで、縁が一段高くなる。刀身を通す孔は、最大巾23mm, 長さ29mmの倒卵形。18は、4×11mmの矩形の窓(八窓か)を有し、完存していれば、大きさを17を上回ったものとみられる。19は、4×11mmの矩形の窓を有し、六窓と推定される。

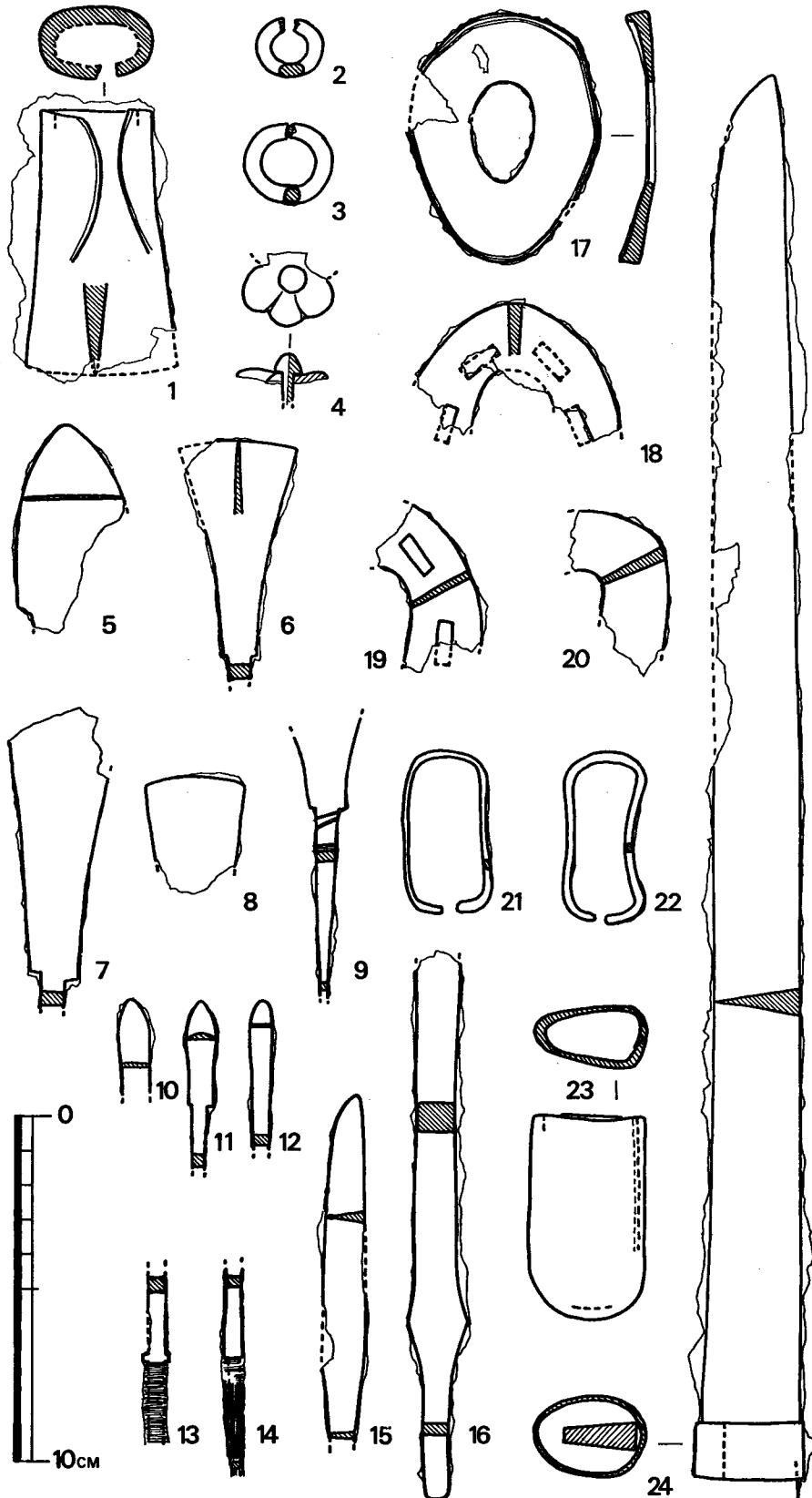


Fig. 36 鈴ヶ山2号墳装身具・武器・工具など実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）

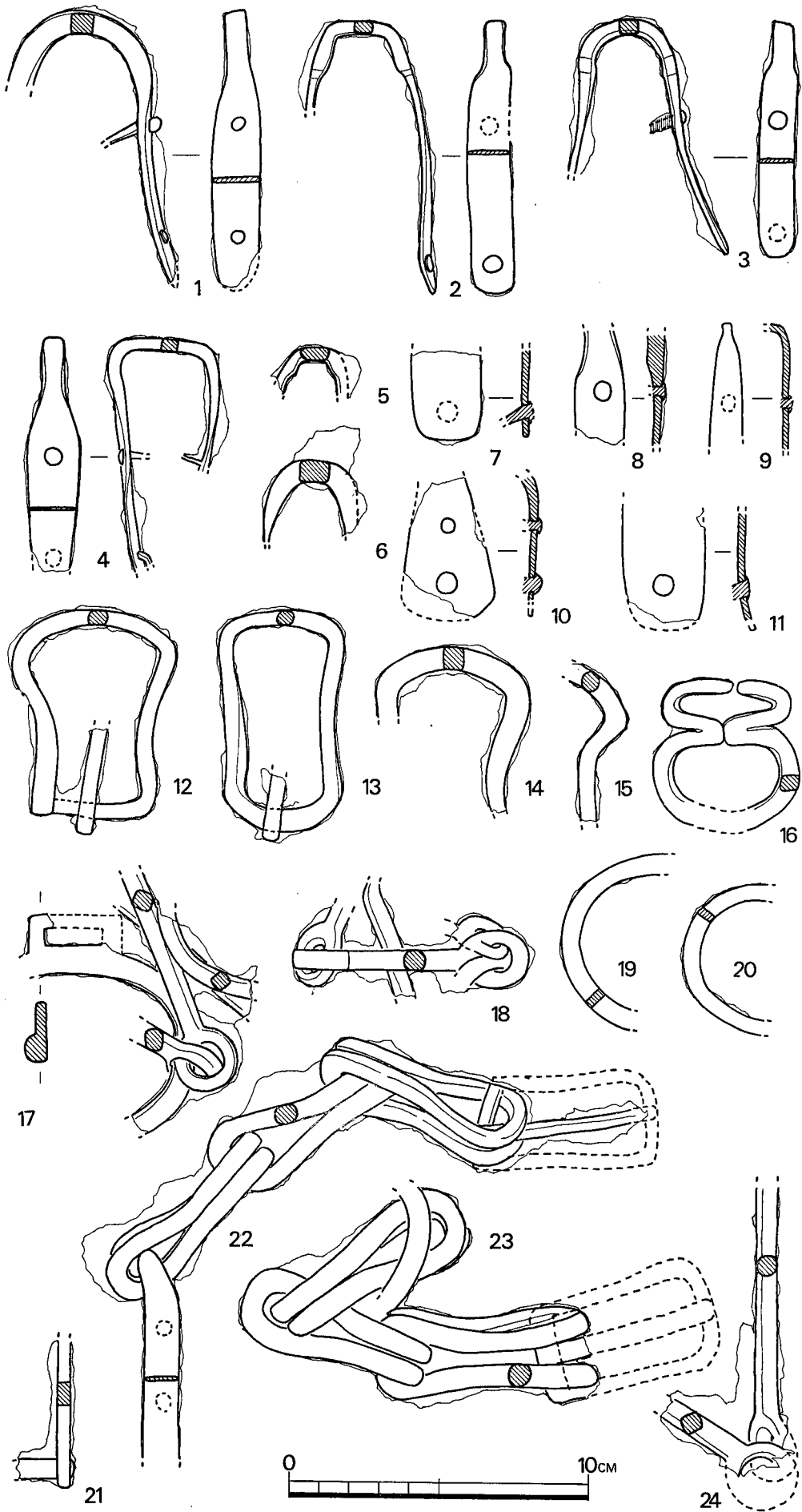


Fig. 37 鈴ヶ山 2 号墳馬具実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

鉄製円頭柄頭 (Fig. 36—23) 全長59mm, 巾は先端部が僅かではあるが広く34mmを測る。厚さ2~3mmの鉄板を折り曲げ棟側でとじ合わせ, 断面は, 33×17mmの肩の張った倒卵形を呈する。目釘は使用されていない。

責金具 (Fig. 36—21・22) いずれも径2mm前後の銅棒を曲げている。22は, 歪みを生じているが, 21は, 略原形と思われ長さ47.5mm, 巾24~25mmである。金銅製であったか否かは不明。

鉄鏃 (Fig. 36—5~14) 6~9は, 円頭広根斧箭式に属する。6は身長63mm, 最大巾35mm, 8の最大巾は29mmで同一規格にあると見做されるものはない。11は, 身長41mm, 最大巾9mmで, 片丸造鑿箭式, 12は, 関無平造りで, 鑿箭式に属し, 最大巾6.5mm。13は棘を有するが, いずれの形式の身部に伴うものかは不明。5は, 広鋒平造三角形式に属するものか。<sup>①</sup>

鉄地金銅張留金具 (Fig. 36—4) 座金は, 五もしくは六葉の花文に仕上げられており, その中央部に円頭鋌が打ちこまれている。裏面に木質・皮質の遺存は認められない。

木心鉄張壺鏡 (Fig. 37—1~6・8・22・23) 鏡本体が遺存するものではなく, いずれも兵庫鎖を受ける鏡上部の金具しか現存しないが, 金具の形態・大きさに小異が認められ, 確実なものだけでも8セット9個体を数え, 県内では異例の多数にのぼる。金具の高さは, 2が91mm, 3が79mmと全体的に低く, 壺鏡本来の高さの1/2程度に過ぎない。1~4の巾は, それぞれ, 1.6cm, 1.4cm, 1.2cm, 1.7cmである。22は, 兵庫鎖および鏡鞆を受ける鉸具の一部が現存する。兵庫鎖は3連で, 1単位は径7mm弱の鉄棒を曲げたもので, 7cm前後の長さを有する。23は鏡上部の金具を欠失するが, 22とセットになるものである。この他別セットに属する兵庫鎖片もあるが, いずれの鏡に伴うものかは不明である。

9は, 頂部が細身である点で鏡とするには疑問が残るが, 形状は良く似ている。7・10・11は, 巾がそれぞれ2.3cm, 3.1cm, 2.7cmあって, 既述例に比して著しく巾広となるが, 10の上部の形状は壺鏡上部の金具に近く, これらもまた壺鏡の頂・側部を補強する鉄板の一部とも見做されよう。<sup>②</sup>

鉸具 (Fig. 37—12~15) 12は全長69mm, 最大巾55mm, 13は, 全長73mm最大巾43mmで, いずれも刺金は, その一端を底辺の横棒に折り曲げてとめている。図示したもの以外にも多数の破片がある。

轡 (Fig. 37—17・18・24) 17は, 素環の鏡板に, 銜・引手の一部が錆着している。鏡板は長径8.2cm前後, 短径6cm前後と見られ, これに3×1.2cm程度の立聞がつく。18は, 銜・引手・鏡板の一部が錆着している。銜は2連で一単位は7.9cm前後。24は銜と引手が錆着したものの。

引手壺 (Fig. 37—16) 一部を欠失するが, 復元全長60mm, 最大巾49mmで, 5×6mmの鉄棒を「8」字形に折り曲げており, 通有のものとは異なる。<sup>③</sup>

鉄製環 (Fig. 37—19・20) 正円ではなく、長円形を呈する。鏡板とするには、断面形・大きい点で疑問がある。

これらの他に、用途不明鉄器として、21がある。鉸具に近いが、断面が矩形を呈し、他例とは異なる。

注 ① 後藤守一「上古時代鉄鍬の年代研究」『日本古代文化研究』所収 1942年

② 木心鉄板張壺鏡としては、美作中宮1号墳出土の2例が著名である(近藤義郎『佐良山古墳群の研究』1952年)。その1つは、筑前王塚古墳出土例と同工の加飾された鉄板により、前面・側面・沓込の各部は補強され、木部の遺存状態も極めて良好である。他の1つは、兵庫鎮を受ける頂部および側部を補強する鉄板のみしか現存せず、鈴ヶ山2号墳出土例はこれに近い。古墳時代の鏡については、増田精一氏の最新の論考があるが(「鏡考」〈史学研究81〉1971年3月)、氏はこれら2例を一括して「三角錐形木心壺鏡」とされている。ただし、2例のうち出土例の比較的多い後者のタイプの壺鏡では、前面および沓込部の補強鉄板の遺存が確認されている例は極めて少なく、大和二塚で側面と沓込部とを補強するL字形の鉄板(森浩一・伊達宗泰・北野耕平・上田紓『大和二塚古墳』〈奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告21〉1950年)、和泉富木車塚で「梁の部分の一部」(上田紓・森浩一・藤原光輝・秋山進午・宇田川誠一『富木車塚古墳』〈大阪市立博物館学報3〉1960年3月)の他二・三の例が知られるのみで、全体の形制はなお不明である。また、これまで後者のタイプの壺鏡とされてきた諸例は多種・多様であり、かつこれを輪鏡かとされるむきもあって(真野和夫「釘崎第3号墳」『管の谷窯跡群』所収、1971年3月)検討の余地が残されている。

③ 大和二塚で該金具が出土している。

(石山勲)

### (3) 鈴ヶ山2号墳麓の火葬墓

鈴ヶ山2号墳の墳丘の構造を調べるために、東方にトレンチ(試掘溝)を設定した際、偶然に発見された。

長さ約80cm、幅約50cm、深さ約20mmの楕円形の墓坑のなかに、木炭が充満し、上面で須恵器碗と器形不明のものとの2個を検出した。奈良時代の火葬墓と推測する。

(西谷正)

出土した碗について述べると、高台の高さは普通であり、いく分、内湾して外方へ張り出す。端部は小さく突き出す。高台底は斜めになっており、一辺のみが地につく。底部と体部の境はヘラ削りされており稜がつく。口縁部は内湾気味に外反する。口径は13.4cm、器高は4.5cm、高台径8.6cmを測る。色調は淡灰色を呈しており、焼成は不十分である。胎土には砂粒を含む。(川述昭人)

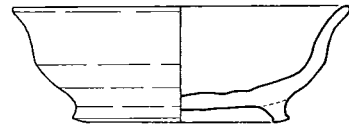


Fig. 38 鈴ヶ山2号墳麓火葬墓須恵器実測図(縮尺1/4)

## 4 鈴ヶ山古墳群採集須恵器・土師器

### (1) 広川4号墳

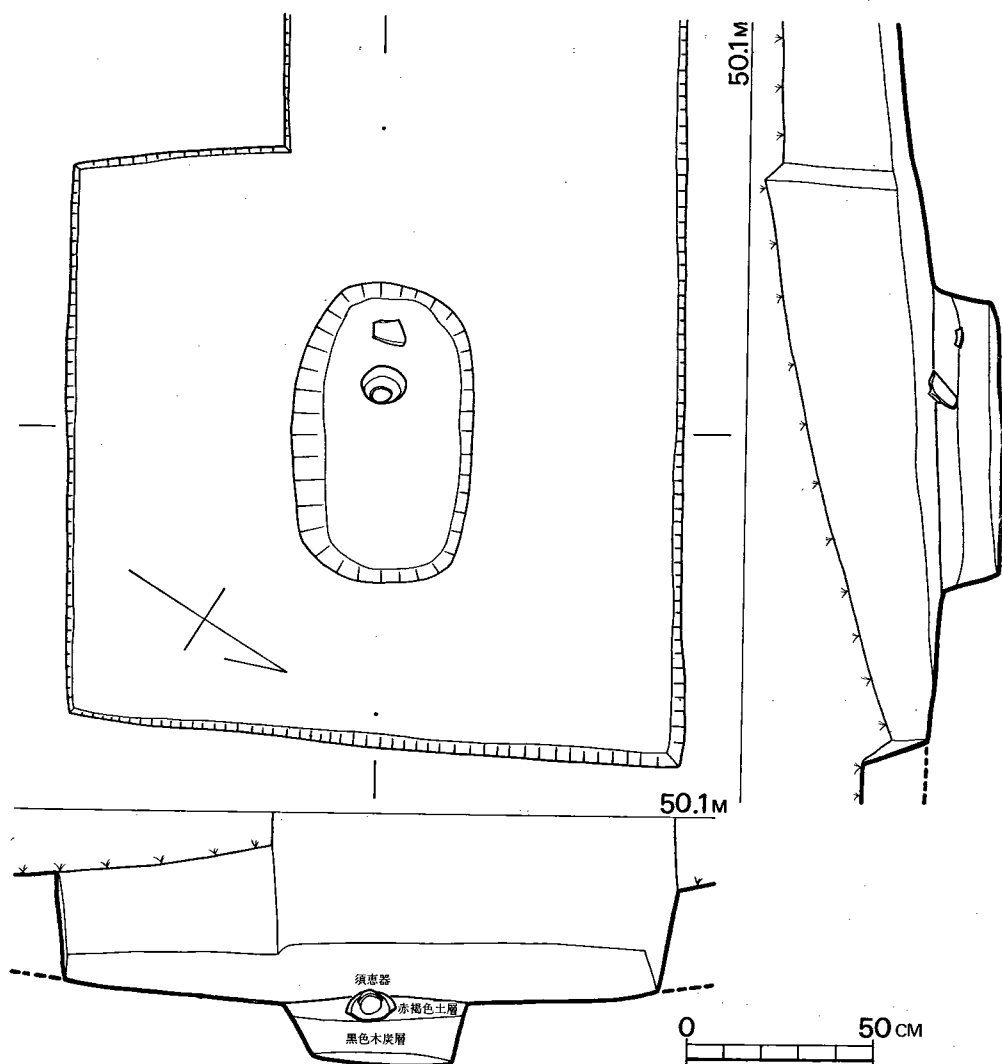


Fig. 39 鈴ヶ山2号墳竈火葬墓実測図(縮尺 $\frac{1}{20}$ )

杯蓋 (Fig. 40-18) 蓋にかえりを有する形態のものである。天井部は欠損しており、その詳細は不明であるが、おそらく、つまみを有していたものと思われる。したがって、つまみ周辺付近は櫛状器具によるカキ目が入る。口径は10.2cmを、かえりは0.8cmを測る。色調は灰褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土も精選されており良好である。

杯身 (Fig. 40-19) たちあがりは長く1.6cmを測る。うすづくりの大形品である。口径は11.5cm, 最大径14.5cm, 器高4.5cm~5cmのものである。たちあがり途中でやや肥厚し、内傾斜面との境は丸くつくられて稜線は入らない。色調は暗灰色を呈しおり、焼成は良好である。胎土には少量の砂粒を含む。

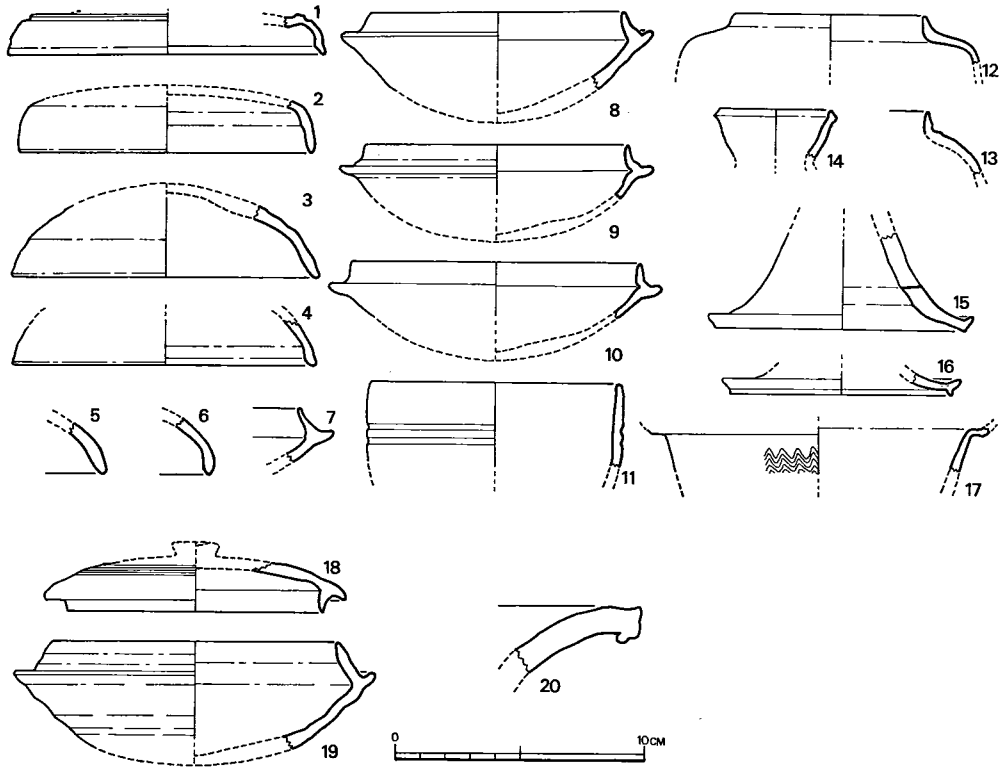


Fig. 40 鈴ヶ山古墳群採集須恵器実測図（縮尺 $\frac{1}{3}$ ）

(2) 広川7号墳

杯蓋 (Fig. 40-1~6)

I a 式 (Fig. 40-1) 器高の低い形態のものである。天井部と体部の境には沈線が入る。口唇部内面は斜めに切られている。復元口径は12.7 cmを測る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は細粒を含む。

I b 式 (Fig. 41-2) I a 式と同じく器高の低い形態のものであるが、天井部と体部の境には沈線はない。口縁部内面に小突出を有する。復元口径は11.8 cm, 器高は2.5 cm~3 cm程である。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

II 式 (Fig. 41-3~6) いずれも破片である。復元口径は12.3 cm, 器高は3.5 cm~4 cm程である。I 式よりも器高は高くなる。口縁部の形態は体部からなだらかな傾斜で口縁端へとつづく。6のみやや、垂直である。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。

杯身

I a 式 (Fig. 40-7) あまりに小片であるため、口径などの復元測定はできない。たちあがりは細く、長さは1.1 cmを測る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土に



は細粒を含む。

I b 式 (Fig. 40—8) I a 式にくらべて、たちあがりは太く、安定感がある。長さは1.1cmを測る。蓋受けの落ち込み部には、沈線が入る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。復元値は、口径10.3cm, 最大径12.5cm, 器高は約4.5cmである。

II 式 (Fig. 40—9・10) たちあがりの形態に特徴がある。即ち、外面では、蓋受け部との中ほどは一段高くなり、内面では、内傾斜面との境は沈線が入って、入りくんだ形態を呈する。9, 10とも、うすでづくりである。復元口径は10.7cmと11.6cm, 器高は共に3.5cm～4cm程であり、たちあがりは1cmを測る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

III 式 (Fig. 40—11) 蓋受けを有さない形態のものである。体部には2条の沈線が入る。口縁端部上面は平坦である。復元口径は10.1cmを測る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

罎 (Fig. 41—12, 13) 12は復元口径7.8cmを測る。共に頸部の短い、うすでのものである。色調は暗灰色と灰色を呈しており、焼成は共に良好である。胎土には細粒を含む。

提瓶 (Fig. 40—14) 口頸部を少し残すのみである。口唇部は直線的につくられており、すどく稜がつく。口径は4.9cmを測る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

高杯 (Fig. 40—15, 16) 共に脚部を一部残すのみである。15は透孔が入るが、その数は不明である。脚裾端部は、はね上る。16の脚裾端部も15同様にはね上った形態であり、脚裾下端部は直立する。色調は15は灰色, 16は暗灰色を呈する。焼成は良好であり、胎土には共に細粒を含む。復元脚裾径は、15は10.6cm, 16は9.6cmを測る。

壺 (Fig. 40—17) 頸部の上部をわずかに残すのみであるが、古式のものである。頸部上端は小さく、鋭く折れまがって口縁部へとつづく。頸部には櫛描波状文が入る。

### (3) 広川8号墳

杯身 (Fig. 41—26) たちあがりは0.8cmと短い。たちあがりと内傾斜面との境は甘い稜線が入り、下方に、更に一段を有する。口径は10cm, 最大径は12.4cmを測る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

### (4) 広川9号墳

杯身 (Fig. 41—22) たちあがりは1.3cmで太い。内傾しつつも途中からは外反する。たちあがりと内傾斜面との境には明瞭な稜線は入らない。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。復元口径は12.4cm, 最大径は14.5cm, 器高は4cmを測る。

壺 (Fig. 41—23) 口頸部を一部残すのみである。口端部は細く鋭い。口縁部は突帯がつく。内面の口唇部と頸部の境は鋭い稜がつく。頸部残存部の下端には沈線が入る。色調は灰

色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。復元口径は15.3cmを測る。

提瓶 (Fig. 41-24) 口頸部を残存するのみである。口頸部より見ると、小形品であることがわかる。復元口径は5.3cmを測る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。

甕 (Fig. 41-25) 小片であるため、全体の大きさはわからない。口唇部は平坦面を有し、端部は丸くつくられている。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。

#### (5) 広川10号墳

甕 (Fig. 41-20) 口縁部の一部を残存するのみである。口縁部径の復元測定は不能である。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

#### (6) 広川11号墳

### 須恵器

#### 杯蓋

I式 (Fig. 41-1・2) 天井部と体部の境には沈線が入り、口縁部内面には段がつき古式の特徴を残す。復元口径は、1は14.2cmを測る。2は12.8cmを測る。器高は4cm~4.5cm程である。色調は、1は灰黄褐色を、2は灰小豆色を呈する。焼成は共に良好であり、胎土には細粒を含む。

II式 (Fig. 41-3) 天井部を欠損するが、つまみを有する形態のものであろう。かえりは直線的で1cmを測る。体部には楯状器具によるカキ目が入る。色調はやや青味を帯びた灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は精選されて良い。復元口径は9.5cm、最大径は11.5cmを測る。杯の身II式とセットである。

III式 (Fig. 41-4) 天井部を残すのみである。つまみは中央部のややとがった扁平な形態である。色調は灰白色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を多く含む。

#### 杯身

I a式 (Fig. 41-5・6) たちあがりは1.2cm~1.3cmを測る。たちあがり基部は太く、内傾斜面との境は稜線が入らない。復元口径は、5は13.3cm、6は11.8cmを測る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には共に砂粒を含む。

I b式 (Fig. 41-8) たちあがりは1cmを測り、細く直線的となる。蓋受け部は落ち込みが深い。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。復元口径は10.5cm、最大径は13.1cmを測る。

I c式 (Fig. 41-7) たちあがりは1.5cmを測り内傾するが上方は直立する形態である。底部のみヘラ削りされているが、この削りは雑である。口径は9.9cm、最大径は12.7cm、器高は4.4cmを測る。色調は灰小豆色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

II式 (Fig. 41-9・10) 蓋受けのない形式のものである。大きさは多少異なるが、つ

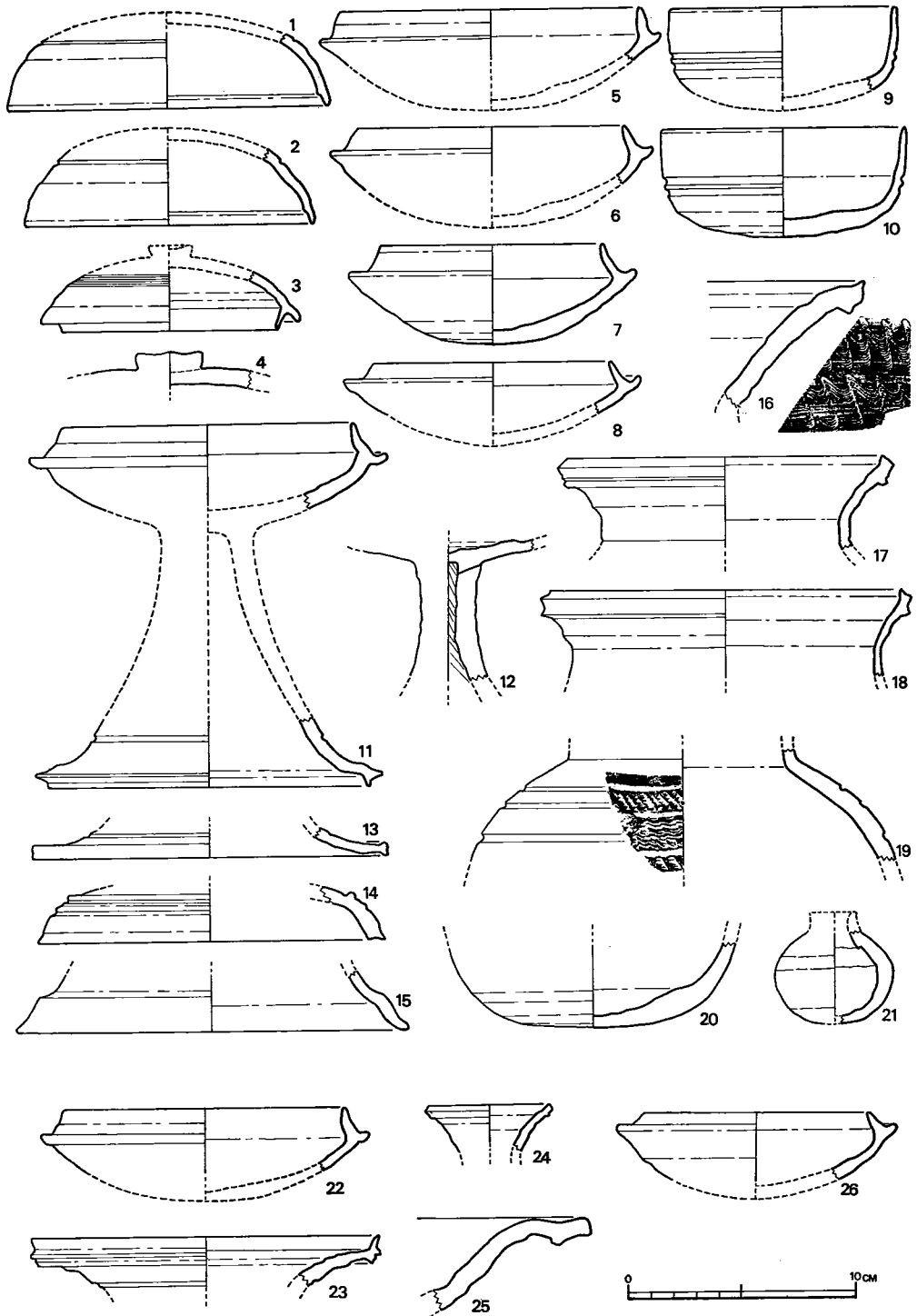


Fig. 41 鈴ヶ山古墳群採集須恵器・土師器実測図（縮尺 $\frac{1}{4}$ ）

くりは全く同一である。口縁端部は丸くつくられており、体部には2条の平行沈線が入る。底部はヘラ削りされており、丸味はあるが平坦に近い。口径は10.1cmと10.9cm、器高は4.4cmと4.8cmをそれぞれ測る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には9は細粒を、10は砂粒を含む。杯の蓋Ⅱ式とセットである。

#### 高杯

I 式 (Fig. 41—11) 有蓋高杯である。杯部は口径12.9cm、最大径15.9cmと大きく、たちあがりは1.3cmを測る。蓋受け部の落ち込みは深くないが、蓋受け部は長い。脚柱部を欠損する。脚裾径は15.3cmを測る。脚部ははね上らず、斜下方につき出す。脚下方部には一条の沈線を配する。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

Ⅱ a 式 (Fig. 41—12) 杯部と脚柱部の一部を残存するのみである。透孔が三箇所に入るものと思われる。脚柱は、内外面とも凹凸が多く、内面には、しぼり痕が明瞭に残る。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

Ⅱ b 式 (Fig. 41—13) 脚部の一部を残すのみである。脚裾径は15.8cmを測る。脚端部上方は、わずかにはね上り、下方は、小さくつき出す。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。残存部上端には1条の沈線が入る。

台付椀 (Fig. 41—14・15) ともに脚部を残すのみである。14は2条の突帯で装飾している。この土器は、山の前1号墳、鈴ヶ山1号墳出土の土器と同じような形態のものであろう。脚裾径は15.3cmを測る。色調は灰色ないしは灰黒色であり、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。15は段がついて脚裾をひろげる。脚端部はややとがり気味であり、14と比して、器壁はうすである。脚裾径は17.3cmを測る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

甕 (Fig. 41—16) 口頸部の一部を残すのみである。小片であるため、口径は明らかではないが、それでも50cm位にはなりそうである。口縁端部は鋭く突き出し、口唇部には突帯がつく。頸部には櫛描波状文が入る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

壺 (Fig. 41—17・18・19・20) 17は口唇部に1条の沈線が入って装飾を加える。口唇部下端は小さいが鋭く突き出す。口径は14.1cmである。色調は灰小豆色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

18は細味である。口唇部上端、下端は小さく突き出す。復元口径は15.5cmを測る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

19は肩部のみを残存する。肩部には3条の沈線が入り、その下方には櫛描列点文と櫛描波状文、最初のそれより、少し幅の広い櫛描列点文が入る。色調は外面は暗灰色で、内面は暗小豆色を呈する。焼成は良好であり、胎土には砂粒を含む。

20は底部のみである。19とは別個体である。底部は平坦面を有し、残存部のほとんどをヘラ削りしている。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでおり、器面はザラザラする。

#### 土師器

埴 (Fig. 41—21) 口縁部を欠損する。最大径は5.2cmで、胴部中央に位置する。外面は不正方向にヘラ削りして調整する。器高は5cm程である。色調は黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

広川4号墳は第ⅢB期

広川7号墳は第ⅢB期、第Ⅳ期、甕のみ第Ⅱ期

広川8号墳は第Ⅳ期

広川9号墳は第ⅢB期

広川11号墳は第ⅢA期、第ⅢB期、第Ⅳ期

の土器を採集している。(川述昭人)

#### 5 小 結

鈴ヶ山古墳群のうち、発掘調査を行なった2基の古墳については、前節でそれぞれ詳細に報告しているので、ここでは、年代そのほか、若干の総括を行なって、結語にかえたい。

鈴ヶ山1号墳および鈴ヶ山2号墳の、構造ならびに副葬品の状況は、きわめて類似した内容をもっていて、同一年代の营造によるものであることがわかる。出土した須恵器には、2、3型式の年代的な幅を認める。これはもちろん横穴式石室が家族墓として、世代をわたって、使用されたためである。もっとも古い型式をみると、飛鳥時代の瓦と共伴した筑紫郡大野町大浦窯跡の須恵器とは、一型式ほど古式に属するので、6世紀の後半にあたる。したがって、6世紀の後半に築造された後、2、3世代にわたって使用され、7世紀のはじめまで営まれたことが推定される。

さて、鈴ヶ山1・2号墳の内部はいちじるしく破壊を受けていて、当初の埋葬状況を把握できない。ただ、鈴ヶ山1号墳では耳環の出土状況や組み合わせから、6体以上が推定され、数次にわたっているのが、一回では数体以上となる。鈴ヶ山2号墳では、耳環は2個出土しているが、対にならないので、2個体つまり2体以上の埋葬が考えられよう。

鈴ヶ山古墳群は、小規模な支群を形成するが、鈴ヶ山1号・2号両墳は山丘の頂上部のなかでも、見通しのよいところに立地して、盟主的な感じを与える。

古墳の構造をみると、鈴ヶ山1号・2号両墳に共通してみられるいちじるしい点は、自然の丘頂部に占地した自然条件とも関連はあるが、地山に深い墓壇を掘って、盛土を最小限にとどめていることである。結果としては、低い墳丘で外観の威圧感はないが、構造的には、強固

であるうえに、工事的には、軽減されるものである。さらに、両墳に共通してみられる墓道が付設されている問題も、羨道部の省略形式とも理解できる。また、鈴ヶ山1号墳で明らかになったことであるが、石室構築のための墓壇が、後室・前室・羨道といった石室の平面形の凸凹とは、相応せず、墓壇線が直線的であることも新しい事実を提供した。

出土遺物には、特筆すべきものはない。ただ、鈴ヶ山1号墳の北側羨道先端の北にあって、墳丘のなかから小形の手づくね土器数点を採集した。最近、同時期の住居跡出土の例が増加しているが、いずれも祭祀品と考えられ、「家」の祭祀と、「墓」の祭祀の関係を考えるうえに示唆を与えるものである。

(西谷 正)

## V 山の前古墳群の調査

### 1 調査の経過

山の前1号墳の調査は、1970(昭和45)年3月1日から3月26日までの延23日間を費した。調査は山の前2号墳とほとんど同時に併行して実施したが調査団はつぎのとおりである。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	西谷正
調査員	九州大学大学院学生	佐田茂
	九州大学研究生	松本肇
	福岡教育大学学生	川述昭人
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	森田勉
	同	小川浩一郎
		加藤久嘉

以下に、調査日誌によって経過をたどってみよう。

- 3月1日(日)晴。調査員一同宿舎に集合して、調査の準備。
- 3月2日(月)曇一時雨。日本道路公団の仮B.M.から絶対高をひく。遠景写真撮影。地形測量を開始。
- 3月3日(火)曇時々雨。作業を中止。調査計画の検討と調査資材の整備。
- 3月4日(水)晴。近景写真撮影。盗掘塚の清掃をもって、発掘を開始。その際、弥生式土器や黒曜石の破片を採集。盗掘塚の壁面に、黄褐色粘質土や黒色土の互層を認め、墳丘の版築状であることを確認する。いっぽう、地形測量を続行。
- 3月5日(木)晴。盗掘塚の清掃を続行。石斧・石鏃・石匙などを採集。いっぽう、測量の補足も行ない、地形測量を完了。直径約20mの円墳と推定。
- 3月6日(金)晴。遠景写真撮影。盗掘塚の清掃を続行し、横穴式石室の奥壁と側壁の一部を発見。その間に、弥生式土器や黒曜石・サヌカイトの剝片を採集。横穴式石室の長軸線に直交するトレンチを、墳丘に設定。
- 3月7日(土)晴。横穴式石室の内部を清掃。奥壁に平行して石障を発見。また、底面にいたり、須恵器・耳環・小玉などを検出。石室がいちじろしく破壊されていることがわかる。墳丘の築成状況を調べるために、墳丘東半の、東トレンチを発掘開始。その際、石鏃や黒曜石剝片を検出。

3月8日(日) 晴。石室内底面清掃。敷石の上面で須恵器や鉄器を検出。東トレンチの発掘を続行。

3月9日(月) 曇のち雨。石室内清掃を続行。

3月10日(火) 曇のち雨。石室内底面清掃。鉄器や玉などをさらに発見。午後は雨天のため作業休止。

3月11日(水) 晴。作業人夫が少ないため休止。

3月12日(木) 晴のち曇。石室内床面の清掃を行ない、遺物を検出。

3月13日(金) 曇のち晴。石室内床面の清掃と遺物検出を続行。羨道部前面に、墓道を認む。

3月14日(土) 晴。石室内遺物の出土状況を記録し、取りあげる。東側玄門石と掘り方を検出。

3月15日(日) 雨。雨天のため作業を中止。

3月16日(月) 晴。石室の西側に、墳丘の断面を調べるために、トレンチを設定。玄室内の遺物出土状況を記録のち、取りあげる。玄室側壁の抜け跡を検出。

3月17日(火) 晴。西側のトレンチを掘りあげ、北側にトレンチを設定。玄室内側壁抜き跡をはじめ、石室全体にわたって清掃。

3月18日(水) 晴時々雨。玄室の前方でさらに玄門石の抜き跡を検出したので、前室をもつものであることを確認。石室全体にわたって清掃。

3月19日(木) 晴。石室内を清掃し、写真撮影。掘り残しのトレンチを掘りあぐ。

3月20日(金) 晴。北・西・東側の掘り残しのトレンチを掘りあぐ。

3月21日(土) 晴。トレンチの掘りあげを続行。



盗掘跡の清掃

1970. 3. 4



石室の検出

1970. 3. 6



墳丘の切筋

1970. 3. 8



遺物の検出

1970. 3. 19

Fig. 42 山の前1号墳調査状況



石室の実測をひかえ、割りつけを行なう。

- 3月22日(日) 雨のち曇。石室の実測開始。  
 3月23日(月) 晴。石室墓塚を追求。石室の実測を続行。  
 3月24日(火) 晴。石室の実測を続行。墳丘断面実測を開始。  
 3月25日(水) 晴。石室実測を終了。墳丘断面実測もって調査を終了。  
 3月26日(木) 晴。調査資材ならびに出土遺物を  
 運搬。

山の前2号墳の調査は、山の前1号墳の調査と併行して、1970(昭和45)年3月1日から3月24日までの延21日間を費して実施した。

以下に、調査日誌によって経過をたどってみよう。

- 3月1日(日) 晴。調査員一同宿舍に集合して、調査の準備。  
 3月2日(月) 曇一時雨。日本道路公団の仮B. M. から絶対高をひく。遠景写真撮影。地形測量を開始。  
 3月3日(火) 曇時々雨。作業を中止。調査計画の検討と調査資材の整備。  
 3月4日(水) 晴。地形測量を開始。  
 3月5日(木) 晴。地形測量を続行し、夕刻には終了。  
 3月6日(金) 晴。近景写真撮影。  
 3月7日(土) 晴。作業休止。  
 3月8日(日) 晴。発掘開始。東西方向にトレンチを設定。  
 3月9日(月) 曇のち雨。トレンチをさらに掘り下げると、トレンチと直交して、南北方向の石室の側壁を検出。ついで、奥壁を北側において確認。午後、雨天のため作業中止。  
 3月10日(火) 曇のち雨。石室の清掃。東南区の墳丘封土を除去。午後、雨天のため作業中止。  
 3月11日(水) 晴。墳丘北東区のみを残して、他



墓塚と周溝の検出

1970. 3. 12



石室内外の清掃

1970. 3. 16



石室の実測

1970. 3. 23

Fig. 43 山の前2号墳調査状況

の封土を地山面など掘り下げる。西トレンチで溝を認めたので、それを追求。

3月12日(木) 晴のち曇。昨日検出した溝は、墳丘前面にまでめぐっており、須恵器・土師器などを多量に含む。

3月13日(金) 曇のち晴。墳丘封土を除去し、また、溝を清掃。石室を清掃、両袖形式であることを確認。

3月14日(土) 晴。周溝を追求。石室内床面を清掃、敷石の上面で遺物を続々と発見。

3月15日(日) 雨。雨天のため作業を中止。

3月16日(月) 晴。石室内清掃。周溝の追求を続行。

3月17日(火) 晴。石室内を清掃し、遺物出土状況を実測。写真撮影後に遺物を取り上げ。同溝および旧地表を清掃。

3月18日(水) 晴時々雨。遺物取り上げ後の石室全景写真撮影。発掘後の旧地形を測量。

3月19日(木) 晴。石室掘り方を追求。石室内の床面をさらに清掃し、敷石や遺物を認む。

3月20日(金) 晴。石室床面を清掃。写真・実測を終えて、遺物を取り上げ。石室全景写真撮影。石室を割りつけ、実測を開始。

3月21日(土) 晴。石室の実測を続行。

3月22日(日) 雨のち曇。石室の実測を続行。

3月23日(月) 晴。石室の実測を完了。

3月24日(火) 晴。墳丘断面を実測して、調査を終了。

3月26日(木) 晴。調査資材ならびに出土遺物を運搬。

山の前3号墳の調査は、1970(昭和45)年10月2日から11月6日までの延28日間を費した。調査関係者は下記のとおりである。

調査担当者 福岡県教育庁文化課技師 西谷 正

同 石山 勲

同 栗原 和彦

川述 昭人

調査補助員 福岡教育大学学生 江浜 明德

重住 昌志

鹿島 英世

筒井 亀

中尾 徹

庶務担当者 福岡県教育庁文化課主事 加藤 久嘉

以下に、調査日誌によって、経過をたどっ



石室の検出

1970.10.12



石室の清掃

1970.10.20

Fig. 44 山の前3号墳調査状況

てみよう。

10月2日(金)曇時々晴。調査開始。すでに伐採されていた樹木の片づけを行なった後、拡張された道路用地内の樹木を伐採し、片づける。

10月3日～5日 作業休止。

10月6日(火)晴。縮尺100分の1、コンター25cmで現状地形測量を行なう。

10月7日～9日 作業休止。

10月10日(土)晴。午後から平原古墳群の作業員の一部をさいて、排土を置く場所を設定するために、伐採した樹木をさらに遠方へ移動して片づける。

10月11日(日)作業休止。

10月12日(月)曇一時雨。午前中に、平原古墳群から調査資材を運搬したり、写真撮影などを行なって、発掘の開始に備える。午後から、盗掘堀に沿って清掃しながら発掘を開始する。羨道全面にあたる位置で、多数の須恵器を検出する。

10月13日(火)曇のち雨。盗掘堀を深く掘り下げ、清掃を続ける。玄室の輪郭がほぼわかる。玄門石の幅の狭さが目だつ。午後は、雨天のため作業休止。

10月14日(水)晴。玄室内を掘り下げると、敷石のある床面に達する。耳環などが出土しはじめる。羨道の状況はよくわからないが、羨道部前面の北側と南側で多数の須恵器が出土する。

10月15日(木)曇一時小雨。玄室床面の清掃を続行すると、各種多様の遺物が検出される。いっぽう、羨道部前面では昨日に続き多数の須恵器が出土する。羨道部の北側端から積石の列石が、弧を描いて、北にのびる。これと接して別の方形状の列石が北にのびていることもわかったが、性格はつかめないで終る。

10月16日(金)雨。雨天のため、石室内部の作業をやめて、墳丘西半部の表土剥ぎを行なう。南側では、墳丘の中ほどに、石室の長軸と平行する列石をみつける。昼ごろから雨が激しくなり、作業を休止する。

10月17日(土)曇一時晴。玄室内遺物出土状況を、清掃し、写真撮影をしてから、実測してとりあげる。なお、石室の前面ならびに南側へと、墳丘の裾を追求する。南側で、墳丘を画する溝を認める。

10月18日(日)作業休止。

10月19日(月)晴。墳丘の旧状を追求するため、墳丘の南西区と北西区で堆積土を除去していく。羨道部北側端から外にまわってつづく列石が、急に東に入りこんでいるところがあり、そこに別の小石室の存在を思わせる。ここから西北にまた別の列石状の外縁をもつ敷石がみつかり、そこで須恵器を大量に発見する。

10月20(火)晴。墳丘西半部の旧状を露呈した状態に清掃を行ない、写真を撮影する。午後、断面図を作成した後、残りの東半部の表土剥ぎを行なう。横穴式石室の北側にもう1基の小石室が平行して築造されていることが明らかになる。さきに検出されていた列石は、大石室の円弧と、小石室の円弧が、小石室の背後つまり東側でくいちがっている。

- 10月21日（水）調査員が帰庁の用務をおびて、作業を中止する。
- 10月22日（木）晴。墳丘の表土剥ぎを、東北区から東南区へと進む。小石室をめぐる列石は、小石室の背後でとまる。いっぽう、小石室の内部を清掃する。敷石のある床面において、鉄刀・鉄鏃などを認める。
- 10月23日（金）晴のち曇。墳丘東南区の表土剥ぎを続行。列石や周溝が検出される。つづいて、墳丘全体の清掃を行なう。小石室では、敷石のある床面において、鉄刀・鉄鏃・土師器などを認める。
- 10月24日（土）晴。墳丘内外にわたって清掃を行なってから、写真撮影をする。
- 10月25日（日）曇時々晴。石室の実測をひかえて、50cm方眼の割りつけを行なう。
- 10月26日（月）晴。残余の実測用割りつけを行なった後、大石室から実測にはいる。
- 10月27日（火）晴。石室平面実測を行なう。
- 10月28日（水）晴。石室平面実測を続行する。墳丘外縁南側トレンチを設定する。
- 10月29日（木）晴。大石室平面を実測し、側壁の割りつけを行なう。小石室の遺物を実測して、とりあげる。墳丘外縁東・北トレンチを設定する。
- 10月30日（金）晴。大石室側壁を実測する。小石室では、側壁の割りつけを行なう。
- 10月31日（土）晴。石室側壁および墳丘外縁を実測する。
- 11月1日（日）晴。小石室を実測する。
- 11月2日（月）晴。大石室の南側壁ならびに玄門側壁などを実測する。敷石の断面を実測しながらとりはずす。小石室では、側壁の側面ならびに断面を実測する。墳丘トレンチ断面を検討する。
- 11月3日（火）晴。大石室の敷石を実測しながらとりはずす。小石室では、側壁を実測する。敷石は実測しながら、とりはずしを行なう。
- 11月4日（水）晴。大石室側壁の断面図を作成する。小石室では側壁の断面図の作成にはいる。
- 11月5日（木）晴。墳丘を切断して、石室と墳丘の構造を調べる。大小両石室の間の状況を調べると、小石室の列石が楕円形にとりまいていることがわかる。器材の一部を撤収しはじめる。
- 11月6日（金）晴。石材標本を採集する。遠景写真を撮影する。調査資材を撤収し、大宰府発掘事務所の倉庫に搬入し、調査を終了する。

その後、福岡県教育庁において、出土品を整理し、担当者が中心となって報告書の作成にあたった。山の前1号墳と山の前2号墳の石室の破壊はいちじるしかったが、山の前3号墳の場合、比較的良好に石室構造を残していた。加えて、一つの墳丘のなかに、大小二つの石室を包蔵している事実は、全国的にみて稀有なものであること、そして、何よりも、群集墳を構成する一つの墳丘と石室に埋葬された被葬者の性格を究明するうえに、貴重な資料であることなどから、山の前3号墳を重視し、道路公団に対して、保存問題について協議をもった。文化課としては、古墳の上を道路がまたぐことによって、現状保存が可能であると考えたが、1971（昭和

46) 年3月に行なった公園と教育庁との間の協議会において、丘陵上にある古墳をまたぐことは、水田面から路面が昇り坂になる関係上、勾配の限界をこえるものとして工法的にむづかしいということであった。(西谷正)

## 2 山の前1号墳

### (1) 古墳の構造

山の前1号墳は、舌状台地の突端部に位置する円墳であり、東側で2号墳に近接している。この付近に点在する多くの古墳と同様に古くからの石材採取のために破壊されて、墳丘は墳頂部より墓道にかけて大きくえぐりとられ、旧状を著しく変形し、ほぼ石室の基底部まで露出している状態である。現状での計測では、墳丘の高さ3.5m、径24mを計ることができる。

古墳の東西断面(付図 Fig. ⑤)を見ると、石室の中心から東へ、約7.5mのところから外方へ、また同じく西へ、約7mのところから外方へ地山をテラス状に切り取っている。一方南北断面をみると、石室の奥壁から北へ、約7mのところから外方へ、南側では石室の奥壁から約9mのところから外方へ、東西断面と同様にテラス状に地山を切り取っている。墳丘下の地山はいずれもほぼ平坦にしている。

これらのテラス状のところを古墳の外縁とすれば、東西14.5m、南北16mとなるが、しかし、いずれの個所においても、墳丘の盛土時にテラス状の上にも盛土しているため、古墳の外縁と認めることはできない。この地山の切り取りは、古墳の墳丘構築に先だって、その規模の範囲を設定するための指標にしたものではないかと考えられる。

古墳の築造は、先にのべたように、地山をある程度切り取り、規模を設定し、そのほぼ中央に南北に長く、石室を築くための墓壇(掘り方)を掘り、石室の構築と、封土の築成とを交互にくりかえして行っている。現状では掘り方は、地山面より約1.5m掘り下げ、石と土とを交互に積んでいき、約11層からなる封土となっている。墳丘は石室の掘り方の底面から、約4.6mの盛土が認められるが、石室の天井石を架構すればもう少し高くなると思われる。現在墳丘の高さが3.5mであるので最小限度4m以上は計えられるだろう。なお石室は裏込め石等の使用はまったく認められない。埴輪・葺石・濠等の外部施設も全く認められなかった。

### (2) 内部主体の構造

石室は、円墳のほぼ中央部に築かれ、S 47°Eに開口している、胴張りの複室を有する横穴式石室を内部主体としている。後室には一つの石槨を持っている。基底部は、地山の中に約1.5m掘り込まれた掘り方を作り、その上に築いている。現存している石室の側壁からみると、石材は、緑泥石片岩を主体にし、その板状石の小口積により、積石をしだいに内部にせり出させた、持送り式に積み上げ、ドーム状に構築している。また床面は、広い板状の緑泥石片岩を敷きつめて形成している。前述したごとく、ことごとく破壊されていて、旧状をほとんどとどめて

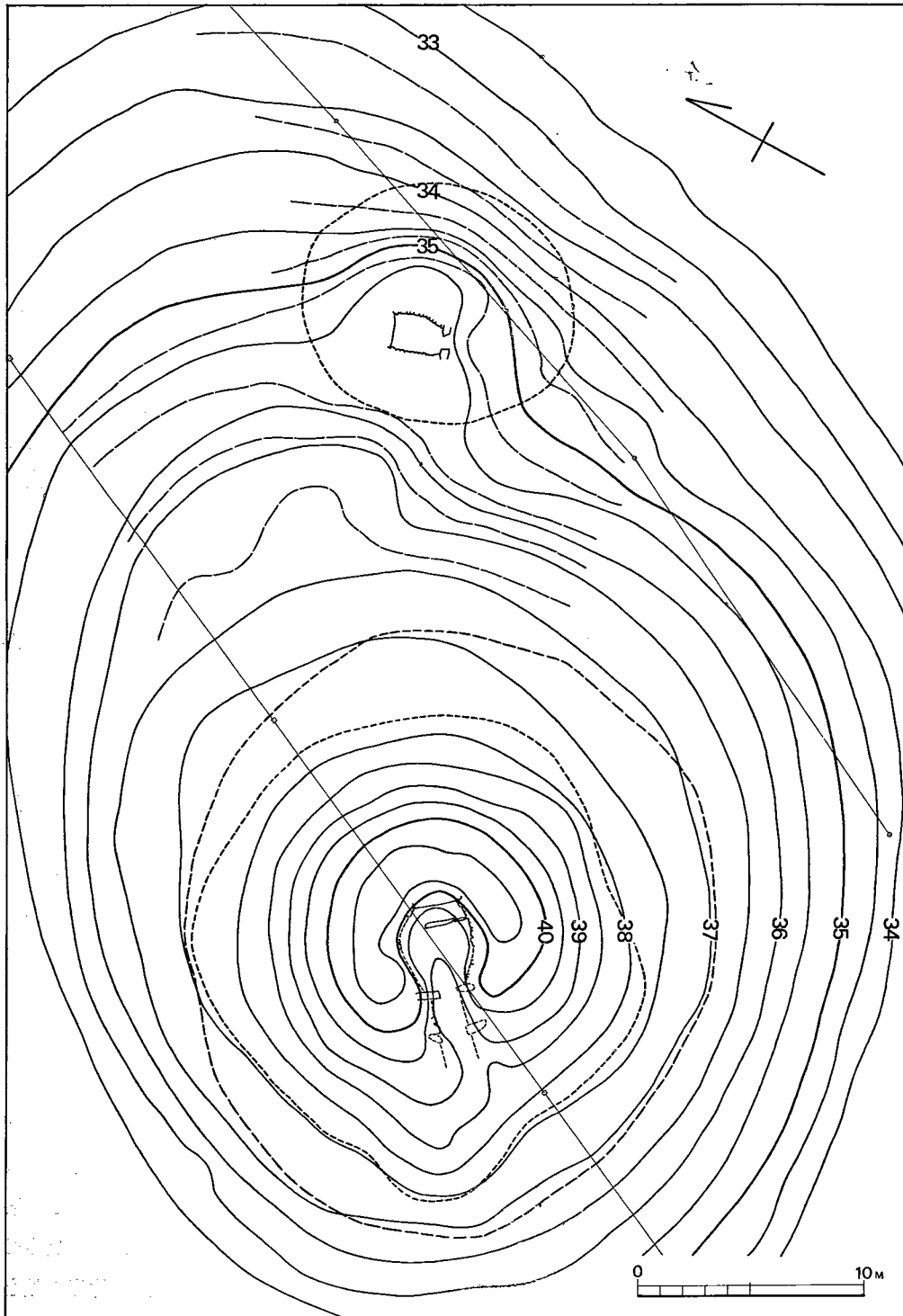


Fig. 45 山の前1・2号墳地形実測図 (縮尺 1/300)

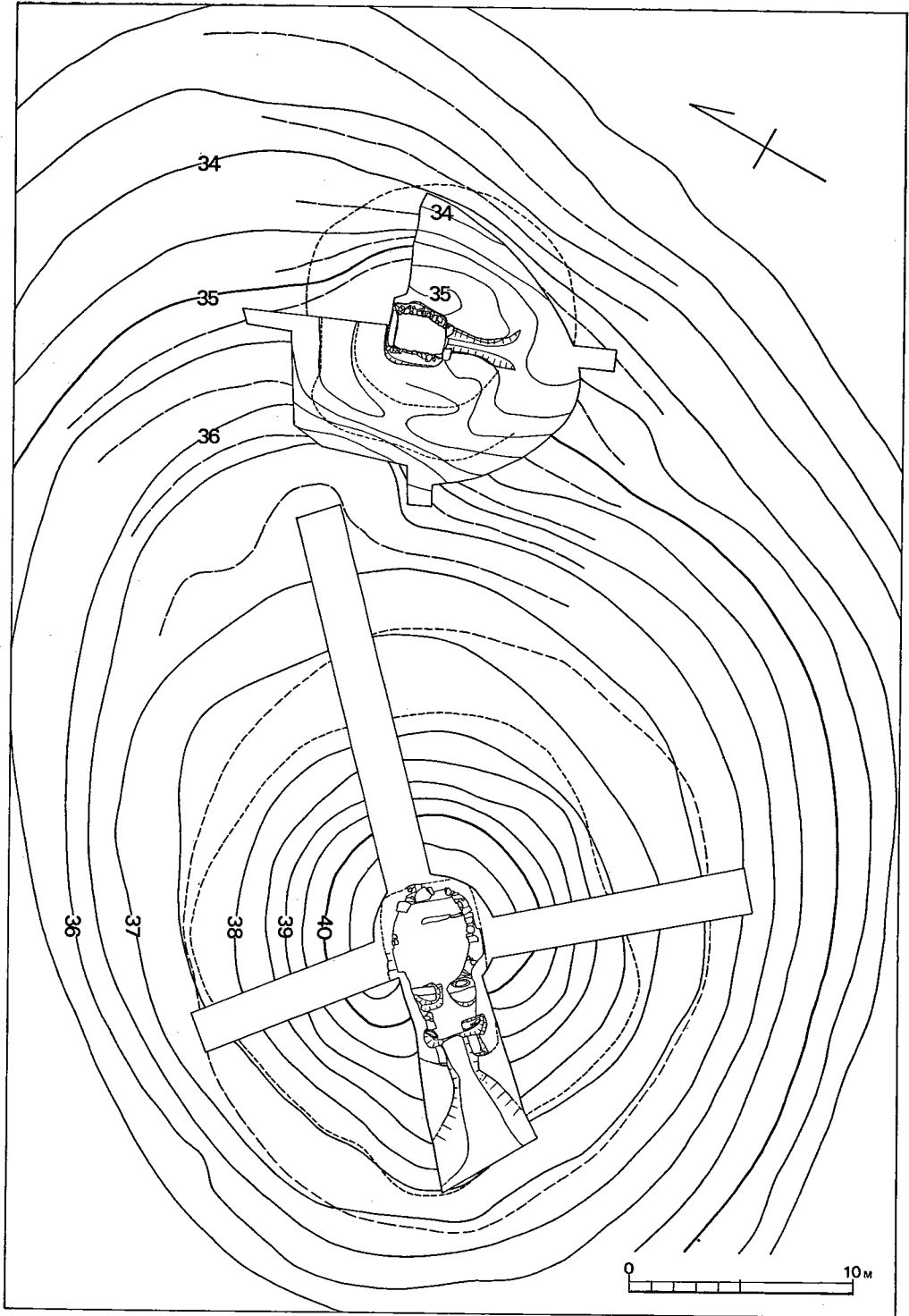


Fig. 46 山の前1・2号墳墳丘と石室実測図（縮尺 1/3）



Fig. 47 山の前古墳群分布図 (縮尺 1/2000)



いないので、現存している部分と掘り方による確認しかできない状態であった。

後室は、奥行7.3m、中央部の最大幅5.6mの胴張りの長方形プランである。奥壁には、長さ4.7m、高さ1.7mの切り石を立て、地山面と同一のレベルにしている。その上に板



Fig. 48 山の前1号墳墓壁と側壁

状石を小口積にしている。構築は、奥壁及び玄門、羨門等の立石をうめこみ、側壁をつみ上げていっている。掘り方の地山面と同一レベルに達した以降は、板状石を積みながら交互に盛り土を行なっている。石槨は、奥壁より1.4mのところ、厚さ0.4mの一板石をうめこみ石障とし、一区劃をもうけている。床面は他の床より0.3cm程度高く、緑泥石片岩の一枚石を敷いている。石障の高さは0.7mあり、上面は平らに面取りを施して、上面・表面・裏面共全面に朱を塗っている。

後室と前室をつなぐ通路は、奥行0.7m、幅1.5mの大きな立石を、左右に立て玄門としている。すでに天井石は持ちさられていた。

前室は、奥行約3m、幅約5mのやや横に広がりをもつ長方形プランを呈し、後室と同様に側壁は板状石の小口積であり、床にも敷いていたようである。

羨門はすでに立石はないが、掘り方によると、玄門と同程度の石で造られていたと思われる。玄門及び羨門には、同種の石の礫により根占をしている。

羨道部は、約2mの正方形の地山の傾斜を利用した短いものであるが、わずかに掘りこんでいるようであるが、あるいは、そのまま羨道という意識はなく墓道の延長と考えた方がよいようである。この部分も含めると墓道は約7mになる。

床面は石室全面に地山の上にじかに敷石をしているが、石槨側に横石をつかい、他は縦石を用いている、前室には小さ目の石で行なっているようだ。石槨内に第一次の埋葬を行なっているようだ。(松本 肇)

### (3) 遺物

#### 出土状況

石室の内部がいちじるしく破壊されており、したがって、遺物も攪乱されていたが、比較的原位置を示すものについて、若干出土状況を示しておく。

前室東南隅に近く、敷石の上面で、須恵器杯身、杯蓋計3が出土した。形式的に新しいもので、追葬時のものかと思われる。玄室ほぼ中央で、須恵器甕などの破片を認めた。須恵器や土師器は、羨道・玄室ならびに羨道前面などで攪乱土中からかなり出土している。



Fig. 49 山の前1号墳前室床面須恵器出土状況

玄室ほぼ中央部で、鉄鏃8と、用途不明の馬具1が出土した。攪乱土中ではあるが、前室と羨道部ならびにその前面で、鉄鏃や馬具の出土が多かった。

装身具は、ほとんど後室の出土で、前室ではガラス玉数個が出たにすぎない。後室東壁近くの中央やや北寄りの付近で、やや密集してみられるのは、原位置に近い状態といえよう。ガラス玉が多く、数個の管玉も含んでいる。耳環はこの一群のなかに1個と、中央付近で2個出土した。大きな板石を敷いた敷石の下から、銀製空玉1、人歯1、碧玉製管玉1、ガラス5が出土した。

なお、山の前1号墳の盗掘堀を清掃している際や、北・西・東に設定した墳丘切断トレンチにおいて、弥生式土器や石器を採集したので、上記の各トレンチや、石室墓塚ならびに墓道などにおいて、遺構を注意した。しかし、山の前1号墳がつくられている狭い平坦部分にあたるトレンチなどにおいて、遺構は何ら発見できなかったため、ぼう大な墳丘の土量を除去してさらに、墳丘下の遺構を追求しても、成果は期待できなかった。そこで、それ以上の墳丘下の調査はあえて行なわないことにした。石室墓塚を掘った際に出た排土はもちろん封土として利用されているが、いっそう多くの土量は、さらに周辺部からもたらされたものである。

出土した遺物を列記すると、つぎのとおりである。

- (1) 容器 須恵器  
土師器

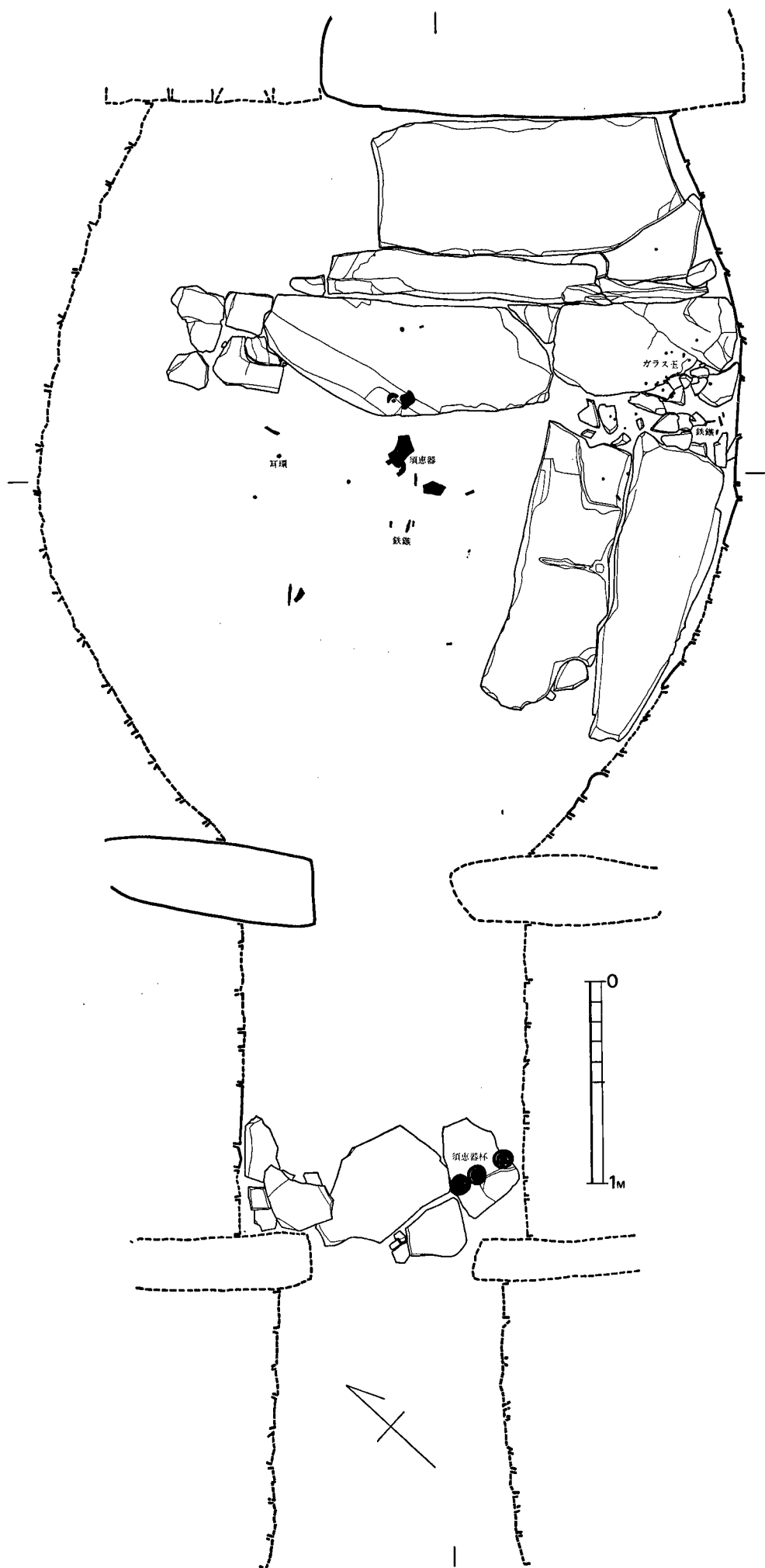


Fig. 50 山の前1号墳遺物出土状況実測図（縮尺 1/30）

- (2) 武器 鉄鏃  
刀子
- (3) 馬具 雲珠  
辻金具  
杏葉  
鉸具  
鐙  
その他
- (4) 装身具 耳環  
空玉  
管玉  
丸玉
- (5) その他 弥生式土器  
石器

以下において詳述する。(西谷 正)

#### 須恵器 (Fig. 51・52)

本古墳から出土した須恵器は杯蓋、杯身、無蓋高杯、脚付椀、提瓶、蓋類、甕、甕である。そのうち杯蓋、杯身が圧倒的に多数出土した。底部成形技法は全てヘラ切りであり、糸切り痕は認められない。

杯 (Fig. 51・52) 杯蓋・身は形態的には2種類認められ、身に受部を有し、それに対応する蓋をⅠ類、身に受部がなく無高台、蓋につまみと口縁部内部に返りが有るものをⅡ類とする。

#### 杯身

I a (Fig. 51-2) 口径12.6cm、器高3.6cmで内外面とも淡灰青色を呈し、焼成は堅緻である。胎土は比較的良く精選し、砂粒の含有は少なく、たちあがりは1.2cmでやや内傾し、ヨコナデ調整により端部は丸くおさめている。受部は水平に短く外方へ延び先端はいくぶん稜線をなす。体部はヨコナデ調整であり、底部はやや平底ぎみでロクロヘラ削りは若干荒く、内底部はナデ仕上げである。器壁は全体的に薄い。

I b (Fig. 51-4・5・7) 口径は12.4cm~13.0cmで、胎土は良く精選し、砂粒は少なく焼成は堅緻である。たちあがりは1.0cm~1.5cmで、やや内傾するが高くたちあがり、端部は丸くおさめている。7は、たちあがりを体部に接合する時に篋で押えたと思われる細く浅い凹線がめぐる。4、5の受部は水平近く延び、7は外上方へ高く延び深い蓋受けを成し、先端はいずれもヨコナデ調整により丸くおさめている。底部は欠損し、調整、形態は不明であるが、

残存部底分はいずれもヨコナデ調整である。

I c (Fig.51-9・11) 9の口径は12.4cm, 11の口径11.2cm, 器高3.8cmで両者とも還元度が悪く, 乳灰色を呈し, 焼成は軟かい。11のたちあがりは1.2cmで内傾度はやや大きいと比較的高くたちあがり, 端部は丸くおさめている。受部は水平に近いが, やや外上方へ延び先端は丸くおさめている。体部はヨコナデ調整である。外底面はいずれも, 手持不定方向のヘラ削りで, 内底部はナデ仕上げである。9の底部にはヘラ記号がある。

I d (Fig.51-18・22~24・26~30) 口径は11.3cm~12.5cmである。26は小形で口径は10.5cmを測る。高さを知り得るものは5体分でいずれも低く3.0cm~3.4cmであり, 18は例外的で4cm強に復元できる。26・29・30の色調は暗黒灰色, 22~24・27・28は灰青色を呈す。18は砂粒が多く表面がざらざらした感じで淡灰色を呈すが, 他の胎土はいずれもよく精選し, 焼成は堅緻である。22~24のたちあがりは中位で傾斜変換があり低く, 端部は尖がっている。26~30のたちあがりは内傾度が大きく低い。受部はいずれも外上方へ延び先端は丸くおさめているが, 18は外下方へ延びる。体部はヨコナデ調整である。底部はヘラ切り離しのみで荒く, 再調整は施していない。内底部はナデ仕上げである。23の底部にヘラ記号が認められる。

I e (Fig.51-31) 口径は11.9cmで灰青色を呈し, 胎土中に砂粒は少なく, 焼成は堅緻である。たちあがり是非常に低く, 受部と同一高位にあり, 断面は三角形に近い形状を呈す。たちあがりを体部に接合した際の痕跡が明瞭に残存している。受部は外上方へ高く延び先端は丸くおさめ, 体部はヨコナデ調整で, 底部は丁寧なロクロヘラ削りである。欠損部分が多いので杯身であるとは断定し難く, 逆転して蓋になる可能性がある。

#### 杯蓋

I a (Fig.51-1) 口径12.6cm, 器高3.4cmで内外面ともに淡灰青色を呈し, 胎土は比較的良く精選し砂粒の含有は少なく, 焼成は堅緻である。口縁端部はヘラ切りにより内傾し段をなし, 内外面を分ける稜線は明瞭である。体部外面にはヨコナデ調整により比較的大きな凹みがあり, やや荒いロクロヘラ削りを施している天井部との境いをなす。内部は全て丁寧なヨコナデ調整である。杯身I aと同一組合せになる。

I b (Fig.51-3・6・15) 3の口径は15.1cm, 器高4.4cmで灰青色を呈し, 胎土中に微砂を含有する。焼成は堅緻である。口縁部は直立し端部は丸くおさめ, 天井部は荒いヘラ削り調整で, 天井部内面はナデ仕上げである。他の部分はヨコナデ調整である。6・15の口径はそれぞれ12.0cm~12.3cmで灰青色を呈し, 焼成は堅緻で, 良く精選した胎土を使用している。口縁端部は丸くおさめている。6の天井部はロクロヘラ削り調整により丸味を呈し, ヘラ記号を記している。天井部内面はナデ仕上げである。口径, 焼成を技法より7とセットになると考えられる。

I c (Fig.51-8・10・12~14) 口径11.1cm~12.0cm, 器高3.6cm~4.2cmでいずれも乳灰色を呈し, 軟質の焼成である。胎土は比較的良く精選し砂粒は少ない。口縁部は垂直ぎみに

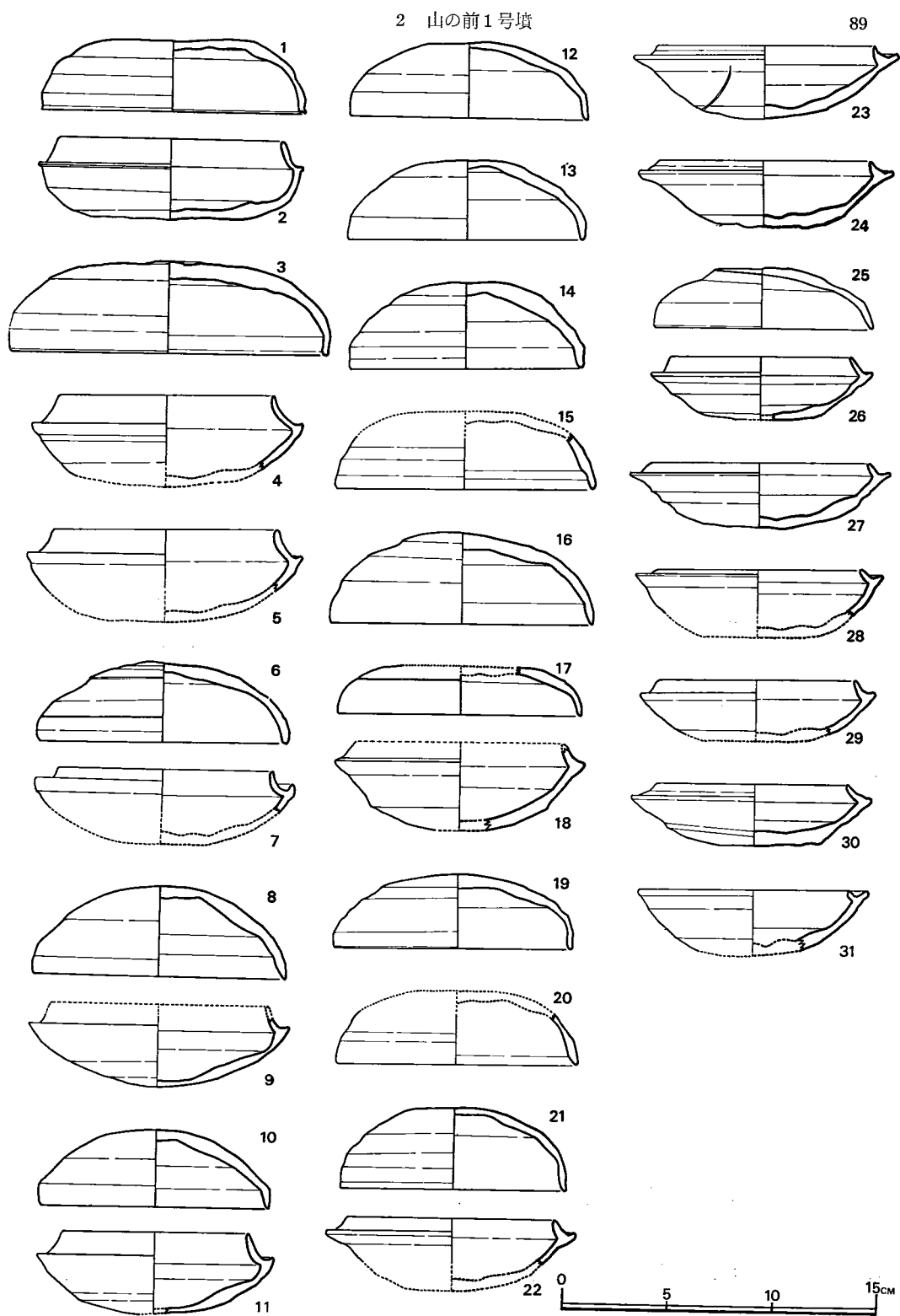


Fig. 51 山の前1号墳須恵器実測図① (縮尺 1/5)

立つものとやや外反するものがあり、端部は全てヨコナデ調整により丸くおさめている。天井部外面は手持不定方向のヘラ削り調整で、内面はナデ仕上げである。他の部分はヨコナデ調整である。10・13・14の天井部に同一ヘラ記号を記している。杯身I cとセットになる。

I d (Fig. 51—16・17・19～21・25) 口径10.3cm～11.5cmの小形杯蓋である。16はこのグループの中では大きく口径12.5cmを数える。16は灰色を帯びた山吹色、17・20は淡灰色、19は暗黒灰色、21は暗いあずき色、25は暗赤色を呈し、いずれも堅緻な焼成である。胎土中の砂粒含有量は17がもっとも多く表面がざらざらしているが、他は少ない。口縁端は全て丸くおさめている。16の口縁部内面は篋による一条の沈線がめぐる。21の頂部はロクロヘラ削り調整であるが、他はヘラ切り離しのままか、その上に若干ヘラでなでる程度で粗雑である。天井部内面はナデ仕上げである。17と18、21と22、25と26は同一セットになるとと思われる。16・19・21にはヘラ記号が認められる。

II類杯身 (Fig. 52—33) 口径9.8cm、器高4.0cmで黄灰色を呈し、堅緻な焼成で、胎土は緻密である。底部は平底でヘラ切り離しのみで再調整は施していない。体部との境界は丸味を有するが明確にあらわれている。体部は外傾しながら立上り、丸くおさめた口縁端に至る。内底部中央は欠損しているためナデ仕上げをしているかどうか不明である。

II類杯蓋 (Fig. 52—32・34・35) 口径9.6cm～11.0cmである。32は灰青色を呈し、堅緻な焼成で、胎土中に少量の砂粒を含有するが、34・35は土師質で淡赤褐色を呈し、胎土中の砂粒はきわめて少ない。身受けの返りはいずれも三角形状を呈す。32・34のつまみは尖った円筒形で、34はボタン形状を呈す。34・45の天井部外面は一段高く高度を増し、32・35はロクロヘラ削り調整で、35はヨコナデ調整であり、内面は全てナデ仕上げである。32にはヘラ記号がある。杯身33とセットになると考えられる。

杯以外の蓋類 (Fig. 52—36～39) つまみの有無により二種類に別けられる。

(1) 36・36は口径10.2cm～10.4cm、器高は両者とも2.8cmで、暗灰青色を呈し、堅緻な焼成で、良好な胎土である。身受け返りは内反し、端部は丸くおさめている。体部と天井部との境界は傾斜変換をなし、それを中心にして櫛描列点文が不規則にめぐる。口縁部は体部内面はヨコナデ調整で、天井部内面中央付近はナデ仕上げである。体部、天井部外面は櫛によるカキ目調整を施している。

(2) 38は口径9.9cm、器高3.2cmで、淡赤褐色を呈した土師質の蓋である。胎土は良好で砂粒はほとんど含まない。口縁部内面の返りは三角形状を呈している。体部と天井部との境界は不明瞭である。39は口径11.1cm、器高3.5cmで淡灰青色を呈し、焼成は堅緻である。胎土は良好で砂粒は少ない。身受け部はU字型を呈し、返り先端部は尖りぎみである。体部と天井部との境いは段をなす。38・39の頂部はヘラ削りの上に荒いカキ目再調整を施している。体部、口縁部内外面ともヨコナデ調整で、天井部内面にナデ仕上げである。39の天井部にヘラ記号を記し

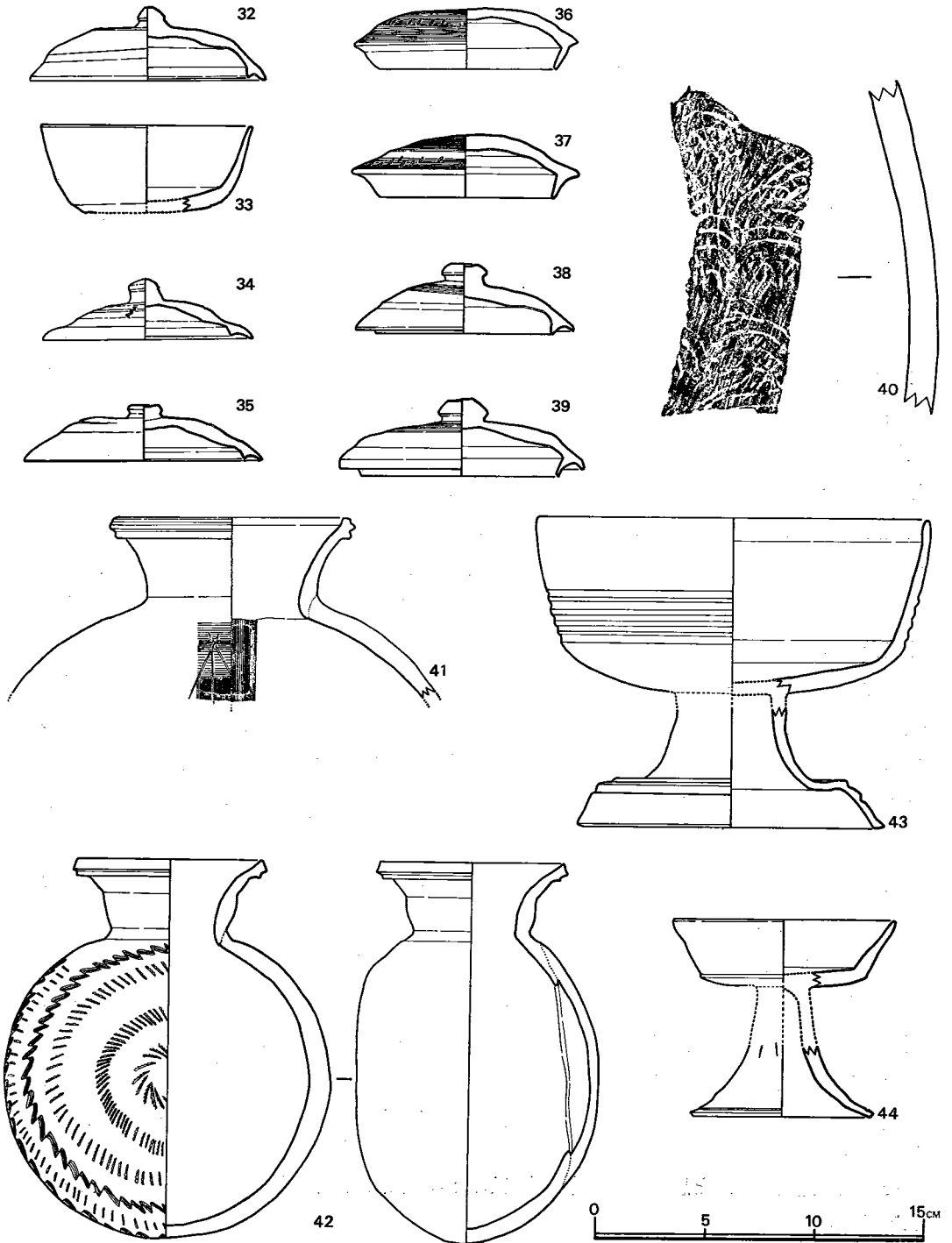


Fig. 52 山の前1号墳須恵器実測図② (縮尺 1/3)



ている。

甕 (Fig. 52-40) 淡灰青色を呈し、焼成は良好である。胎土は良く精選し砂粒は非常に少ない。厚さ1.1cm~1.3cmで、外面は細格子目文を叩打し、内面は同心円文の叩きの上に篋でナデ、叩目の一部を消している。他に甕の破片を数片検出したが細片化しているため詳細は不明である。

提瓶 (Fig. 52-41・42) 41の口径は11.3cmで、赤味をおびた暗灰黒色で、胎土中には砂粒は少なく、堅緻な焼成である。頸部は外反しながら高度を増し、直立ぎみの口縁部に至り、明確に一線を描き、端部は平坦で、内外面に稜線がめぐる。胴部は櫛によるカキ目調整で縦方向に調整を行い、肩部は横方向にカキ目を施している。口頸部内外面はヨコナデ調整で、体部内面は同心円文の叩き板を叩打して成形したのちに、ヨコナデ調整（器体の方向からみれば縦方向のナデになるが体部の成形は横にして整作したと思われる）により叩目を消している。口頸部42はこの接合は体部成形後にヘラで穿孔し、接合したと思われる。体部にヘラ記号を記している。口径8.4cm、器高17.4cm、体部最大幅11.0cmで暗青灰色を呈し、堅緻な焼成で、胎土は良く精選し砂粒の含有は非常に少ない。体部前面は丸くふくらみ、背面はほぼ扁平である。前面中央は粘土円盤を貼り付けてふさいでいる。頸部と体部の接合は体部成形後に穿孔して後に接合している。頸部はやや外反しながらち、口縁部は外に若干開き、外面には稜線がつくが、内面にはない。体部前面には4条の櫛描列点文と2条の波状文がめぐる。前面の一部と背面および頸部接合部にはカキ目調整が認められる。他の部分は全てヨコナデ調整である。

脚付椀 (Fig. 52-43) 椀の口径は18.0cm、脚端径14.0cmで暗緑褐色を呈し、内部は茶褐色を呈し還元不十分なものであるが、焼成は堅緻である。胎土中には砂粒は背無である。体部は外上方に延び中位に5条の沈線がめぐる。口縁部はやや内反し、端部はヨコナデ調整により丸くおさめている。体部と底部との境界は丸味を有しているが、明確に一線を描く。筒部はやや外開きになりながら2条の沈線を有する裾部に至る。脚端部はやや外上方に跳上っている。椀体部内外面はヨコナデ調整で、底部外面は丁寧なヘラ削り調整で、底部内面はナデ仕上げであり、脚部は内外面ともにヨコナデ調整である。

高杯 (Fig. 52-44) 杯部口径10.2cm、脚端径8.4cmで、灰黒色を呈し、堅緻な焼成で、砂粒の含有は少ない。底部は丁寧なロクロヘラ削り調整で、体部との境界は明確な段によって隔られる。口縁部はやや内反し、端部は丸くおさめている。内底部はナデ仕上げである。筒部の大部分は欠損して不明であるが、残存部内面にはしぼり目は認められない。裾部は大きく外に広がり、脚端部ははねあがり、外部に1条の沈線がめぐる。筒部に非常に浅いヘラ記号の一部が残っている。

その他の遺物 甕と思われる破片を検出したが、非常に細片化しているためその形状は不明である。

ヘラ記号について (Fig. 53)

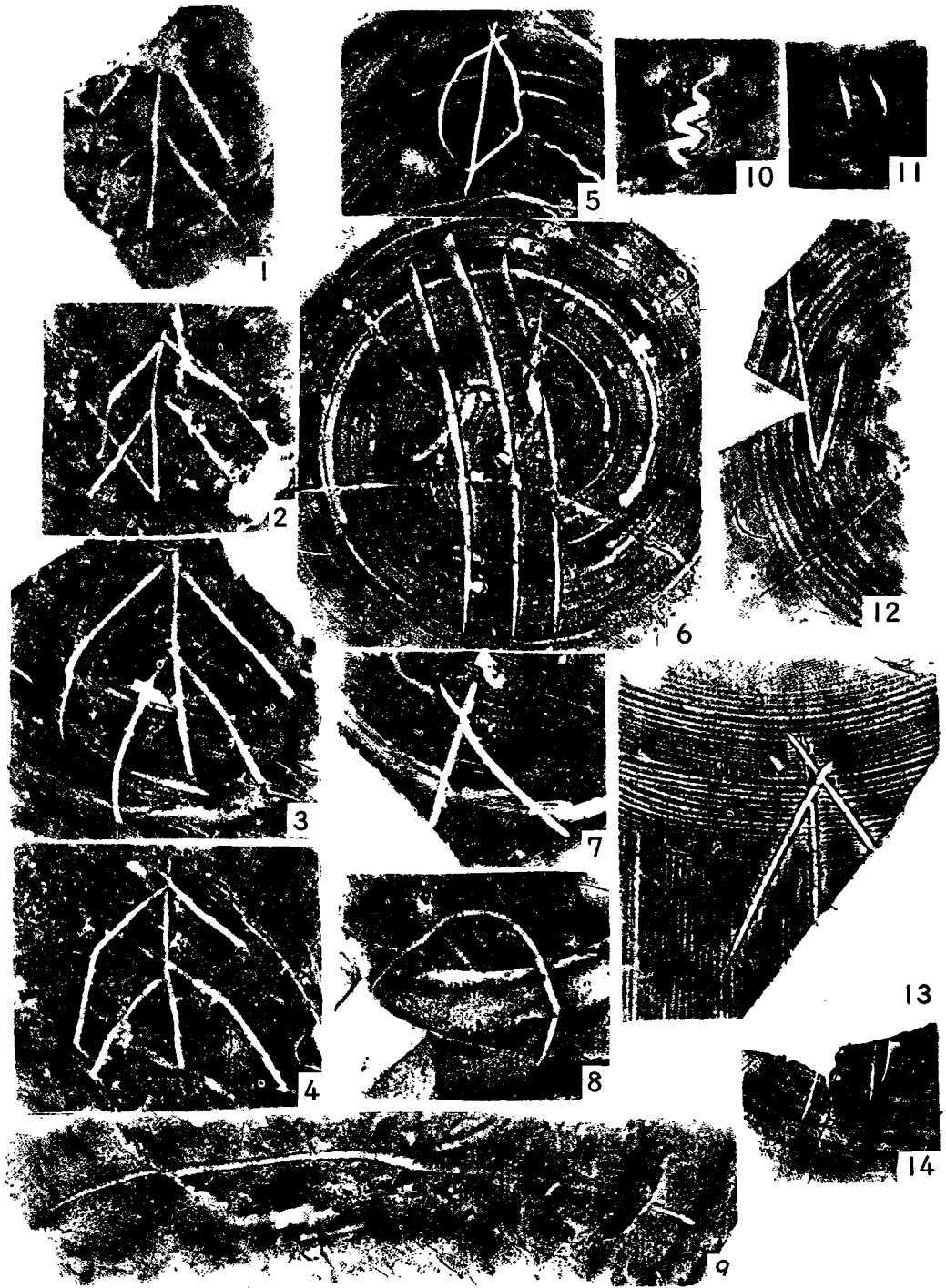


Fig. 53 山の前1号墳須恵器ヘラ記号拓影(実大)

本古墳から検出した須恵器のうち、杯身、杯蓋、提瓶、高杯、蓋類にヘラ記号が認められる。

1. 杯蓋、杯身に圧倒的に多く、ヘラ記号が認められる14個体分のうち10例にものぼる。
2. Fig. 54— 1～4 のヘラ記号は同一筆順で、焼成、調整とも同じであり、同一工人の製作によると考えられる。
3. Fig. 53— 5 のヘラ記号は塚ノ谷4号窯出土の杯と同一記号である。

Fig. 53 番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
Fig. 51・52番号	9	10	13	14	21	6	16	19	23	24	38	39	41	44

Tab. 7 山の前1号墳ヘラ記号拓影番号・土器実測図番号対照表

小 結 以上、出土須恵器について述べた。そのうち判明したことを若干述べる。

杯身、杯蓋には大きな画期が認められ、杯身に平底が出現し、それに伴う有返りの杯蓋もあらわれる（Ⅱ類）。明らかにそれ以前の杯身、杯蓋（Ⅰ類）とは区別され、時代を異にする。Ⅰ類も形態的、手法的にⅠa、Ⅰb、Ⅰc、Ⅰd、Ⅰeと三つにわけられる。Ⅰaの杯蓋の口縁端部はヘラ切りの段を有し、杯身の受部は突出して稜をなす特徴が認められ、他の杯とは明らかに区別される。Ⅰb・cとⅠd・eとの相違は天井部および底部の調整の有無によって認められる。前者はヘラ削り再調整を行うが、後者の大部分はヘラ切り離しのままか、若干のヘラナデを施すのみで再調整は顕著ではなく、杯身のたちあがりは前者に比較して後者は内傾度がいちじるしく、低くなる。提瓶（41、42）はⅠ類に比定でき、41の口縁部内部に稜線がめぐり、体部内面の叩目をヨコナデにより消す古い特徴を有し、42と共にⅠbに比定して大きな誤りはなからう。脚付碗の類例として、塚ノ谷窯跡出土のものがある。

検出した須恵器の絶対年代は6世紀中葉から7世紀初頭におくことができ、かなりの年代差が認められ、所謂「追葬」が行なわれたと考えられる。Ⅰ類とⅡ類から少なくとも2回の埋葬、Ⅰ類を更に細分化し、Ⅰa、Ⅰb・c、Ⅰd・cとに分けると4回になり、2～4回埋葬が考えられる。奴隷を所有する家父長（戸主）が埋葬されたとすると、以上の事実は考え難く、アジア的専制国家が弛緩し、家族の自立化が進んだ時期に「家父長制的世帯共同体の家父長やその家族」（門脇禎二「日本古代共同体の研究」）が埋葬されたと考えられる。（森田 勉）

#### 土師器

小盃（Fig. 54—1・2） 脚端は欠失している、口径7.6cm、高さ約4.2cmある。口縁は指により外側に引き伸ばし、脚端も高杯等から推定して、外反させていると考えられる。良質の粘土で作り、ヘラ磨研を行ない、丹を全面に塗っている。

小埴（Fig. 54—3） 口径3.6cm、高4.8cmの非常に小形のものである。口径部は直立し、胴部中央で最大径をとる。精製された良質の粘土を用い、器面はヘラ磨研を行い、丹塗を施している。底部には製作時に径0.5cmの小孔を穿っている。

高杯（Fig. 54—4～10） 4は、碗状の杯部に外反する脚部を付けたもので、脚端部に至

って、指により引き伸ばしを行ない大きく反り返っている。口径14.6cm、高さ10.6cmあり、良質の粘土を用い、ヘラ磨研を行ない、丹塗を施こしている。部分的にしか残っていないが5～8も同様であると考えられる。9は杯部の口縁部のみであろう。10の杯部は、小形の鉢形であり、口縁部は外反し、径6cmある。脚部の脚端径6.2cmあり、胎土・焼成が整形共に同様であり、同一個体と考えられる。

#### 杯 (Fig. 54—11~13)

1, 12共に粘土紐の巻き上げの状態をのこしている。ヘラ、ハケ等により調整している。13は、完全に須恵器を模したものである。

口縁は垂直に立ちあがる

が、底は浅いものである。ハケにより調整を行なっている。

土師器は全て墓道上より出土しており、墓前祭に使用したものと考えられる。死者の霊をなぐさめるために、特に胎土も良質な粘土を使用し、磨研を行い、丹塗りを施こして、霊前にそなえている。1号墳で出土したような土師器の類例がみあたらないが、時期的にも、同一時期のものであり、6世紀中葉頃に比定することができる。(松本 肇)

#### 装身具

耳環 (Fig. 55—1~3) 大きさと材質からみて、3種類3個を玄室内から発見した。最大のもの(1)は、直径2.4cm、円形断面の幅0.4cmのやや細い銀環である。2は直径1.9cmと少し小さく、円形断面の幅が0.2cmの細身である。金箔が少量しか付着していない金環である。これとほとんど同形同大の3は、銅環の破片である。金箔が剥落している可能性も高く、その場合は、2と3が一对になるだろう。

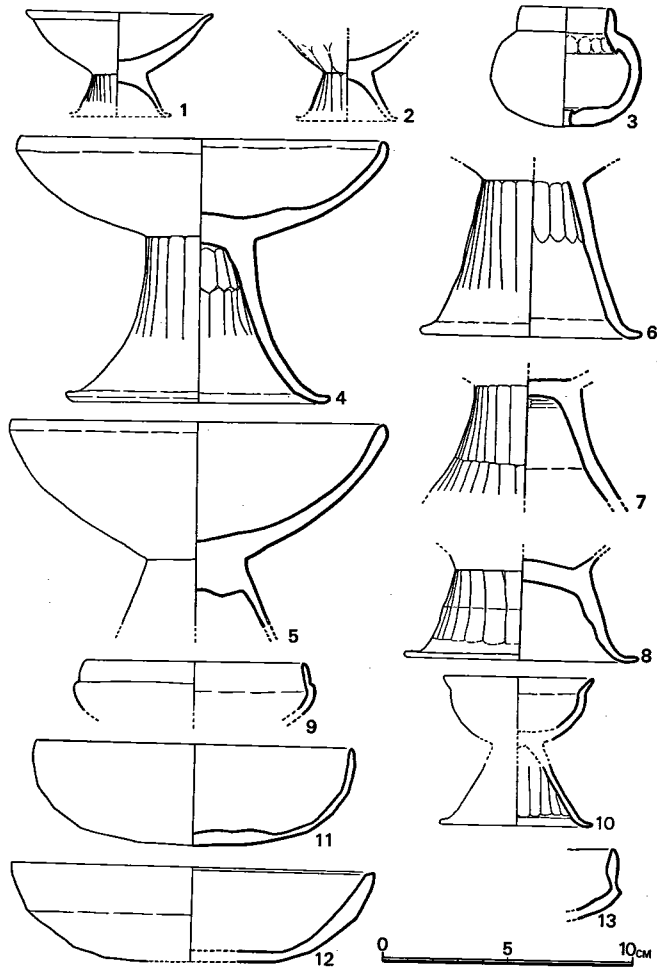


Fig. 54 山の前1号墳土師器実測図(縮尺 1/4)

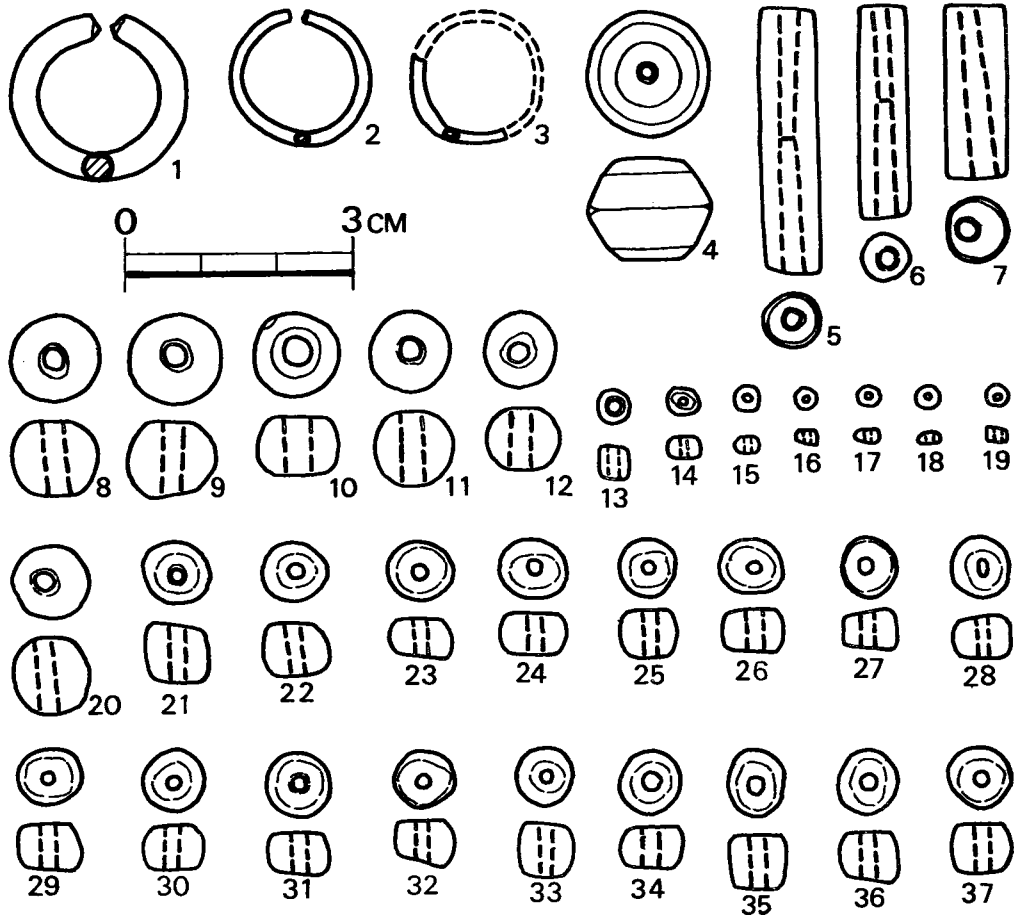


Fig. 55 山の前1号墳装身具実測図(実大)

空玉 (Fig. 55-4) 玄室中央部の敷石の下から出土した。直径1.7cm, 高さ1.45cmを測り, 中央に上下を貫通した直径1.8mmの孔があく。平面は円形であるが, 側面は六角形を呈する。厚さの薄い銀製である。

管玉 (Fig. 55-5~7) 玄室内の敷石の下から出土したもので, いずれも碧玉製である。灰色ないし深緑色を呈する。5・6は両面穿孔, 7は片面穿孔である。5は表面の風化がはげしい。大中小3種類3個である。計測値は Tab. 8 のとおりである。

番号	長さ	長径	孔 径	
			上	下
5	3.5cm	0.8cm	0.25cm	0.25cm
6	2.8	0.7	0.25	0.3
7	2.3	0.8	0.1	0.3

Tab. 8 山の前1号墳管玉計測表

丸玉 (Fig. 55-8~37) 玄室内の敷石の下(22・37), 羨道部(20・35・36)のほかは,

玄室内の床面から出土した。ガラス製で、大きく大小2種類に分かれ、合計30個を検出した。大きいものには、直径が最大1.2cm(8)から、最小0.8cm(29)までを含む。そのなかでも大きいものは、球形に近い(8~12, 20)が、小さいものは、上下に平坦面をもつ形態(21~37)である。大きいものでは緑色ないし淡緑色(9・12・20)のほかはすべて紺色である。

小さいものは、直径がおよそ0.35cm前後のものである。一つだけ大きい13は、紺色であるが、その他はすべて黄色を呈する。計測値はつぎのとおりである。

番号	直径	高さ	孔径	色調	番号	直径	高さ	孔径	色調
8	1.2	1.0	0.25	紺	30	0.84	0.65	0.2	紺
9	1.20	1.05	0.3	緑	31	0.9	0.6	0.2	紺
10	1.1	0.8	0.35	紺	32	0.8	0.65	0.2	紺
11	1.1	1.05	0.3	紺	33	0.8	0.7	0.2	紺
12	1.0	0.8	0.25	淡緑	34	0.88	0.58	0.2	紺
20	1.0	1.05	0.2	淡緑	35	0.9	0.78	0.21	紺
21	0.85	0.78	0.2	紺	36	0.88	0.81	0.2	紺
22	0.9	0.75	0.2	紺	37	0.8	0.6	0.2	紺
23	0.85	0.54	0.2	紺	13	0.49	0.47	0.17	紺
24	0.94	0.6	0.2	紺	14	0.47	0.3	0.1	黄
25	0.8	0.65	0.2	紺	15	0.34	0.3	0.1	黄
26	0.85	0.61	0.2	紺	16	0.35	0.27	0.09	黄
27	0.83	0.56	0.2	紺	17	0.38	0.22	0.09	黄
28	0.82	0.6	0.22	紺	18	0.35	0.19	0.1	黄
29	0.86	0.68	0.18	紺	19	0.31	0.21	0.1	黄

Tab. 9 山の前1号墳丸玉計測表(単位はcm)

## 馬具

雲珠 (Fig. 56-1) 羨道部内で出土した。円形で大形なもので、上に半球形に近い飾りがつく模様である。上部につく隅丸の足金具は、三つの鉤留めをもつが、他の五つの足金具は方形で、二つの鉤留めをもつ。なお、責金具はもたない、鉄地金銅張りで、ところどころに金箔が痕跡的に残っている。長さ13.2cmである。

辻金具 (Fig. 56-2・3) 羨道部内から2個出土した。大小あり、いずれも、残片を残すのみである。鉄地金銅張りである。

杏葉 (Fig. 56-6) 羨道部入口付近から出土した。鉄地金銅張りである。いわゆる鐘形をしている。鉄板の台板のうえに、縁と内部をうめる斜格子文形を残して切り抜いた鉄板を金

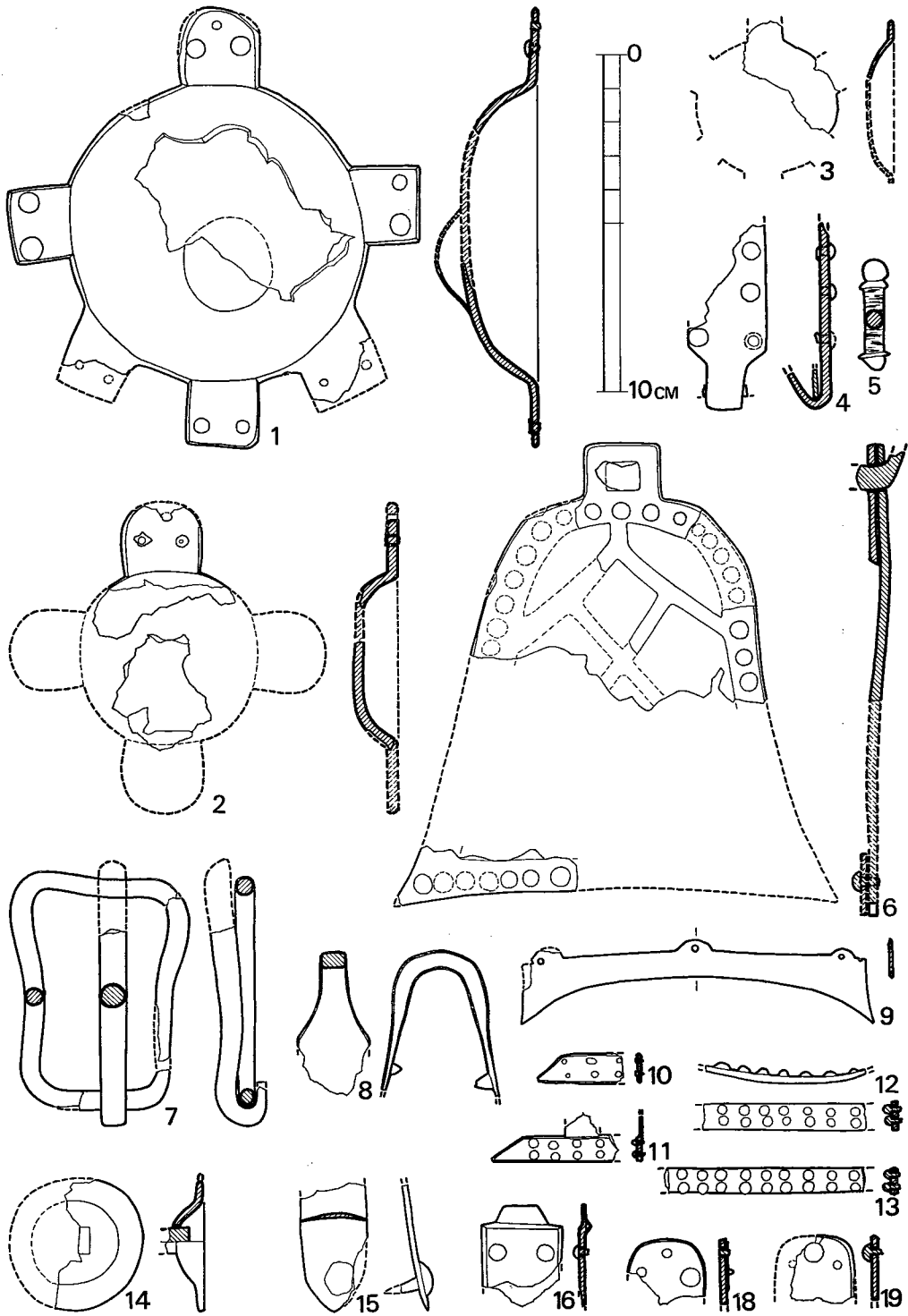


Fig. 56 山の前1号墳馬具実測図 (縮尺 1/2)

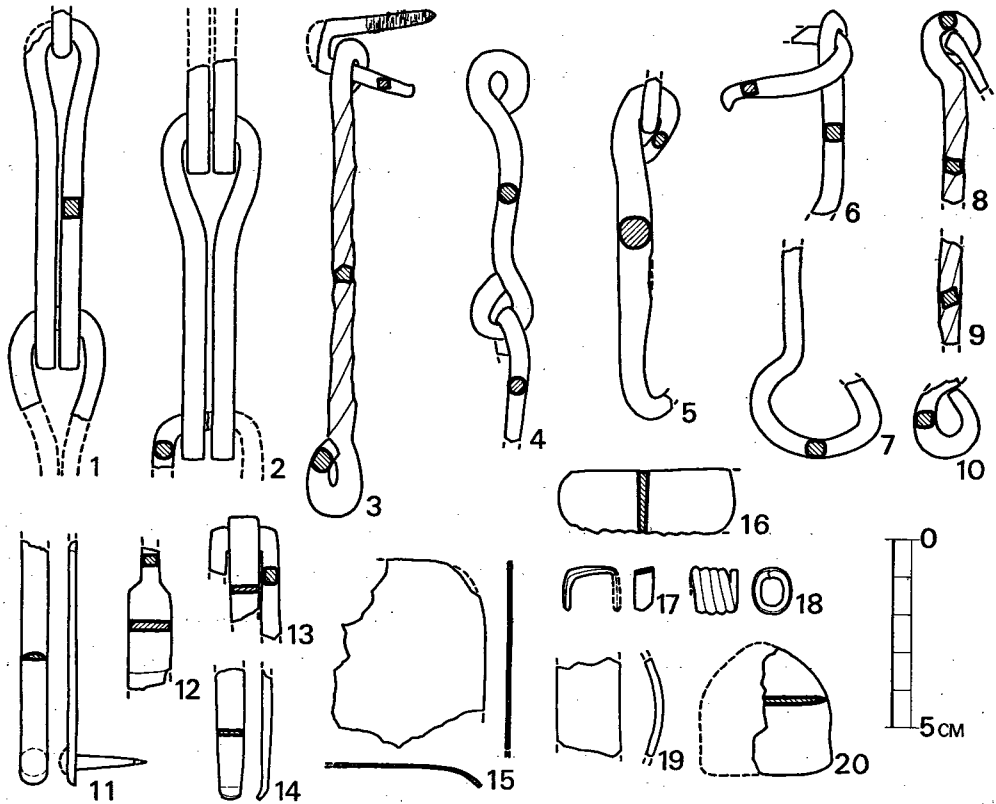


Fig. 57 山の前1号墳馬具その他実測図（縮尺 1/2）

銅板でまいたものを、鉄でとめたものである。下面の外縁は、ゆるやかに内湾している。上面には方形の立間が突出している。4は、杏葉を垂下する草帯の先端につけた金具である。

鉸具（Fig. 56—7） 羨道部入口付近で出土した。鉄製である。断面円形の鉄棒を折り曲げてつくったものである。横幅が若干狭なった形式である。

鐙（Fig. 56—8・15） 羨道部入口付近で出土した。鉄製の輪鐙の一部を遺存している。



鉄板を挾状に折り曲げてつくったものである。兵庫鎖 (Fig. 57-1・2) に接続される部分は、断面が隅丸長方形に部厚くなっているが、この部分を除いて下方にいくと、薄手となり、横断面も三日月形に、若干内湾する。下端は剣先状に尖っている。横から鋸をうっている。この金具部分は、鐙の上半にあたり、下半には竹木製の足を直接あてる部分がついたものであろう。

その他 鉸具の座金具と思われるもの (Fig. 56-14) とか、雲珠あるいは辻金具の留金具が若干出土している (Fig. 56-16~18)。

Fig. 56-9 は、鉄地金銅張りの薄手の金具である。若干外湾した一辺に三つの突起があり、それぞれの一つずつ鋸どめを行なっている。他辺は、内湾している。

Fig. 56-5 は、木部にはめられた円筒形の鉄金具の両端から、鋸を打ちこんだものである。

Fig. 56-10~13 は、鉄地金銅張りの、細身薄手のものである。一端が刀先のように尖ったもの、T字形になるものなどがある。二列にならんだ密集した鋸どめがある。

Fig. 57-3~10 は、木部に装着された座金具から、一つ(5)あるいは二つ(4)の金具を吊り下げたものである。断面が円形のもの(4・5)と方形のもの(6)のほか、ねじられて多角形をなすもの(3, 8, 9)など、いろいろの形式がある。

Fig. 57の11は断面半円形、幅7mmの細い鉄板の先端に、比較的長い鋸がついたものである。12は、断面長方形、幅1.15cmの細い鉄板であるが、一端が幅5mmと狭くなっている。13は、断面隅丸方形の鉄棒をコ字形に折り曲げ、その内側に、断面長方形の鉄板が折り曲げて、装着している。14は、断面長方形の薄くて細い鉄板であるが、一端にいくにつれて、幅は狭まり、薄くなり、先端で屈折する。15は、厚さ1mm弱の鉄板であるが、一つの縁辺部で、一方に湾曲する。隅丸の角が残っている。16は、一辺が鋸歯状になっていて、鋸のような形態をもつが、刃部の幅が2mm強と厚い。17は、小さな鉄板をコ字形に折り曲げたものである。鋸のような形態をもっている。18は、断面楕円形の細い鉄線を、螺旋状にいてねいに巻いたものである。19は、幅1.7cmの鉄板であるが、長辺が弓なりに湾曲している。20は、先端が尖った、鋸の鋒のような形態をなしている。(西谷 正)

### 武器

鉄鋸 (Fig. 58-1~25) 頭部の形態より次のI式からIV式までに分類される。

I式 (Fig. 58-1・2) 腸袂式の変形である。全長9.7cmを測る。貫通というよりもむしろ傷口を大きくあけるのに有効な形態である。鋒、茎とも断面は長方形を呈する。

II式 (Fig. 58-3) 五角形の鋒部を有する。鋒と茎の長さは同じであり、全長は14cmを測る。鋒の断面は半円形を呈し、茎は方形を呈する。

III式 (Fig. 58-4) 定角式である。鋒の先端部は直線で、短く、側面は内湾気味で、長い。鋒の横断面は長方形を呈する。

IV a 式 (Fig. 58-5・6・10) 柳葉式である。鋒中央部は最も幅をひろめ、棒状部への移

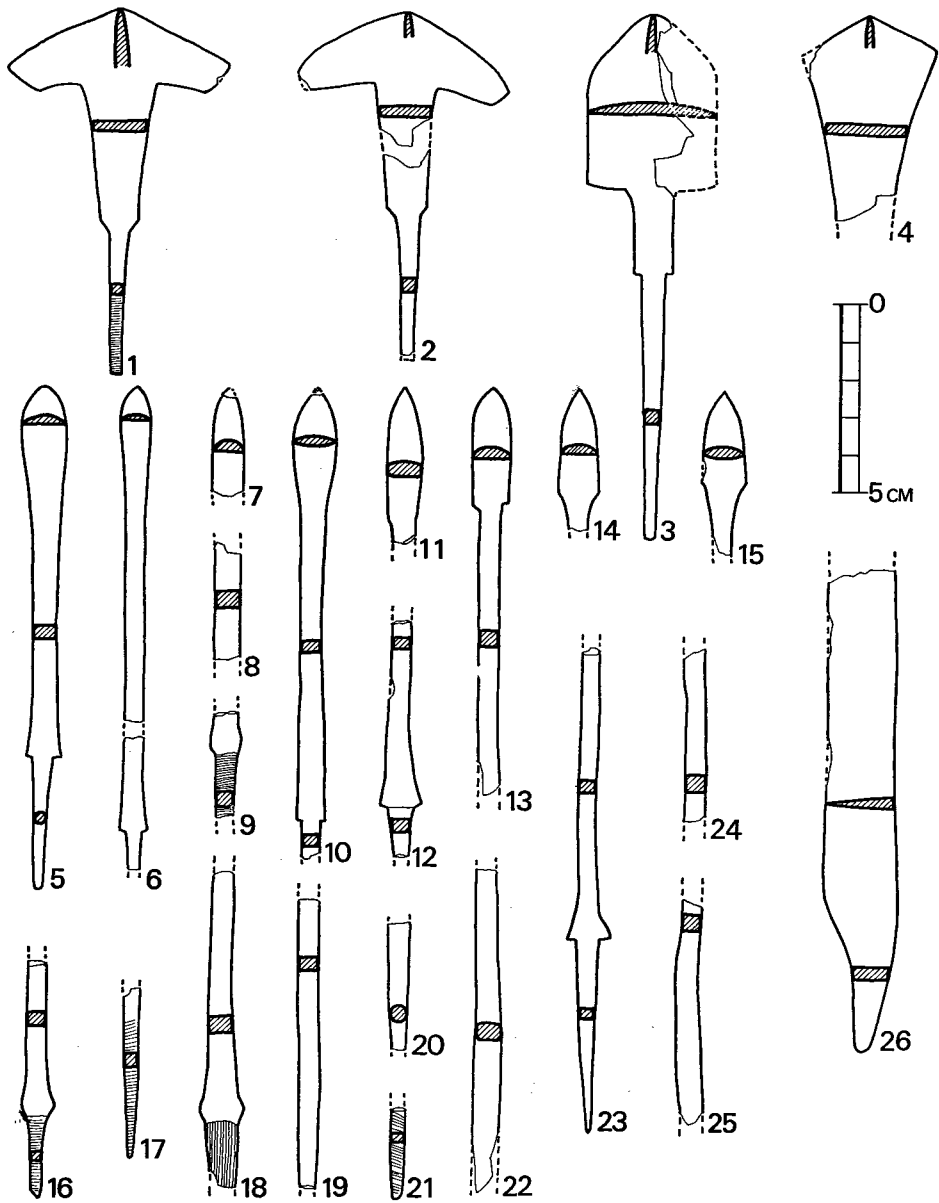


Fig. 58 山の前1号墳武器実測図 (縮尺 1/2)

行はなめらかである。棒状部下端は、かどがついて茎となる。5は全長13.4cmを測る。鋒の断面は半円形と兩丸形とがある。

IV b 式 (Fig. 58—7・11) 柳葉式である。a 式との相違は鋒と棒状部の境に、わずかだが、かどがつくこと、鋒のふくらみがなくて細長くなることである。鋒の断面は半円形と隅丸長方形を呈する。

IV c 式 (Fig. 58—13) 柳葉式である。鋒下端部は両端とも直角に屈折して幅をせばめて棒状部となる。鋒の断面は半円形を呈する。

IV d 式 (Fig. 58—14・15) 柳葉式である。鋒と棒状部の境は内湾気味のかどがつく。鋒の断面は半円形と両丸形を呈する。

16, 17, 18, 21の茎には本質が付着している。

刀子 (Fig. 58—26) 刃部の一部を欠損する。刃部と茎の境は段がつくというような明瞭な変化ではなく、刃部がそのカーブを変えることによって茎を形成している。茎は4 cmを測る。(川述昭人)

### 石器

山の前1号墳表土層および封土中から20点の石器が出土している。その内容は石鏃12, 石核1, 石斧1, その他性格不明確なもの6点である。

石鏃 (Fig. 59—1~12) いずれも無茎鏃であるが、器形はバラエティに富み、規格性がない。1は厚手、不定形なサヌカイト製品であるが、石鏃未製品と考えられる。周辺に荒い加工を施したのみである。2は将棋駒形石鏃で図上表面の中央部は極端な盛り上りを見せている。サヌカイト製である。3~5はいずれも長三角形の石鏃で、基部は直線か、わずかに挟りが入る程度である。前2者は黒曜石、後者はサヌカイト製品である。6は先端の鈍い石鏃である。細加工剥離痕に統一性が見られないので、未製品とも考えられる。黒曜石製である。7は精美な石鏃で、B面には大きく剥片原面を残している。透明度の高い良質な黒曜石製である。8は底辺を極端に湾曲させない例、9は大形鏃片であり、いずれも黒曜石製である。10は部厚く、断面三角形に近い点、石鏃とするにも疑問も残る。黒曜石製である。11は有刺鏃で、粗質で透明度の低い黒曜石製である。12は底辺の湾曲著しく、挟入部が方形に近いサヌカイト製石鏃である。表面磨耗し、加工痕は判然としない。

石核 (Fig. 59—18) 黒曜石の礫を利用した石核で、打面(A面)および側面(C面)は未調整で、自然面をそのまま広く残しているため不定形を呈している。B面が剥片剥離面である。

磨製石斧 (Fig. 59—19) 表裏面共に軽い稜を持つ狭長な石斧である。研磨が不十分なため、全体に製作時の敲打痕を残している。刃部はやや粗い砥石で各方向より磨き上げており、特に先端は刃部と並行に砥いで仕上げている。

性格不明石器 (Fig. 59—13~17・20) 13は表裏共加工を施してある黒曜石製品である。図上下部が欠損しているので鏃ではないかと思われる。14はきわめて精美に加工された黒曜石製品である。特に図上上縁に細かいリタッチが見られる。下縁は断面図に見られるように薄く作られている。15はサヌカイト製品で、下縁に沿って細加工が見られる。小形石匙の未製品とも考えられる。16は唯一の石英製品である。A面は大まかな打調を加えているのみだが、B面は丁寧に加工されている。特に先端部の加工に細かさが見られるので、射突具の1種と考えら

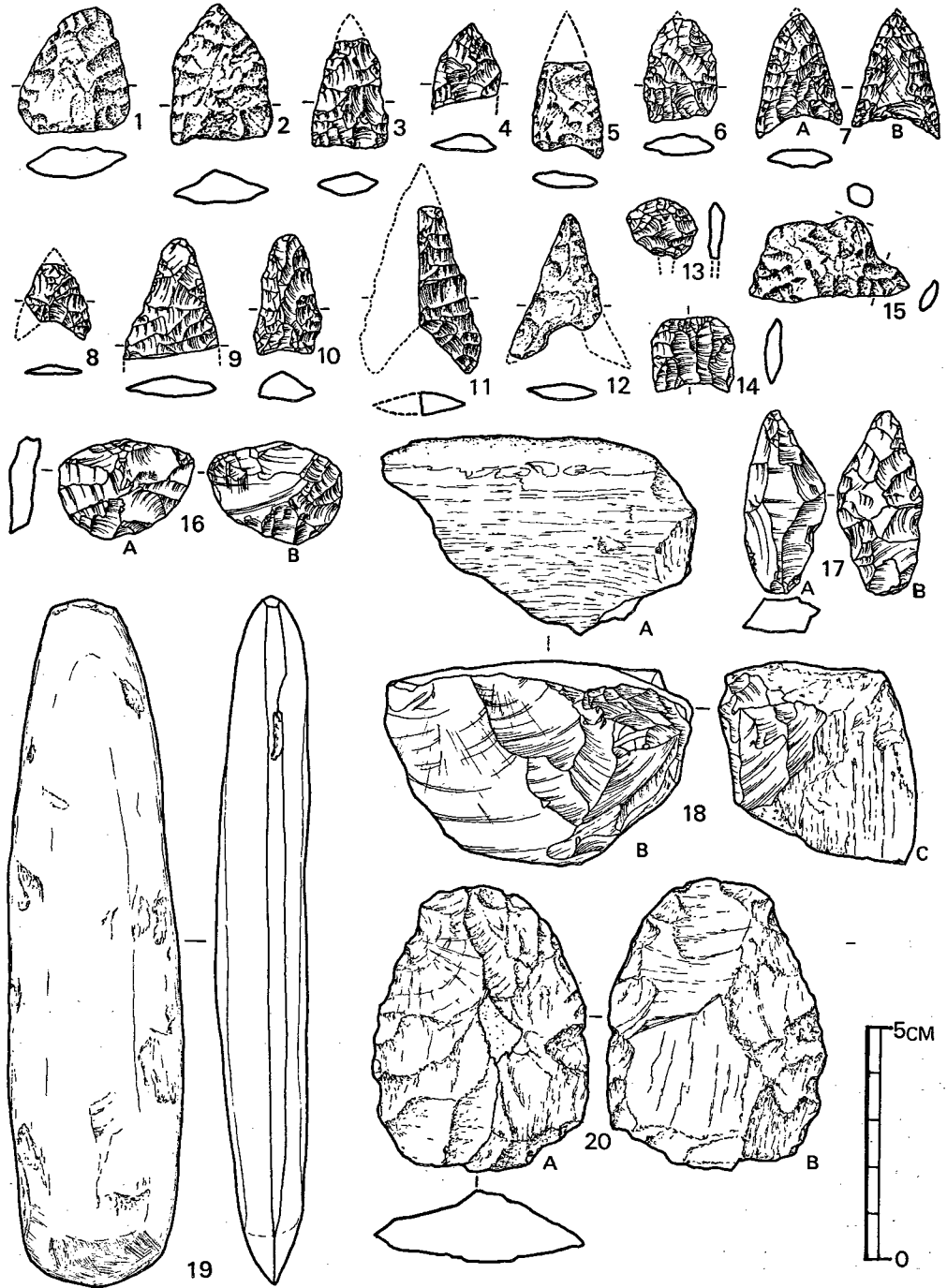


Fig. 59 山の前1号墳石器実測図 (縮尺 2/3)

れる。20はサヌカイト製品で、A面は凸形でB面は平坦に近い。A B両面とも周縁部に細加工が施されているので、スクレーパーとしての機能を有するものであろう。

以上20点の石器の他100点以上の剝片が出土している。封土中に含まれていた例も多いので、古墳築造のため、これら石器の包含層が破壊されたものであろう。(酒井仁夫)

#### (4) 小結

本古墳は、石室構造のところでも述べたように、扁平割石小口積の複室を有する横穴式石室である。特に後室には、一枚の石障を立てて区割された屍床を持っている。

わが国において、横穴式石室がいち早く登場したのは、大陸にもっとも近く、対外交渉の地でもあった筑肥沿岸地域である。これまでに最古の横穴式石室墳として、福岡市周船寺丸隈山古墳<sup>①</sup>と佐賀県松浦郡浜玉町横田下古墳<sup>②</sup>が著名であり、再古墳共に5世紀前半代に比定されている。

横穴式石室の採用は、畿内よりも北九州地方が半世紀ほどさかのぼるといわれている。これらは、畿内系の竪穴式石室の手法に、新たに朝鮮半島でみられる埴室墓の手法をとり入れたものであり、石室内には、九州の伝統的な墓制である組合せ式箱式石棺を組みこみ、個人墓から家族墓形式の墓室に適應させたものである。これらのことは、横穴式石室への転換によって、構造上だけでなく墓制上の変革へと移行するものと考えられる。

横穴式石室は、5世紀後半代には、北九州各地に伝播していくが、まだすべて単室墳<sup>③</sup>である。各地に普及した横穴式石室墳に、北九州では6世紀中葉の嘉穂郡桂川町王塚古墳の時期から複室があらわれてくるようである。それとともに石室内に装飾をともなって発展し、複室墳が定型化していく。

5世紀代に大陸より影響をうけて出現した横穴式石室には、方形プランを呈すものと、長方形プランを呈すものとの二型式があり、6世紀代になると、前者は肥後地方に、後者は筑前・筑後・肥前・豊前・豊後地方へと、その地域を異にして発展する。特に複室を構成するものは、後者と結びついて6世紀後半以降に盛行する。また石室構成の積石も、扁平割石小口積から、大形の石を積み上げたものへと移行していく。

山の前1号墳でみられるような、胴張り長方形のプランと石障との組み合わせは、すでに肥後地方では、5世紀中葉の熊本県上益城郡小坂大塚古墳<sup>⑤</sup>に出現している。小坂大塚古墳は、方形プランの石室内を三個の障壁により分割し、三区画の屍床となしている。あきらかに家族墓として、最初から作ったものと考えられる。これらの埋葬形態は、いわゆる肥後タイプと呼ばれており、胴張りのプランと石障との複合型で、6世紀前半に熊本県玉名郡大坊古墳<sup>⑥</sup>では、複室形成への転換があったことが示めされている。肥後型の石室は、筑前と肥後との接点をなす、筑後地方にも数多くみられ、6世紀中葉以降、石棺から石障へと拡大発展されると共に複室墳形成がみられるようだ。このように山の前1号墳は、単室墳から複室墳への転換期であり、出

土遺物からみても、6世紀中葉を下ることはないと考えられる。

- 注 ① 「丸隈山古墳」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第10集) 1970.  
 ② 松尾禎作「横田下古墳」(佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告第10輯) 1948.  
 ③ 梅原末治・小林行雄「筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳」(京都帝国大学文学部考古学研究報告第15冊 1940.  
 ④ 小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」史淵第100輯 1968.  
 ⑤ 「上益城郡小坂の大塚古墳」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第2集 1925.  
 ⑥ 小林行雄編「装飾古墳」1964. (松本 肇)

### 3 山の前2号墳

#### (1) 古墳の構造

山の前1号墳の東に接して位置する2号墳は、かろうじて古墳と認識できる程の低い盛り上がりのみせている。墳形は円墳で、東西径約10.5m、南北径約12.4mをはかり、わずかではあるが楕円形を呈す。墳丘の西側は1号墳の裾からそのままほとんど高まりを見せずに続く。東側は丘陵が次第に低くなるに従い、墳端も西側に比して低くなっている。墳丘の高さは東側約1.8mをはかる。

山の前1号墳は径約27mをはかる円墳で、この丘陵上では一番大きく盟主的存在の古墳である。そのかたわらにある2号墳は1号墳との距離が9mしか離れておらず、盛土もわずかの小古墳で、1号墳と密接な関係をもっている。

調査に際しては、北東の一角を残し、墳丘をはぐ調査を行なった。その結果では墳頂は若干削平されているが、築造当時の様相を知ることができた。もともと小さくはマウンドを持っていて、径7mをはかる小円墳であった。西側の高いところは丘陵とマウンドを区別するために地山を切り、溝をもうけている。溝の幅は約2m、深さ0.65mで、墳丘の半分をめぐっている。その端は低くなるに従って次第に浅くなり、地形に沿って自然になくなっている。古墳の中心から溝の端までは5.5mある。古墳の東側は墳丘を区割するための施設は何ら認められず、マウンドの傾斜がわずかに変わり、そのまま丘陵に続いている。

マウンドはわずかに盛上る地山の上に土を盛ることによって築かれている。すなわち約10度の傾斜面に土を盛って、地山から現高約0.7m(復原推定高1.1~1.2m)の高さにしている。盛土の状況は付図Fig.⑦に示す如く通常の状態である。そして墳丘を築いた後に掘り方を掘って石室を築いている。掘り方は地山をもわずかに切っている。石室は南に開口する横穴式石室であるが、様相がすこし異なっている。

#### (2) 内部主体の構造

低いマウンドの中央に主軸の方向をS-18°12'-Eに向けた横穴式石室をもつ。石室は全長

2.65m、最大幅1.75mである。玄室は長さ2.25m、奥壁で幅1.44m、中心部で1.75m、袖の部分で1.11mをはかる。いわゆる胴張りを持つ構造である。羨道部は両側に石を立てて袖としているが、袖石の部分のみで終わっており、本来の羨道は持たない。長さ0.35m、幅0.55mの短かい羨道で、羨道と呼ぶにはふさわしくない程である。羨道の前には墓道がつづく。墓道は浅くU字状になっている、墓道の端は墳丘端に近づくにつれて広がって行き、そのまま自然な形で墳端に接する。袖石と接するところでの幅は上端で1mをはかる。床面は羨道部まで一面に板石を不規則に敷いているが、羨道部のところは幾分板石が大きい。また玄門を境にして両方に1枚ずつ広い板石を敷いている。

奥壁は1枚の大石を立てて構成しているが、側壁は割石の平積みである。袖石には若干大きな石を用いているが、左側の袖石は破砕されて根だけを残している。奥壁は直立しているが、両側壁にはわずかに持送りが認められる。石材は壁、床面とも同種のものである。

石室の構築法は次の通りである。わずかに盛上った地山に土を盛ってマウンドを築き、その後掘り方を掘っている。掘り方は不整形であるが、長さ、幅とも2.60mの正方形を呈する。この掘り方の中にまず奥壁を立て、次に左右の側壁を割石の平積みで積んでいっている。この側壁は割石を1初に積んだだけで、それを補強するものは何ら見当たらない。割石は最初から若干内に傾かせて積んでいる。掘り方の中に築かれたのは玄室のみであって、袖石を立てるために改めて掘り方に接して塼をうがって、塼いっぱい大きさの袖石を立てている。これに墓道が続く。

構築方法は通常の横穴式石室とは異なっている。すなわち掘り方は最初から玄室のみを対象として掘っており、もともと羨道を設けることを考慮に入れてなかった。掘り方のプランが方形を示すことは、背景に肥後型といわれる石室構造があったと考えることもできよう。

石室は破壊されている。奥壁は1枚石で上になる程薄くなっている。床面からの高さは0.73mである。側壁は両側とも、大体6段残っており、0.4m~0.5mの高さである。袖石は一方のみしか残っていないが、高さ0.71mをはかる。この袖石も先端が尖っている。

奥壁と袖石の高さがほぼ同じであり、しかも両方の石とも先端が尖っている。このことから、更に上に石を積み上げることが不可能な気がする。しかも裏込めによる補強ができないことは、その感をさらに強くする。とすれば側壁も1列の石積みですむし、わずかの持送りも可能となる。このようなことから石室は元々低かったものだと考える。それに加えて盛土の状況から墳丘の高さを復元すれば、余り高くないことが、さらに強化する。石室に使用された石材には、緑泥石片岩・石英-絹雲母片岩・縞状石英片岩などがある。(佐田 茂)

### (3) 遺物

#### 出土状況

山の前2号墳の石室は、ひどく破壊されていたが、遺物は豊富な遺存状況を示した。石室の

床面からは、装身具  
 ・馬具・鉄製利器・  
 須恵器などが出土した。追葬や石室の破壊によって、ある程度は攪乱されているが、ほぼ最終段階の原位置を示すものと思われる (Fig. 60)。

装身具としての耳環は、石室の中央から奥壁にわたって、散乱したような状態で検出されたが、ガラス玉は、西北隅付近にかたまっていた。馬具は、轡が、西北隅と西南隅の二群2対に分れる。鉸具も、西南隅に近い。鉄鏃も、西北隅に、ガラス玉や轡にまじって一群と、中央部東壁隅付近でも一群が出土した。鉄刀は、西南隅で、轡とともに検出した。須恵器の量は少なく、西北隅と、中央部や南よりのところでそれぞれ提瓶と杯が出土した。

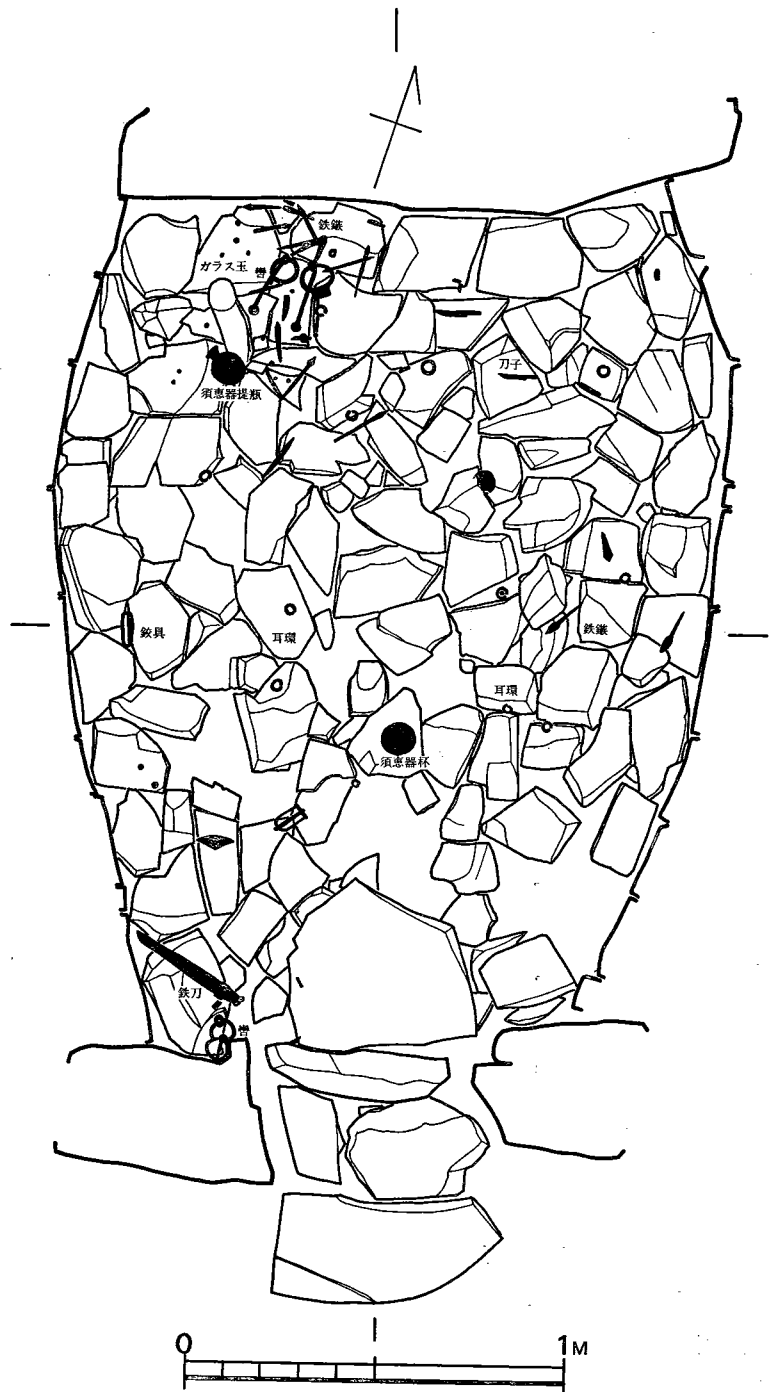


Fig. 60 山の前2号墳遺物出土状況実測図 (縮尺 1/20)



大量の須恵器と、若干の鉄鏃・紡錘車は、羨道前方から、その前方の周溝部で出土した。追葬時にかき出されたものであろうが、石室外から出土した遺物で注目されたのは、石室の東南方向にあたる旧地表面で、須恵器の蓋をした杯3個が並置されていた (Fig. 61)。盛土を行なう前に置かれたもので、古墳營造過程における儀礼に使用されたものである。

その他、封土中から玄武岩製石斧の破片、叩石、サヌカイトと黒曜石の剥片など計5点と、墳丘北トレンチでも、サヌカイトと黒曜石の剥片を計2点採取した。

(西谷 正)

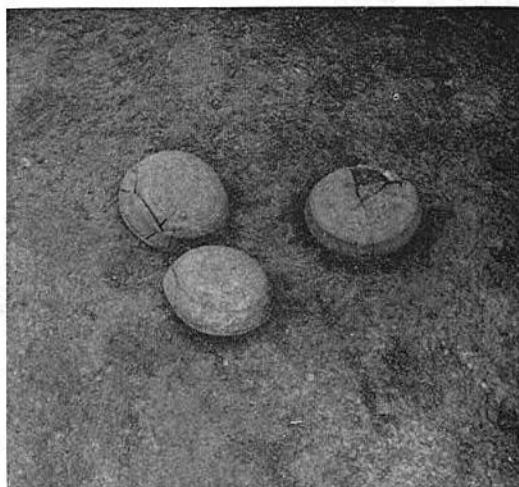
出土遺物を列記すると、つぎのとおりである。

- |         |       |        |
|---------|-------|--------|
| (1) 容 器 | 須恵器   | 95個体以上 |
|         | 土師器   | 25個体以上 |
| (2) 武 器 | 鉄小刀   | 1振     |
|         | 鉄鏃    | 17本以上  |
| (3) 工 具 | 鉄刀子   | 8本     |
| (4) 馬 具 | 鉸具    | 2      |
|         | 轡     | 2      |
|         | 帯先金具  | 1      |
|         | その他   | 3      |
| (5) 装身具 | 耳環    | 16     |
|         | 鉄環    | 1      |
|         | 土玉    | 1      |
|         | ガラス小玉 | 11     |
| (6) その他 | 紡錘車   | 1      |

#### 須恵器

#### 杯蓋

I 類 (Fig. 62-1・2・3) 天井部と体部の境に段を有するもので、段の位置は口縁端よ



墳丘下旧地表面須恵器



石室内床面耳環・鉸具・刀・轡

Fig. 61 山の前2号墳遺物出土状況

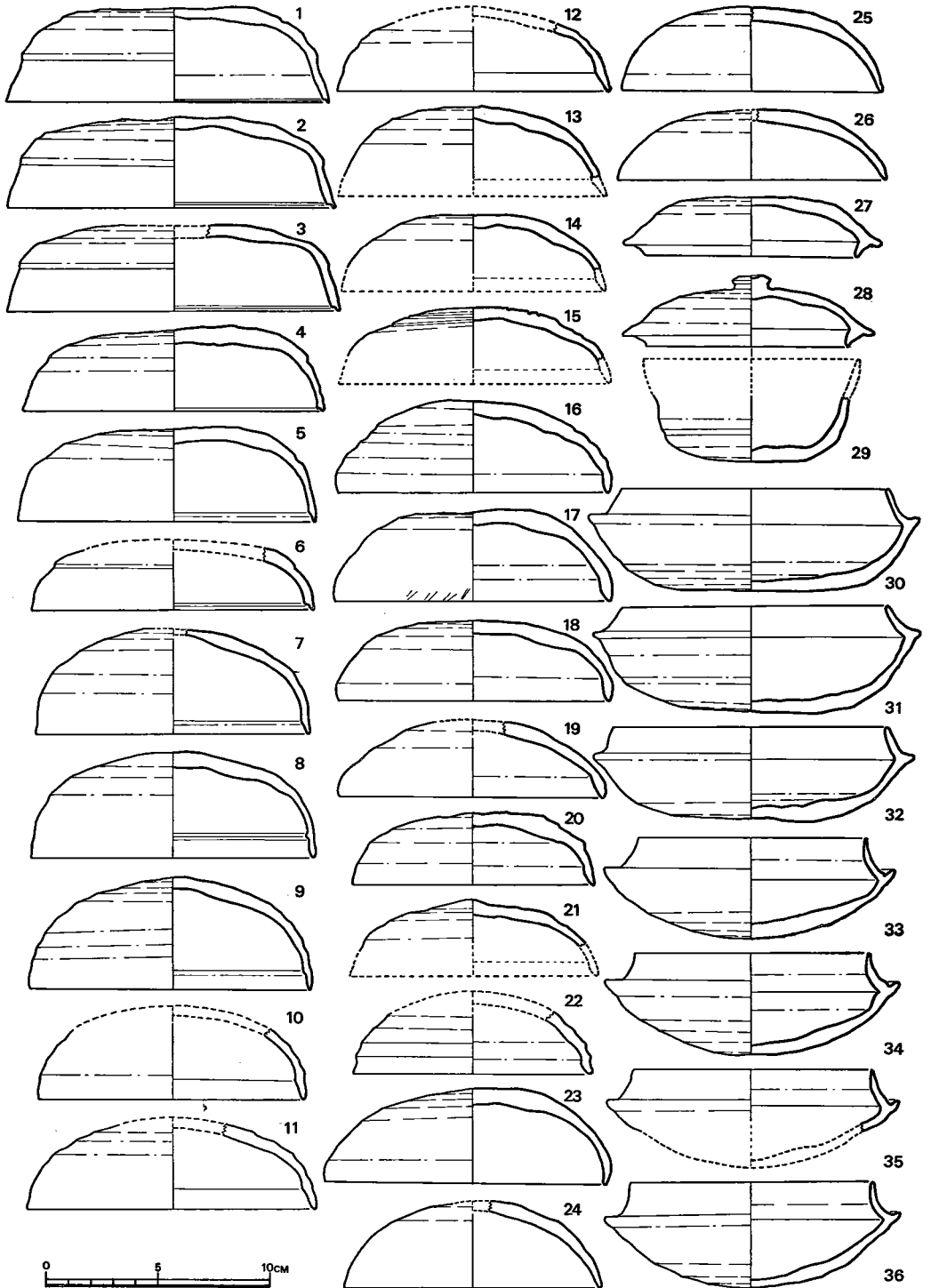


Fig. 62 山の前2号墳須恵器実測図① (縮尺 1/3)

り2.1cm~2.2cmの高さにある。口径は14.5cm~15cm, 器高は3.8cm~4.2cmの間であり, 全体に断面は箱形を呈している。口縁内部には段を有して古式の特徴を残している。天井部は篋削りしており, 砂粒の移動よりみた篋削りの方向は左廻りである。口縁端はやや鋭りぎみのもの(1)と端部を丸くおさめているもの(2, 3)とがある。色調は青灰色を呈し, 焼成は良好であり, 胎土には砂粒も多く含んでいる。1では天井部内側に粘土紐のつぎ目が観察できた。

II a 類 (Fig. 62-4・5・6) 天井部と体部の境に沈線を有するもので, その高さは1.8cm~2.8cmとひらきがある。口径は4, 5がそれぞれ13.6cm, 13.4cmを測り, 6は12.6cmと小さくなる。器高は3.6cm~4.1cmの間であり, これも断面箱形を呈する。口唇部内面には段を有しており, 口縁端部は丸くつくられている。色調は灰黒色ないし, 暗灰色を呈し, 4, 5は土器面に灰白色の自然釉が附着する。焼成は良好であり, 胎土には砂粒を含む。天井部は篋削りされており, 他は横なである。4, 5共内側に篋記号を有する。

II b 類 (Fig. 62-7~15) 土器内面の体部と天井部の境に突出を有するもので, 位置は口縁端部より5mm~12mmの高さにある。口径は12cm~12.7cm, 器高は復元高も含めて3.5cm~5cmとひらきがあるが, 器形は全体的に丸い形態である。横なであるによる凹凸がいちじるしく, 口縁部はほぼ垂直もしくは外反し, 口縁端部は丸くおさめられている。15は天井部に3条の沈線を有する。色調は暗灰色ないしは灰色を呈し, 焼成は良好である。9は篋記号を有する。

II c 類 (Fig. 62-16~19) 内面の天井部と体部の境に屈曲を有する。即ち, 天井部からなめらかにカーブしてきたのがこの部分を境として, 外湾しつつ口縁端部へと続くのであり, 体部は全体的に肥厚する。この境には, やや甘い稜線が入る。口径は12cm~12.3cm, 器高は3.7cm~4cmを測る。全体的に口縁部は垂直に近く, 端部は丸くおさめている。篋削りの範囲は天井部付近を $\frac{1}{2}$ 弱程行っており残りは横なである。16は横なであるの際の凹凸が器面にいちじるしい。篋削りの方向は左廻りであり, 16, 17, 18は篋記号をもつ。色調は暗灰色と灰色がほとんどであり, 16のみ灰赤褐色を呈する。焼成は良好であり, 胎土には細砂粒, 砂粒を含む。

III a 類 (Fig. 62-20~22) 内面の口縁部と天井部との境に, 甘い稜が入り, 口縁部は肥厚して外湾する点はII c類と似るが, 口径は10.8cm~11cmと小さくなり, 口縁部外面は長くなる。器高は3.2cm~3.5cmを測る。色調は暗灰色を呈しており, 焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。20は天井部をへら調整しており, そのほかはへら削りである。

III b 類 (Fig. 62-23~26) 天井部から体部への移行は滑らかであり, 天井部は丸い形態をし, 全体的に丁寧なつくりである。口径は11.7cm~12.5cm, 器高は3.2cm~4.2cmを測る。23は口縁部外側に篋により線が入る。色調は暗灰色を呈し, 焼成は良好である。

IV a 類 (Fig. 62-27) 蓋にかえりを有し, つまみのつかないものである。口径9.6cm, 最大径11.6cm, 器高2.7cmを測る。天井部はうすく, 体部へ向って序々に厚みを増し, かえりは太い。かえりと身受け部の境は一条の沈線が入り, かえり内面の接合部は明瞭な稜線をも

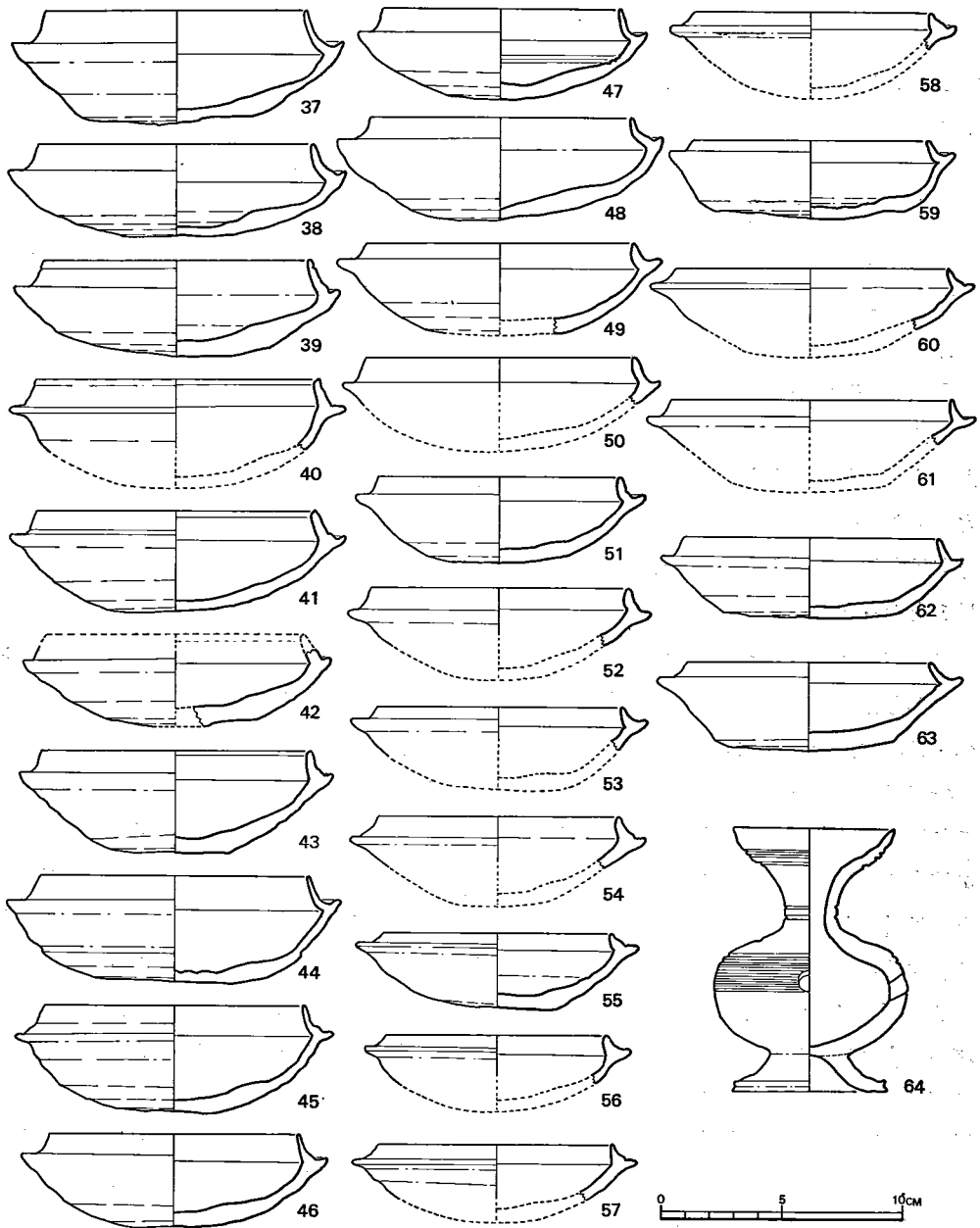


Fig. 63 山の前2号墳須恵器実測図② (縮尺 1/3)

ち内傾した8mmのかえりがつく。端部は丸くつくられており、かえりは受部水平面よりも外側へ突出する。天井部にかけて1/2ほど篋削りされているが、削りは雑である。胎土には砂粒を含んでおり、器面はザラザラする。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。天井部に篋記号をも

つ。

IV b 類 (Fig. 62—28) 蓋につまみとかえりを有するものである。頭部のくぼんだ扁平なつまみがつく。口径9.1cm, 最大部径11.2cm, 器高3.1cmを測る。器壁は一体にうすであり、かえりは7mmで、受部水平面よりも出る。かえり内面接合部には稜線が入り、かえりは内湾ぎみに延び先端部付近では外反して、口縁端部はすどくなる。身受け部とかえりとの境は沈線が入り、受け部先端は細くなる。篋削りは丁寧に天井部から体部にかけて $\frac{2}{3}$ ほどなされており、残りはすべて横なである。体部はやや内湾ぎみに受け部へとつづく。削りの方向は左廻りで、胎土には砂粒を含んでいる。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

#### 杯身

I 類 (Fig. 62—30—32) たちあがりは1.5cm~1.6cmを測り、直線的に内傾するものである。口径は12cm~12.3cm, 最大径14.3cm~14.8cm, 器高4.2cm~4.7cmを測る。蓋受け部はわずかにくぼむか、全くくぼまない形態を呈して、特徴的である。篋削りは底部付近に $\frac{1}{2}$ 強ほど施されており一気に削りあげている。底部は平坦であり広い。砂粒の走向状態より見た篋削りの方向は左廻りである。色調は青灰色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土には細粒を含む。30は1とセットになる。

II a 類 (Fig. 62—33—36, Fig. 63—37) 33で代表されるように、たちあがり長くて、接合部からは内に傾きつつも中ほどから直立ぎみに外湾する形態をとるものである。口径は10.3cm~10.7cm, 最大径は13cm~13.2cm, 器高は4.5cmを測り、ほぼ同大である。たちあがりは1.7cm~1.9cmの間である。器形は全体的に丸い形態をしている。37は底部がやや扁平であるが、これは底部付近が削り足らなかったためのものと考えられる。31はたちあがり外面と受け部との接合部に浅い沈線が一本入っており、他のものは受け部の落ちこみがやや深い。たちあがり内傾斜面との境は明瞭な稜線を有し、接合部下に一段を有するものもある。33, 37は篋記号を有する。色調は暗灰色を呈するものが多く、焼成は良好である。34は、17とセットである。

II b 類 (Fig. 63—38・39) たちあがり1.5cmを測り、内に傾きつつも外湾するが、外湾の度合いはI b 類のそれほどでもない。37はたちあがり外上部に沈線が一本入り、蓋受け部の落ちこみの深さは共に2mmほどである。口径は11cm~11.2cm, 最大部径は15cm前後である。器高は3.7cm~3.9cmと低くなり、器形は全体的に扁平である。38はたちあがり内傾斜との境に明瞭な稜線を有するが、39はやや不明瞭である。外側底部付近は $\frac{1}{2}$ ほど篋削りされており、削りの方向は左廻りである。色調は灰色を呈するが、39はやや黄色を帯びる。焼成は共に良好であり、胎土には砂粒を含む。38は底部に篋記号を有する。

II c 類 (Fig. 63—40—43) たちあがり端部内側を斜めに切られたものである。口径は11.1cm~11.5cm, 最大径12.8cm~13.6cm, 器高4.1cm~4.2cmを測る。たちあがりはすべて1.2cmであり太く、内傾する。41, 43は蓋受け部落ちこみから、たちあがりに続く部分にふくらみ

をもつ。たちあがりと内傾斜面との境は明瞭な稜線を有し、器壁は全体的に厚い。色調は暗灰色を呈するものが多く、焼成は良好である。篋削りの方向は左廻りである。

II d 類 (Fig. 63—44~48) たちあがりが1.1cm~1.3cmのものである。たちあがりの1.3cmのものは3個を数える。たちあがり内面の接合部から大きく内湾し、途中からは若干内傾しつつも直線的に端部へと続く。48は口縁端より7mm位の所から直立する。全体的にたちあがりは細い。蓋受け部の落ちこみ溝は深くないが、おおむね広く、蓋受け部先端はややとがり気味となる。口径10cm~11cm、蓋受け部径12cm~13.5cm、器高3.7cm~4.3cmを測り全体的に丸い形態である。47は内面に3条の沈線が入り、底部外側には篋記号を有する。44、46も篋記号をもつ。44は4とセットになるものと思われる。篋削りは底部から $\frac{1}{2}$ ほど施されており、削りの方向はすべて左廻りである。45は灰黒褐色、47は青灰色で他は暗灰色を呈し、焼成は良好である。胎土には細粒、砂粒を含んでいる。なお44は羨道東側墳丘中より出土したものである。

III a 類 (Fig. 63—49~58) たちあがりの7mm~10mmのものである。51と55のみ完形品である。口径9cm~10.5cm、器高3cm~3.5cmを測る。器形は55とみると底部は丸いが全体的には扁平である。たちあがりは全体的に短くて太く、内湾ぎみにつくられ途中からゆるやかに傾斜をかえて外湾ぎみに端部へとつづいて行き、端部は丸く仕上げられたものと、たちあがり内面は接合部からほぼ垂直につくられ、先端はとがり、断面が直角三角形のような形態をとるもの(57、58)とがある。蓋受け部は短くわずかにくぼむ程度であり、ここに沈線をもったもの(55、57、58)もある。たちあがりと内傾斜面との境は明瞭な稜線をもつが、54はあまり明瞭でない。色調は大部分暗灰色を呈するが灰色のもの(58)、灰褐色のもの(54)もある。焼成は良好で、胎土にはおおむね細粒、砂粒を含む。55は篋記号をもつ。

III b 類 (Fig. 63—59~63) たちあがりの9mmほどのものである。口径は10.5cm~13.5cmとひらきがある。器高は3.4cm~3.7cm、最大部径は12.5cm~13cmを測る。たちあがりは内湾しつつも途中から外湾ぎみに立ってくるもの(60、61)と、直接的に内傾するもの(62)、内傾の著しいもの(63)とがある。底部は全体に平坦であり、底部、体部の境が明瞭である。蓋受け部はわずかにくぼむ。器形は扁平である。60は蓋受け部に沈線をもち、端部は平坦な面をもつ。59は口径9.8cm、蓋受け部径11.8cm、器高3.2cmを測り扁平な形態である。たちあがりと内傾斜面との境が特徴的である。底部は篋整形し、篋記号をもつ。色調は暗灰色がほとんどで、焼成は良好である。胎土には細粒を含み、篋削りの方向は左廻りである。

IV b 類 (Fig. 62—29) 蓋受けのないものである。28とセットになる。内側は底部から体部中央付近まで内湾気味につくられ、上部は欠損するが、外反ぎみに口縁端へ続くものと思われる。底部から少し上った所に2mm~3mmの沈線が1条入る。底部のみ篋削りされており、この部分に篋記号をもつ。復元口径9.5cm、復元器高4.5cmを測る。色調は灰白色を呈し、焼成はやや軟質であり、胎土には砂粒を多く含む。

台付甕 (Fig. 63—64) 胴部と頸部とを2条の沈線で区別し、頸部は口縁下の沈線部までラッパ状に外反し、口縁部は内湾気味に端部へとびる。端部はややとがる。口縁部には3条の沈線が入り頸部と区別されている。肩部には2条の沈線が入り、沈線下より円孔下端部まで刷毛目を施している。円孔は胴部の最も張り出したところに穿たれている。底部には胴部とほぼ同じ厚さで脚がつく。脚端は退化形態の段を有しており、端部には稜線が入る。口径6.8cm, 最大部径8.1cm, 脚端部径6.3cm, 器高は10.7cmを測る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多数の砂粒を含む。

埴蓋 (Fig. 64—65) 口径6.3cm, 器高2.3cmを測り、天井部は平坦である。口縁部はやや外反気味で端部は外方へ突出する。端部内側は斜めに切られており、この部分に稜線が入る。天井部はヘラ調整しており、残りの部分はすべて横なである。灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土には砂粒を含む。埴の身66とセットになるものである。

埴身

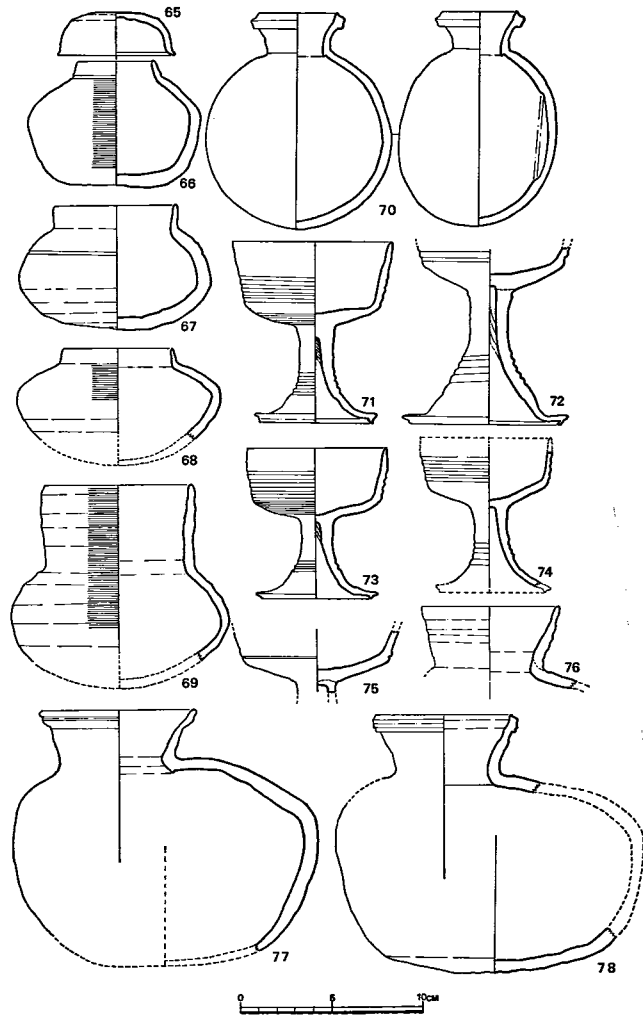


Fig. 64 山の前2号墳須恵器実測図③ (縮尺 1/4)

a類 (Fig. 64—66) 口縁部は10mmほどで短く、内傾する。端部は平坦な面をもっている。口径4.4cm、最大部径9.6cm、器高6.8cmを測る。口縁部と肩部との境には1条の沈線が入る。肩部から胴部、胴部から底部への移行は直線的な感じで、断面「コ」の字型に近い。底部は平坦である。器壁は口縁部から底部へ移るに従って厚くなる。底部はヘラ調整しており、この部分に篋記号をもつ。肩部、胴部には刷毛目が入る。色調は暗灰色で焼成は良好である。胎土には細粒を多く含む。

b類 (Fig. 64—67) 口縁部は1.3cmほどあり外反する。端部は丸くつくられている。口径6.8cm、最大部径10.6cm、器高6.8cmを測る。肩部下方に1条の沈線を有しており、最大径は胴部中央にある。器壁は全体に厚い。底部から胴部まで篋削りされており、底部には篋記号をもつ。色調は黒灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含み、砂粒の移動よりみた篋削りの方向は左廻りである。

c類 (Fig. 64—68) 口縁部は細く、長さ1cmほどで直立し、端部はとがり気味である。口径6cm、最大部径11.2cm、復元器高6.5cmを測る。最大径は胴部上方にあり、やや不安定な感じを受ける。器壁はうすく、胴部のはり出しは著しい。肩部のみ刷毛目が入る。色調は灰茶褐色を呈し、焼成は軟質である。胎土には砂粒を含む。

d類 (Fig. 64—69) 口縁部が非常に長く4.8cmを測り、やや外反気味に延びる。端部はややせばまり、丸くおさめている。器面は横なでの際の凹凸がいちじりしい。口径8.2cm、最大部径12cm、復元器高11cmを測る。最大径は胴部中央に位置する。口縁部、肩部は刷毛目が入る。胴部より下方は篋削りをしている。口縁部外面には篋記号をもつ。色調は暗茶褐色で焼成は軟質であり、胎土には少量の砂粒を含む。

提瓶 (Fig. 64—70) 石室内の出土である。球形の胴部をもち、横断面も丸い形態をしている。頸部は短く、口縁端まで2.4cmを測り、外湾しつつも口縁内面はやや傾斜を変えて、立ち気味になる。端部はとがり、口縁外側には稜をもつ小凸帯がつく。頸部より下方は刷毛目が入る。口径4cm、最大部径10cm、器高11.8cmを測る。肩部に篋記号をもつ。色調は灰色で焼成は良好である。

#### 高杯

a類 (Fig. 64—71・73・74) 小形のものである。71は石室内から出土しており焼成が不十分であったため赤褐色を呈する。71は杯部口径8.7cm、脚端部径6.7cm、器高10cmを測る。73は器高が少し低くなる。杯部は体部より斜め上方へと直線的にひろがる。端部は丸くおさめておく。杯部中央より下方に沈線が4本入る。脚中央部付近にも沈線が入るが、これは平行でなく螺旋形にめぐっている。脚内面上部には成形時のしぼり痕がみられる。脚端部はかえりの退化した形態の段を有しており、端部は稜線を有する。色調は71以外は暗灰色を呈し、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。74は脚上部に篋記号をもつ。なお71、73の土器は塚の谷4号窯



跡出土土器と類似しており、この4号窯で焼かれたものではなかろうか。

b類 (Fig.64—72・75) a類にくらべて少し大形となる。72は杯上部を欠損するが、沈線が3～4本入るものと思われる。脚柱やや下方には螺旋形に沈線がめぐっており、内面には成形時のしぼり痕が見える。脚内面に篋記号を持つ。75は杯部下方に1条の細い沈線が入る。72は暗褐色を呈し、焼成はやや軟質である。75は暗灰色を呈し、焼成は良好である。

#### 平瓶

a類 (Fig.64—76) 頸部は外上方へ直線的にのびて、口縁部へ続く。口縁部はやや細くなり、端部は丸くおさめている。口径7.6cmを測り、頸部外面には篋記号を有する。色調は灰黒色であり、焼成は良好である。胎土には細粒を多く含み、土器表面はザラザラしている。

b類 (Fig.64—77) 頸部は短く、ラッパ状にひらき、口縁部は1条の凹線によって段がつく。口縁端面はほぼ水平である。肩部から胴部への変換はなだらかであって、稜線は入らない。口径8.4cm、最大部径16.3cm、器高14cmを測る。胴部中央より底部までは篋削りされている。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。

c類 (Fig.64—78) 口縁端上部には鋭い突出があり、口縁部にも装飾的な突帯がつくが、ここには明瞭なる稜線はつかない。頸部は外湾している。胴部下方のみ篋削りしてあり、底部は指でおさえたらしく指頭の凹凸と共に指紋が観察できた。口径7.6cmを測る。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。

#### 壺

a類 (Fig.65—79) 頸部は外湾し、口縁部は頸部からひき出されて外側に折りまげられており、端部は丸味を帯びる。口径19cm、最大部径31.2cm、器高31cmを測る。最大径は胴部中央付近に位置する。肩部と頸部の接合部は、くの字形を呈する。器面は全体に凹凸がみられる。頸部、口縁部は横なでを施し、それ以外の部分では、外面に平行条線叩文が入り、内面には同心円叩文が入る。色調は暗茶褐色を呈しており、焼成は不十分である。胎土には砂粒を含む。

b類 (Fig.65—80) 頸部は凹凸がいちじるしく、外反する。口縁端は上下に突出する形態をとる。口径20.5cmを測る。口縁部、頸部は内外面とも横なでしており、残りの部分は、外面には平行条線叩文、内面には同心円叩文が入る。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。

#### 甕

a類 (Fig.65—81) 頸部は短く、太い。外湾気味にのび、口縁端内側はややくぼみ、短く突出する。口縁外側には1条の突出を有し、下端はややのび、折りまげられており沈線が入る。口径20cmを測る。頸部より下方の外面は平行条線叩文、内面は同心円叩文が入り、それ以外は横なでである。色調は灰黄色を呈しており、焼成は不十分である。胎土には細粒を含む。

b類 (Fig.65—82) 頸部はいちじるしく外反する。頸部内面ではまっすぐ口縁部に続き、口縁外面では下方を折りまげており、沈線状のすきまがあく。口径22.5cmを測る。横なで

を施す。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

c類 (Fig. 65-83) 頸部はほぼ45°の角度で外湾気味のび、口縁上部は、くの字形に内湾する。口径38cmを測り、頸部は13cm~14cmと長い。頸部の最小部径は26cmほどでかなりすぼまっている。口縁部外面には3本の沈線が入り、頸部との境の器壁はうすく、下方に進むにつれて厚みを増す。頸部には沈線が2箇所に入り、3分割され、上部2つには楕円波状文が入る。口縁凸帯は装飾にとんだ様相を呈している。頸部下は、

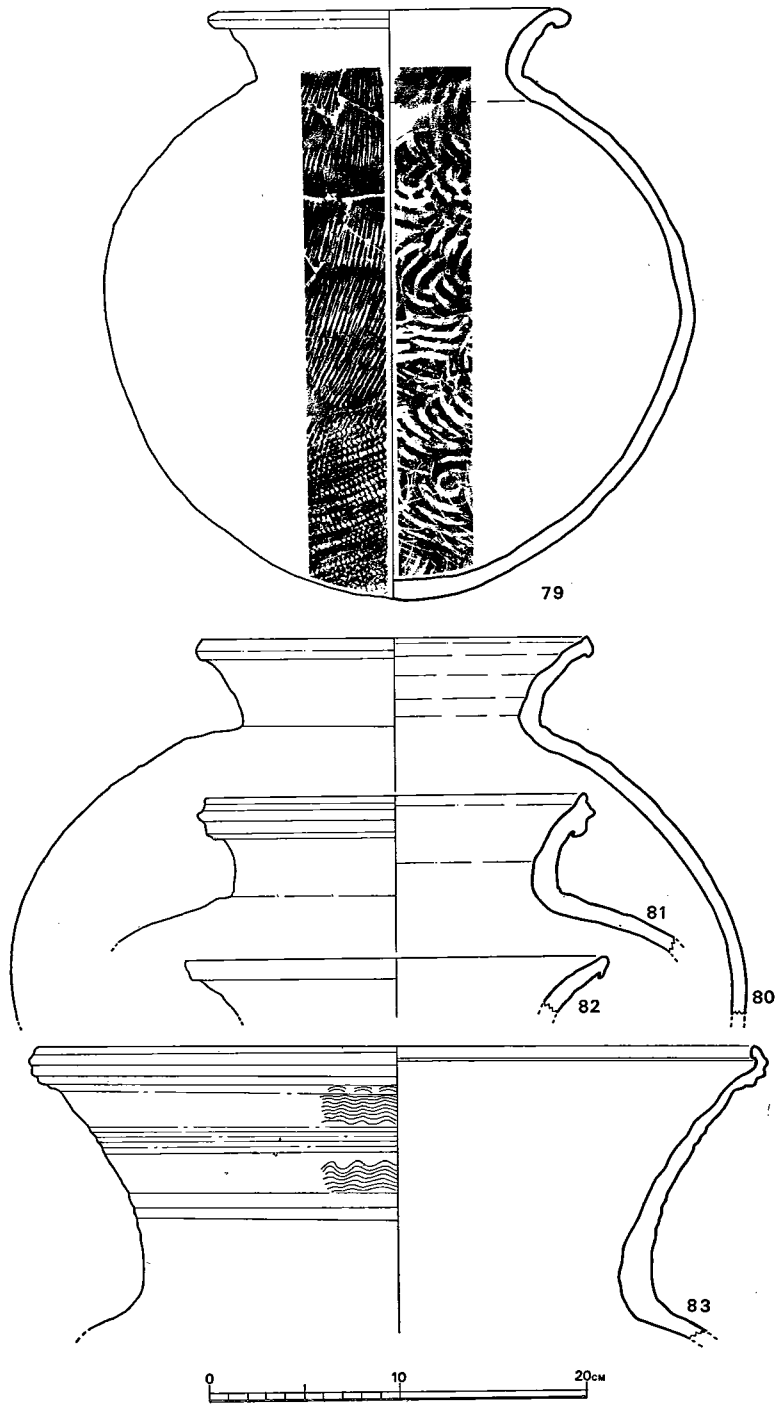


Fig. 65 山の前2号墳須恵器実測図④ (縮尺 1/4)

外面に平行条線印文が、内面には同心円印文が入る。色調は褐色を呈しており、焼成は不十分である。

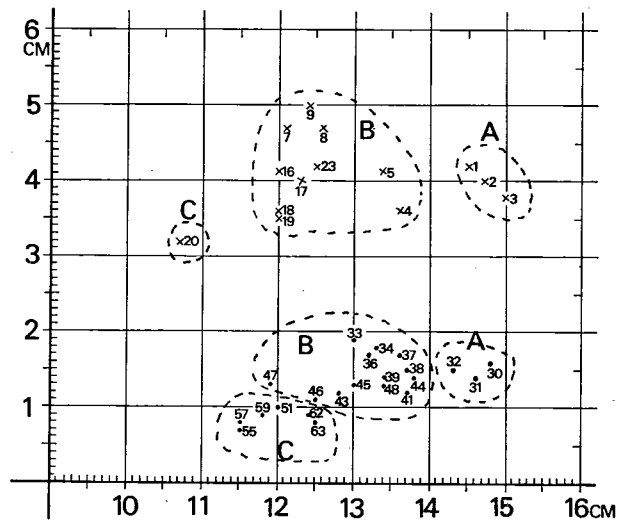
### 小結

山の前2号墳からは須恵器では、杯、埴、提瓶、高杯、平瓶、甕、壺が出土しており、総計95個体以上を数える。土師器では、杯、埴、高杯、盃、その他が出土しており、25個体以上を数える。須恵器では、杯の蓋をⅠ類からⅣ類に分類し、Ⅰ類は、天井部と体部の境は肩が張って段がつき、口縁部内面に段を有するもので、第ⅢA様式に属するものであろう。なお、Fig.62—1は、同30とセットであり、杯の身Ⅰ類との組合わせを考える。Ⅱ類はⅠ類より小形となり、口縁部内面に段を有するが、肩は張らないa類と、天井部が丸く、器高の高いb類、口縁部が肥厚するc類とに細分され、第ⅢB様式に属するものと思われる。Ⅲ類は口径に大小があり、第Ⅳ様式に属するものであろうか。Ⅳ類は蓋にかえりのつくもので、a類はつまみが見つからないため、第Ⅳ様式に、b類はつまみがつき、Fig.62—29とのセットであるため第ⅢB様式に属するものと考えた。

杯の身はⅠ類からⅣ類までに分類した。Ⅰ類は、杯の蓋Ⅰ類とセットであり、第ⅢA様式に属するものであろう。Ⅱ類はたちあがりの形態で、a～dまでわけた。c類はたちあがり端部を斜めに切る癖をもつ。いずれも第ⅢB様式に属するものであろう。Ⅲ類は第Ⅳ様式に属するものと思われ、たちあがりは短くなり、口径も小さくなってくる。Ⅳ類は身に蓋受けのつかないもので、Fig.62の28とはセットであり、第ⅢB様式に属する。Fig.64の70の提瓶と71の高杯は、石室内の床面より出土しており、いずれも第ⅢB様式に属する。Fig.63—64の台付皿は、口頸部が極端に小さくなってくる。これは第Ⅳ様式に属するものと思われる。

以上のように、出土土器から見 ていくと、ⅢA様式、ⅢB様式、Ⅳ様式に属すると思われる土器の出土をみていることから本墳は、少なくとも3回以上埋葬が行なわれていることがわかり、その被葬年代は、第1回目を6世紀中葉に求め、6世紀終末にまで及んだものと推定される。

なお、出土土器の中には、塚ノ谷4号窯で焼成されたと思われるものがあり、その供給先の一つとして、塚ノ谷4号窯を指摘する事



Tab. 10 山の前2号墳須恵器計測表

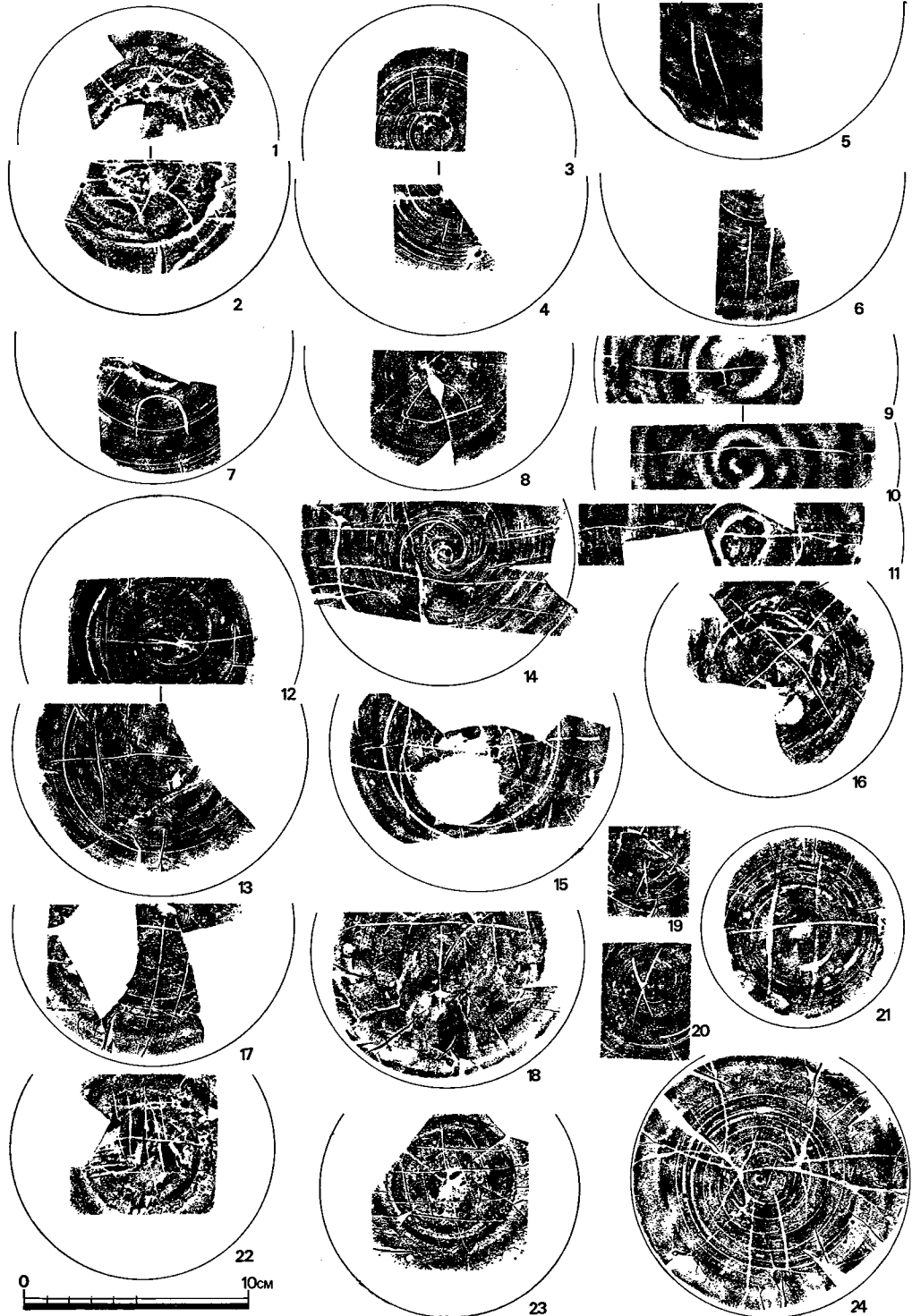


Fig. 66 山の前2号墳須恵器ヘラ記号拓影(縮尺 1/3)

ができる。

#### Tab.10の説明

Tab.10は須恵器杯の蓋と身の計測値を表で表わしたものである。

×印は蓋であり、番号は実測図の番号を示す。この場合、縦軸は器高を、横軸は口径を表わす。表の如くに3つのグループに分類できる。Aグループは口径14.5cm～15cm、器高は3.8cm～4.2cmの間のものであり、第ⅢA様式に比定される。Bグループは口径12cm～13.6cm、器高3.5cm～4.7cmの間のものであり、第ⅢB様式に比定される。Cグループは口径10.7cm、器高3.2cmのもので、第Ⅳ様式に比定される。第ⅢA様式→第ⅢB様式→第Ⅳ様式への移行は、口径の変化、即ち小形化の現象である。

つぎに・印は杯の身であり、縦軸はたちあがり、横軸は最大径を表わす。これもA、B、Cの3グループに分類できる。Aグループは最大径14.3cm～14.8cm、たちあがりは1.4cm～1.6cmの間のものであり、第ⅢA様式に比定される。Bグループは、最大径12.5cm～13.8cm、たちあがりは1.1cm～1.9cmの間のものであり、第ⅢB様式に比定される。Cグループは11.5cm～12.5cm、たちあがりは0.7cm～1cmの間であり、第Ⅳ様式に比定できる。第ⅢA様式→第ⅢB様式→第Ⅳ様式への移行は、小型化の現象である。(川述昭人)

### 土師器

#### 杯蓋

I類 (Fig.67—84) 天井部と体部の境に沈線が入る。口縁部はやや外湾し、端部にかけて若干、内湾する。口縁端部は丸くつくられる。内面の体部と天井部の境には甘い稜線が入る。口径12.2cm、復元高4.4cmを測る。色調は赤褐色を呈する。85とセットになるものと思われる。

II a類 (Fig.67—86・88・90) 器壁はうすでづくりであり、天井部と体部の境はわずかに張る。器形は丸味を帯びる。口縁部は、ほぼ直線的のび、口縁端部は丸くおさめている。86は外面に円塗りしている。87、89、91とそれぞれセットになる。口径14.2cm～14.8cm、器高4.7cm～5cmを測り、ほぼ同大である。色調はいずれも黄褐色を呈する。

II b類 (Fig.67—92) 天井部の器壁はうすでづくりで、体部はやや太くなるが、口縁部は再び器壁をせばめ、口縁端部は丸くおさめている。口径13cm、復元高3.7cmを測り扁平になる。II a類に比して小形である。色調は黄褐色を呈しており、胎土には砂粒とともに雲母を混入している。

#### 杯身

I類 (Fig.67—85) 立ちあがりは1.5cmを測り、内面は直線的に内傾し、端部は鋭気味となる。立ちあがり外面は内湾気味となる。蓋受け部は、わずかにつく程度であり、先端はとがる。たちあがりと、内傾斜面との境は甘い稜線が入る。底部の形態は丸くなる。口径11.2cm、蓋受け部径12.4cm、器高4.5cmを測る。色調は褐色を呈する。

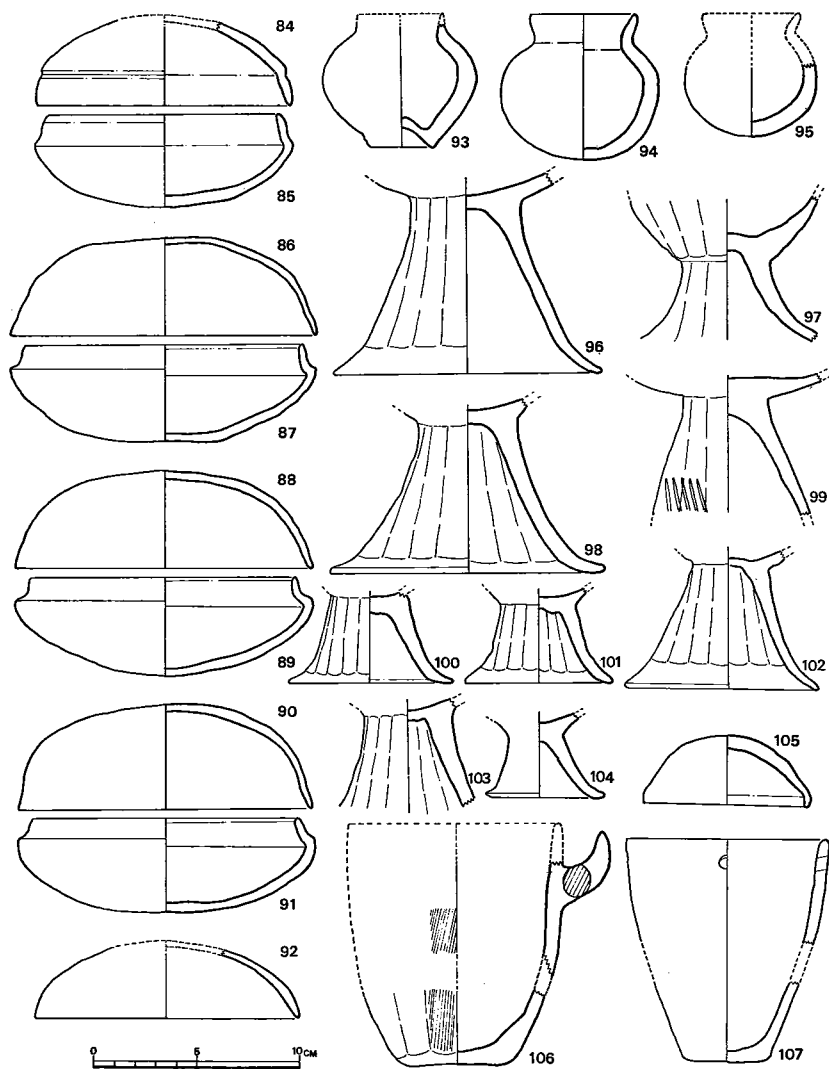


Fig. 67 山の前2号墳土師器実測図（縮尺  $\frac{1}{4}$ ）

II a 類 (Fig. 67—87・89・91) 立ちあがり端部は斜めの平坦面をもつ。立ちあがりは1.4 cm～1.5 cmほどあり、内傾斜面との境には明瞭な稜線が入る。立ちあがりの形態は内湾しつつも途中から立ってくる。蓋受け部はわずかにつく程度であり、先端には稜線が入る。底部はやや平坦な面をもつものと、鋭り気味になるもの(89)とがある。口径13 cm～13.4 cm、器高4.6 cm～4.8 cmを測る。89は内外面とも円塗りを施しているようである。色調は黄褐色を呈する。

埴

a 類 (Fig. 67—93) 口縁部を欠損する。頸部は短く、わずかに外反する。肩部と胴部との境は、わずかに張り器壁は最も厚い。底部は上げ底で1 cmほど上る。口径4 cm、器高6.3 cm

を測る。外面は $\frac{1}{3}$ ほど黒変しており、色調は褐色を呈する。

**b類** (Fig. 67—94・95) 94は器壁は一体に厚手である。頸部は外湾し、端部は丸い。頸部から胴部への移行はなめらかであり、全体に丸味をもつ。口径3.2cm, 最大部径7.7cm, 器高7cmを測る。色調は赤褐色を呈するが $\frac{1}{4}$ ほど黄変している。95は胴部から底部を残すのみであるが、94と同型のものであろう。色調は黄褐色を呈しており、底部は黒変している。

#### 高杯

**a類** (Fig. 67—96・98) 4類のうちでは大形のものである。脚部のみを残存する。脚裾に進むにつれて、ひろがりを増す。脚端は丸く、内面は平坦面をもつ。脚端外面には稜線が入る。内外面とも篋削りされている。96の脚内面は磨滅が著しく不明であるが、おそらく篋削りされていたものと思われる。脚端部径は13cmを測る。外面はみな丹塗りしている。色調は赤褐色を呈しており、胎土には多量の砂粒を含む。

**b類** (Fig. 67—97・99・102・103) 脚の形態はa類をやや小さくしたものである。99のように内湾気味のものもある。器面の磨滅によって、内面に篋削りの認められないのは97と99であり、その他は、内外面とも篋削りされている。色調は褐色ないしは、黄褐色を呈する。

**c類** (Fig. 67—100・101) b類を更に小さくした形態である。100は外面にのみ篋削りを認め、101は内外面とも篋削りしている。脚端部径8cmである。色調は褐色を呈する。

**d類** (Fig. 67—104) 最も小形である。脚端部はわずかに上り、この部分補修が行なわれたみたいに土器に色調の変化がみられる。篋削りは認められない。脚端部径4.8cmを測る。色調は黄褐色を呈する。

**用途不明蓋** (Fig. 67—105) 口径8cm, 器高3.3cmを測り、天井部は丸い形態である。口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。天井部との境には不明瞭な稜線が入る。色調は赤褐色を呈しており、胎土には多くの砂粒を含む。

**盃** (Fig. 67—106) 復元径10.5cm, 復元器高11.5cmを測る。把手は片方のみつくものと思える。底部は5cmほど平坦面をもつ。外面は篋削りし、刷毛目が入る。底部から外湾気味に胴部へと続き、そこからは直立気味になる。色調は赤褐色を呈しており胎土には多数の砂粒を含む。

**不明土器** (Fig. 67—107) 底部は平坦な面をもち、外湾気味に口縁部へ続く。口縁端はややとがる。口縁部水平面より7mm下った所に直径7mmの円孔が一つ入る。口径9.6cm, 復元器高10.7cmを測る。胎土には雲母片を含み、色調は褐色を呈する。

#### 武器

**鉄小刀** (Fig. 68—25) 全長は35.7cmあり、刃渡り26.7cm, 茎9cmを測る。目釘孔は、茎底部寄りに1カ所ある。刀身は、先細り気味であり、最大刃幅は3.5cm程である。

**鉄鏃** (Fig. 68—1~24) 鏃の形態により6分類できる。

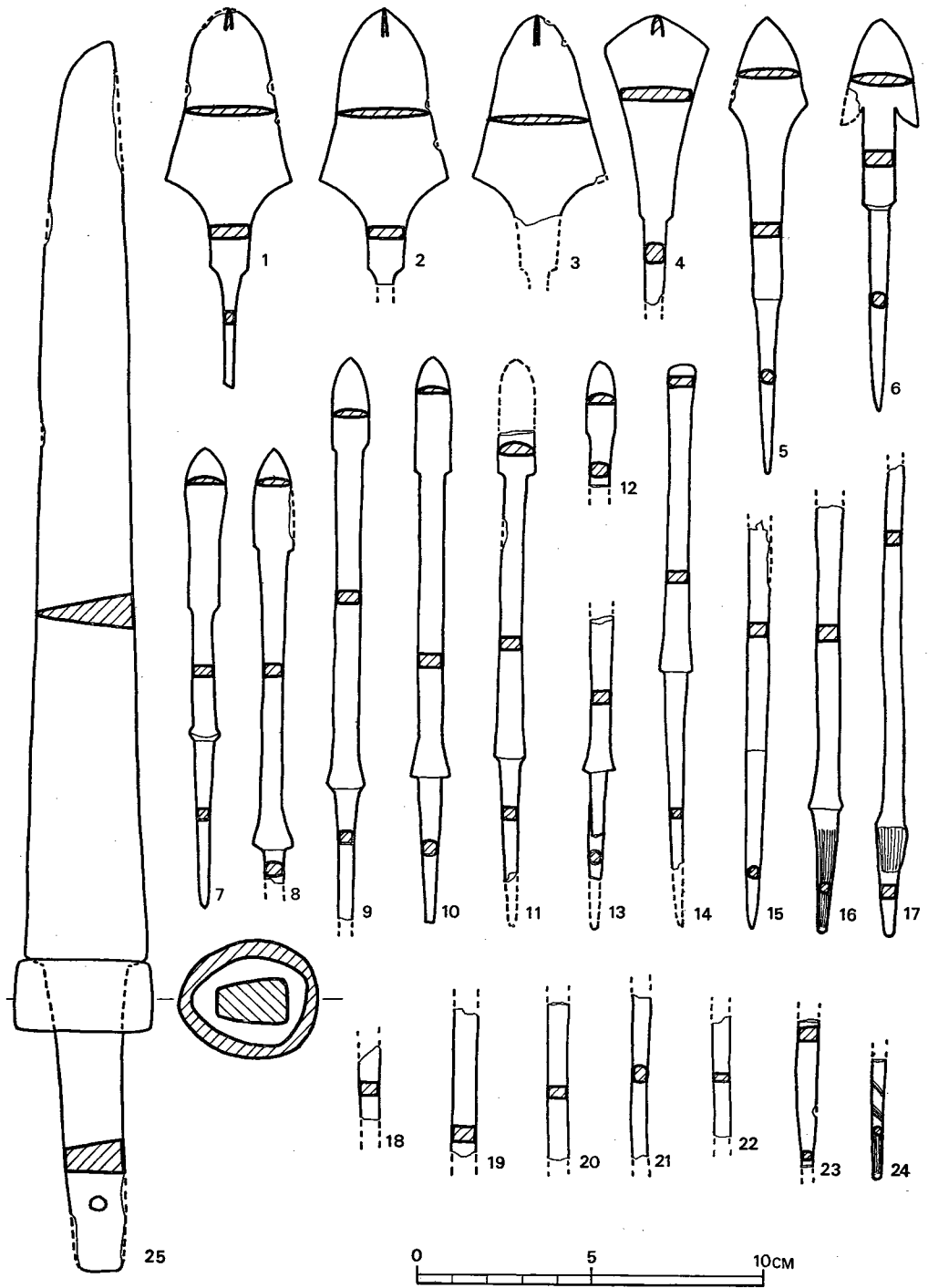


Fig. 68 山の前2号墳武器実測図 (縮尺 1/2)



① (Fig. 68—1～3) 全長は11cm程あり、鋒の長さは約7.5cm、茎は約3.5cmである。鋒の最大幅は3.5cmと広い。鋒は途中より大きく内彎する。鋒断面は両刃形を、茎断面は方形を呈する。

② (Fig. 68—4) ばち形とでも言おうか。鋒の先端部はとがるが、両側面はとがらず、断面は長方形を呈する。茎は下方を欠損しているため、全長は明らかでない。茎断面は隅丸方形を呈している。

③ (Fig. 68—5) 全長13.3cmを測る完形品である。鋒断面は両丸形を呈している。鋒と茎の境は、わずかに段がついて区別される。茎断面は円形を呈する。

④ (Fig. 68—6) 腸袂式であり、全長11.3cmを測る。鋒断面は両丸形であり、茎との境は大きく段がつく。茎は5.8cmと全長の半分程あり、断面は円形を呈する。

⑤ a (Fig. 68—7) 柳葉式である。鋒は4.5cmを測り、鋒断面は半円形を呈する。棒状部と茎の境はふくらんで区別される。茎断面は方形を呈する。全長は13.3cmを測る完形品である。

⑤ b (Fig. 68—10・11) 柳葉式である。5 a より鋒が短い。鋒と棒状部の境は直角につくられている。10, 11は棒状部、茎の断面は長方形を呈するが、10の茎のみ隅丸長方形である。鋒断面は半円形である。10は全長16.4cmを測る。

⑤ c (Fig. 68—8・9) 柳葉式である。5 b より更に鋒が短い。鋒断面は両丸形であり、棒状部、茎はいずれも断面は長方形である。全長は17cm程度である。

⑤ d (Fig. 68—12) 柳葉式である。鋒部のみ残存する。鋒断面は半円形を呈する。

⑥ (Fig. 68—14) のみ頭式である。棒状部中央では最も幅をせばめ、茎との境付近は、最も幅を広める。断面は、鋒、棒状部、茎とも長方形を呈する。

鉄刀子 (Fig. 69—1～8) 8本出土しており、うち3本が完形品である。1は最も短く、全長9cm程である。茎は3.3cm程であり、木質部の付着をみる。刃幅は1.1cmと細味である。4は茎と刃部の境付近が最も幅広く1.9cmを測る。茎の断面形は、4のみ隅丸方形を呈するが、他は全て長方形である。7は全長15cmを測り、細味である。茎には木質部が一部付着している。8は全長19cmを測る。背は直であり、茎との境は直角をなす。茎には糸状の巻き跡が一部残存する。

### 馬具

鉸具 (Fig. 69—9・10) 9は長さ7.8cm、幅4.3cm、10は長さ10.1cm、幅4.8cm、湾曲部幅3.6cmを測る。幅の数値からもわかるように中央部は大きく内湾した形態である。

轡 (Fig. 69—11・Fig. 70) Fig. 70は、銜は棒状の鉄環を二つ、つないだもので、長さ20cm程あり、引手も同じ棒状の鉄環を使用しており、これの長さは18.2cmを測る。鏡板の鑲は方形に近いような楕円形で、長径9.1cmを測り、断面は隅丸方形を呈する。一縁に長さ3.5cmの立間がつく。

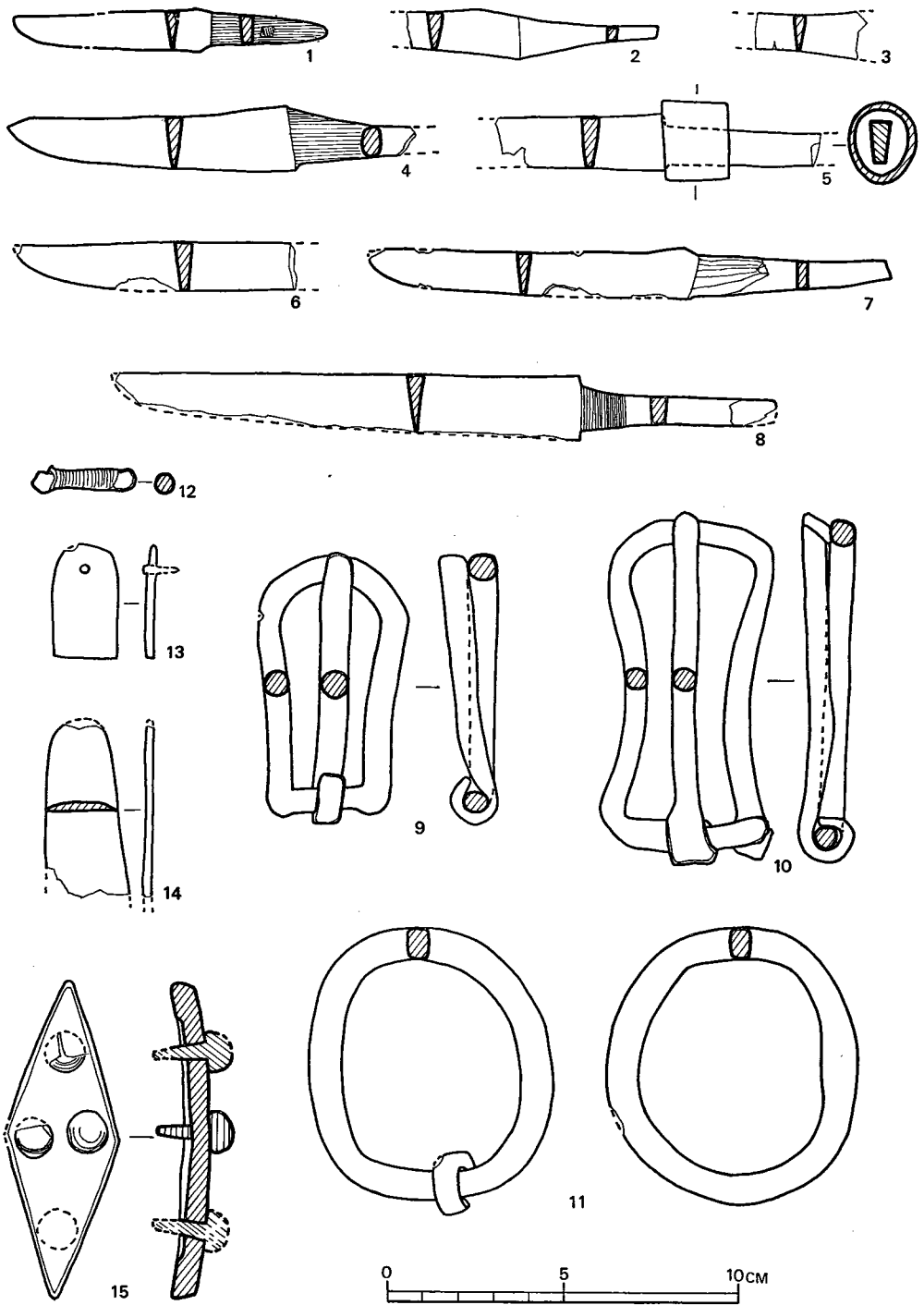


Fig. 69 山の前2号墳馬具その他実測図 (縮尺 1/2)

Fig. 69—11は鏡板のみで、長径 7.8cmを測り、不正楕円形を呈する。

#### 帯先金具

(Fig. 69—13)

長さ3.3cm、幅1.9cmのもので、一端は円形で、他端は直線である。

#### 用途不明鉄器

(Fig. 69—12・14・

15) 12は長さ3cmの棒状のもので両端は丸い。この棒状部には、長軸に対して直角方向に木目が残存している。両端の丸い形態のものは棒状部に打ちつけたものようである。

14は帯先金具かも知れない。

15は留金具である

うが、その所在がはっきり

しない。一辺が4.8cmの菱形で、留鍼は4個である。断面はやや厚手であり、少し内湾する。

#### 装身具

耳環 (Fig. 71—1~17)

金環 (Fig. 71—6・9・10・13・14・17) 9と10, 13と14, は対である。17は特に細味である。

銀環 (Fig. 71—1~4・7・8・11・12・15・16) 1と2, 3と4, 7と8, 11と12, 15と16は対である。

鉄環 (Fig. 71—5) 1個だけの出土である。

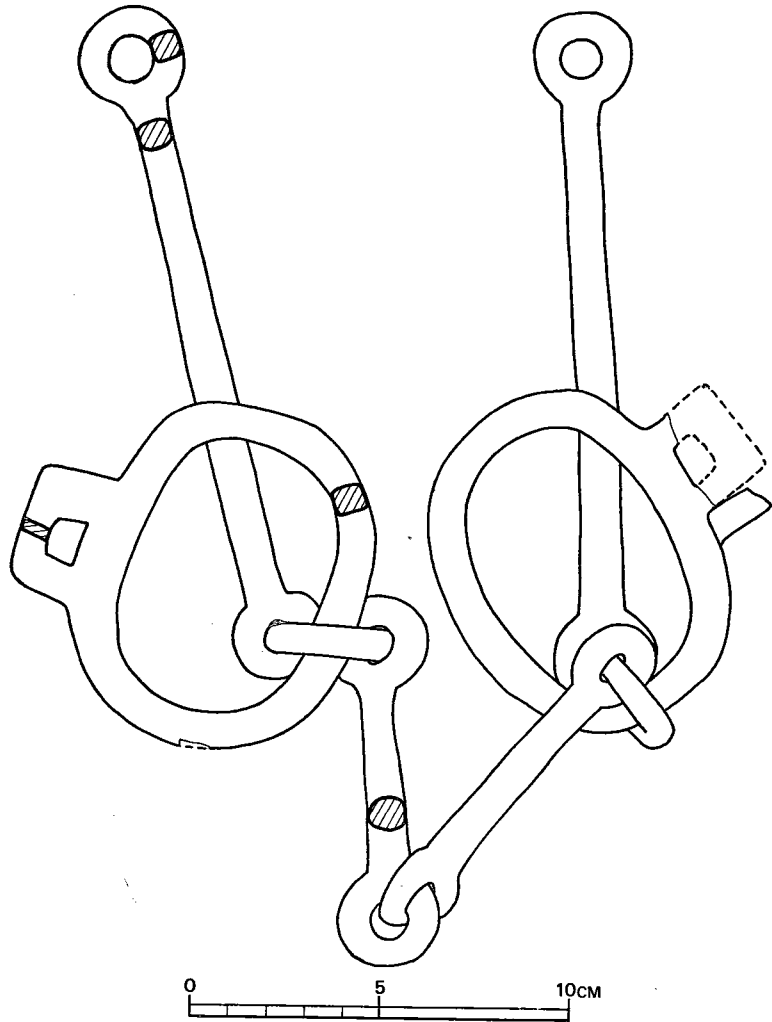


Fig. 70 山の前2号墳馬具実測図(縮尺 1/2)

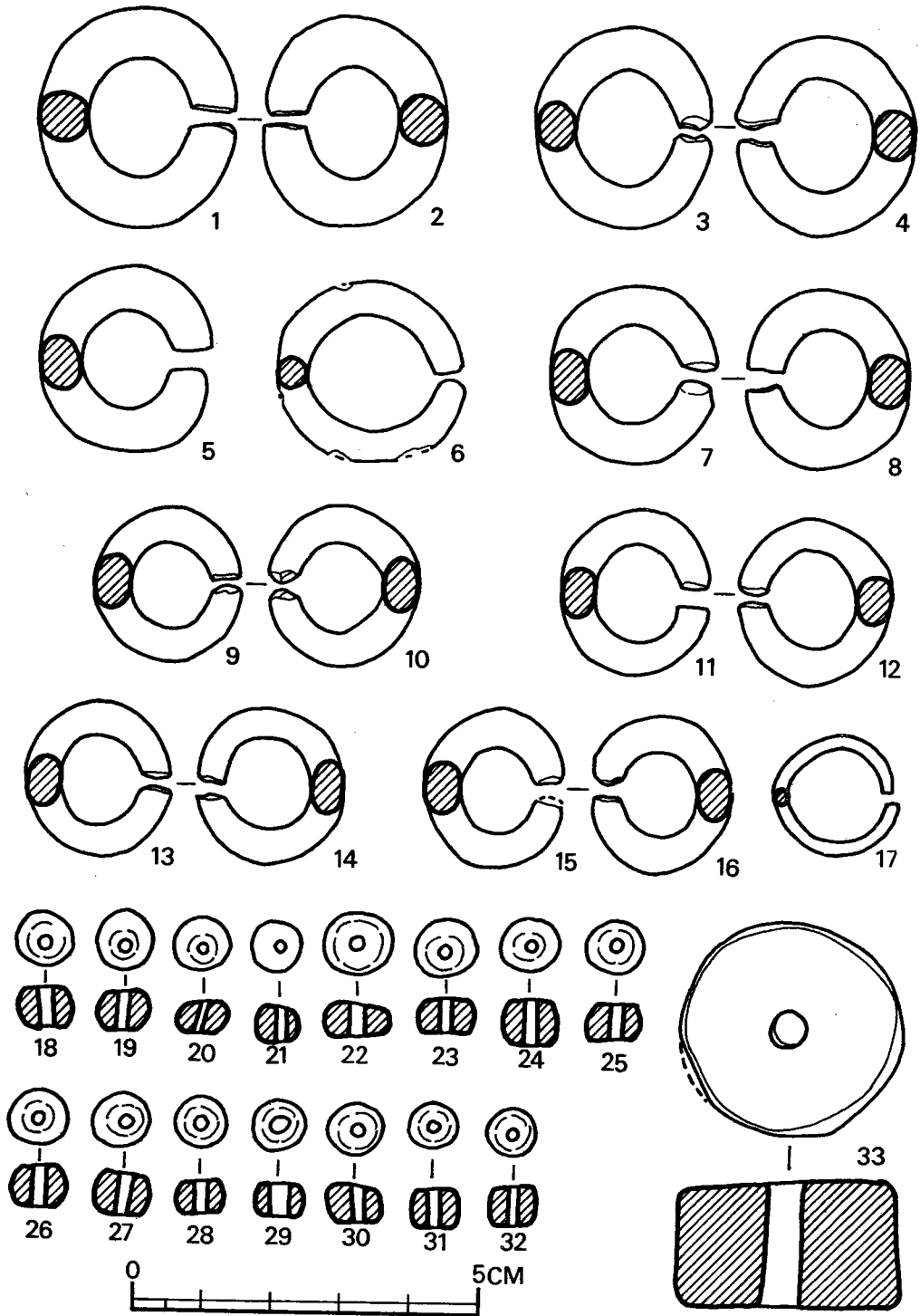


Fig. 71 山の前2号墳装身具実測図 (実大)

番号	種類	長径	短径	断面の形態	断面の長径	断面の短径
1	銀環	3.25	2.83	円形	0.74	0.7
2	"	3.1	2.74	"	0.77	0.7
3	"	2.93	2.65	"	0.73	0.6
4	"	2.95	2.6	"	0.72	0.65
5	鉄環	2.73	2.45	楕円形	0.75	0.61
6	金環	2.72	2.65	円形	0.45	0.41
7	銀環	2.65	2.5	楕円形	0.77	0.6
8	"	2.65	2.4	"	0.78	0.6
9	金銀	2.3	2.15	"	0.8	0.5
10	"	2.35	2.19	"	0.81	0.5
11	銀環	2.43	2.21	"	0.70	0.51
12	"	2.4	2.22	"	0.73	0.51
13	金環	2.2	2.1	"	0.7	0.5
14	"	2.27	2.15	"	0.75	0.5
15	銀環	2.32	2.05	"	0.78	0.53
16	"	2.32	2.08	"	0.8	0.53
17	金環	1.8	1.75	円形	0.2	0.2

Tab. 11 山の前2号墳耳環計測表(単位はcm)

小玉 (Fig. 71-18~32) 総数15個余りで、材質により、粘土玉とガラス玉に分類できる。

土玉 (Fig. 71-18~21) 4個出土しており、径7mm~9mm、厚さ5mm~6mm程度である。孔は斜めに穿たれたものが1個体あるが、他は垂直である。色は暗褐色ないし、暗茶褐色を呈する。

ガラス玉 (Fig. 71-19~32) 大きさによって3群に分けられる。まず、径が10mm、厚さが5mmのもの1個、径が8mm、厚さが5mm~7mm程度のもの8個、それに径が6mm、厚さが6mmのもの2個である。色はすべて紺色である。

紡錘車 (Fig. 71-33) 径は3.2cm、厚さは1.9cmの土製品である。(川述昭人)

#### (4) 小結

山の前2号墳が1号墳に従属的な立場をとっていたことは立地関係からも明らかである。同一丘陵上にある5基の古墳が一支群を形成している。この中では1号墳が圧倒的に大きい。1号墳と2号墳の築造はほぼ同時期と考えることができるので、他は未調査であるが、同時期の築造と考える。すなわち5基が1単位となっている。群集墳が被葬者を家父長制的世帯共同体

①の家父長制的世帯共同体の家父長とその家族と考えるならば、この一支群を生産単位と考えることができる。

石室の構造は前述した通りである。通有の羨道を持たないが、墓道が続いているところから機能的には横穴式石室と同じである。形式的にも横穴式石室に入れてよいと思う。ただ、掘り方が玄室を築造することのみを対象として掘られたことは興味深い。ということは羨道の意義がここでは考えられなかったことを示すのだが、同様に1号墳でも羨道らしきものを認めることができない。したがって羨道の位置づけに関する問題だが、すでに6世紀後半では複数埋葬は普遍的なものであり、玄室と羨道の区別がなくなっていたことによる。羨道部への埋葬も当然のこととして行なわれている。とすれば1号墳にみられる複室構造も複数埋葬を前提とした埋納場所の拡大と見れないこともない。

②特異な石室構造を示す本古墳に類似したものをさがすと、妙見17号墳が似ている。規模は長さ約2.50m、幅1.80mで本石室よりは若干大きい。が、しかし袖石の在り方も近い。ただ明確な羨道をもつところは大きな違いである。

遺物は玄室内と墓道前庭部から出土している。耳環、鉄製品、土師器、須恵器がある。須恵器では玄室内から出土した高杯が八女市塚谷窯跡群<sup>⑧</sup>でⅢB期に比定されているものである。また前庭部出土の杯は乗場古墳出土の立ち上がり<sup>④</sup>が薄く、高い杯身に類似している。しかし全体に形がくずれているし、シャープさもないところから、乗場古墳よりも一形式降る時期と考えられる。したがってこの古墳の築造の時期はⅢA期、すなわち6世紀中葉と考える。

胴張りをもつ石室の分布をみると福岡県内では朝倉、筑後、浮羽地方、熊本県では北部地方を中心として、熊本市まで延びている。一部は筑後川を遡流して大分県日田地方にまで及んでいる。また九州から遠く離れた関東地方においても同様の石室構造をもつものが数多く見られ、その数ではむしろ九州を上まわっている。<sup>⑤</sup>

通有の横穴式石室は大石を用いて長方形プランの玄室に細長い羨道がつづく形態をとり、畿内を中心にして汎全国的な分布をみる。(とはいっても地域ごとの特色をもっているのは当然であり、そこに地域ごとの問題点を残している。) このような横穴式石室を内部構造にもつ古墳の北部九州での在り方は特異な現象を示している。装飾古墳の発生、展開、複室構造をもつ横穴式石室墳の形成、初期における方形プランの玄室をもつ横穴式石室の構築、そしてここで問題にする胴張りのある石室と、壁を構築する際の追持式の構築法等を挙げることができる。これらの事象がどのような条件の下に形成されたものであるかが問題となる。

大陸の影響を強く受けていることはしばしば指摘されているが、それに対処した北部九州地域の主体的条件の解明が急務となってくる。当時の政治的中枢からは離れているにせよ、大陸、半島への門戸として重要な意味を持っていた。このことが、後に大宰府の設置の前提条件となったのである。とくに那津の官家の設置は軍事基地としての性格が強い。そしてこの条件

が一方では磐井のような独自性をもった国造を生み出してきたのである。そうはいっても部民所有形態をみると、王家、中央豪族に集中されており、地方豪族の所有がみられないことは、<sup>⑥</sup>地方権力構造の再検討と同時に国造磐井の権力機構の検討も必要であろう。

装飾古墳が北部九州豪族層の自己主張のあらわれであるとするならば、そこには大和王権に対する精一杯の反抗を見出すことができる。磐井の反乱もこのような土壌の下に起こったものであるし、後期古墳にあらわれる諸現象も同様な観点から見なければならぬ。装飾古墳の分布は筑後川流域、菊池川流域を中心としているが、複室の横穴式石室、胴張りのある横穴式石室もほぼ同様の分布を示し、三者は応々にして一致しているばあいが多い。この中では胴張りのある横穴式石室が一番分布範囲が狭く、より地方的といえることができる。

前述したような特徴をもった古墳は如何なる条件の下で作り出されたものであろうか。朝鮮半島からの專業者集団のわが国への渡来は『日本書紀』応神天皇の条にみられるごとく部民として大和王権のもとに組織されていた。しかし6世紀の前半を境として半島における勢力は次第に下降の一步をたどり、新技術の導入も思うがままには進行していかなくなってきた。帰化系集団の渡来は必然的に変わった風俗、習慣をわが国へもたらす。その門戸となったのは、いうまでもなく北部九州の地域である。

胴張りをもつ横穴式石室の初期のものとしては熊本県千金甲3号墳、福岡県日の岡古墳を挙げることができる。

千金甲3号墳<sup>⑧</sup>は熊本市松尾町に所在する径15m、高さ約3mの円墳である。内部主体は横穴式石室で、玄室は奥行3.6m、幅3mある。石室は安山岩の割石を平積みにした隅丸の長方形を呈す。奥壁には自然石を組みたてた石屋形をもつ。この古墳は壁画系の古墳で、同心円文、<sup>⑨</sup>靱、弓、大刀が描かれているが、画材も日の岡古墳に近く、石屋形をもつところから、<sup>⑩</sup>剣塚古墳との関連も考えられる。

日の岡古墳<sup>⑪</sup>は筑後川流域の福岡県浮羽郡浮羽町若宮八幡宮境内に位置し、傍には甲冑類を多数出土したことで有名な後方後円墳の月の岡古墳がある。日の岡古墳は前方後円墳の後円部にくびれ部に向って開口する横穴式石室を内部主体にもつ。横穴式石室は羨道部が短く、玄室はいわゆる三味線胴張りといわれる構造である。胴の張り具合は大きなカーブを示し、この点では1、2号墳に近いといえる。構築の方法は腰石に幾分大きな石を用い、上部を割石状の石で平積みになっている。石室の内面には円文が玄室内全て、羨道部には円文と三角文が赤、緑、白でほどこされており、間に靱が描かれている。いわゆる壁画系古墳といわれるものの早い例といえることができる。

初期のものとしては、ほかに玉名市の大坊古墳<sup>⑫</sup>がある。複室構造の横穴式石室は安山岩の割石を平積みになっている。後室は隅丸のほぼ正方形プランで、奥壁にそって石屋形をもつ。6世紀前半に比定されており、複室構造をもつ横穴式石室では初期のものである。

胴張りをもち、複室構造を呈する壁画系古墳としては塚花塚古墳<sup>⑬</sup>、珍敷塚古墳<sup>⑭</sup>、原古墳<sup>⑮</sup>、古畑古墳<sup>⑯</sup>、寺徳古墳<sup>⑰</sup>、大田古墳<sup>⑱</sup>、チブサン古墳等々がある。

以上のようなことから次のことが考えられる。

装飾古墳にしても、胴張りのある横穴式石室、複室をもつ横穴式石室にしても、北部九州の海岸近くには分布しない。むしろ内陸部に分布している。装飾古墳の出現が筑後石人山古墳の横口式家形石棺に浮彫りされた直弧文、円文にあることに異論<sup>⑲</sup>はない。また複室をもつ横穴式石室の初現は須恵器第Ⅱ様式の時期とみられ、肥後の大坊古墳が今のところ初見<sup>⑳</sup>である。このようにみえてくると、その初現は北部九州海岸地域ではなく、内陸部にあったといわざるを得ない。

装飾古墳、複室構造が、百済、任那地方から将来されたものであるということには異論のないところである。けれども百済、任那の技術者達の力によって九州に折出されたものであることに問題がある。部民は石母田正のいう「王民」化<sup>㉑</sup>であって、王、王族や豪族が独自に私有するものではなく、たとえ豪族が所有しても、それは中央の大族であって、地方豪族の所有は極めて少なかった。とすれば北部九州の豪族の中にあっても、帰化系の部民は少なかったといわざるを得ない。北部九州に渡来した技術者集団もその大部分は中央において部民化されていった。

このことを前提とすれば、装飾古墳、複室構造にしても百済、任那の技術者が直接関係したものであると言うことには躊躇する。その要因は(一)は初期のものが内陸部にあること、(二)は装飾古墳の画材に類似性が認められないこと、である。それよりも次のように考える方が妥当ではなかろうか。

確かに朝鮮半島からの影響の下につくられたのであるが、その実際の推進力は北部九州内部の豪族層の事情に求められる。知識を与えたのは百済、任那からの技術者達であったけれども、彼らはほとんど関与しなかった。それを消化吸収したのは北部九州の人達である。海岸地域は大和王権との関係が非常に強固で、畿内的様相は九州では一番強かった。だからこその地域では発展しなかったのである。逆に海岸から離れた地域で盛んにつくられた。すなわち知識のみを知った内陸部の豪族層が、彼らの意識の表現として独自につくりだしたものである。半島における新羅の台頭は、わが国の百済に対する政治的立場を微妙なものとした。一方豪族層の内においても微妙な対立<sup>㉒</sup>をみるようになる。国内でも継体天皇擁立の裏にひそむ豪族間の抗争は継体、欽明朝の内乱といわれる如く混乱した社会をつくりだした。この混乱期に地方豪族のとり手は自己勢力の伸長をめざせばおのずから明白である。したがってその分布が特異であり、装飾古墳の画材にも独自性があったと考える。なかには竹原古墳の壁画のように朝鮮と類似性を求めうるものもでてくるのである。

石室の胴張りについても同様のことが考えられるが、胴張りの場合には力学的利点も考慮し



なければならない。すなわち1, 2号墳ともに割石の平積みであるが、裏ごめもなく、簡単なつくりである。が、しかし横穴式石室としては充分な構造をつくりだしていることは、積極的に技術の導入をなしたことに他ならない。ただその背景には前述したような社会情勢があったことを見のがしてはならない。このようなことを簡単なことばでいえば、自己主張ともいえる<sup>24</sup> わけで、森貞次郎氏のいう「北部九州の豪族が、大和政権にたいして示した自己主張」も容認される。

注 ① 近藤義郎編『佐良山古墳群の研究』1952

② 朝倉高等学校史学部『埋れていた朝倉文化』1969

③ 小田富士雄・石松好雄・宮小路賀宏・松本肇他『塚ノ谷窯跡群』1969

④ 小林行雄編『装飾古墳』

⑤ 金井塚良一は柏崎古墳群の胴張りをもつ石室の被葬者を帰化系氏族吉志氏に求めているが、これは九州における同様の例を考えた時に興味ある提起である。金井塚良一『柏崎古墳群』

⑥ 狩野久「部民制」『講座日本史』1, 1970

⑦ 森貞次郎「装飾古墳の発生まで」『古代の日本』3, 1970

⑧ 小林行雄編『前掲書』

⑨ 川上市太郎「筑前王塚古墳」『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書』第11輯, 1935

梅原末治・小林行雄「筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳」『京都帝国大学文科大学考古学 研究報告』15冊, 1940

⑩ 貝原益軒『筑前続風土記』

⑪ 小林行雄編『前掲書』

⑫ 田添夏喜「玉名市玉名大坊古墳追加資料」(プリント), 1963

浜田耕作, 梅原末治「肥後に於ける装飾ある古墳及横穴」『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』1冊, 1917

⑬~⑰ 小林行雄編『前掲書』

⑱ 小林行雄編『前掲書』

⑳ 小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」『史淵』第100輯, 1968

㉑ 石母田正「日本古代の身分秩序」『古代史講座』7, 1963

㉒ 林屋辰三郎「継体・欽明朝内乱の史的分所」『立命館文学』88, 1952

㉓ 森貞次郎「前掲書」112ページ

(佐田 茂)

#### 4 山の前3号墳

##### (1) 墳丘および外部施設

伐採直後に行なった墳丘測量時には、東西径11.5m, 南北径13m高さ1.5m強(北側)の規模を有する円墳と思われた(Fig.73)。北側が張り出すが、これは墳頂部に陥没が認められる

ことから、盗掘時に土砂がこの方向に捨てられたことによるものと判断していた。つまり、我々はこれを通常の円墳と認識していたのであるが、調査が進展するにつれ、本墳は小石室を内部主体とする小円墳の南面側にこれに覆いかぶせるようにしてより大きな円墳を営んだものすなわち本墳は大・小2墳が「8」字形に複合したものであることが判明した。

築造順序に従い小古墳から述べると、小石室周囲に長径3.7m、短径3.2m強の長円形プランの列石群が羨道両側壁先端にとりつく形でめぐり、これが小石室に伴なう墳丘の範囲を画している。墳丘の構築は石室のそれに平行するが、列石は地山の高い南西側では墓塚の外側を一段掘りこんで据えており、対する地山の低い北東側では列石側から2.2m弱（南西端から5.5m）まで盛土してレベルを揃えた後に置いている。列石線は左半分は切れ目なく遺存する。右半分は部分的調査にとどまるが、ボーリングによっても部分的にしか遺存していない。左半での列石の積み方は一段のものが多く、2～3段重ねられる場合でも隣接する石と高さを揃える程度のものであり大石室に伴なう列石に比して低く、かつ整美なものではない。

大石室（以下石室と略す）の墳丘構築は、①盛土が小石室の墳丘にかぶせられている。②列石が小石室のそれにとりつけられている。③石室北東側の地山が石室に向かって下降し、これは小石室構築時の地山整形作業によると思われる。の3点により（付図Fig.⑨参照）小石室およびこれを覆う墳丘の構築に対して後出することは明らかである。小石室同様、墳丘構築は石室構築と平行するが、盛土に先立ち、右側（南西側）の地山が高いので、小石室列石南西端から4.8～7.9m弱の範囲を30cm前後掘り下げて整形を行ない墳丘規模の大略を決定している。従ってこの部分は墳丘完成時には周溝状を呈したと思われるが、墳丘裾全体を圍繞するものではない。盛土の範囲は石室主軸方向では8m弱。これと直交する方向では小石室列石南西端から5.6m弱。列石は、奥壁に向かって右半分では綺麗な弧を描くが、奥壁背後から小石室列石との接点に

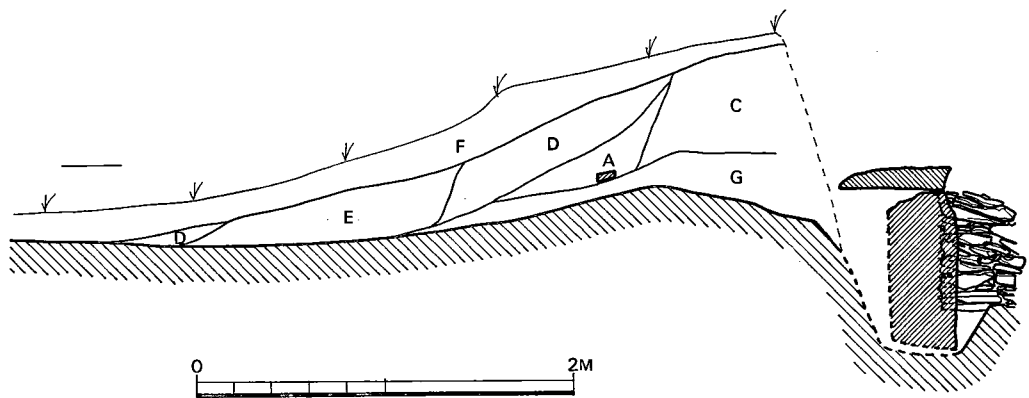


Fig. 72 山の前3号墳大石室墳丘土層図（縮尺 1/40）

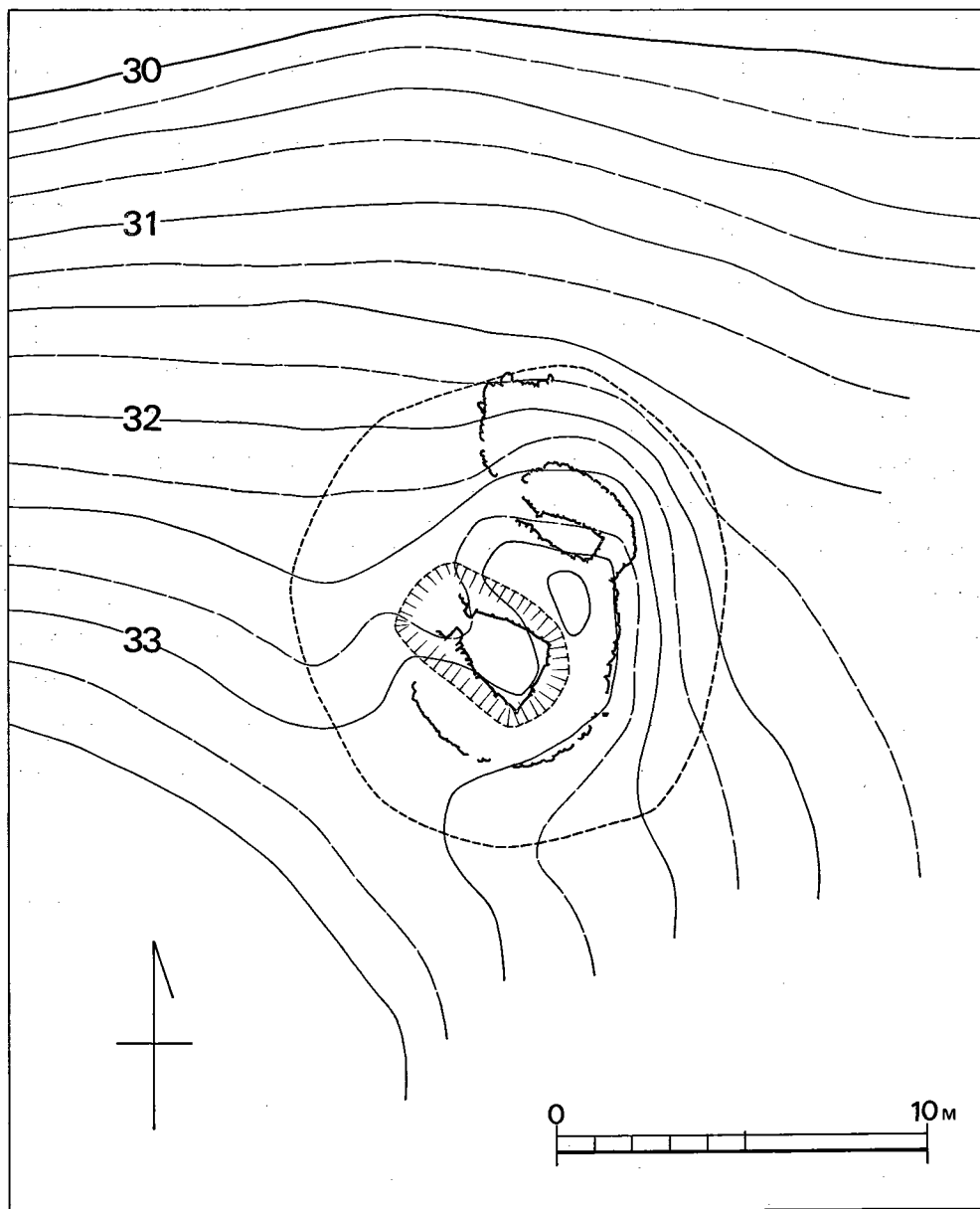


Fig. 73 山の前3号墳地形実測図（縮尺  $\frac{1}{200}$ ）

いたるまでの弧は張りが緩く直線に近くなっており、全体的にはイビツである。先端は、羨道部右側壁の調査が十分ではないので遺憾ながら不明となっているが、ボーリングの結果では列石は現存しない。当初は、小石室と同様に、羨道右側壁最先端にとりついたものであろう。列石最下段のレベルも同一ではなく南西側と奥壁背後では46cm前後の高低差がある。これは地山の高さが両者で約50cm異なり、しかも小石室列石との交点で兩列石のレベルを合わせ地山の高

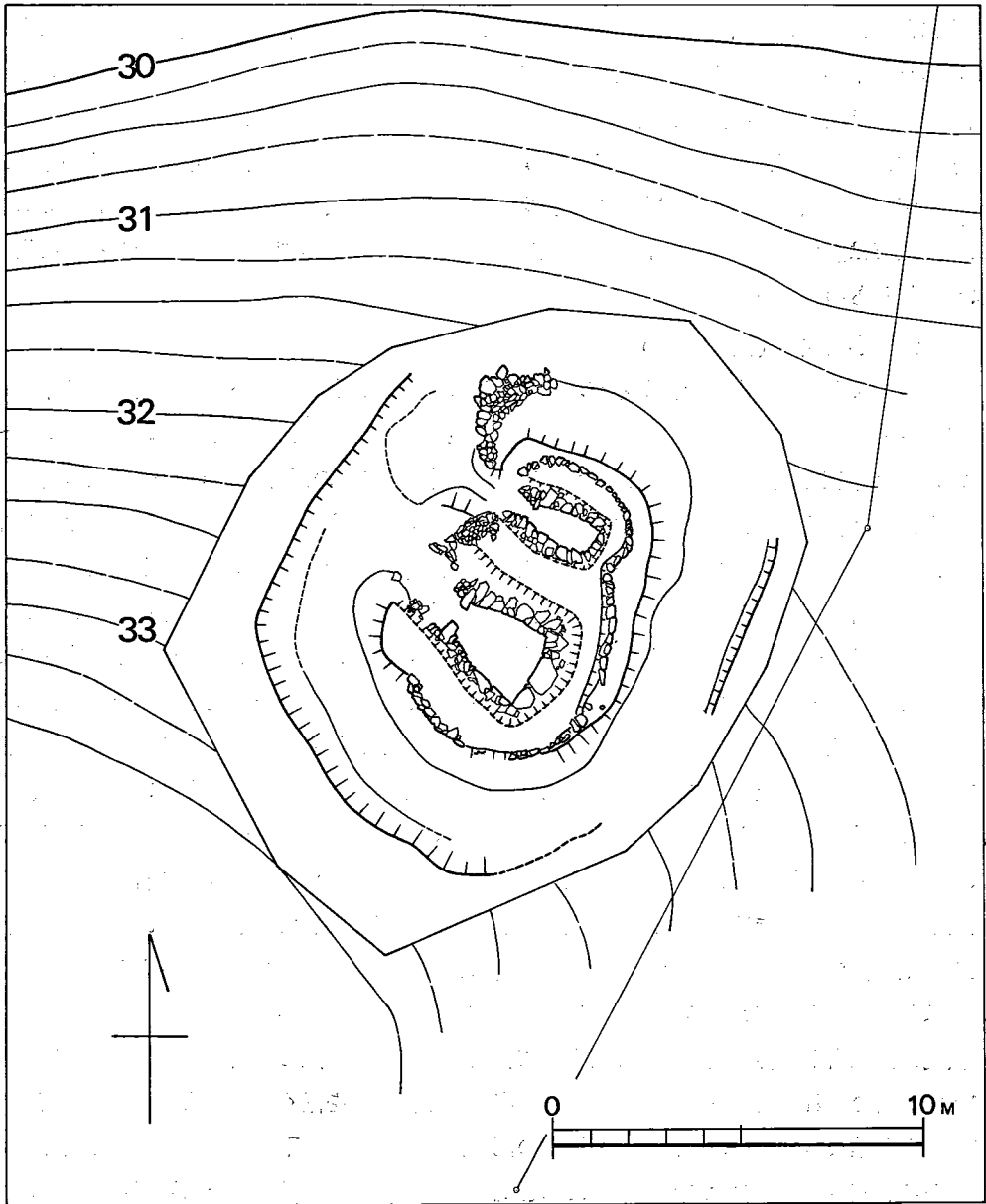


Fig. 74 山の前3号墳墳丘と石室実測図（縮尺  $\frac{1}{200}$ ）

い南西側に巡らそうとすれば、徐々に高さを回復させるしかないことによる。従って地山の低い奥壁背後では列石の外側約1 m強にまで盛土が及ぶことになる。列石は現存するのは4段程で高さも20cm前後と低い、右半では最上段各石の面が比較的良好揃っている、当初からこの程度のものと推定される。小石室羨道右側壁最先端と大石室羨道左側壁最先端とを結んで、長さ1.6m、高さ1.7m強の石垣状を呈する石積が設けられている。基底は羨道部床面より稍

高位にあり、上述の列石線の一部をなすもので、正面であるので特に高く積み上げられたものである。下半はきちんと小口積されているが、上半は稍乱雑で、上端は水平ではなく、小石室に近い方は羨道側壁の高さに合わせて低くなっている。

小石室の墓道左側、墓道左肩部から盛土裾部にかけて、長さ3m、最大巾1.2m強の不整三日月形プランを呈する割石群が存する。弧をなす部分では数石が重ねられているのに対しこれより内側では重ねられていない。これは前者の方が少しく低いので、割石上面のレベルを揃えようとしたものであろうか。

## (2) 小石室 (付図Fig.⑩)

全長2.62mと極めて小形ではあるが、主軸をN62°35'Wにとり、大略北西に開口する単室横穴式石室で、一応の胴張りを有する。墓壇は部分的にしか確認し得ていないが、地山を0.2～0.7m前後の深さに穿った巾2.3m、長さ2.7m前後(上端で)の長方形プランと見られる。

玄室長は、袖石が対称の位置にないので左壁側で1.75m、右壁側で1.84mを測る。巾は奥壁部で0.93m、奥壁から0.83mの所で1.17mと最大値を示し、袖石部では0.7mと狭まる。胴の張り見合は右壁の方がキツク対称とならず、左右とも出・入があり綺麗な弧線を描くとはいい難い。周壁は、一部を除いては片岩割石の小口積によって築かれている。奥壁最下段右側には墓壇底をさらに一段穿って長さ0.62m、高0.35m、厚さ6cmの板石が据えられ、その左側にこれと上端を揃えて高さ0.43m、巾0.27mのひとまわり小さい板石を立てている。これらの上に、2～4段、墓壇上端より稍高くなるように割石を積み、この上に厚く大きい板石を二段重ね、重心が外側へくるように巧みに配慮されている。奥壁現存高は0.88m。両側壁最下段の石は、稍長目の石が用いられており、左側では奥壁・袖石寄りの部分に大き目の石が用いられる傾向がある。右側壁では3～4段目以上に大き目の石が用いられているが、この部分から攪乱により急に内部へせり出している。側壁現存高は0.97mで、当初もこれをそう大きく超えるものではなかったと推定される。床面には、敷石が全面にわたり認められた。

玄門は、左右から各1個の石を突出させて袖石としている。左の袖石は実高0.68m、厚10～16cmで、右のそれは高0.67m、厚17cmで間の床面には仕切石を置く。この仕切石は両袖石の間にきちんと納まっていない。袖石と袖石との間は、上部で24cm、下部で33cmと極めて狭く、また見かけの高さ(仕切石から上)も28～33cmと低い。従って、この袖石直上に楯石が架構されたものとは考えにくい。

羨道は、左壁長56cm、同高30cm、右壁長65cm、同高73cmの極めて短簡な構造である。左壁と右壁とでは、石材の大きさ、積み方が異なるが両者とも玄室周壁に比較すると概して粗雑である点で共通する。天井石はいつれも現存しないが、側壁の状況より羨道部への架構は行なわれなかったものと推定される。

羨道先端から、断面U字形の浅い切り通し状の墓道が約1.5mにわたり設けられ、巾は下端

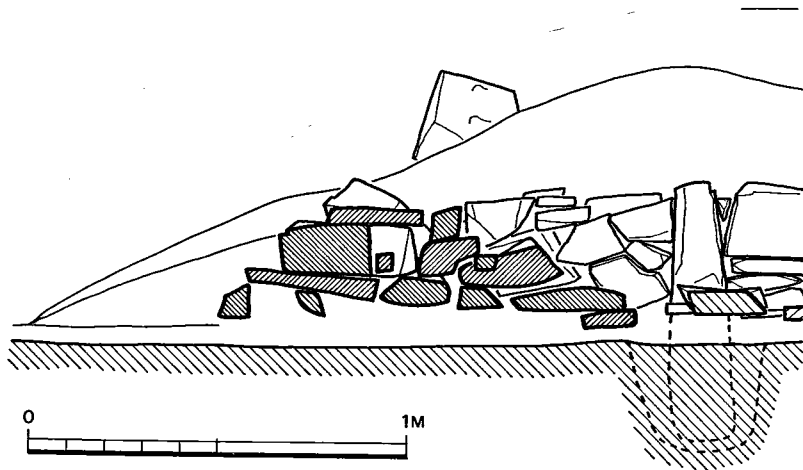


Fig. 75 山の前3号墳小石室閉塞状況実測図（縮尺 1/20）

で0.4 m前後。羨道から墓道にかけて、閉塞石と見られる長さ1.15 mにわたる4段の割石群が現存する (Fig. 75)。仕切石とこの割石群との先端とは、10~15 cm程度の間隔をおくので、当初の閉塞状況は既述した鈴カ山1号墳と同様に、まず板石を立てて袖石にもたせかけ、次に割石を以て裏込めとすると復元され、超小形の石室ではあるがかなりも念なものといえる。

### (3) 大石室 (付図Fig. ㊸)

主軸をN55°10'Wにとり、略北西に開口する単室横穴式石室で、玄室上部および羨道部は破壊されている。墓壇は一部での確認にとどまるが、玄室部では巾2.8 m (下端) あり、最も深い所で約1.1 m地山を穿っており、この墓壇底に石室の基礎をおく。

石室構築にあたっては、まず鏡石および袖石を据えつけて石室プランの大綱を決定し、両側壁および奥壁上半は片岩割石を徐々に持ち送りつつ小口積としている。玄室の長さは2.29 m。巾は奥壁部で2 m、奥壁から0.4 m強で2.03 mと僅かに広くなり、これから玄門に向うにつれて漸次巾を狭めて袖石部では0.95 mとなる。奥壁は、墓壇底をさらに一段掘りこんで長さ1.14 m、高さ0.8 m、厚さ36 cmの巨石を鏡石として立て、この両脇にこれの上端と略一致するように2~3段大き目の石を積み上げている。墓壇の長辺沿いの床面は、巾40~45 cm、深さ6~7 cm程にわたり一段掘り下げており、ここに側壁最下段の石を置く。両側壁は胴張りを有するが、その度合は僅かであり、描く弧線も不揃いかつイビツである。壁面はいずれも奥壁側から順次積み上げているが、下部は小形の石材を使用して胴張りの基礎作りをし、以上は比較的大き目の石を用いている。随所に割石小片を使用するが、力の配分が必しもうまくは行なわれていず、亀裂を生じた石材が散見される。現存最高は、左側壁奥壁部の0.74 mである。床面には、扁平割石を全面にわたって敷きつめているが、屍床・枕石等の施設は何ら認められない。

羨道部は破壊が著しく進んでおり、袖石寄の一部と、左側壁先端基底部しか現存しない。これらと列石の状況から、羨道は片岩割石小口積からなり、長さ約1.5 m、袖石寄の巾1 m内外とみられ、列石と接続する先端に向うにつれて徐々に「ハ」の字状に裾開くプランを呈したものと推定される。

#### (4) 遺物出土状態

##### 小石室 (Fig. 76)

石室は既に攪乱されていたが、清掃の結果左側壁沿いに副葬品の一部を検出し得た。まず、奥壁近くの遺体の右頭部から右肩部にかけてと思われる位置の床石直上からは、鋒を横口寄に刃部を外側に向けた短刀1口 (Fig. 78—26) が、またこれと左側壁との間の床石上からは鋒を奥壁部に向けた鉄鍔2本 (Fig. 78—24) が検出された。これらはいずれも当初の位置をそう大きくは移動していないと見られる。直刀の鋒近くの床石の間には蓋 (Fig. 76—A) が、これから約20 cm隔った左壁沿いの床石上には壺の底部片 (B) と、Aよりひとまわり大きな蓋 (Fig. 76—C) が、これよりさらに50 cm程度口寄の左壁際に埴 (Fig. 76—D) が出土した。これらはいずれも手捏の小形土器で、CとDとはセットになるが遊離しており、Dを除けばいずれも原位置を移動しており、本来は左壁沿いに置かれていたものであろう。この他石室内の堆積土中から、鉄鍔 (Fig. 78—25)、耳環 (Fig. 78—23) 各1個が出土している。

石室外では、既述の墓道左側の割石群から0.4 m程石室に寄った所に大甕 (Fig. 86—77) が1個据えつけられており、この内部にセット計6個の蓋杯・杯 (Fig. 79—7~12) が重ねられていた。

##### 大石室 (Fig. 77)

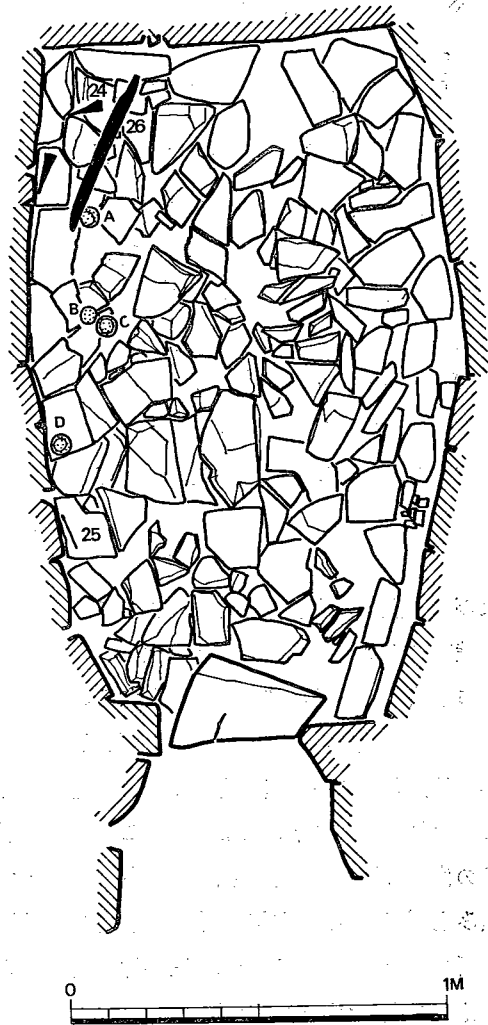


Fig. 76 山の前3号墳小石室遺物出土状況実測図 (縮尺 1/20)

石室上半を盗掘および石の抜き取りのために失っていたが、玄室清掃の結果各種金属器を検出し得た。耳環は計11個の出土をみたが、いずれもセット関係にあるものが著しく離れて出土しており、各遺体の位置の復元は困難である。

石室外からは、多くの須恵器・土師器が検出された。出土位置は羨道前面、しかも中軸線より左側就中石垣前面に集中する。石垣前面からのこれ約0.8m隔った所に、大甕(Fig. 87-78) 1個が据えつけられており、小石室におけると同様な出土状態が目される。

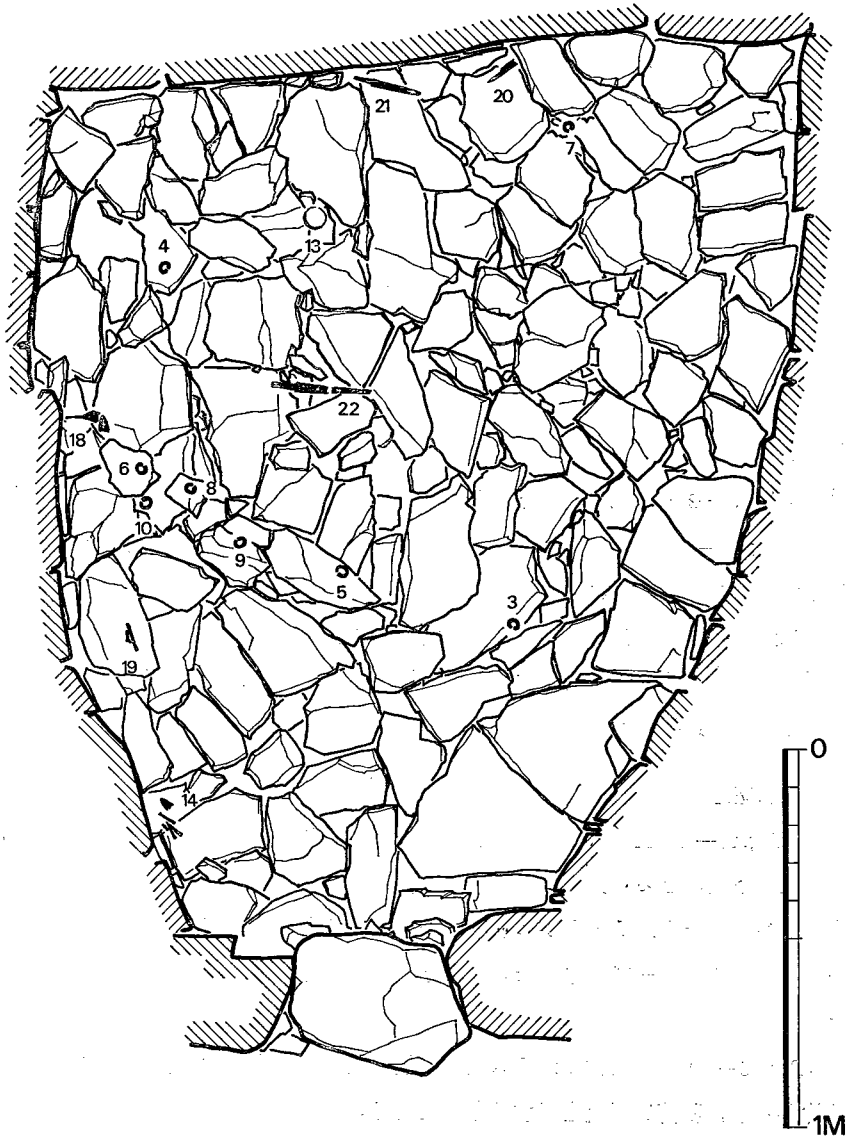


Fig. 77 山の前3号墳大石室遺物出土状況実測図 (縮尺 1/20)



小石室	大石室
石室内	石室内
装身具	装身具
耳環 1	釧 1
武器	耳環 金 5
短刀 1	銀 6
鉄鍬 3	ガラス玉 4
土器	武器
手捏土器 4	短刀 2
石室外	鉄鍬 9 + $\alpha$
土器	工具
須恵器	刀子 1
	石室外
	土器
	須恵器
	土師器

## (5) 小石室遺物

耳環 (Fig. 78—23) 腐蝕が著しく進み、銅胎のみで、金、銀のいずれかは不明である。

鉄鍬 (Fig. 78—24・25) 24は、円頭広根斧箭式に属し、身長74mm、最大巾31mm。25の身部は錆化が著しく進行しており形状は不明である。現存茎長は920mmと長い。

直刀 (Fig. 78—26) 全長451mm、刃わたり370mm、身巾30mm、身厚5mm。関部には、巾18mmで断面倒卵形（長径32mm短径2mm）の縁金具が装着されている。茎は、巾18mm、厚5mmで、先端近くに現存長21mmの目釘が認められる。

## (6) 大石室遺物

耳環 (Fig. 78—1~11) いずれも中実の銅胎であるが、金・銀の2種に分れる。それぞれの計測値は下表のとおり。

これらのうち、5—6、7—8がセット関係にあることは確実で、この他断面形に小異はあるが1—2、3—4、9—10もまたセットになると見做される。従って本石室出土の11個の耳環は6セット分となる。

丸玉 (Fig. 78—12) 濃紺のガラス製で、最大径8mm、高6mm、孔径1mm。この他に3個体分の破片があり、稍薄い紺色を呈するものである。

小玉 図示していないが、検出されたのは僅かに1個のみである。径3mm、高2mm、孔径

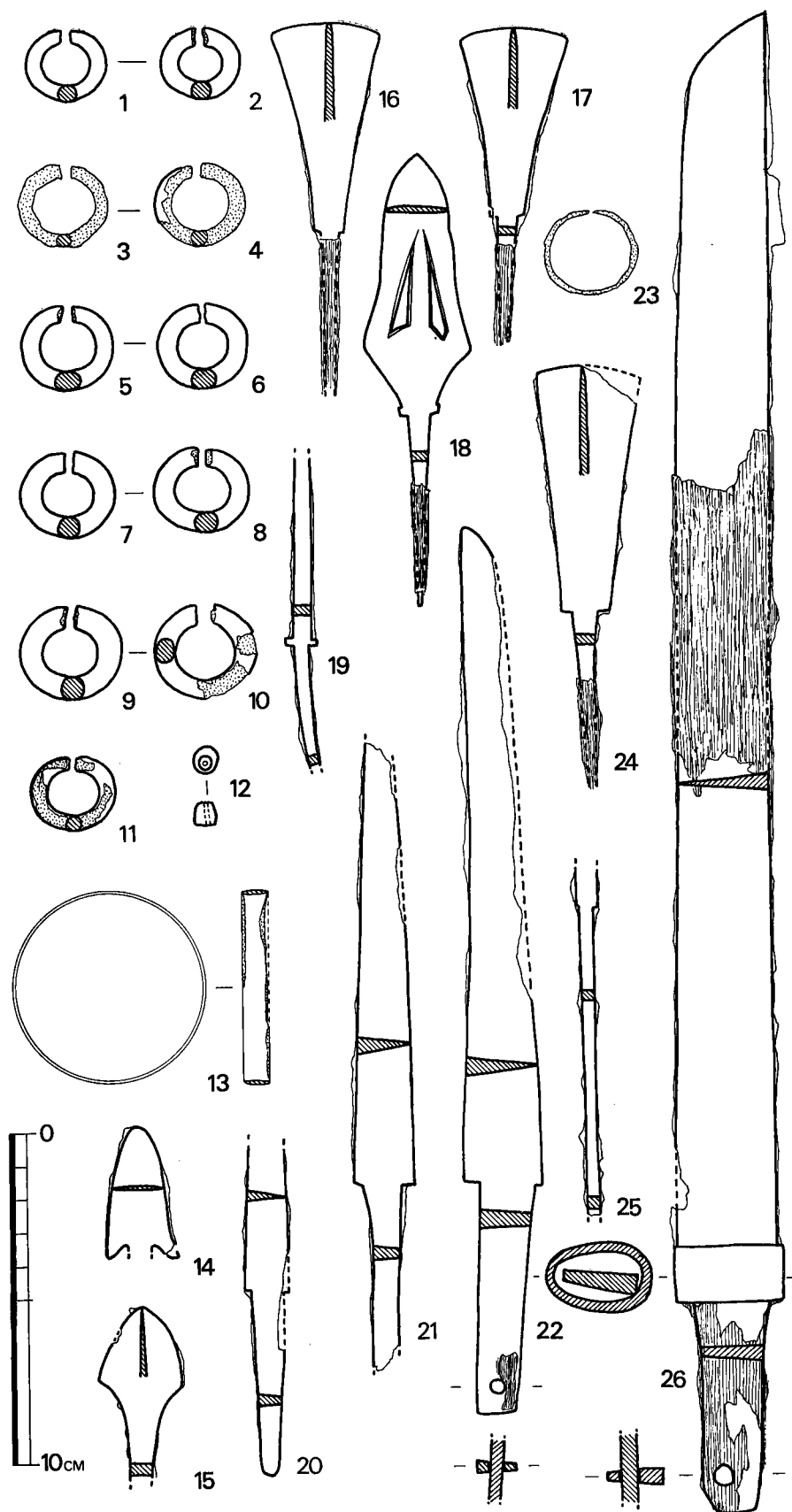


Fig. 78 山の前3号墳小・大石室装身具・武器その他実測図 (縮尺 1/2)

	外 径	厚			外 径	厚	
1	24.5×22.5	4.5×6	金	7	29×26	6.5×6.5	銀
2	23.5×22	5.5×6	金	8	28.5×26	7×7	銀
4			金	9	21×29	7×7	銀
5	28.5×26.5	6×8	金	10	31×28.5	6.5×7	銀
6	28×26	6×8	金	11	26×23.5	5×5	金

Tab. 12 山の前3号墳大石室耳環計測表 (単位はmm)

1 mmで、薄い紺色を呈する。

銅釧 (Fig. 78—13) 腐蝕が著しく進んでおり、3片に割れ一部を欠失している。外径は58mm前後とみられ、断面は、僅かに中央部が脹らむが、厚さ1mm、巾8mm強と扁平に近い。

鉄鏃 (Fig. 78—14~19) 小片が多く、18を除けば完存するものはない。

19は、棘を有し、16、17以外のいずれかの鉄鏃の一部とみられる。

短刀 (Fig. 78—21・22) 21は鋒と茎の一部を、22は鋒近くの刃部を、それぞれ欠失している。ともに両関で、22は、茎先端近くに目釘孔を有し、現存長19mmの目釘あり。

刀子 (Fig. 78—20) 鋒部を欠失している。両関と思われ、身巾11mm、身厚3mmで、茎は、長57mm、最大巾9mm前後、厚3mmで、先細りとなる。(石山勲)

須恵器

杯蓋

I a類 (Fig. 79—1) 天井部と体部の境には沈線が入り、口縁部内面には段がつくものである。

口径は12.4cm、器高は4cmを測る。天井部のみ篋削りし、残りは横なでを丁寧に施す。色調は青灰色を呈しており、焼成は不十分である。胎土には細粒を含んでいる。

I b類 (Fig. 79—2・4・6) 体部は肥厚し、ここに沈線が2本入るものである。体部断面には凹凸を生じ、器形は無格好である。口縁部内面はわずかに段ができ、口縁端ではその幅を急にせばめる。内面では、天井部と体部の境に段がつき区別される。2、4は灰色、6は灰褐色を呈しており、焼成は共に良好で、胎土に細粒を含む。口径は12.8cm~13.3cm、器高は4

	形 式	全長	身長	最大巾
14	両丸造腸扶柳葉式		36	22
15	変形斧箭式丸変形広根定角式			25
16	円頭広根斧箭式		62	32
17	"		57	32
18		136	75	32

Tab. 13 山の前3号墳大石室鉄鏃計測表 (単位はmm)

番号	全 長	刃わたり	身厚	身巾	茎厚	茎巾
21	210前後		4	19	4	8
22	266	197	6	24	5	14.5

Tab. 14 山の前3号墳大石室短刀計測表 (単位はmm)

cm～4.3cmを測る。

なお、2と3、4と5はセットである。

I b類 (Fig. 79—7・9・11・13) 天井部と体部の境の沈線は入らないが、口縁部内面に段を有するものである。

なお、7と8、9と10、11と12はセットであり、墳丘前面北側にすえられた甕の中より重なった状態で出土した。色調は乳白色を呈しており、焼成は不十分である。胎土には砂粒を含んでいる。天井部付近はへら削りしてあり、11は頂上部のみロクロを静止した状態でへら調整している。口径、器高をみると、7は14cmと4.5cm、9は13cmと4cm、11は12.3cmと3.9cmと、ひとまわりずつ小さくなっている。

I d類 (Fig. 79—14・15) 口縁部内面の途中に突出を有し、ここに稜線が入るものである。色調はともに暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。口径は、それぞれ、12.8cm、12.4cm、器高は4.7cm、3.9cmを測り、14が丸味をもつのに対し、15はやや扁平味をもつ。

I e類 (Fig. 79—16) d類とは逆に、口縁内面の途中に凹線が入るものである。

口縁端部は、少し外反する。口径は12.6cm、器高は4.3cmを測る。色調は外側は黄灰色を、内側は淡灰色を呈しており、焼成は不十分である。胎土には砂粒を含む。

なお、33とはセットである。

IIの類 (Fig. 79—17～20, Fig. 80—21) 天井部から口縁まで、きわだった変化のみられないものである。

17は、復元口径14cm、器高約4cmを測るが、そのほかは、口径11.6cm～12.4cm、器高3.2cm～3.9cmを測る。天井部はへら削りを施しているが、19のみ、ロクロを静止した状態でのへら調整を行うが、雑である。21は口縁部外面に1条の沈線が入る。色調は灰黒色が多く、暗灰色を呈するものもある。胎土には砂粒を含んでおり、焼成は良好である。

II b類 (Fig. 80—22) 口縁端から1cmの高さに天井部と体部の境がくる。体部はここより垂直気味におちる。

復元口径11.7cm、器高3.5cmを測り、小形となる。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好であり、胎土には砂粒を含む。

III類 (Fig. 80—23・24) 蓋につまみと、かえりのあるものをIII類とした。23は天井部を欠損しており、つまみの形態は不明であるが、つまみは有したものと思われる。身受け部の幅は広く、落ち込みも大きい。かえりは口縁端部より大きく外へ出る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。復元値ではあるが、口径10.8cm、最大径13cm、かえり1.1cmを測る。

24は口縁部を欠損する。つまみは凝宝珠つまみがつく。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含み、器面は粗く、ざらざらする。

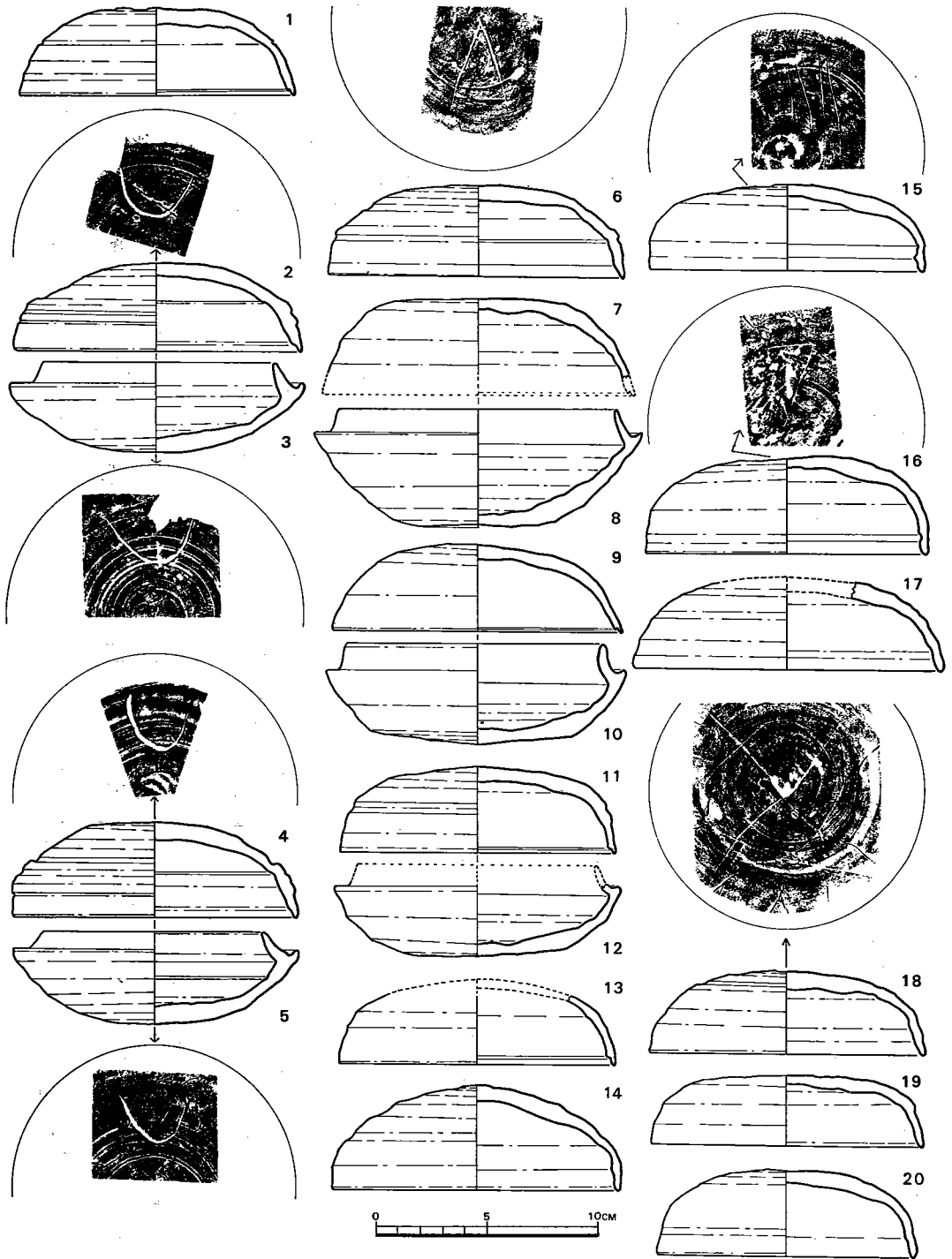


Fig. 79 山の前3号墳須恵器実測図① (縮尺 1/3)

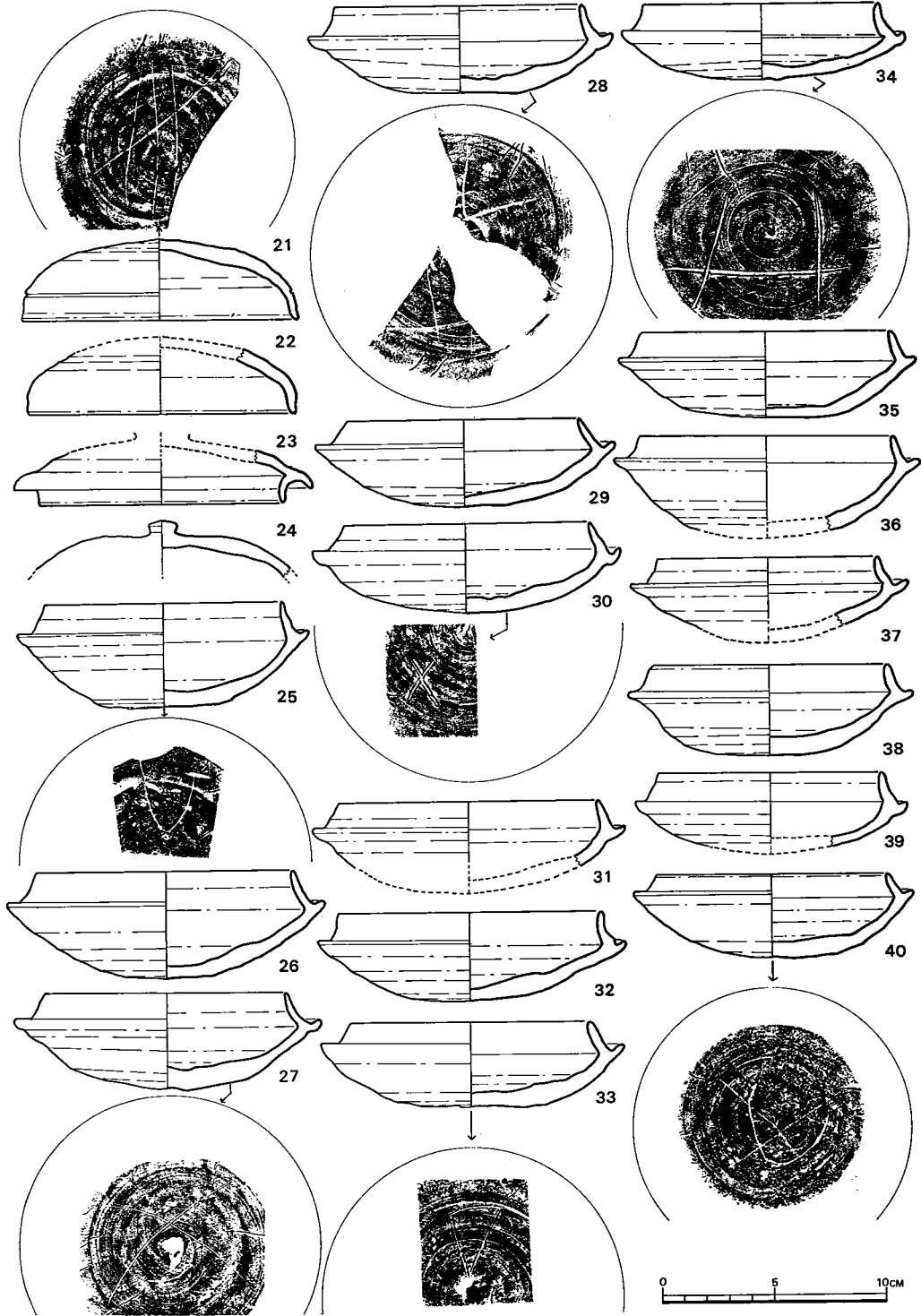


Fig. 80 山の前3号墳須恵器実測図② (縮尺 1/3)

## 杯身

I a類 (Fig. 80—25~27) たちあがりは1.5 cm以上で、内傾しつつも、途中からカーブを変えて直立する形態をとるものである。従って、たちあがり内面の途中に、あまり明瞭ではない稜線が入る。

たちあがり基部には稜線は入らない。口径は10.6 cm~11.5 cm, 最大径13 cm~14 cm, 器高4.3 cm~4.8 cmを測る。色調は、25は小豆色であるが、ほかは灰色を呈している。胎土には砂粒、細粒を含み、焼成は良好である。

I b類 (Fig. 79—3・5) 2, 4とセットである。たちあがりは1.4 cm~1.5 cmで太く、途中から幅をせばめながら内反する形態をとる。接合部下に一段をもち、3は更に一段をもつ。5はこの段がつく所に1条の沈線をめぐらしている。底部は丸味をもつ。口径は、それぞれ10.5 cm, 9.9 cm, 最大径は13.4 cm, 12.8 cm, 器高4.1 cm, 4.2 cmを測る。色調は灰黒色ないし暗灰色を呈しており、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

I c類 (Fig. 79—8・10・12) 7, 9, 11とそれぞれセットであり、甕内 (Fig. 80) より出土した。たちあがりは、1.5 cm~1.8 cmを測り、細くて内傾するものと、やや太く、内湾しつつも途中から外湾する形態のものがある。体部から底部への変化は直線的で明瞭である。底部は平坦面を有する。色調は乳白色を呈しており、焼きは悪く、器面は磨滅しかけている。胎土には砂粒を含んでいる。口径10.8 cm~12.6 cm, 最大径12.8 cm~14.8 cm, 器高4.1 cm~5.2 cmとひろく。

I d類 (Fig. 80—28~31) たちあがり1.2 cm~1.5 cmを測り、形態は、先端がとがり気味で内傾する。底部は丸い形態をしており浅い。蓋受け部と体部の境は大きく湾曲する。口径は10.3 cm~11.6 cm, 最大径13.4 cm~13.7 cm, 器高3.9 cm~4.5 cmを測る。色調は暗灰色を呈しており、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。篋削りは丁寧であり、器形は整う。

I e類 (Fig. 80—32~35) たちあがりは1.4 cm~1.5 cmで、たちあがりの形態はd類より太く、たちあがり全体に丸味をもつ。底部は平坦面を有してくる。口径は10.5 cm~11 cmであるが、32のみ、たちあがりが直立するため11.8 cmと広い。最大径は12.6 cm~13.7 cm, 器高は3.4 cm~4.5 cmを測る。色調は灰褐色ないし、灰白色であり、焼成は不十分である。胎土には砂粒を含んでいる。なお、33は、16とセットである。

I f類 (Fig. 80—36~40, Fig. 81—41) たちあがりは1 cm~1.3 cmと短く、内湾する。底部は平坦面をもつ。口径は9.6 cm~10.6 cm, 器高は3.7 cm~4.5 cmを測り、口径に比して器高が高い。たちあがり基部には稜線が入り、その下に一段をもつものもある。色調はすべて暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細粒、砂粒を含む。37は蓋受け部の落ち込みが広く、41はここに沈線が入る。

II類 (Fig. 81—42~45) たちあがりは0.9 cm~1.1 cmと短く、ほぼ直立する。42, 43は、

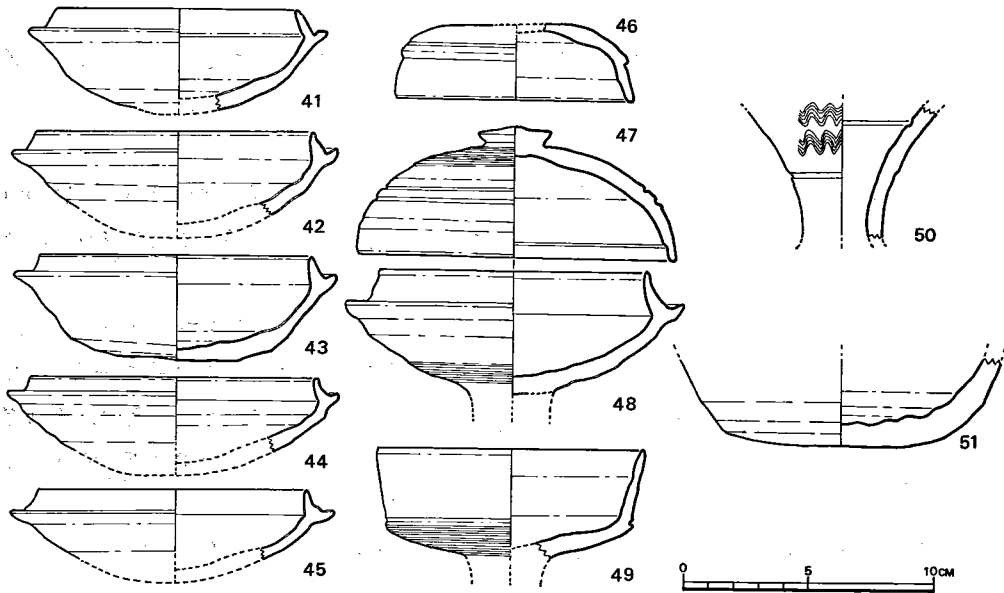


Fig. 81 山の前3号墳須恵器実測図③ (縮尺 1/3)

たちあがり基部には稜線が入らない。45は沈線が入る。蓋受け部と体部との境は全体的にくぼむ。口径10.7cm~11.4cmとa類よりも大きい。器高は3.8cm~4.2cmである。色調は42は小豆色, 43は灰褐色, 44, 45は灰色を呈する。

■ 埴蓋 (Fig. 81-46) 天井部と体部の境に1条の沈線が入り, その下方は外方へ張り出す。天井部はロクロを静止した状態でヘラ調整している。色調は暗灰色を呈しており, 焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。口径は9.4cm, 器高は3cmを測る。

#### 高杯蓋

I類 (Fig. 81-47) 天井部と体部の境に2条の沈線が入る。上方のは細く, 下方のは広い。つまみ周辺部はヘラ削りのあと, 刷毛でなでている。口縁部内面5mmの所に1条の沈線が入る。凝宝珠つまみがつく。口径は12.6cm, 器高は5.3cmを測る。色調は灰白色を呈しており焼成は不十分である。胎土には細粒を含む。48とセットである。

#### 高杯身

I類 (Fig. 81-48) 有蓋高杯である。たちあがりは1.6cmで内湾するが, 先端はやや外反する。

蓋受け部から体部への移行面が大きくくぼむ。杯部下方はヘラ削りの上を刷毛でなでている。杯部の形態は, 杯の身I a類と類似している。口径は10.8cm, 最大径は13.5cmを測る。色調は灰白色を呈しており, 焼成は不十分である。



Ⅱ類 (Fig. 81—49) 無蓋高杯である。杯部の底部と体部の境はかどぼり、直上には1条の沈線が入る。底部には刷毛目が入る。色調は灰褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。杯部口径は10.7cmである。

甕 (Fig. 81—50) 頸部を残すのみである。頸部はほぼ中央と思われる位置に沈線が1条入って頸部を2分している。上部には櫛描き波状文が2列入る。内面では頸部上方に1条の沈線が入る。色調は、黄褐色を呈しており、焼成は不十分である。胎土には細粒を含む。

不明土器 (Fig. 81—51) 底部から胴部の一部を残すのみである。残存部のすべてはヘラ削りを行っている。内面はヨコナデしてあり、この際の凹凸が著しく器壁に残る。色調は灰白色を呈しており、焼成は不十分である。胎土には砂粒を含む。

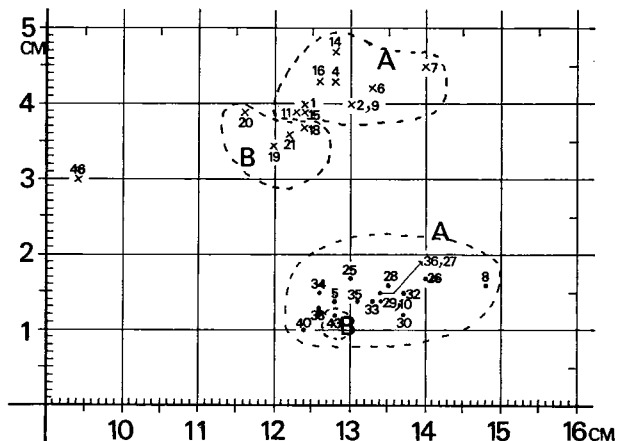
小結 山の前3号墳から須恵器では、杯、高杯、埴、甕、提瓶、平瓶、三脚付壺、壺、甕の出土を見ており、総計90個体以上を数え、そのうち杯は54個体以上を数える。土師器では杯、高杯、埴、脚付埴が出土しており、総数は43個体以上を数える。

須恵器では、杯の蓋をⅠ類からⅢ類にわけ、Ⅰ類は第ⅢB様式に属するものであり、口縁部の形態、その他でa～eに細分した。a～eの分類は、単に列挙したにとどめるが、a～c類はd、e類より先行しそうである。杯の蓋Ⅰb類は身のⅠb類と、杯c類は身のc類と、蓋e類は身のe類との組み合わせが確認できた。なお土器の説明でも述べた如く、Fig. 79—7～12は、墳丘前面北側の甕 (Fig. 80) の中より出土した事を付記しておく。Ⅱ類は第Ⅳ期に属するものと考えた。口縁部の形態より、aとbとにわけた。Ⅲ類は第Ⅳ期に属するものであろうか。疑問である。

杯の身はⅠ類とⅡ類とに分類した。Ⅰ類は第ⅢB様式に属するもので、たちあがりの形態、その他により、a～fに細分した。Ⅱ類は、第Ⅳ様式に属するものとする。

高杯のⅠ類は有蓋高杯であり、第ⅢA様式に属するものだろうか。

Tab. 15の説明 Tab. 15は須恵器杯の蓋と身の計測値を表であらわしたものである。



Tab. 15 山の前3号墳須恵器計測表

×印は蓋であり、番号は実測図の番号を示す。この場合、縦軸は器高を、横軸は口径を表わす。表の如くに2グループに分類したが、その相違はあまり明瞭ではない。Aグループは、口

径12.3cm~13.3cm, 器高3.7cm~4.7cmの間のものであり, これらの土器は第ⅢB様式に比定される。7はやや大形である。Bグループは, 口径11.6cm~12.4cm, 器高3.4cm~3.9cmの間のものであり, 第Ⅳ様式に比定される。この表からみると, その相違は明瞭ではないが, 第ⅢB様式に比して, 第Ⅳ様式の土器は小形化し, 特に器高は4cmを越すことはない。天井部の調整は第ⅢB様式の土器は全て, ヘラ削りしてあり, 第Ⅳ様式においては, ヘラ削りと, ロクロを静止した状態でのヘラ調整を行う。

つぎに・印は杯の身であり, 縦軸はたちあがりを, 横軸は最大径を表わす。43は第Ⅳ様式であり, 他は全て第ⅢB様式であるが, 計測値からは分類できない。第ⅢB様式の土器は最大径12.4cm~14.8cm, たちあがりは1cm~1.7cmの間である。 (川述昭人)

甕 (Fig. 82-52~54, Fig. 83-66) 52は, 器高13.9cm, 口径11.4cm, 口頸部高8.1cm, 胴部最大径8.9cm。口唇内面はそがれ, 頸部の内・外面に絞り目が残る。孔径1.1cm。灰青色を呈し焼成・胎土ともに良好である。53は, 器高14.7cm, 復元口径12.6cm, 口頸部高8cm, 胴部最大径8.7cm。頸部内・外面に絞り目あり。焼成は甘く, 黄褐色を呈するが, これは底部にワラシベが焼けた痕跡が認められることから知られるように, 他の大形器種の中に入れて焼成されたことによる。54は, 口頸部のみ。復元口径11.7cmで, 焼成は堅緻である。66は, 器高12.2cm, 口径11.2cm, 口頸部高6.5cm, 胴部最大径8.9cm。厚手で全体にズングリとして胴部は扁平に近い。頸部上半の2条の波状文は, 振幅が小さく, 稚拙である。黒色を呈し, 焼成良好。52, 53, 66とも, 胴部の篋削りは半ば近くにまで及ぶ。

小形直口壺 (Fig. 82-55) 口頸部を欠失しており, 胴部最大径は12.2cm。

短頸壺 (Fig. 82-56・57) 両者とも蓋を失っている。57は, 器高7.7cm前後, 口径5.7cm, 胴部最大径12.1cm。56は, これよりひとまわり小形で, 復元口径5.7cm, 同胴部最大径10.5cm前後。

有蓋壺 (Fig. 82-58・59) 完形品。壺は器高11.9cm, 口径6.6cm, 口頸部高1.1cm, 胴部最大径14.4cm。器表ほぼ全面にカキ目調整が施され, 各所に指紋を散見する。蓋は, 口径9.2cm, 深さ3.6cmで, 壺にかぶせた状態で焼成されている。壺の底部には, ×印の篋記号がつけられ, これは蓋頂部のそれと同一のものであるが, 肩部にもこれと異なる記号が認められ, 興味深い。

器形不明台脚 (Fig. 82-60・61) 60は, 砂質で焼成甘く, 黄褐色を呈する。復元底径10cm, 同高10.1cmで, 内面に絞り目あり。61は, 底径10.3cm, 高3.8cm。底部内面に青海波文が残る。

有蓋三脚壺 (Fig. 82-62・63) 蓋は, 撮みを欠失するが, 現存高7cm, 口径10.8cmで, ほぼ全面にカキ目調整がなされ, これに先立つ頂部の篋削りは美事である。壺の復元高は15.2cm前後, 口径は同じく8.7cm。口頸部高は3.7cm。胴部最大径は17cm前後か。蓋同様, ほぼ全面

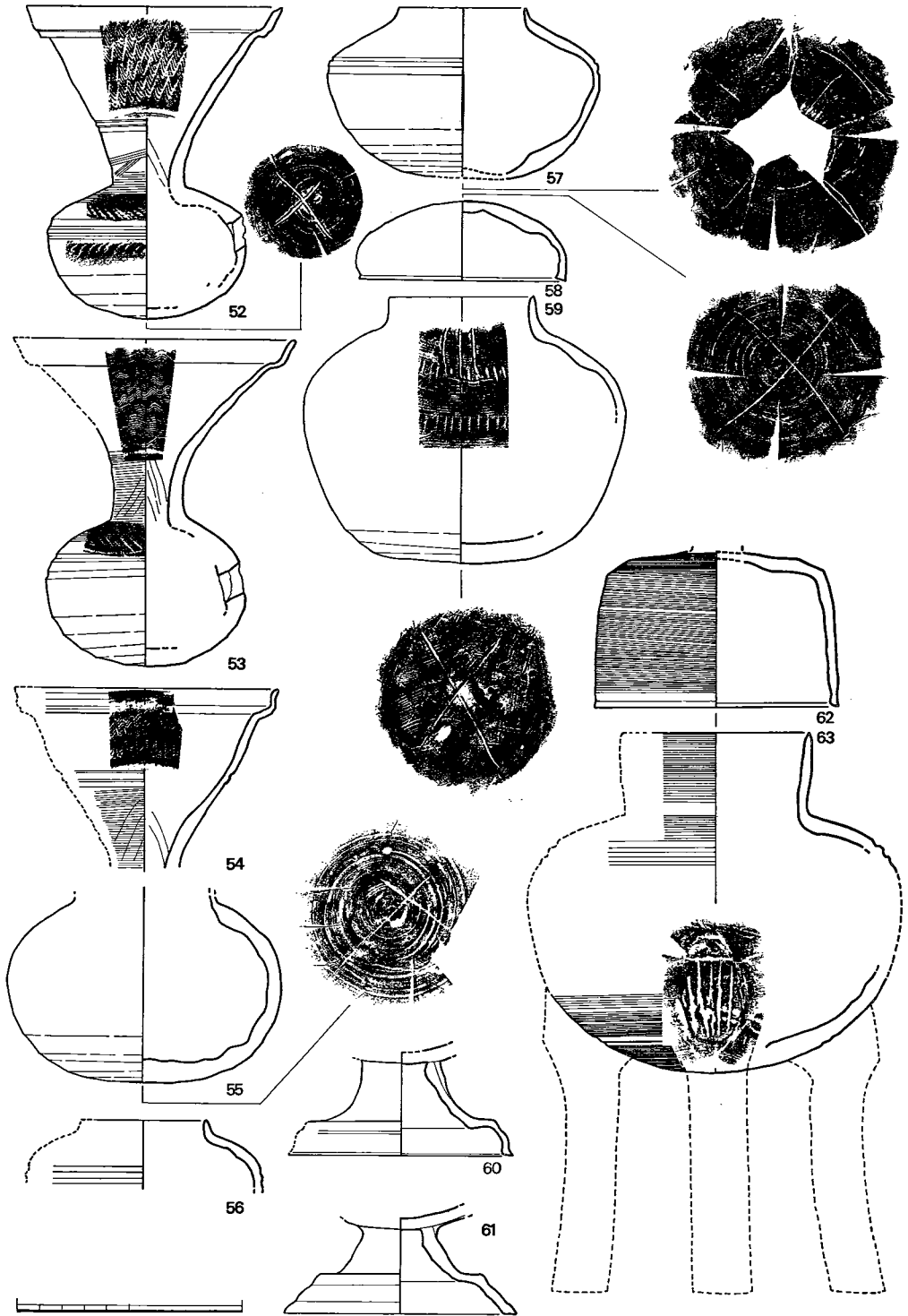


Fig. 82 山の前3号墳須恵器実測図④ (縮尺 1/3)

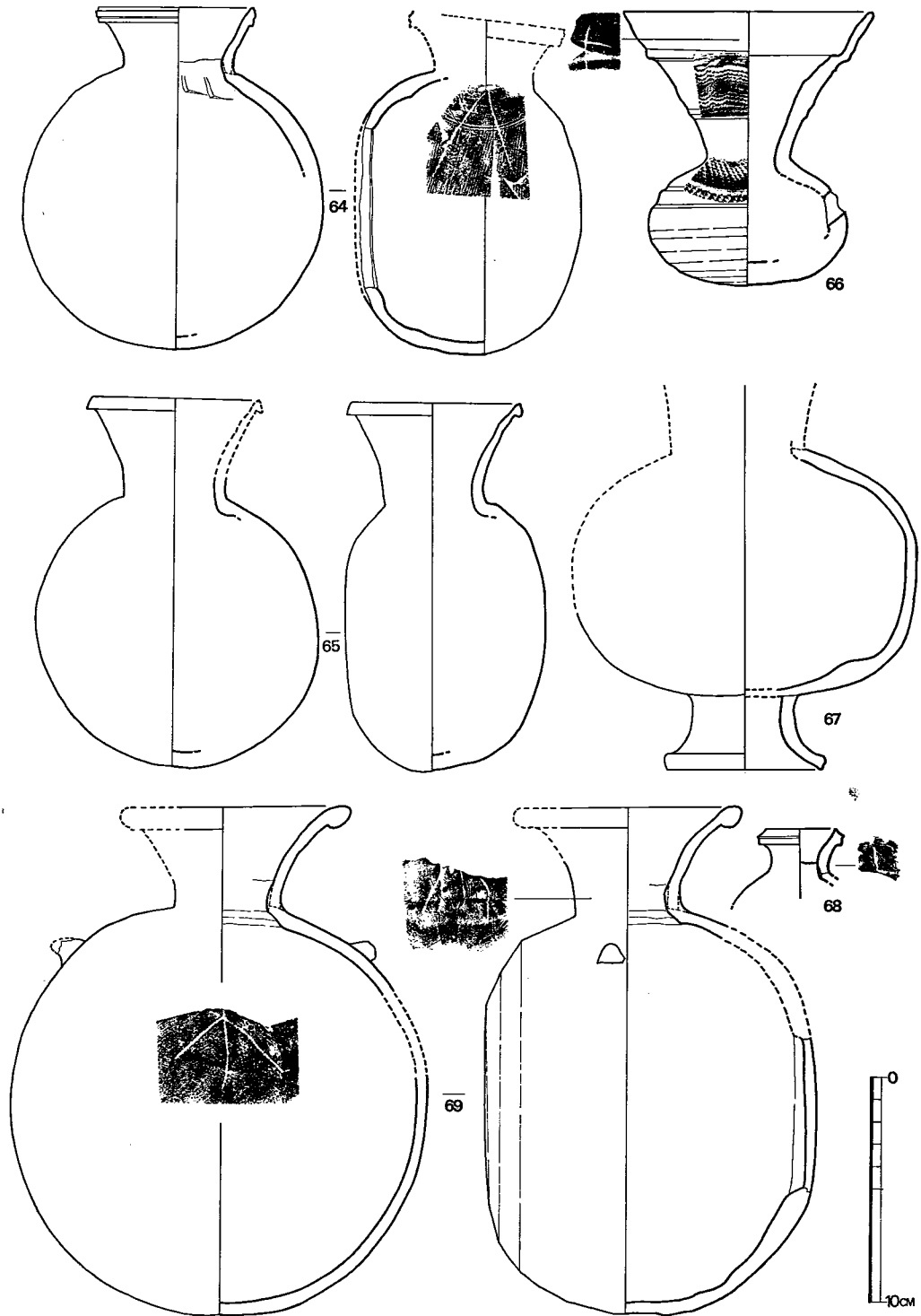


Fig. 83 山の前3号墳須恵器実測図⑥ (縮尺  $\frac{1}{3}$ )

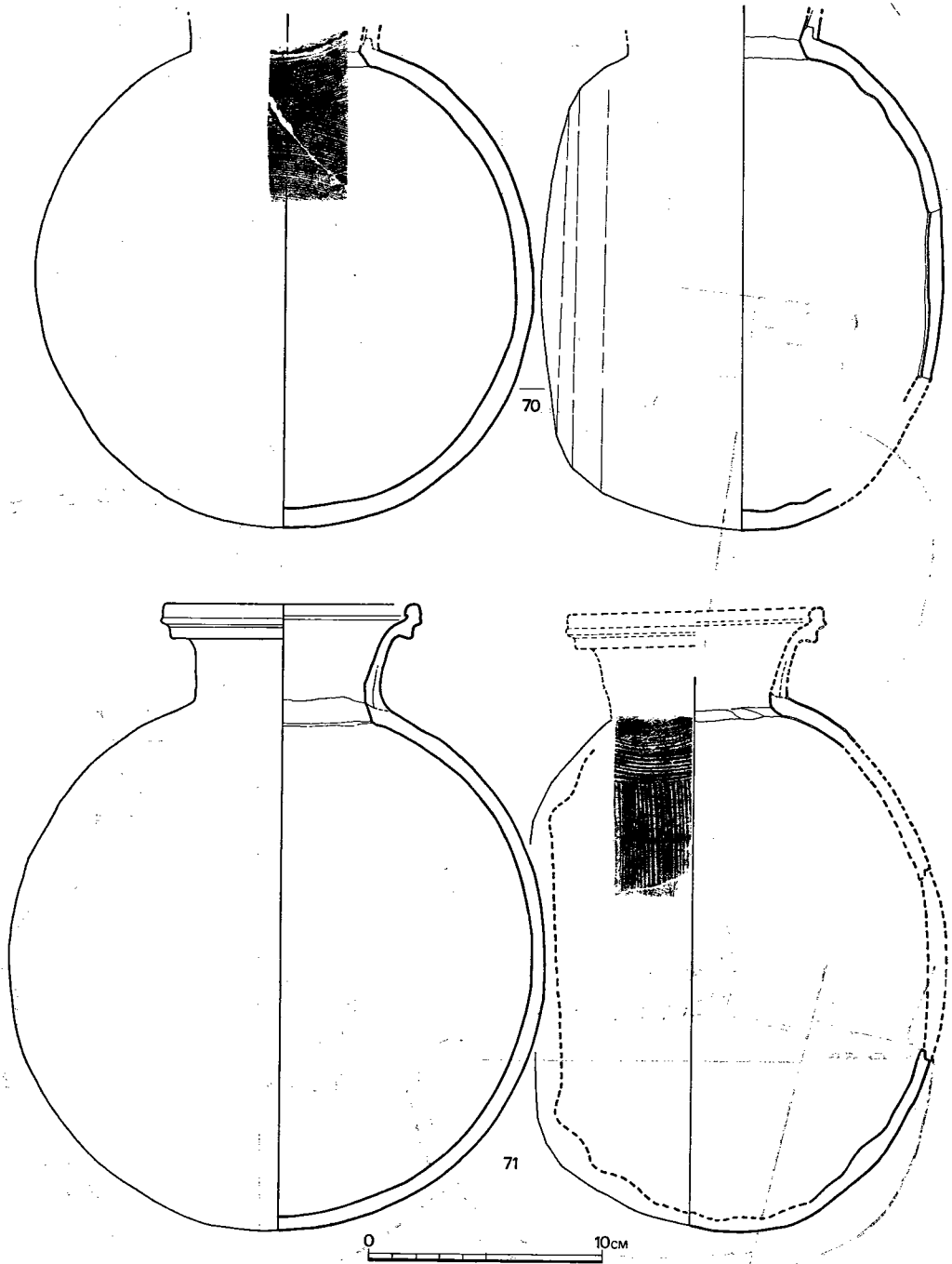


Fig. 84 山の前3号墳須恵器実測図⑥ (縮尺 1/4)

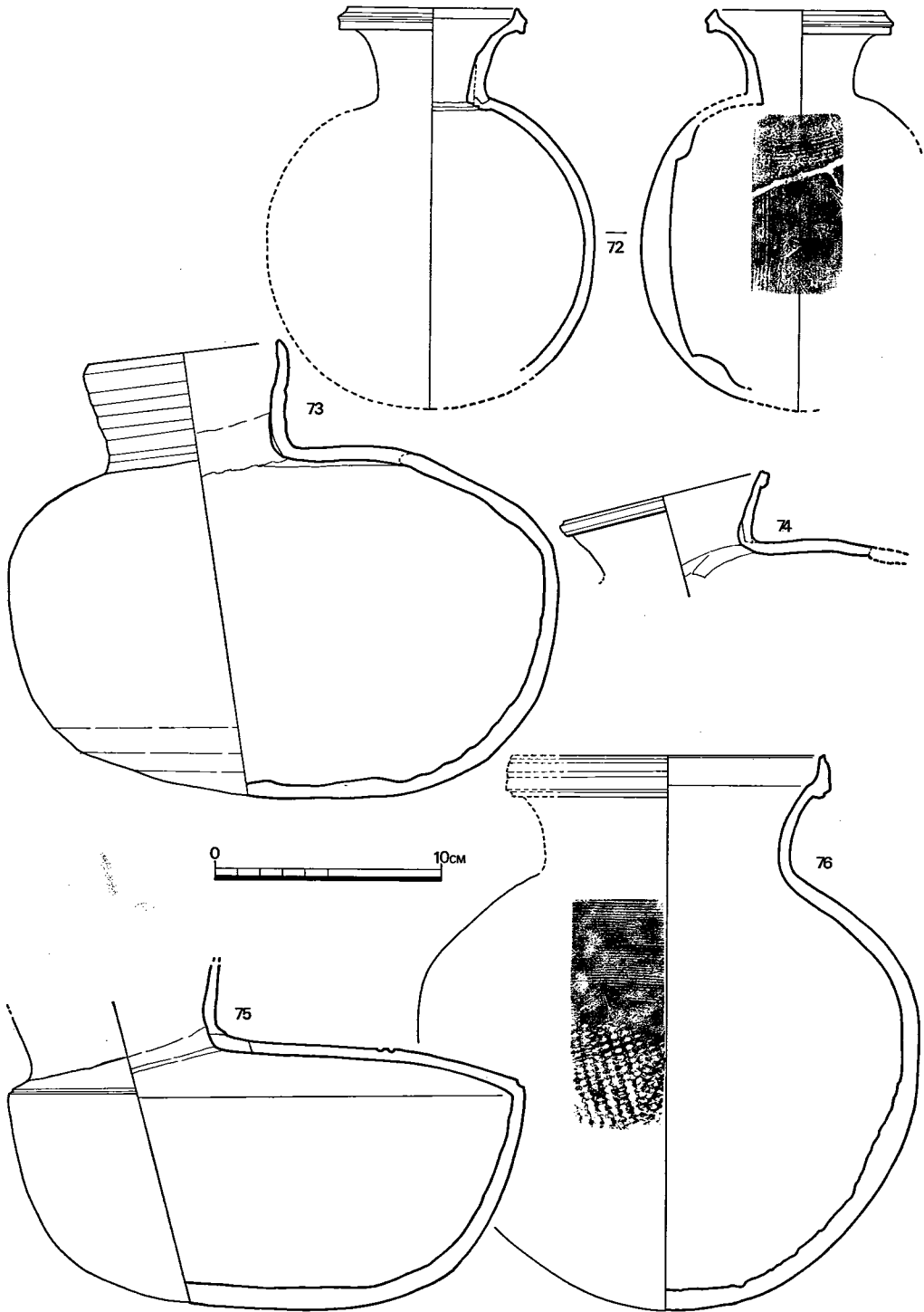


Fig. 85 山の前3号墳須恵器実測図⑦ (縮尺 1/3)

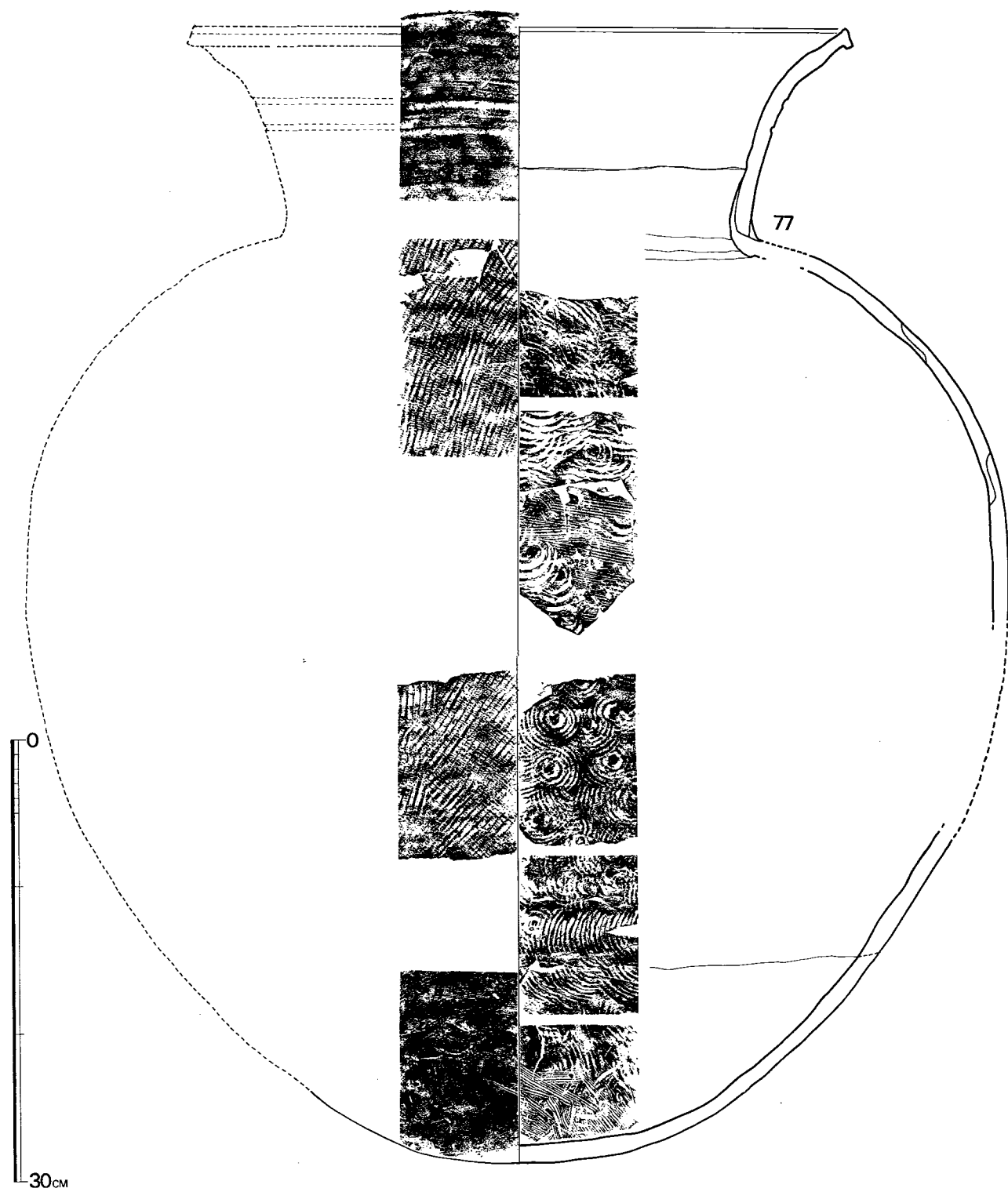


Fig. 85 山の前3号埴須恵器実測図⑧ (縮尺 $\frac{1}{4}$ )

にカキ目調整がなされる。脚部は現存せず、接合の便を図るために底部の3ヶ所に刻みこまれた5~7条の沈線が、本器が三脚壺であることを示すのみである。両者とも焼成は甘い。

提瓶 (Fig. 83—64・65・68~69, Fig. 84—71・Fig. 85—72) 大・中・小に分れる。68は、口径4cmの小形品で、焼成良好。中形品としては、64, 65, 72がある。64は、器高15.4cm, 復元口径7.1cm, 口径部高3cm, 胴部径13.3cm。側面最大巾は、10.2cm前後か。焼成は良好である。65は、器高16.5cm, 口径7.8cm, 口頸部高4.5cm, 胴部径12.4cm。側面最大巾中は9cmで、64に比して扁平に近くなる。頸部周辺には、カキ目調整を施さない。焼成良好。72は、復元器高17.8cm, 口径8.4cm, 復元胴部径14.5cm。焼成不良で、黄褐色を呈する。胴部をいったん塞ぐ円板は極めて厚い。胴部の張は、他例より少しくふくらむ可能性がある。大形品には、69~71が該当する。69は、器高22.5cm, 復元口径10.2cm, 胴部径18.6cm, 側面最大巾15cm。両肩部に退化した把手がつく。背面は扁平に近くなっている。焼成は良好である。頸部と胴部の2カ所に、同一とみられる篋記号各1個が認められる。70は、胴部径21.7cm, 側面最大巾17.4cm。背面は稍脹らむ。焼成甘し。71は、器高26.9cmで、本墳出土品中では最大である。口径11.4cm, 胴部径23.3cm, 側面最大巾は18cm前後か。カキ目は極めて荒く、焼成も甘い。

口頸部と胴部との接合法は、64と69とが内・外面から補強する点で共通し、7・72では接合・強化に特に意が払われ、その手法は略同一と見てより。

台付壺 (Fig. 83—67) 口頸部を欠失する。胴部は、全面カキ目調整が施され、高さ11cm復元最大径15.3cmで、これに高さ3.4cm, 底径7.2cmの台脚がつく。赤褐色を呈し、焼成は極めて不良である。

平瓶 (Fig. 85—73~75) 形態、口頸部と胴部との接合等3者とも異なる。73は、器高20.1cmと比較的大きく、口径9cm, 口頸部高5cm, 胴部最大径24cm。底部内面は指頭にて粘土紐の接合部をならしている。器表全面にカキ目調整、底部周辺には篋削りが施される。頸部との接合部内面は、キレイに調整されている。焼成は堅緻。74は、口頸部のみ。口径9.7cm, 高さ3cmで、焼成良好。75は、口縁部を欠く。胴部最大径23.2cmで、肩部は鋭角的な稜がつく。体部下半から底部にかけては、工具によるなで・削り調整が認められる。頂部には、2条の同心円の沈線。口頸部の接合法は、孔の縁を立ち上らせてこの外側に口頸部をおく前2者とは異なり、単に、孔の縁に口頸部を立て器肉を外側からおさえるのみである。一方、胎土も細粒を多く含み、灰白色を呈し、前2者とは著しく趣きを異にする。

壺 (Fig. 85—76) 器高24.5cm。復元口径14.5cm, 胴部最大径22.3cm。胴部器表全面を叩きしめた後、上半にカキ目調整を施す。内面上半の青海波文は、なでられて消されている。

甕 (Fig. 86, Fig. 87—78~80, Fig. 88—81~85) 77は、復元高78cm内外の超大形品である。口径は推定45.2cm, 頸部高14.4cm, 胴部最大径60.4cm。頸部は、2条の浅い沈線をはさんで上下に櫛描波状文。胴部の成形にあたっては、粘土紐巻き上げが6回に分けて行なわれ、体部上半



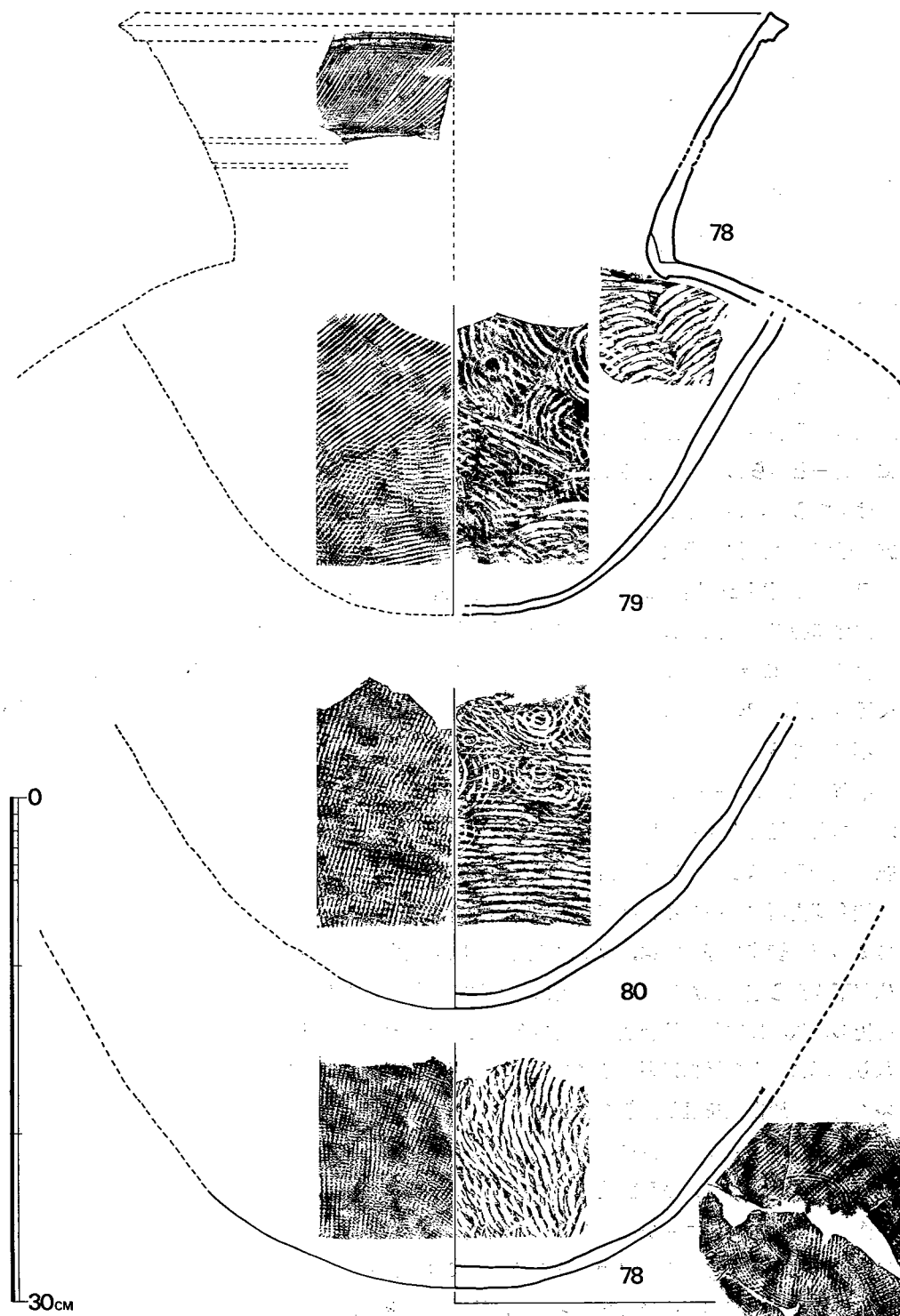


Fig. 87 山の前3号墳須恵器実測図⑨ (縮尺 1/4)

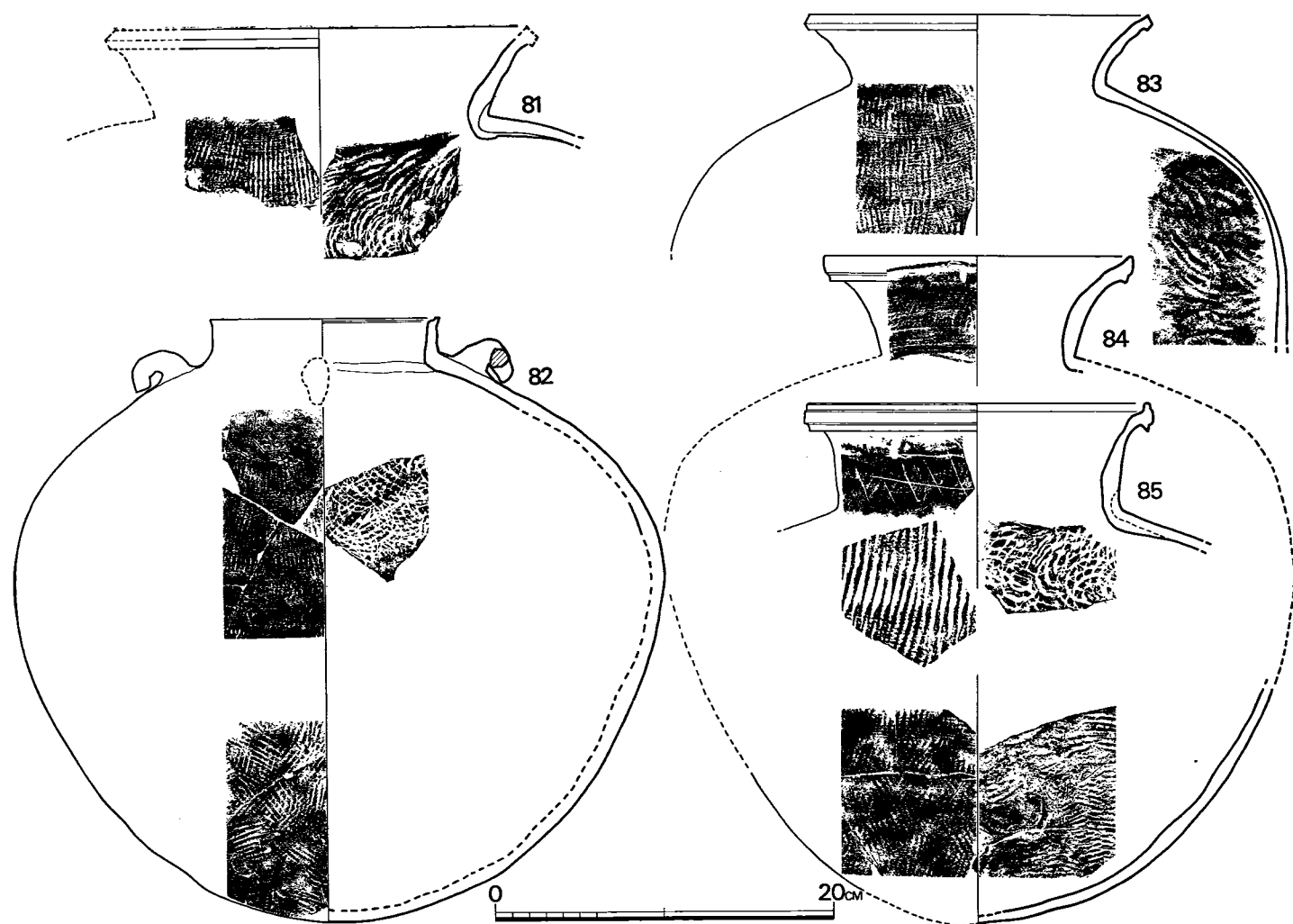


Fig. 88 山の前3号墳須恵器実測図⑩ (縮尺 $\frac{1}{4}$ )

では特に粘土紐帯の接合に意が払われている。焼成は全体に甘く、特に底部が著しい。接合部と他の部分とは、青海波文の密度が明らかに異なるのが特徴的である。78も、前者よりひとまわり小形であるが復元高76.5cmの超大形品である。口径は復元で40.3cm、口頸部高は同じく15cm、胴部最大径は64cm前後とみられる。頸部には2条の沈

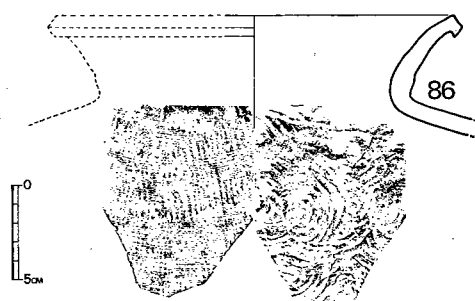


Fig. 89 山の前3号墳須恵器実測図⑩（縮尺  $\frac{1}{4}$ ）

線と、この上部に櫛による斜行文が入れられている。成形作業は念入に行なわれ、内面の青海波文はその単位がつかめない程密である。また他例では、カキ目調整が体部上半までで底部には及んでいないが、本例では底部から渦巻状にカキ目調整を施す。焼成は堅緻。79・80は、底部と体部のみで、口頸部は採集されていない。80は、内外の叩きしめが特に念を入れて行なわれ、さらに接合部については、内部を叩きしめている。81は、口径25.7cm、口頸部高5.3cm。口径20.7cm、口頸部高4.1cm。薄手で焼成も甘い。84は、復元高39.5cm、口径18.5cm、口頸部高5.9cm、胴部最大径は37cm前後と推定される。83と同様に全体に焼成甘く、灰白色を呈する。頸部表面にはカキ目調整痕が明瞭に残っている。85は、口径20.8cm、口頸部高6.3cmである。器表肩部の叩き目文は太身で特徴的である。頸部には、甕の中で本例のみの篋記号がある。86は、復元口径22cm前後。81・83と口縁の形状・調整が類似する。焼成はやや甘い。

頸部と体部との接合法には、2種がある。1つは、77・78にみられるごとく、体部の端を薄くのばして立ち上らせ、この外側に頸部を置いて補強し、他の1つは81・85にみられるように、前者とは逆に内側に頸部を置いて内側を補強する手で、接合部内面が特に厚くなるので大體識別できる。

四耳壺 (Fig. 88—82) 器高35.8cmではほぼ完存する。口径は13.7cm、頸部は高2.1cmと低く、胴部最大径38.7cm。口唇内面はそがれており、有蓋であったと思われる。四耳は対称の位置になく、相対する二耳を欠く。焼成は稍甘い。(石山勲)

土師器

杯蓋

I類 (Fig. 90—1) 口径15cmと大形である。口縁部と体部の境がいくぶんくぼみ、口縁内面は斜めに切られ境には甘い稜線が入る。器高は5cmを測る。色調は褐色を呈しており、焼成は不十分である。

II a類 (Fig. 90—2~4) 口縁13.5cm~14.6cmを測るものである。天井部、体部、口縁部の境は明瞭でなく、内外面ともに口縁端までなめらかな円弧を描く。器高は4.8cm~5.4cmを

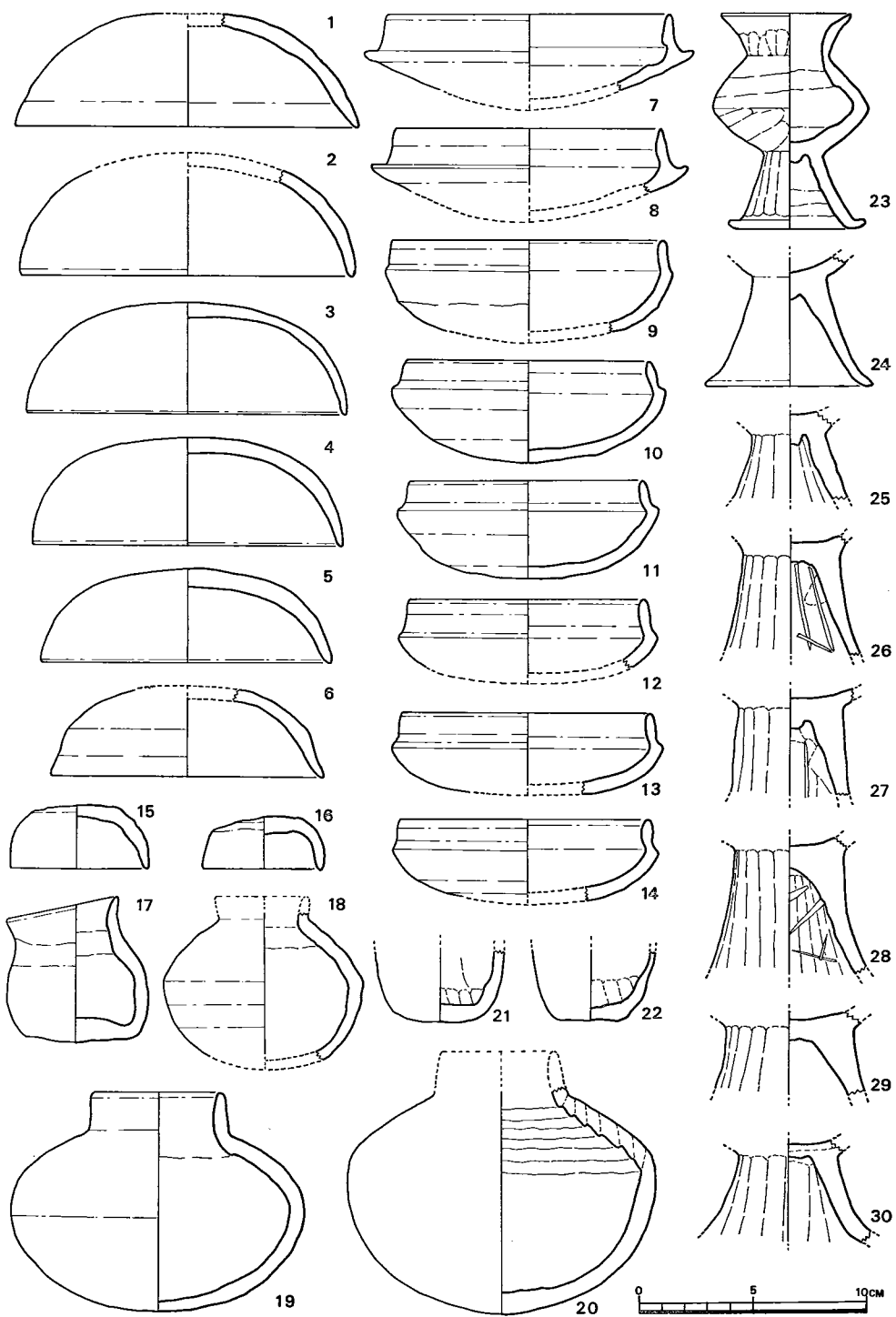


Fig. 90 山の前3号墳土師器実測図① (縮尺 1/3)

頸る。体部から天井部までは、ヘラ整形している。色調は赤褐色ないし褐色を呈しており、2は焼成不十分だが、残りは堅い。胎土には砂粒を含む。

II b類 (Fig.90—5) a類に比して、口径、器高とも小形となり、器壁は厚手となる。口径は12.7cm、器高は4cmを測る。口縁部は直線的に外反する。体部から天井部までヘラ整形している。色調は黄褐色を呈しており、焼成は堅い。胎土には砂粒を含む。

II c類 (Fig.90—6) 口径11.8cmとb類よりも更に小さくなる。体部と天井部の境はかどばり、甘い稜線が入る。口縁部は内湾ぎみに外反する。器高は4cmを測る。色調は黄褐色を呈しており、焼成は不十分である。胎土には砂粒を含む。

#### 杯身

I類 (Fig.90—7・8) たちあがりは1.5cm～1.7cmで外面は直立、または、少し内傾し、内面は外反する形態のものである。たちあがり基部下には一段をもうける。蓋受けは長く、落ち込みを有する。復元測定では、口径11.8cm～12.5cm、最大径13.8cm～14.3cmを得る。色調は黄褐色を呈しており、焼成は不十分である。

II a類 (Fig.90—9～11) たちあがりは1.3cm～1.4cmで、基部付近は内傾するが途中からは直立する。蓋受け部はわずかであり、端部には稜線が入る。口径は10.3cm～12cm、最大径は11.5cm～12.5cm、器高は4.3cm～4.5cmを測る。色調は褐色ないし黄褐色を呈しており、焼成はおおむね堅い。胎土にはいずれも砂粒を含んでいる。底部はヘラ整形を行う。

II b類 (Fig.90—12～14) たちあがりは1.3cm～1.7cmとa類と差はないが、器高が低くなり、扁平な底部となる点が違う。たちあがりはa類よりも太くなる。口径は10.2cm～11cm、最大径は11.2cm～11.8cm、器高は3.7cm～4cmを測る。色調は褐色ないし黄褐色で焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

坩蓋 (Fig.90—15・16) 小石室内の出土品であり、いずれも手づくねである。天井部は扁平に近く、体部との境は明瞭である。器形は凹わん部が多い。口径5.3cmと6cm、器高2.3cmと2.8cmを測る。色調は黄褐色を呈しており、焼成は不十分である。胎土には砂粒を含んでいる。

#### 坩身

I類 (Fig.90—17) 小石室内よりの出土品である。口縁端部は水平でない。底部は多少の凹凸はあるが、ほぼ平坦であり、最大径は胴部下方に位置する。胴部はあまりふくらまず、内傾して頸部をなし、口縁部はわずかに外反する。口径は5cm、器高は5.4cm～6.4cmと左右で1cmの違いがある。最大径は6.2cmを測る。色調は黄褐色を呈しており底部は $\frac{1}{2}$ 程黒変している。焼成は不十分であり胎土には砂粒を含む。

II a類 (Fig.90—18) 小形である。器面は凹凸が多い。肩部と胴部の境はほぼ中央に位置して、最も張り、甘い稜線が入る。外面はヘラ研磨により調整している。復元口径4cm、最大径8.7cm、復元器高7.7cmを測る。色調は褐色を呈し、焼成は良好であり、胎土には細粒を含む。

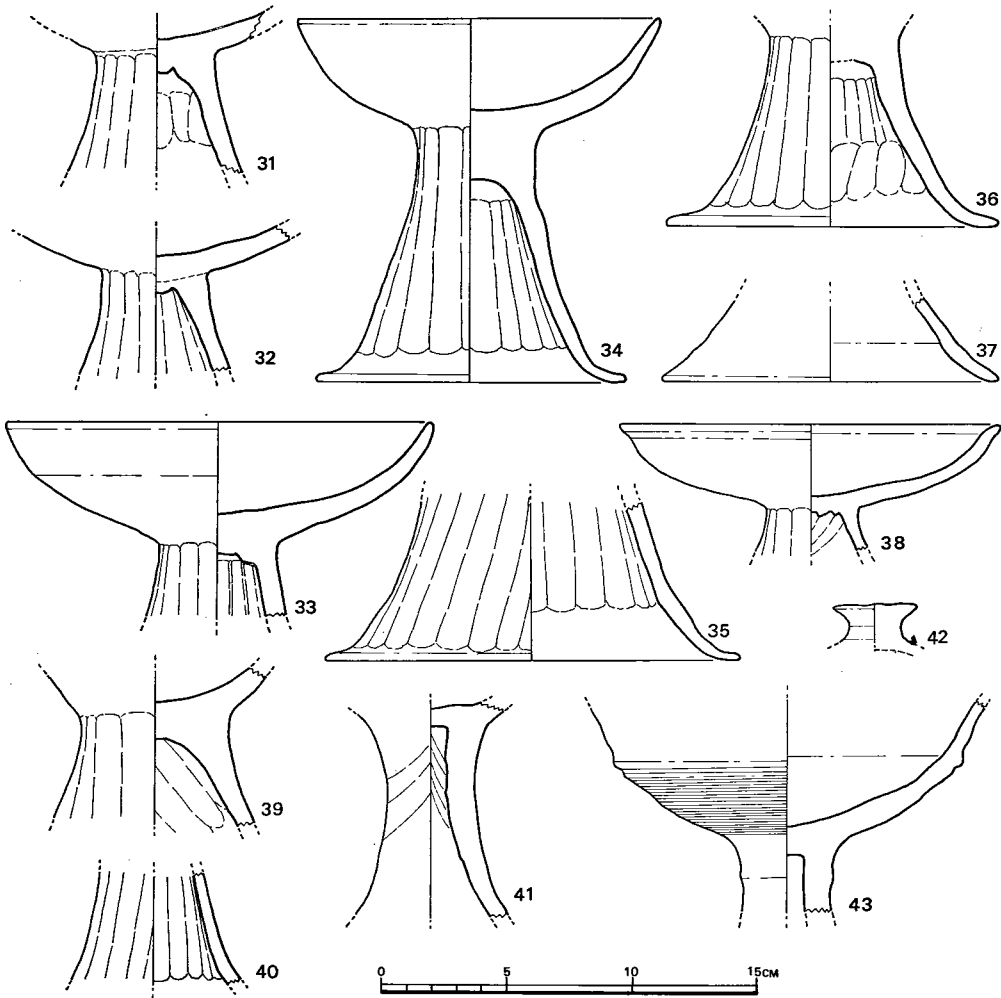


Fig. 91 山の前3号墳土師器実測図② (縮尺  $\frac{1}{3}$ )

II b類 (Fig. 90—19) a類より大形のものである。口頸部はほぼ直立し、肩部から胴部への移行はなめらかである。最大径は、ほぼ中央に位置する。底部は丸底である。肩部から底部までヘラ研磨により調整している。内面の頸部と肩部の接合部は甘い稜線が入る。口径は5.6cm, 最大径12.8cm, 器高9.6cmを測る。色調は褐色を呈しているが、口縁部から肩部の一部は黒変する。胎土細粒を含み、焼成は良好である。

II c類 (Fig. 90—20) b類よりも更に大形である。最大径は上方に位置する。底部はとがりぎみの丸底となる。肩部は、輪状にした粘土紐を積み重ねてつくられているのが良くわかる。この部分、外面はヘラ調整しているのでなめらかであるが、内面は粘土紐の接合の上を指でおさえつけただけなので、凹凸が著しい。復元口径は5cm前後で、最大径は13.4cm, 復元器

高11.5cmを測る。色調は褐色を呈しており、焼成は不十分である。

Ⅲ類 (Fig. 90—21・22) 22は玄室内よりの出土品である。底部と胴部だけであり、全体の器形は不明。底部は平坦であり、内面は指なでのあとが残る。21は外面をヘラ調整している。色調は黄褐色と赤褐色を呈しており、焼成は不十分である。胎土には砂粒を含む。

脚付埴 (Fig. 90—23) 脚部は直線的に外反し、脚端部は小さくはね上る。肩部、胴部も直線的で、境界はするどく突出して稜がつく。頸部も基部から直線的に外反し、口縁部は再び外反して口径を広くしている。全体に直線的である。外面は全面にわたってヘラ削りしている。口径5.7cm, 脚裾径6.1cm, 器高9.5cmを測る。色調は褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土は精選されている。

#### 高杯

I類 (Fig. 90—24・25) 小形である。脚部と杯部の一部を残存するのみで杯部の形態は不明である。磨滅が著しく、24はヘラ削りの有無は不明だが、多分、ヘラ削りされていたものであろう。脚裾径は7.4cm, 器高は3.9cmを測る。褐色で焼成不十分。25は内外面ともヘラ削りされている。褐色で焼成不十分。脚柱径は3.2cmと細い。

Ⅱa類 (Fig. 90—26~30, Fig. 91—31~34・36) 26~32は脚柱部と杯部の一部を残すのみで、器形は不明であるが、脚柱の幅、脚裾への傾斜などが類似するので同一視した。杯部の形態は33, 34で示されるように内湾ぎみに外反する形態である。口径は、33は17cm, 34は14.4cmを測る。34は全面を、33は脚柱内面を除くすべてを丹塗りしている。脚裾は、折れまがって広がる。脚部はほとんど内外面ともヘラ削りしている。色調は褐色ないし赤褐色で、焼成はおおむね良好である。34の脚裾径は12.3cm, 器高は14.4cmを測る。

Ⅱb類 (Fig. 91—35・39) a類の大形品である。35の脚裾径は16.3cmを、39の脚柱最小径は5.8cmを測る。色調は褐色と赤褐色であり、焼成は不十分である。胎土は砂粒を含んでいる。39は脚部内面は指なでの痕跡がある。

Ⅱc類 (Fig. 91—37・38・40) 口縁部は外方へ小さく突き出す。脚部と杯部の接合部はうすすである。脚裾はa, b類のように折れまがらない。色調は37, 38は赤褐色であり、40は褐色である。焼成は、軟質のものとやや堅いものがある。38は杯部外面はヘラ調整しており、内外面とも丹塗りしている。口径は15.1cm, 脚裾径は13.4cmを測る。

Ⅲ類 (Fig. 91—41~43) 42はつまみの部分だけであり、頂部はわずかにふくらむ程度で、ほぼ平坦である。焼成は良好である。41, 43は脚柱部と杯部の一部を残すのみである。杯部には小突出と沈線が入り、この部分より下方には櫛によるかき目が入る。41は脚柱上部は内外面とも、しぼり痕が観察できる。色調は赤褐色を呈し、焼成は41は軟質だが43は堅い。

(川述昭人)

#### (7) 小結

本墳は、既存の小円墳に、意識してさらに1基の円墳を一部重複させて築造したものであっ

て、厳密には2基の古墳であり極めて特異な例である。

小石室が先行することは既に述べたが、該石室は明らかに胴張りを有する横穴式石室のミニチュアの様相を帯びており、被葬者は常識的に考えて成人ではなく小児とするのが妥当であろう。換言すれば、小児用として特別に、意識的に小形石室を構築したと見做される。他方、大石室は、小石室墳丘を破壊することなく、まさに寄り添うごとくに営なまれており、両石室被葬者の極めて濃い血縁関係を想定させる。横穴式石室は、追葬可能であり家族墓としての機能を本来的に有するが、先立たれた児に対する家族の強い愛情が、彼（女）のために特に小形石室を営なませたのであろう。大石室が作られたのは、小石室に遅れること数年であったと思われる。これは、両者の墳丘が重なる部分に間層が認められず、列石も間層をおくことなく接続し、さらには両者から出土する須恵器の型式が一致することから知られる。

列石は基本的には露出されていたと見られ、その機能は、墓域を画し、かつ盛土の流失を防ぐという2点に求められよう。斉藤忠氏は、這種列石を「外護列石」とされており（注）、県内でも最近の調査で各地の古墳で確認されており、外護という名称はともかく土止めの機能を有する点で本墳と共通するようである。

小石室墓道左側の割石群は、石室用材を抜き取って集めたものとは考えにくく、その間に全く遺物を含まないがあるいは小石室被葬者に対する墓前祭に伴なう施設かとも思われるが、その性格は不明である。

本墳の築造時期は、出土須恵器の型式より大略6世紀後半代に比定され、以降小石室1体、大石室6体以上の計7体以上の被葬者が相次いで葬られたものとみられる。

注、同氏『日本古墳の研究』1961年8月。なお、半島の慶州・皇吾里14墳で、本墳と同様に「瓢塚」プランに列石がまわることが確認されている（斎藤忠『慶州星南里第九号墳・星吾里十四号墳』〈昭和三十九年度古蹟調査報告1〉1937年3月）。同墳では先行する古墳の列石の一部は破壊され、石槨の積石に転用されている。なお、氏は同報告書では「外囲列石」とされた。ただし、本墳と半島古新羅の墓制とを直接的に結びつけて考える必要はないと思われる。（石山 勲）

## 5 小 結

山の前古墳群は、上述したように、5基の円墳からなる群集墳である。そのうち、九州縦貫道の建設によって消滅する3基について発掘調査を実施した。3基の調査にもとづいて、山の前古墳群に関する総括を行なっておきたい。

まず、いずれも横穴式石室を内部主体とするものである。とくに、山の前3号墳においては、一つの墳丘のなかに、二つの石室を包蔵していることは、一つの墳丘に葬られる被葬者の性格を考える上に示唆的である。群集墳の最小の単位が、横穴式石室とそれを包蔵する円墳



であり、それが山の前古墳群の場合、5基集合して一つの支群を形成しているという事実が指摘できる。そして、これら5基の支群には、墳丘や石室の規模において、差異を示すばかりでなく、盟主的ともいえるものが存在することも指摘しておかねばならない。山の前1号墳は、墳丘・石室の規模が最大であること、立地が最高所にあること、さらに、副葬品において、金銅製馬具など、他の4基の円墳とは隔絶した情況を示している。

つぎに、山の前古墳群の営造年代についていうと、調査した3基の円墳はいずれも、6世紀後半代に築造されて、7世紀はじめまで、追葬などによって利用されている。おそらく、山の前古墳群全体が同時に営造されたものであろう。

最後に、山の前古墳群を形成した人たちの集落については、平原遺跡を考えたい。山の前古墳群との同時代性ならびに至近性がその理由である。

(西谷 正)

## VI 平原遺跡の調査

### 1 はじめに

東海大学人文科学研究室では福岡県教育委員会の依頼により昭和45年7月20日より31日まで、宮本延人教授の指揮のもとに広川町大字広川字平原にある遺跡を発掘調査した。この遺跡は前年に同教育委員会によって一部発掘調査がなされているので、地形的立地の様子については、その報告によられたい。

なお、調査にあたっては同教育委員会技師酒井仁夫氏をはじめ西谷正氏等同教育委員会の方々、それに別府大学考古学研究室の賀川光夫教授、橘昌信講師、江上幹幸氏をはじめ広川町教育委員会教育長中村二郎氏、同公民館館長中村寿太郎氏、伝習館高校郷土部の田島忠生、末松知子の諸君、東海大学考古学研究会学生、佐々木均、牛島茂、田島秀晴、佐々木博昭、中岡和浩、平方幸雄、長谷川達、亀井喜知子、菅田薫、石橋公二郎、三森俊彦、浜田義明、平賀昌一の諸君、報告書の作成にあたっては、慶応大学考古学研究室の江坂輝弥教授、国学院大学考古学研究室の乙益重隆教授に種々有益なご教示を賜り、明治大学考古学研究室の井上裕弘氏及び松村恵司、坂本あずま、設楽ひろ子の学生諸君には遺物の実測の労を煩わした。これらの方々のご親切に対して心からお礼を申し上げたい。

### 2 調査の経過

今度の調査は前回の調査よりも東側によった地域に $2 \times 2 m$ のグリッドを62箇所設け発掘した (Fig. 93)。その結果、縄文時代早期の遺物と、古墳時代の竪穴住居址2軒、石室1基、それに遺物が発見された。

先ず層位から述べると、この遺跡の地層はかなり攪乱されていた。このことは縄文時代早期の遺物が表土や石棺内から出土したり、古墳時代の遺物と同一の層位からしばしば発見されることから明らかである。恐らく、古墳時代になって竪穴住居がつくられた時に特に攪乱をひどく受けたものと思われる。従って、今回の調査の主目的であった、縄文早期の文化層がどこに本来あるのかという問題は解決できなかった。

この遺跡では一応次の様な層序が認められた (Fig. 92)。

- |     |                |         |
|-----|----------------|---------|
| 第1層 | 灰白色土層 (耕作土)    | 約20cm   |
| 第2層 | 薄赤褐色土層         | 約15cm   |
| 第3層 | 暗褐色土層 (粘質を帯びる) | 約30cm   |
| 第4層 | 赤褐色土層 (粘質を帯びる) | 約35cm以上 |

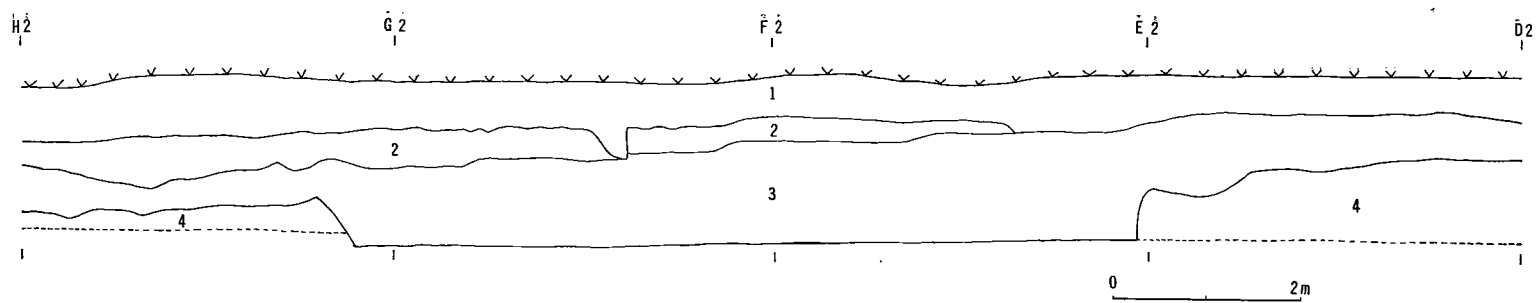


Fig. 92 平原遺跡D 2—H 2 東壁断面図 (縮尺 $\frac{1}{80}$ )

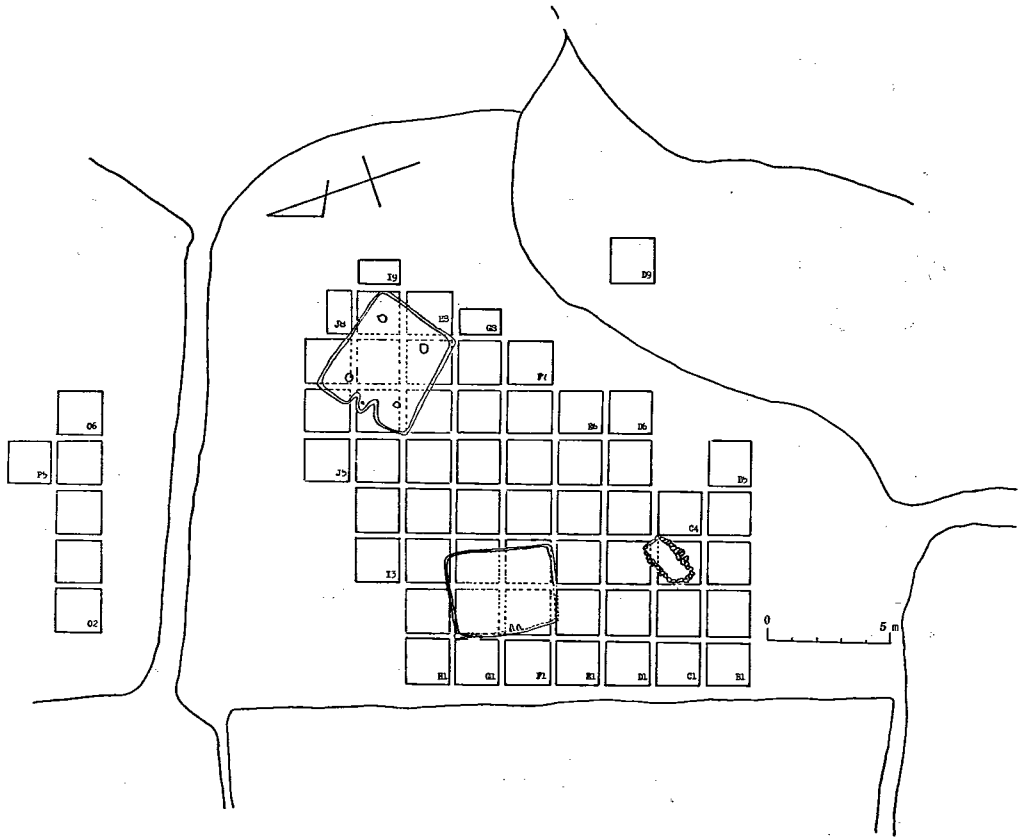


Fig. 93 平原遺跡遺構配置図（縮尺 $\frac{1}{300}$ ）

遺物（土師）は第4層の上部まで認められ、住居址は第4層を切ってつくられていた。

### 3 縄文時代の遺物

既述の如く、該遺跡の地層はかなりの攪乱を蒙っているので出土遺物の層位について述べてもあまり意味がないと考える。そこで遺物についてのみ簡単に紹介しておくことにする。

ここから出土した縄文関係の遺物は全て早期に比定されるものである。

土器は田村式に比定されると思われる楕円押型文1片、粗雑な撚糸文1片、それに厚手の無文10片である。

石鏃は破片を含めると27点出土している。全て無茎石鏃で石質は黒曜石（10点、Fig. 94-1～8）安山岩（14点、Fig. 94-9～16、Fig. 95-1～4、8-9）流紋岩（3点、Fig. 95-5～7）である。

その他の石器としては、黒曜石製ポイント1点（Fig. 95-10）安山岩製局部磨製石斧1点（Fig. 99-1）緑泥片岩製打製石斧（Fig. 98-1）黒曜石製サイド・ブレイド（Fig. 96-4）

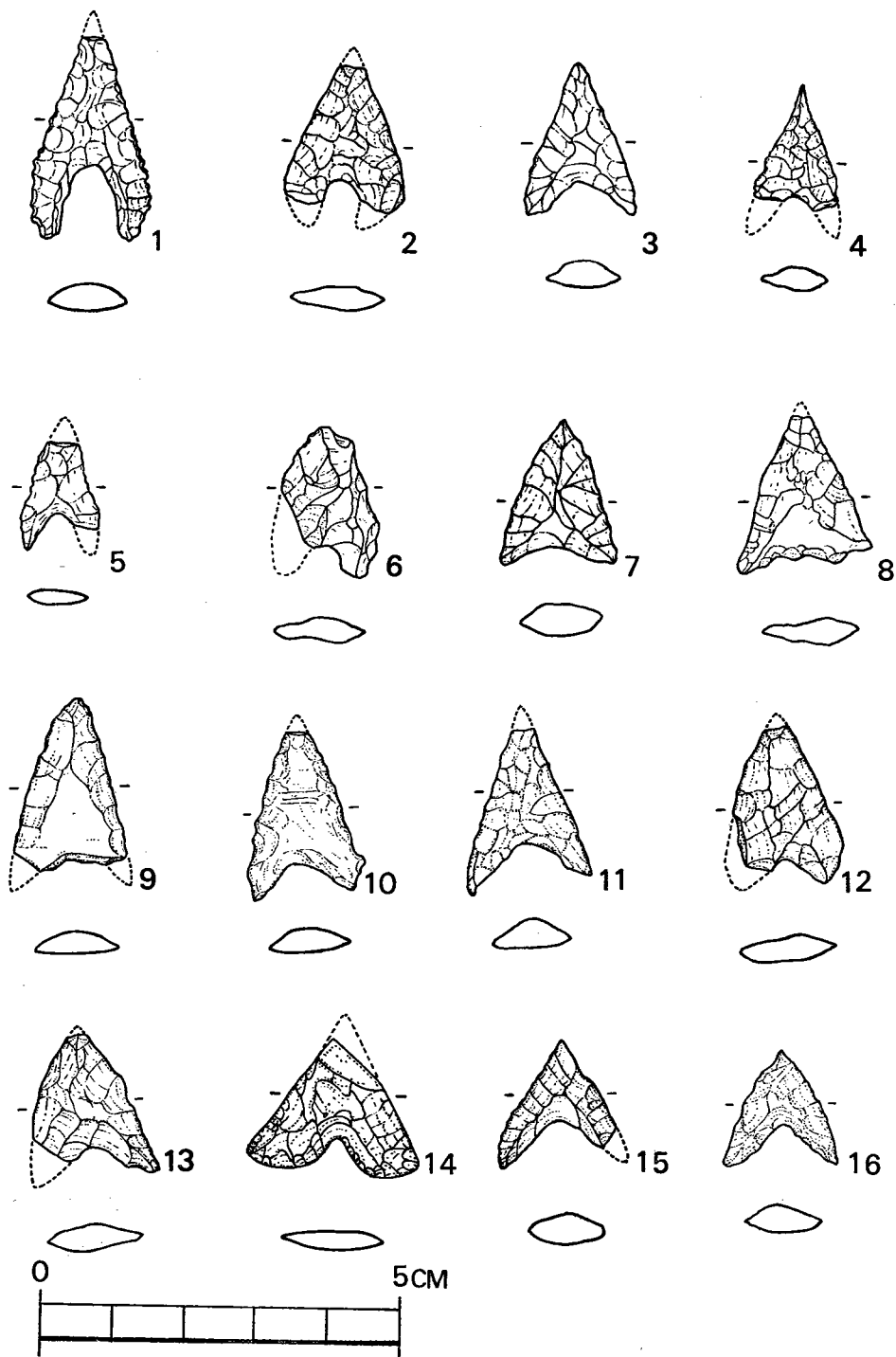


Fig. 94 平原遺跡石器実測図① (実大)

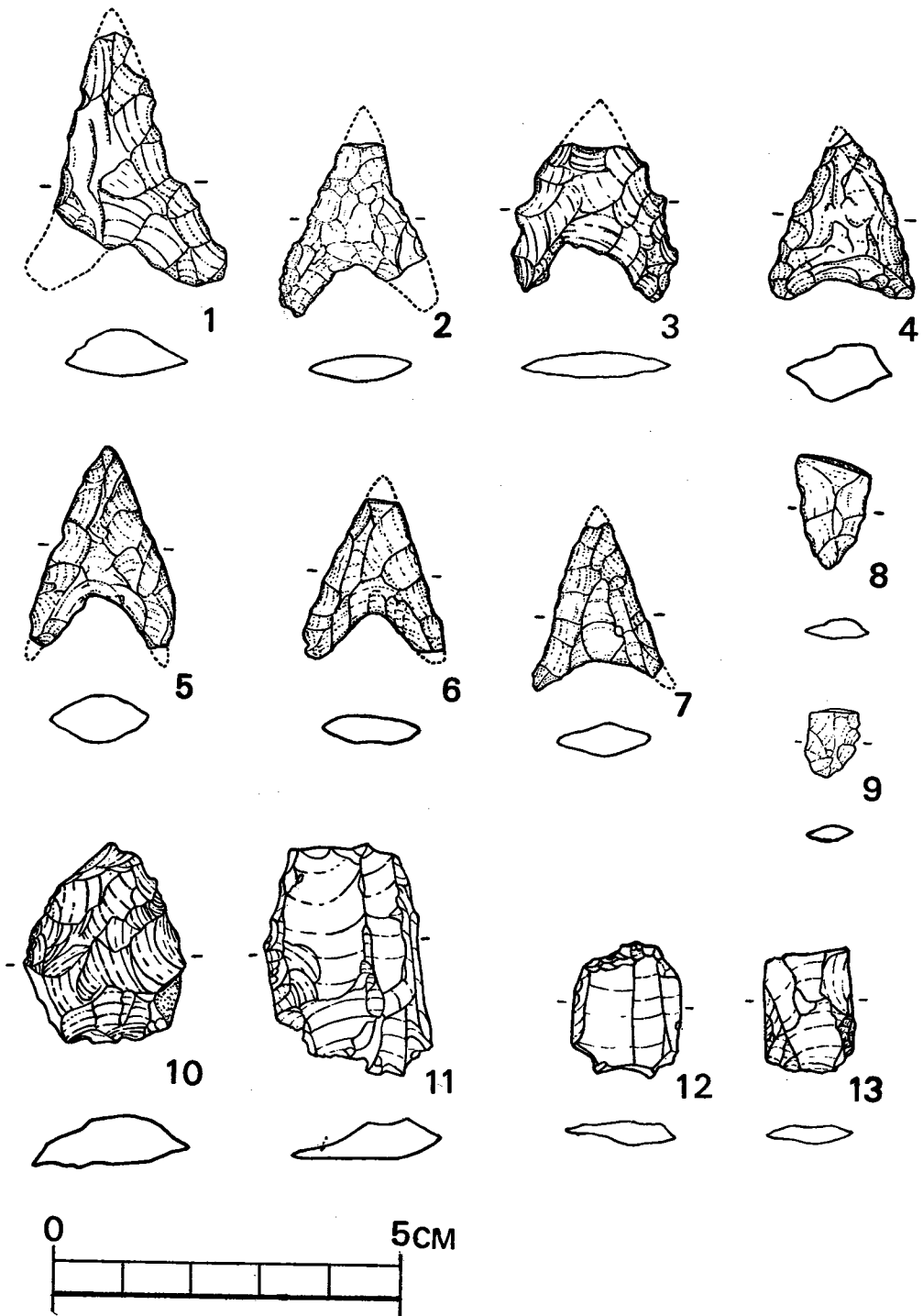


Fig. 95 三 平原遺跡石器実測図② (実大)

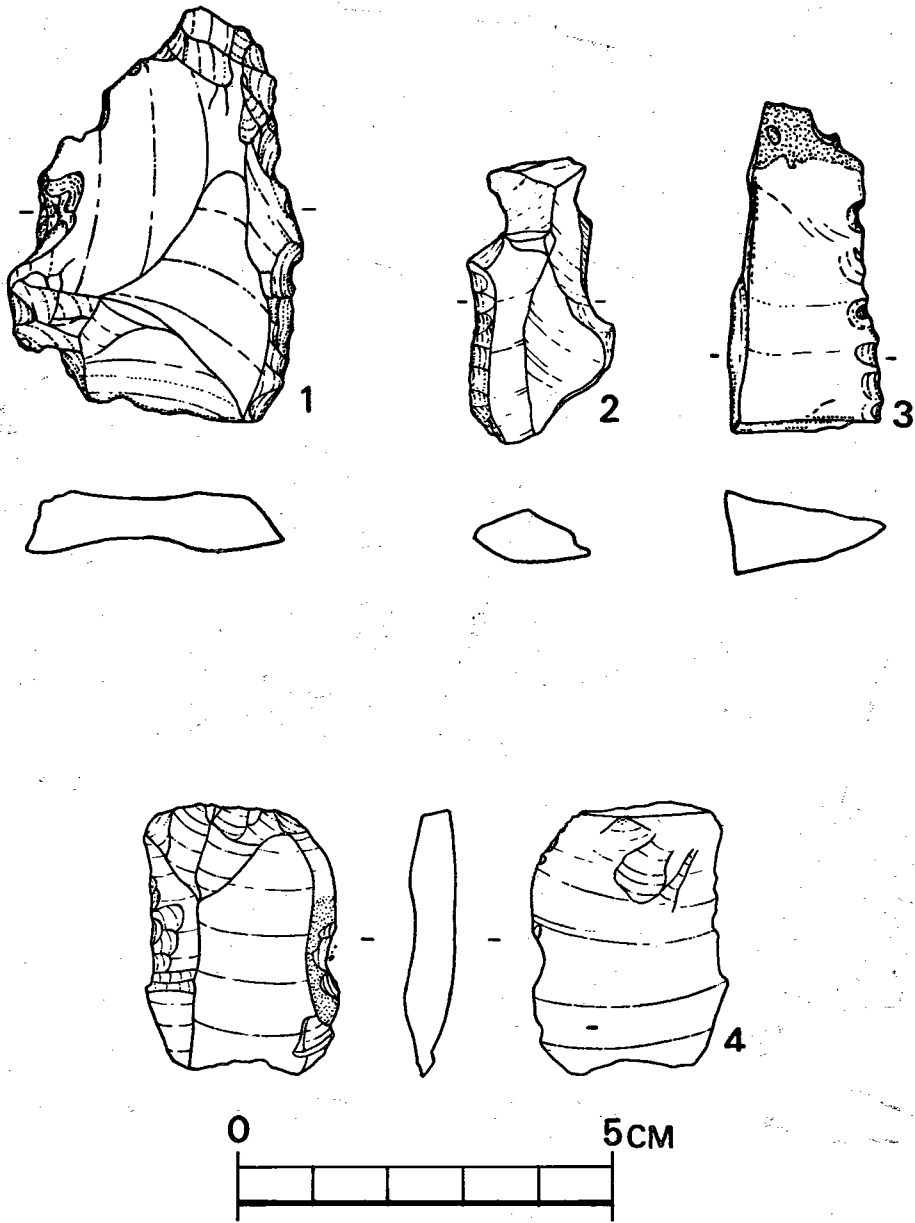


Fig. 93 平原遺跡石器実測図③ (実大)

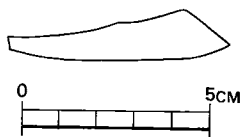
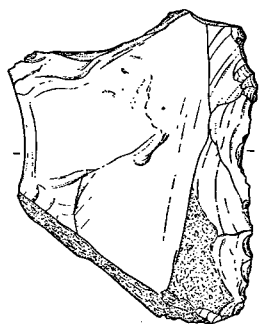


Fig. 97 平原遺跡石器  
実測図④  
(縮尺 $\frac{1}{2}$ )

安山岩製スクレイパー

(Fig. 96-3, Fig. 96-1

Fig. 98-2~3)

黒曜石製スクレイパー

(Fig. 95-11~13,

Fig. 96-2)

磨石 8 点, 石錘 33 点がある。

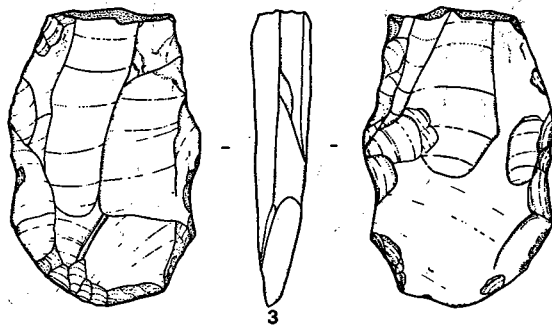
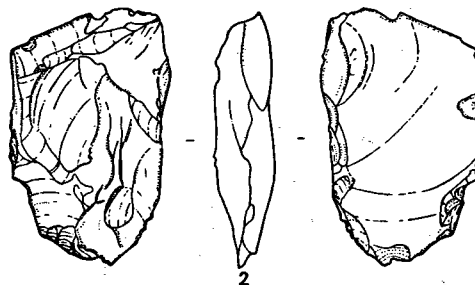
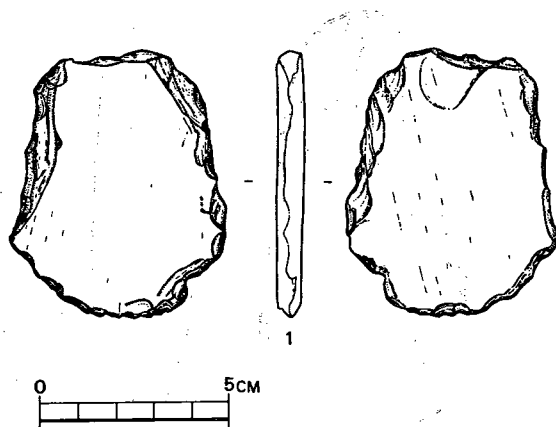


Fig. 98 平原遺跡石器実測図⑤ (縮尺 $\frac{1}{2}$ )



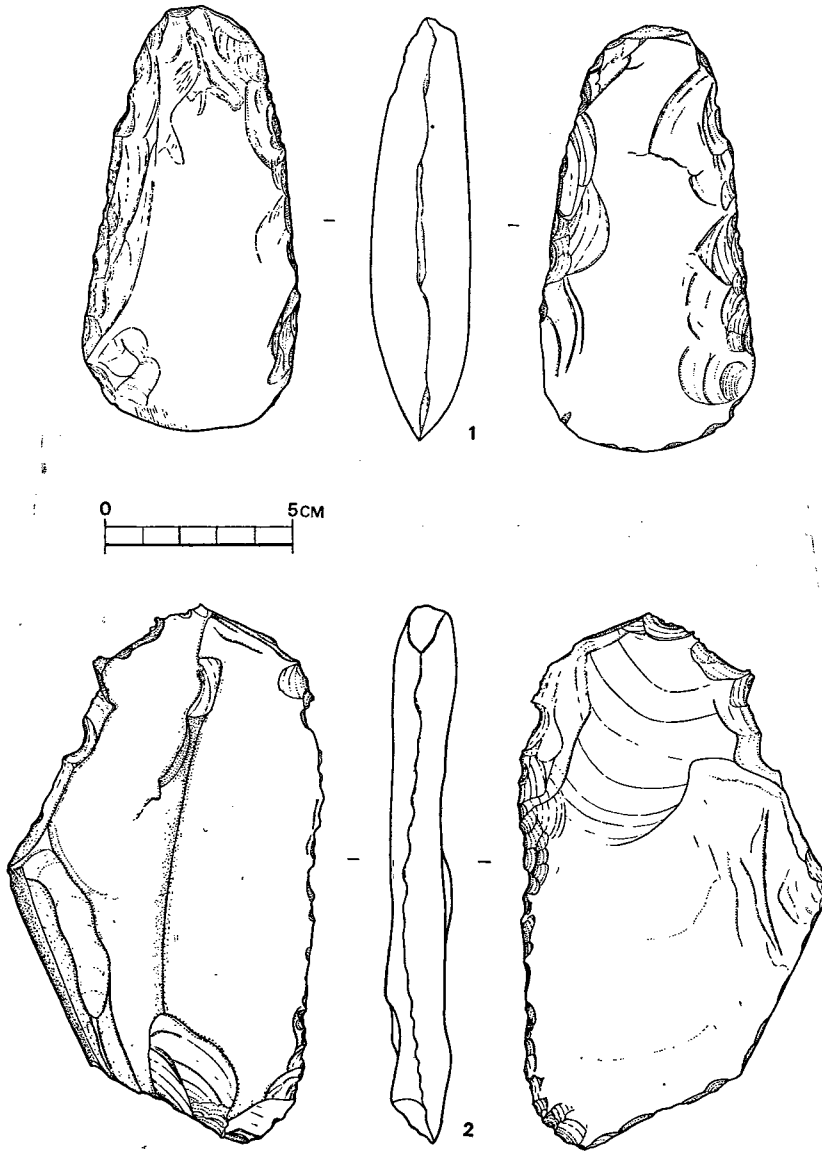


Fig. 99 平原遺跡石器実測図⑥ (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

#### 4 古墳時代の遺構と遺物

土師器及び須恵器の破片は各トレンチからかなりの量(土師器約1350点, 須恵器約150点)発見されている。完形品としてはグリッドE 4の2層から須恵器の杯が3個まとまって出土した(Fig. 100-2~4)。ところが, 約1 mはなれたグリッドE 5の2層から須恵器の蓋のみ単独

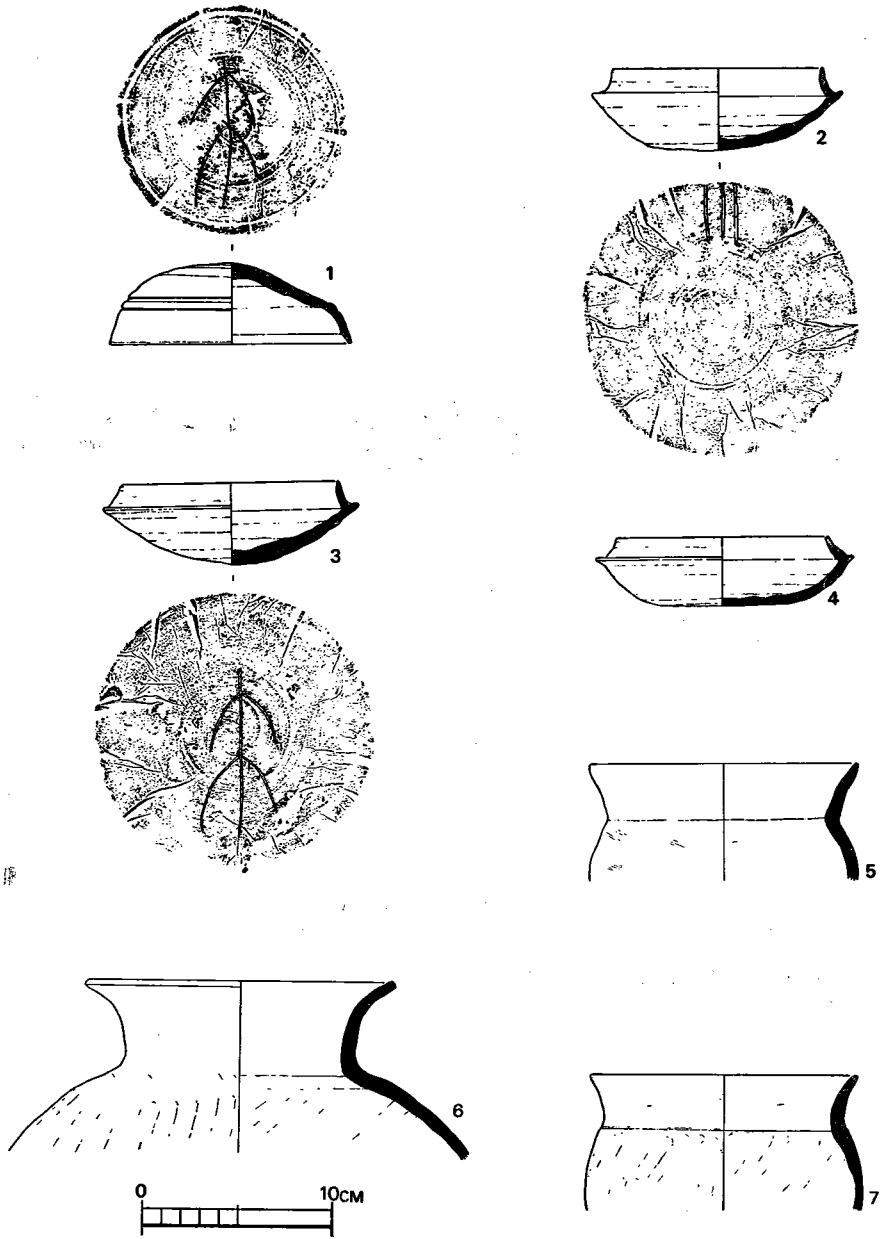


Fig. 100 平原遺跡土器実測図 (縮尺 $\frac{3}{4}$ )

で発見されたが (Fig. 100-1), その窯印は前に発見された杯の1個 (Fig. 100-3) と全く同じでこれらがセットをなすことが判った。なお, これらの杯を出土した地層には人為的なピットの如きものもなにも変化は認められなかった。

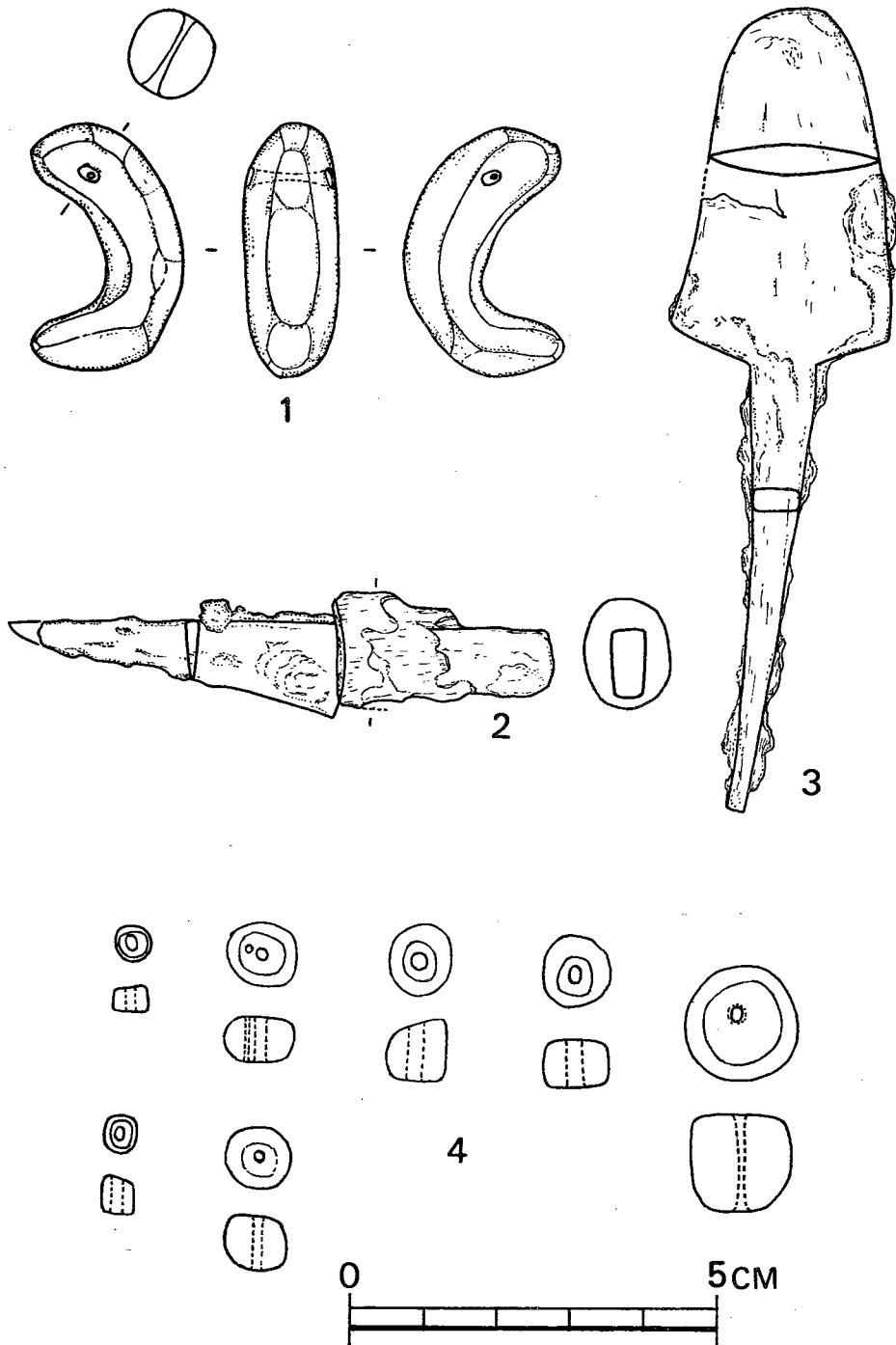


Fig. 101 平原遺跡土製品・鉄器・ガラス玉実測図 (実大)

グリッドH<sub>2</sub>の2層から検出された土製勾玉についても地層にはなんら変化は認められず単独に出土している。

(Fig. 101-1)

イ 1号竪穴住居址 (Fig. 102, pl. 56)

該住居址は長径 (4.25 m) を南北に、短径 (3.8 m) を東西にもった、平面形態は台形に近い方形かと思われるものである。しかし、南西壁附近の地層が攪乱されているため正確なことは判らない。壁の高さは大体27 cmぐらいであったと推定され、北壁から西

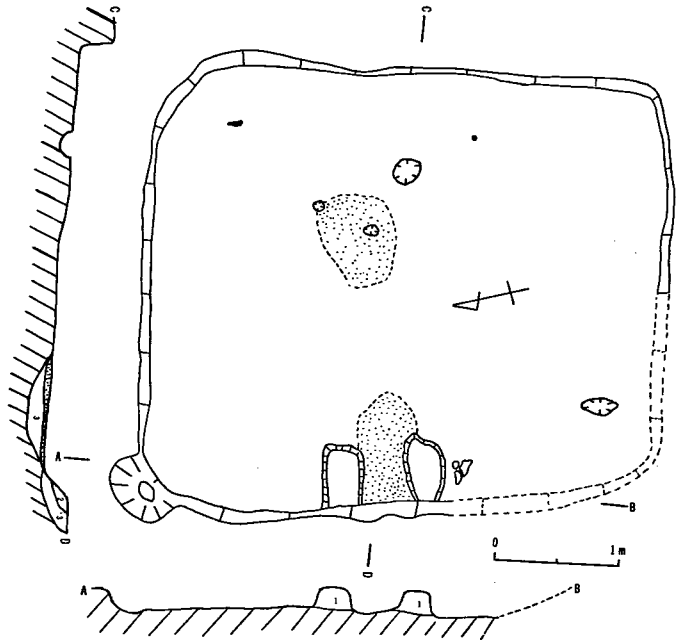


Fig. 102 平原遺跡1号住居跡実測図 (縮尺1/60)

壁にかけての隅の壁には58×36 cmの楕円形をした、深さ25 cmの摺鉢形をしたピットが張り出していた。貯蔵穴であろうか。床面はかなり固く踏み固められていたが、柱穴は検出できなかった。4個のピットが認められたが、それらは不規則な配置と浅いということから柱穴とは見做し難いものばかりであった。炉址は住居内の中央から少々東北寄りに設備され、焼土は75×60 cmの範囲に楕円状に堆積していた。一方、かまどは西壁の略中央に黄色粘土でもって構築されていた。一応、煙道部とも見られる様な小孔が認められたが、この部分の地層の識別は大変難しいところであったため、果してこれが本当に煙道部と見做して差支えないものか躊躇せざるをえない。類例の発見があるまでその存否についての結論は差し控えたい。住居内から出土した遺物としては土製丸玉1個と鉄鏃1本 (Fig. 101-3) と、それに若干の土器片がある。

ロ 2号竪穴住居址 (Fig. 103, pl. 55)

該住居址は1号住居址の北東約5 mほど離れた所から発掘された。長径 (45.5 m) を西北に、短径 (41.5 m及び37.5 m) を南東に有した台形プランを呈したものである。壁の高さは15-20 cmぐらいで、床面は固く踏み固められ、柱穴は4個検出された (P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>)。柱穴の径は20 cm前後で、深さは35 cm前後である。但し、柱穴 (P<sub>4</sub>) は穴が片側に偏し、うまく検出できなかった。P<sub>5</sub>のピットは貯蔵穴と思われ、径は24×20 cm、深さは15 cmで、中には土器片が置かれていた (pl. 55, Fig. 103)。1号住居址と異なりこの住居址には炉はなかった。しかし、かまどは1号住居址のものよりよくできている様である。かまどは西北壁の略中央の壁に1号

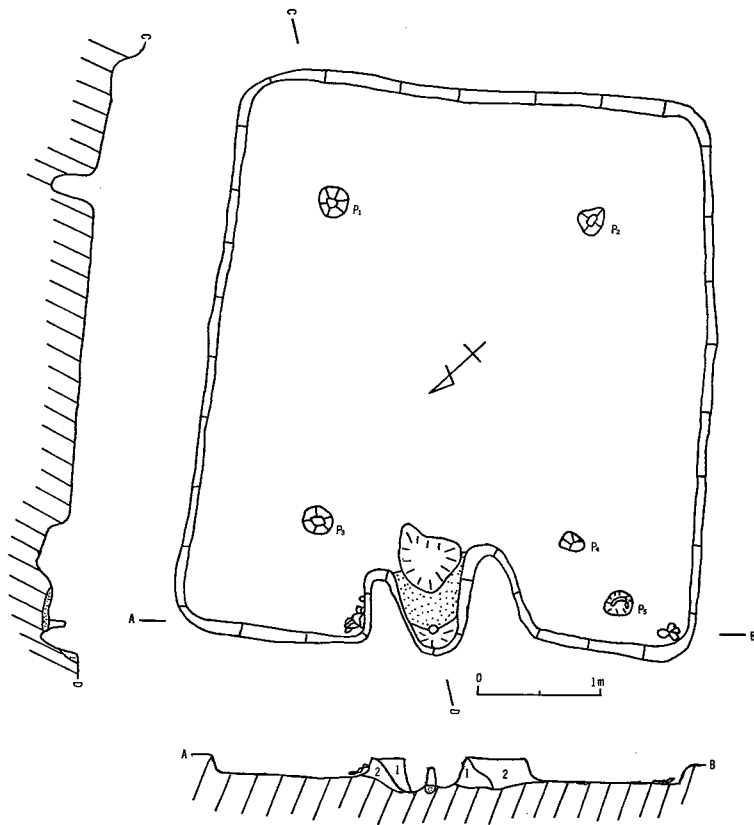


Fig. 103 平原遺跡2号住居跡実測図(縮尺 $\frac{1}{60}$ )

外には土製の穿孔されていない丸玉(径2.1cm)がかまどの傍から検出されたに過ぎない。

住居址の場合と同じく黄色粘土で構築されておりその中央には粘土を固く焼き固められた円錐形の支脚(高さ15cm, 上端径3cm, 底部径8cm)が1個置かれていた。なお、支脚の前後にピットらしきものが認められたが用途は判らない。遺物としては、土器片が前記のピット内以外にも西側壁の隅やかまどの傍や内部(Fig.103)などからも発見されているので、この住居址の時期を知る上に役立つ。土器片以外

#### ハ 平原7号墳(竪穴系横口式石室)(付図 Fig. ⑩, pl.57~59)

箱式石棺の一侧に横口を取り付けた様な所謂竪穴系横口式石室と呼ばれる石室が第1号住居址の南、約3.50mの所から単独で発見された。最初、現地表面下、約40cm前後の深さの所から側壁に用いられた緑泥片岩の扁平な割石がかなり攪乱された状態で姿を現わしはじめ(pl.57-1), その一部は石室内にも落ちこんでいた(pl.57-2)。そこでこれらの石を取り除いたところ、扁平割石を小口積にした側壁(pl.58-3)と1枚の板石を横にしてつくった奥壁と、2枚の板石を両側に立てた閉塞石とがきれいに出来た(Pl.58-4)。この閉塞石の外側には側壁に用いられたものより少々小さい割石が不規則に置かれている(Pl.59-5)。最後に扁平割石を小口積にした側壁を取り除いたところ、(Pl.59-6)に示す様な板石を数枚横に並べた所謂組合せ石棺の如きものが現われた。

現在、側壁の小口積は10段ぐらいで、厚さは約60-70cm, そしてこの下に床面上の高さ10~

20cm ぐらいの板石が横に置かれていることと、攪乱されて外側にくずれたり、石室内に落ちこんだものなどを考慮にいれると、本来、側壁の高さは90cm ぐらいはあったと推定される。しかも、この上に蓋石を置くとその上部は地表面すれすれになってしまい、曾て盛土が存在したのではないかと考えられてくるのである。石室の大きさは床面ではかった場合、長さ約170cm、幅70—75cm 前後である。床面には粘土が敷きつめられ、壁の一部には赤色顔料が塗布されていた。出土遺物としては、奥壁寄りの略中央より最大径1.6cm、最小径0.1cm のガラス玉が29点 (Fig. 101—4)、閉塞石に近い所から鹿角製の柄の付いた刀子の破片1点 (Fig. 101—2)、それに縄文時代早期の石鏃が1点混入して発見された。また、この近くから直径10cm の範囲で赤色顔料の塊が検出された。

この石棺の方位は略東西をさし、死体は頭を東に向けて葬られていたことが、ネックレスと思われるガラス玉の出土位置より推測される。

## 5 結 語

従来、九州では壁にかまどを付設した古墳時代の竪穴住居は発見されていなかった。これは西日本にのみ見出される所謂かまど形土器の普及と関係があると一般に説かれてきた。しかし、今回の調査で九州にもポータブル型かまど以外にも、東日本に見られる様なつくりつけのかまどのあることが判明した。今回の調査で発掘された2軒の住居址は伴出土器より同一時代のもので考えられ、その時代については九州に於ける土師器の編年の研究が確立していない現状なのではっきりしたことはいえないが、土器は鬼高期のものに類似している。そして、また東日本に於てかまどが出現するのは一部和泉期にもあるが、一般には鬼高期よりであることなどから、これらの住居址の時期は鬼高期の頃と見做して大過なからうかと思う。東日本では鬼高期の古い要素の認められる千葉県三ッ堀遺跡、埼玉県前田遺跡に於て炉とかまどが併用されていた。このことは1号住居址の時期を考える上にも参考になると共に、九州でかまどが発見されたということは、我国のかまどの起源として中国を考慮に入れる必要性を感じる。

今回の調査で発見されたタイプの石室は最近知られる様になってきたもので、小田富士雄氏は佐賀県1例、福岡県5例、大分県1例、熊本県1例、計8例をあげておられるが、その他、乙益重隆氏より熊本県天草郡上ノ鼻古墳群、同もへ山古墳、熊本市黒髪町宇留毛立山南麓古墳のうちの1基、をご教示頂いた。時期については5世紀後半から6世紀のはじめにあてるのが妥当ではなからうかと考える。

### 参考文献

- 柳田康雄・副島邦弘「広川平原遺跡」福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—I—』所収、1970。
- 賀川光夫『早水台』 1955。

- 小田富士雄「九州」近藤義郎・藤沢長治編『日本の考古学—古墳時代（上）—』所収 1966。
- 坂本経堯・経昌『天草の古代』 1970。
- 乙益重隆「熊襲・隼人のクニ」『古代の日本(3)—九州)』所収, 1970。 (高山純)

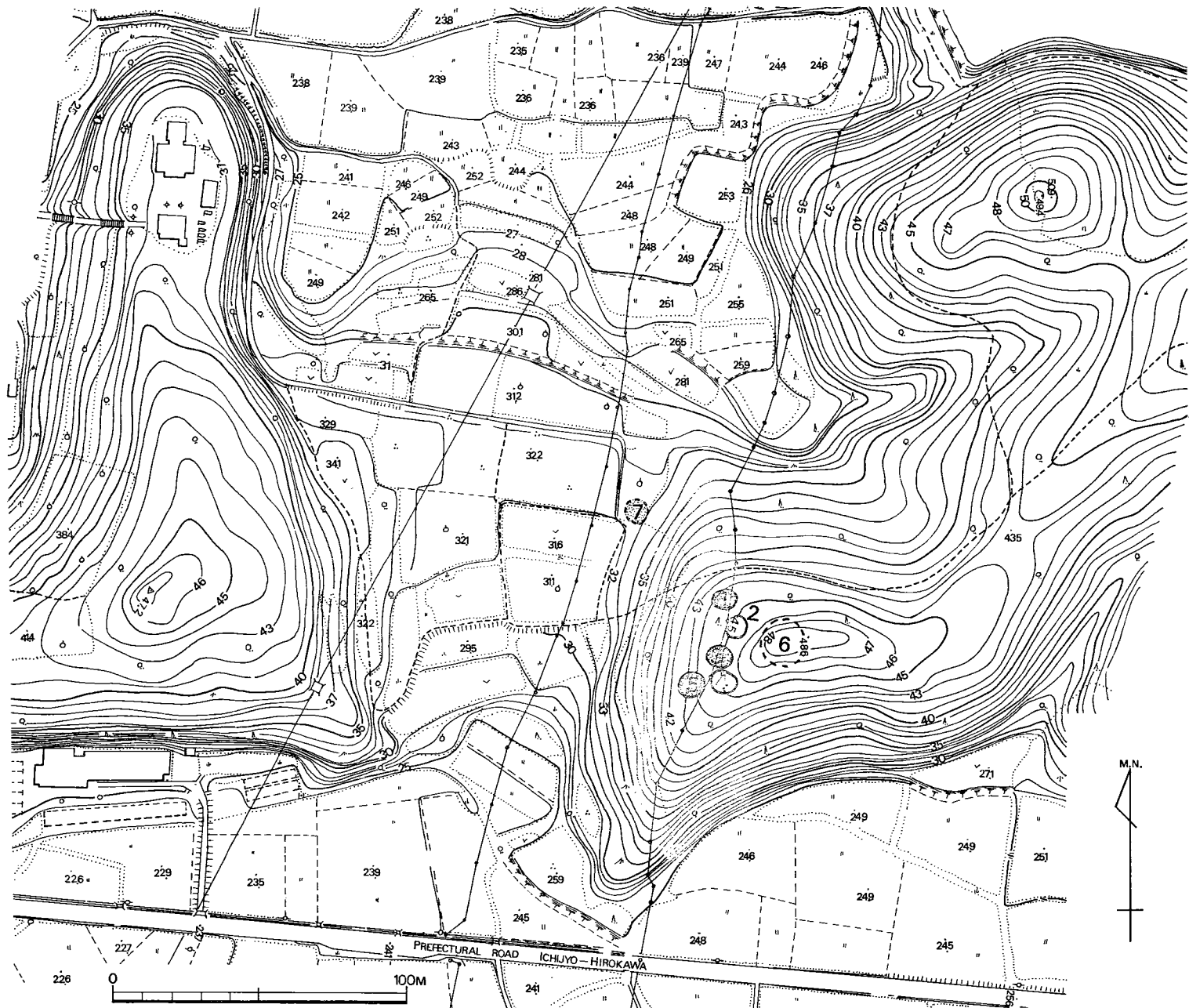


Fig. 104 平原古墳群分布図 (縮尺1/2000)



## VII 平原古墳群の調査

### 1 調査の経過

- 10月1日 器材搬入・テント設営後、発掘地点の伐採作業・材木の片づけ等を行なう。これと平行して1号墳の墳丘測量開始。
- 2日 1号墳盗掘孔の清掃
- 3日 1号墳盗掘孔の清掃作業継続。3号墳の墳丘測量。3・5号墳の写真撮影
- 5日 1号墳の墓壙を完掘。3号墳の盗掘孔の清掃開始。5号墳の地形測量。
- 6日 5号墳の墳丘測量午前中にて完了。午後から盗掘孔に沿って発掘開始。1号墳の墓坑前面のトレンチを拡張・清掃し、撮影に備える。3号墳の墓坑内・前面の清掃。
- 7日 1号墳墓壙全景写真撮影、午後墳丘西半部を除去する。3号墳は清掃後墓壙全景写真撮影。5号墳の清掃作業の進捗により略南に開口する横口式石室であることを確認。ただし横口付近の状況は未だ不明。4号墳の墳丘測量。
- 8日 1号墳の墳丘西半部を地山まで掘り下げ、清掃。撮影後、トランシットにて割つけを行なう。3号墳の墳丘西北部四半分を地山まで掘り下げる。北側で溝を検出。清掃して撮影に備える。5号墳は、石室内清掃続行。墳丘の北西 $\frac{1}{4}$ の表土を除去しはじめる。
- 9日 1・3号墳の実測用の割つけ。5号墳の墳丘トレンチを拡張して西半部の除去作業に切り換える。墓壙検出作業
- 10日 5号墳の墳丘西半部の除去・清掃・石室内清掃中、粉化した人骨少量検出。以外に遺物なし。夕刻、石室と墳丘との関係を撮影。
- 12日 5号墳の石室全景撮影。資材の最小限を残して、山の前3号墳へ移動。午後1号墳の実測開始。
- 13日 1号墳の平面図補足、墓壙断面図作成。
- 14日 3号墳の平面実測午前中に終了。
- 17日 3号墳は、横・縦断面図作成。1号墳の墳丘断面図実測のため、トレンチを1段掘り下げる。
- 19日 1号墳の墳丘断面図作成。3号墳の墳丘断面図作成。5号墳の石室実測のための割りつけを行なう。
- 25日 5号墳の石室平面実測開始。
- 26日 5号墳の平面図午前中に完了。閉室石をとり除く作業を行なう。側面図作成のための割りつけを行なう。
- 27日 5号墳の石室側面実測。
- 28日 5号墳の石室側面実測継続。墳丘断面図作成のため、東側に小トレンチ設定。3号墳埋め戻し

- 29日 5号墳の石室断面図作成。  
 30日 5号墳の石室断面実測。墳丘断面図作成。横口部等の補足調査。  
 31日 発掘区域100全体図作成。石材鑑定のためのサンプルを採集。本日にて、本群の3基の古墳の調査をおえる。

## 2 平原古墳群 (Fig.105)

平原古墳群は、現存7基の円墳により構成されているが、7号墳は既に削平されて墳丘を全て失っており、残りの6基もいずれも墳頂部に陥没が認められて盗掘を受けていることが歴然としている。各墳の尾根での占地をみると、まず本群中で最大の墳丘規模を有する6号墳が標高48.6mの最高所を占めている。尾根筋に位置するのは6号墳1基のみで、2号墳は6号墳につぐ高位を占めるが、尾根筋から少しく下った傾斜面にある。1・3・4号墳の3基は、2号墳よりさらに下った標高41.75mから43.25m前後の斜面にほぼ南北に並び、このうち3・4号墳は墳丘裾を接し合はんばかりである。5号墳は、4号墳の西側、標高38~40.5mのさらに下位の斜面に位置する。7号墳は、他の6基とは稍離れて麓近くの標高32mの緩斜面に所在する。

以下各墳の説明にうつるが、記述の都合上3基中で最も遺存度の良好であった5号墳からとりあげることとする。

## 3 平原5号墳

### 墳丘 (付図Fig.⑤)

東西径約8.5m、南北径8.7m前後とみられ、西側墳丘裾と墳頂部との比高は約2.3mあるが裾はいずれも判然としない。墳丘は全て盛土から成るが、最も厚い所でも56cm後に過ぎない。墓壇周辺の0.8~1.8mの範囲については、地山をカットして整形している。

### 内部主体 (付図Fig.④)

墳丘裾近くに偏在する小形単室横口式石室で、主軸をN11°25'Eにとり、他の2墳が略北西に開口するのに対して略南に開口する。

石室は、地山を掘りこんだ墓壇底に基礎をおき、墓壇は、上部で長さ2.85m、巾約2.4~2.1mの不整長方形プランで、横口が設けられた南側短辺には、更に一段掘りこまれた短筒な墓道が付加されている。墓壇の深さは、奥壁側で0.9m右側壁(山側)では最も深く1.1~1m、左

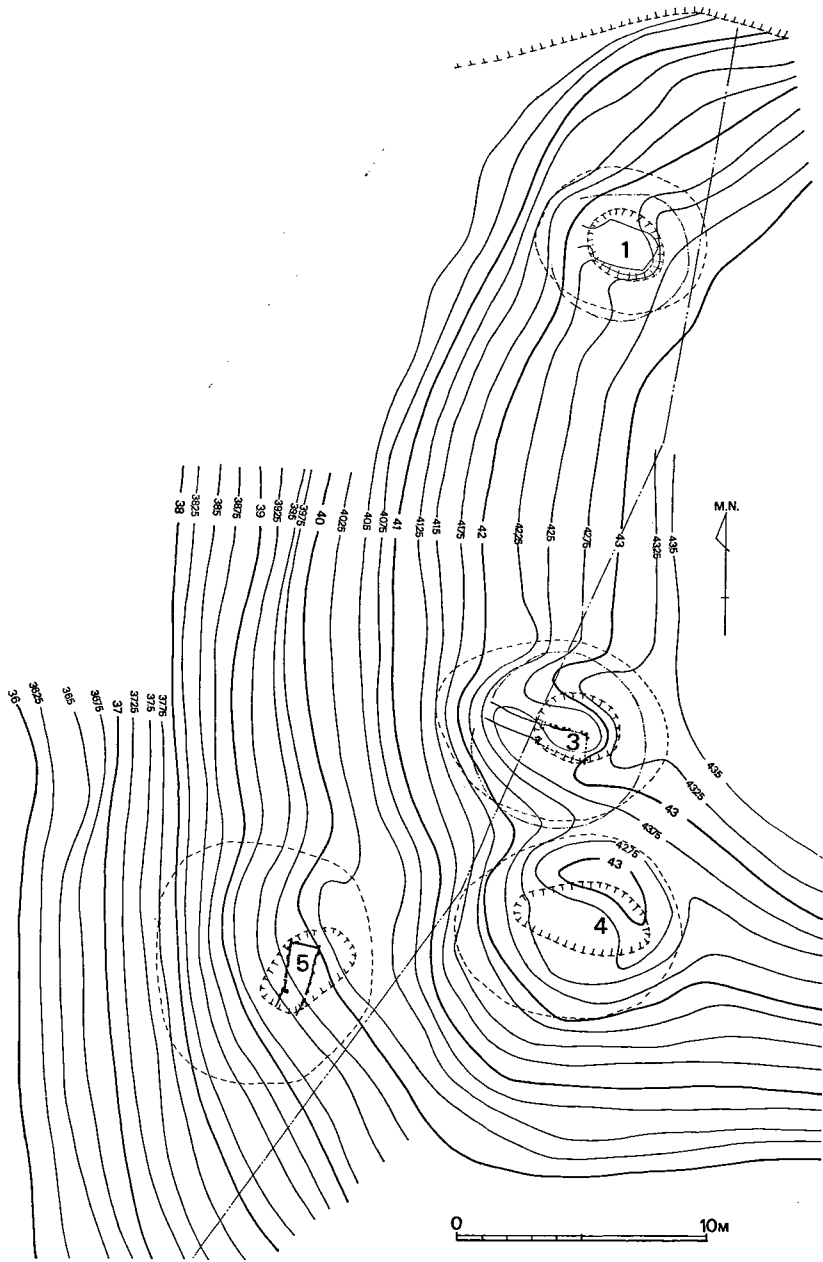


Fig. 105 平原古墳群遺構配置図 (縮尺1/300)

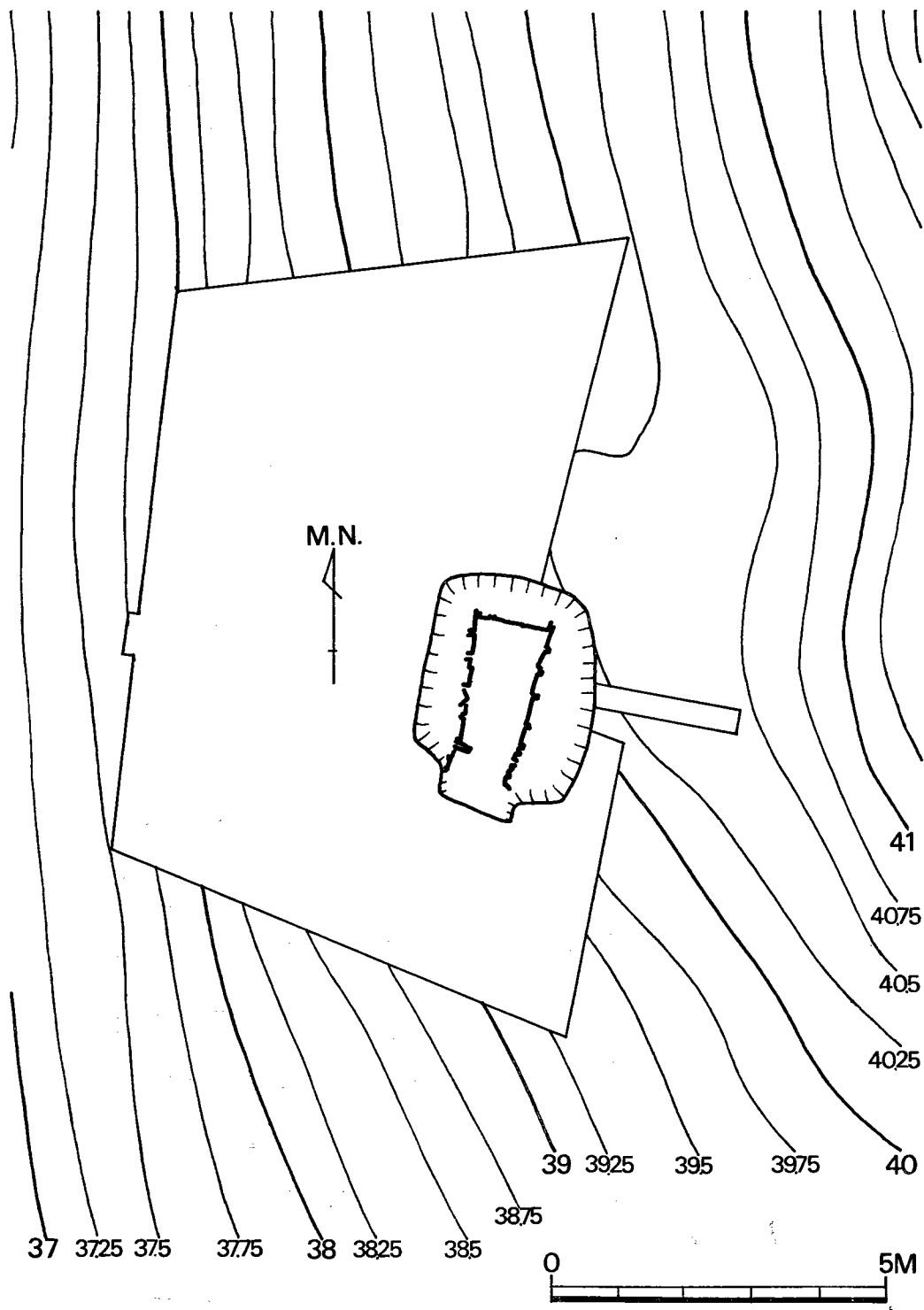


Fig. 106 平原5号墳構造実測図 (1/100)

側壁（谷側）で0.42～0.5mで、横口側を除けば69°～78°の傾斜となっている。

片岩割石を小口積とした玄室は、横穴式石室としては狭小で、内法は長さ1.9m巾は奥壁部で1.17m、横口部では狭まって0.86mに過ぎないが、基本的には長方形プランに属する。周壁

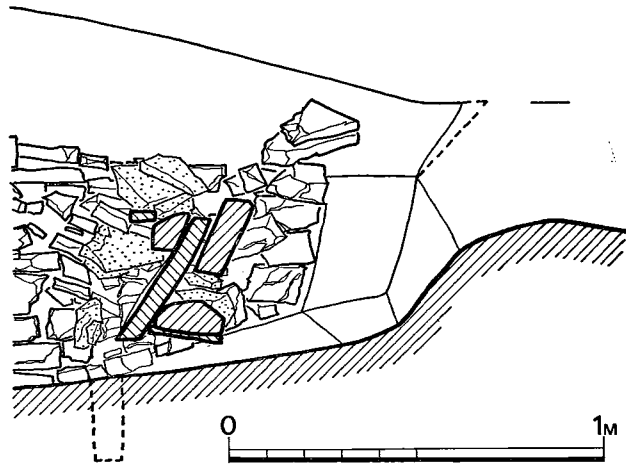


Fig. 107 平原5号墳閉塞石断面実測図（縮尺 $\frac{1}{20}$ ）

構築にあたっては、最下段に長めの石を使用する傾向はあるが、横穴式石室に普通よくみられる腰石に相当するものはなく、2段目以上の用材で同大あるいはむしろこれらを凌ぐ石も多い。ただ奥壁では、最下段に、長さ0.95m、厚12cm、高さ15cmの最長の石を、墓坑底を一段掘り下げて据えており、奥壁としての配慮が認められる。最下段の石を据えるにあたっては、左側壁側では、巾0.55mにわたって墓坑底を数cmの深さに一段掘りくぼめているが、右壁では認められず、また本群中の他の石室でもこうした地業は行なわれていない<sup>①</sup>。これらの上に、片岩割石が除々に持ち送られつつ小口積されており、また後方の控積は墓坑と玄室の巾との関係で横口寄りの玄室前半に特に顕著に認められる。側壁の現存最上段までの高さは、0.7m弱である。

横口部左右には、袖石を立てているが、右側のそれは既に失なわれており、据えつけのために掘りくぼめた穴が存するのみである<sup>②</sup>。左袖石のみかけの高さは40cm強（実高0.6m前後）で石室高の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 程度とみられる。両袖石の間は0.65m前後と見られるが、床面に仕切石にあたるものは現存せず、また掘りこみも認められない。

袖石の外側には、左側で0.4m強、右側で約0.6mの長さにわたって短筒な側壁が設けられており、両側壁はほぼ平行関係にあるが、玄室の中軸線とはズレており、最先端は稍西に偏する。なお、現存高は、左側で0.4m弱、右側で0.6m弱。

両袖石と前庭部両側壁との空間は、不規則に積み重ねられた状態の割石群が認められた。これらの割石は周壁の用材に比して概して小形であり、特に面を揃える等の規則性は認められず土砂と割石とをもってこの空間を埋めたといった感を受けた。また右側壁の旧袖石の位置から前庭右側壁最先端直前にかけては、石の積み方が前後とは明らかに異なり（Fig. 107 右側壁の細線・ドットにて図示した部分）、築造当初の状態ではないことが知られた。右袖石は、当初23cm

前後埋めてまかれていたと見られ、従ってなんらかの事情があってこれを抜く際には、側壁の一部の石を取り除かねばならず、右袖石を抜いた後にこの崩した部分を改めて補修したものと推定される。一方、この補修部分と前述の割石群とは明確に区分できるので、補修作業は、割石と土砂とで埋める作業に先行するとみてよく、同時にこれらが盗掘によってもたらされたのではないことが知られる。

天井石は現存しないが、当初は袖石直上まで架構されていたのであろう。玄室床面には、敷石にあたるものは一切検出されていない。

墓道は、袖石に向かって下降する巾0.9m、長さ0.35~0.5mの短筒なものである。

本墳は、既述のように攪乱を受けており、玄室奥壁の右コーナー近くで検出された骨粉以外出土遺物は皆無である。

さて、ここで問題となるのは、狭小な本石室に追葬が行なわれたか否かである。出土遺物で裏づけるのは不可能であるが、既述したように右袖石が抜かれ、右前庭側壁に補修の痕跡が認められることは、本石室に少くとも2次にわたる埋葬が行なわれたことを示唆するものであろう。つまり、追葬にあたり、第一次の閉塞石をとり除き、更に狭い横口部を遺体搬入の便のためにこれを広くしようとして右袖石を抜き、その後この部分を補修したものであろう。

註 ① 当初、両側とも一段掘り下げの予定であったのが、右側壁では岩盤につかつたので、これを避けたことも考えられる。同様に北東コーナーが隅丸となるのは、この部分で岩盤にあたるからである。

② 玄室右側壁の最先端（袖石側）は略直立し、6段の積み石の面が揃っている。なお、この袖石については後述する。

#### 4 平原3号墳

##### 墳丘 (Fig. 105)

径7m前後の小円墳で、墳丘西裾と墳頂部との比高は1m前後であるが、尾根筋に近い東側では幾分緩斜が緩くなる程度である。

墳丘はFig. 105で明らかのように、2層の盛土よりなるが、最も厚い所でも0.6m強に過ぎない。このうち北側の石室中軸線より3.5m附近には、巾1.9m前後の地山を穿った切り込みが認められ、横口付近まで続き、先端では0.8m強と狭まり、かつ浅くなる。これは周溝と思われるが、径8m前後に及んだ盛土を切りこんでおり、墳形を整えるためのものと見られる。この周溝は南側が未調査のため不明であるが、後述する1号墳の例からみて当初から墳丘北側のみにしか設けられなかったものと見られる。

##### 内部主体 (付図 Fig. ⑬)

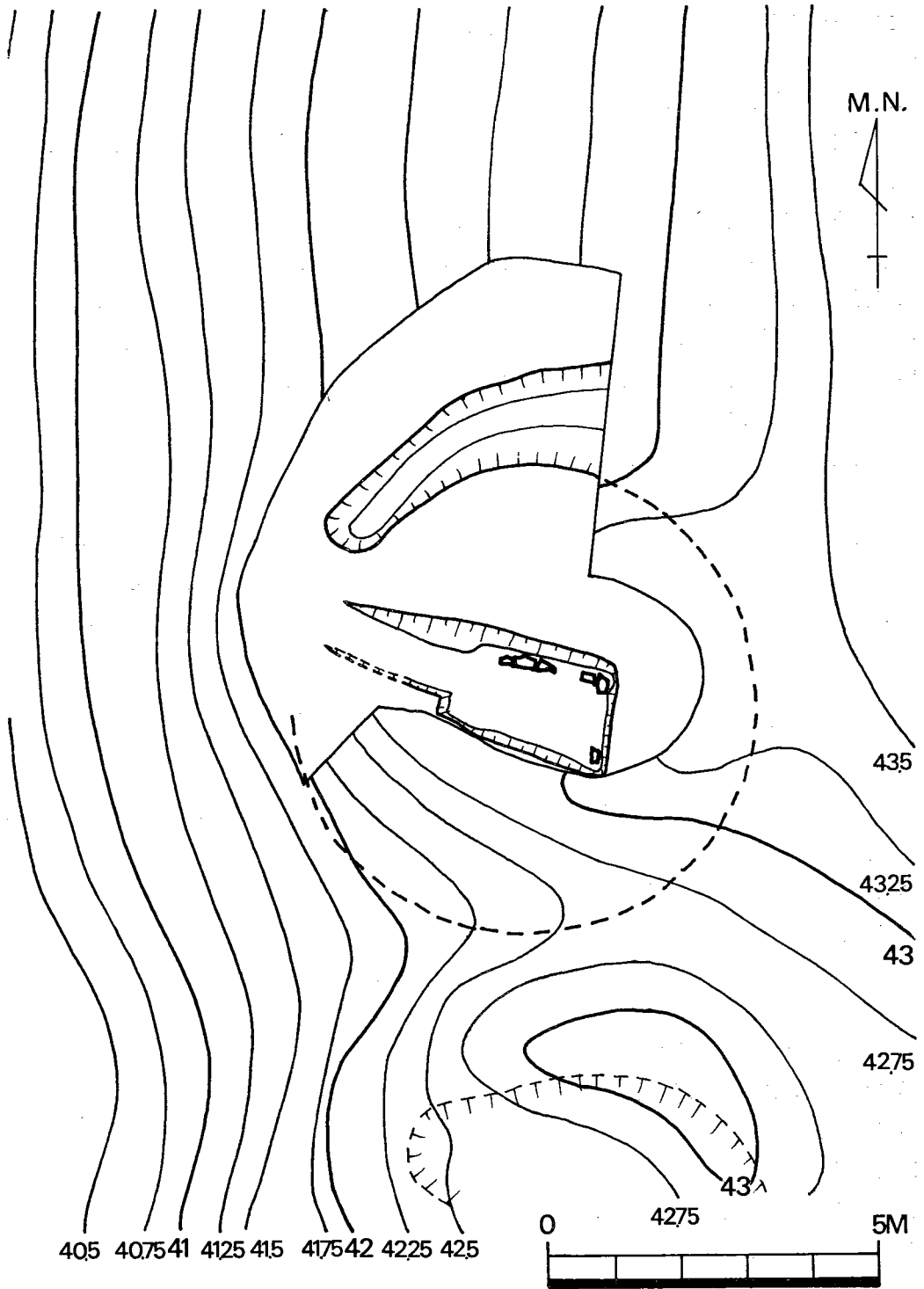


Fig. 108 平原 3 号墳構造実測図 (縮尺 $\frac{1}{100}$ )

主軸をN78°Eにとり、略西に開口する小形単室横口式石室であるが、周壁最下段にあたる割石のうち、奥壁両コーナーの各1石、左側壁の5石が僅かに原位置を保って残存するのみで、他は全て抜き取られていた。

本石室も、地山を穿った墓壇内に築かれており、これは巾1.6m、全長4.5m前後（上端で）の長方形プランで、最も深い所で約1.1mで、前半は墓道となっている。このうち、奥壁にあたる部分は、墓壇上端から深さ0.45m、奥行0.35mの平坦面が設けられており、調査し得た4基中では本例のみである。本石室の規模就中プランについては、上記の割石の他に袖石および仕切石を据えつけるための掘りこみが検出されているので、その復元はある程度可能である。それに拠れば、長さは1.75m前後、巾は奥壁部で1m前後、横口部ではこれより若干狭まっていたと思われ、既述5号墳石室に良く似た構造で、これよりひとまわり小形であったと見て良い。周壁構築は、片岩割石の小口積によるとみられるが、その際墓壇底面をさらに1段掘り下げる等の地業を行なった形跡はない。

両袖石の間は45cm前後の狭いもので、袖石を立てるための掘りこみの深さは、5号墳と略同様で24cm前後である。仕切石は巾7cm前後の板石と見られる。横口前面には、仕切石の位置から長さ2.4m巾0.9m前後の切り通し状の墓道が続き、仕切石から1.1m程までは両端が一段高くなっているが、横口からこの高くなる部分の肩部に、5号墳石室を同様に短筒な側壁が設けられたか否かについては不明である。墓道の床面は、玄室のそれより僅かに低いが略水平位にあり、調査した石室中では最も整ったものである。

#### 遺物

甕 (Fig. 109) 一見して古式須恵器に属することを思わせる。口頸部のみで、胴部を欠先する。口径10.9cm、口頸部高4.2cm前後にそれぞれ復元される。口縁、頸部に楕円波状文、口縁の一部には自然細が認められ、焼成堅緻。各稜線は鋭く、成形は美事である。

(石山 勲)



Fig. 109 平原3号墳須恵器  
実測図(縮尺1/5)

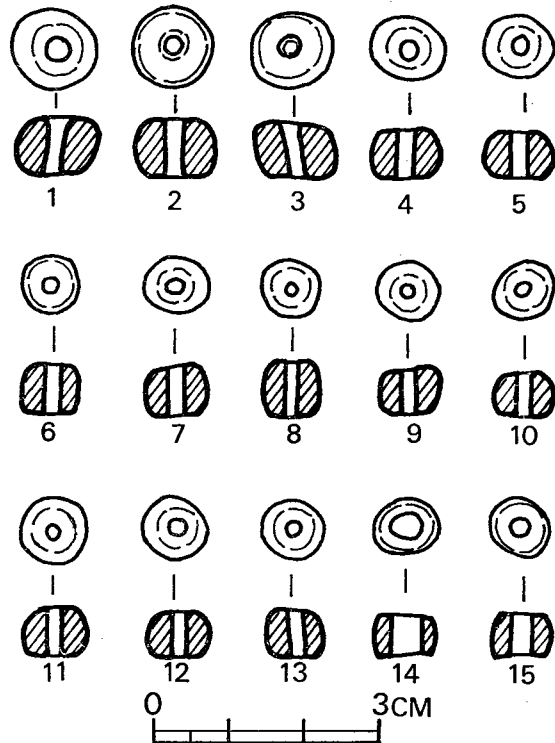


Fig. 110 平原3号墳ガラス玉実測図(実大)



ガラス玉 (Fig. 110) 平原 3 号墳からは、ガラス玉が36個出土した。うち、15個の計測値をあげる。(川述昭人)

### 5 平原 1 号墳

#### 墳丘 (Fig. 105)

径 5.2m 前後の小円墳である。墳丘西裾墳頂部との比高は 0.8m 強で、前述 2 墳と同様に尾根筋に近い東側では殆ど区別がつかない。墳丘は全て盛土からなるが、最も厚い所でも 0.5 m 強に過ぎない。層予は不明確であり、低小な墳丘規模を考えればまた当然と思われる。付図で明らかなくとく、墳丘北側では石室中軸線から 4.5m、南側では同じく 3.75 m、つまり南北径 8.25m 程の範囲に

盛土が認められる。このうちの南半では中軸より 2.5~3 m の地点でカットによる整形の形跡が認められる。一方北側では 2.2~2.35m の地点で盛土から切りこんだ巾 0.9m、深 0.4m 弱 (地山へは 10cm) の周溝が認められる。これは前述の 3 号墳と同様に表面観察では全く気がつかなかったものであるが横口附近まで延びている。なお、この溝は、南側では検出されていない。

#### 内部主体 (付図 Fig. ⑨)

地山を穿った墓壇内に構築された小形単室横口式石室を見られるが、石材は 1 石も残さず全て抜き取られていた。墓壇は、上端で長さ 2.6m、巾 2.1m の不整形長方形プランであり、南西側の短辺には長さ 0.8m 前後、巾 0.75~0.9m の墓道が切りこまれており、5 号墳のそれに近い。深さは奥壁部が 0.95m と最も深い。石室のプランは、墓壇プランの類似から、5 号墳のそれと同構造に属するものとみて良い。ただし、奥壁にあたる墓壇底が、長さ 1.15m、巾 0.45m 前後にわたってくぼんでおり、あるいは奥壁の腰石のすえつけ痕かとも思われ、とすればここには 3 石室中もっとも大きな石が用いられたことになる。横口部底面には、袖石、仕切石を据えつけるための掘りこみは認められない。

番号	径 (y <sup>2</sup> )	厚さ (y <sup>2</sup> )	色調
1	11	7	濃青色
2	11	8	〃
3	11	7.3	〃
4	10	7	青色
5	9.5	6	〃
6	7.5	7	〃
7	8.5	7	明青色
8	8	7.8	〃
9	8.5	7	〃
10	8	6	〃
11	9	6.5	明青色
12	8.5	6.4	〃
13	8	6.5	〃
14	8.5	5.5	青色
15	8	5.5	

Tab. 16 平原 3 号墳ガラス玉計測表

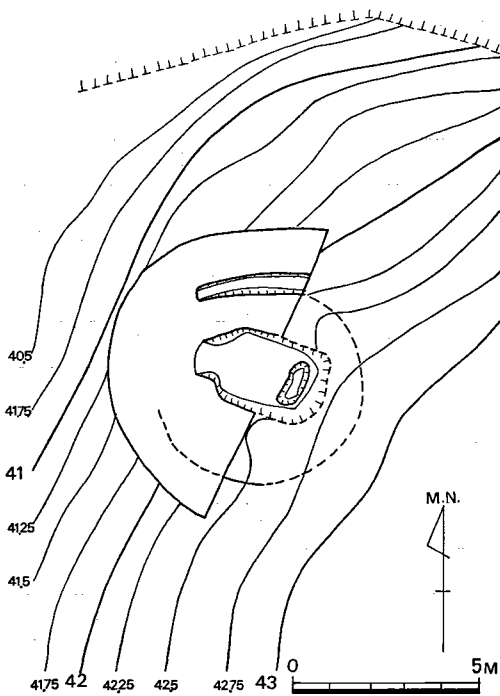


Fig. 111 平原1号墳構造実測図(縮尺 $\frac{1}{200}$ )

今回の調査では、現存計7基からなる平原古墳群のうち、路線内に含まれる3基をその対象としたのであるが、45年夏に東海大学が調査した7号墳(Ⅵ-4参照)と同様の石室構造で、特色ある内容を示すことが明らかになった。以下それらについて触れ、本古墳群調査の総括としたい。

まず、その構造的特色としては

墳丘——極めて低小である

墓壇——石室高(1m前後か)に比して深い。

石室——内法は極めて狭小で、壁面構築にあたっては腰石を使用せず、片岩割石小口積手法をとる。横口前面には短簡な前庭側壁・墓道が付加される。

が指摘される。

墓壇が石室高に比して深いのは、墓壇からの排土を墳丘構築に用いようと意図したためと見られ、これは同時に石室を覆う程度の低小な墳丘規模とも関連する。一方、上記の石室構造上の特色から、4基の石室が竪穴系横口式石室の範疇に含まれることは明らかである。這種石室構造については、かつて触れたことがあるが、これには横口前面の構造に、

A, 前庭側壁が構築されず、横口前面に直接墓道が付設される。

②  
下有木古墳, 片山12号墳

B, 前庭側壁が構築される

④  
中原8号墳

C, 前庭側壁に続いて墓道が付加される

⑤  
七双子2号墳

の3タイプが認められる。平原古墳群のうち、5号墳はCタイプに近く、3号墳はAあるいはCタイプ、7号墳についてはBタイプに属するものと思われる。また、這種石室の構築法では基部から小口積する例と、腰石を使用する例とに二分され、前者が後者に比し基本的には先行する。ただし、本群の場合は当地域で片岩が容易に入手でき、かつ石室用材として各期を通じて使用されており、これのみでは時期決定できない。また丹彩が施される例は這種石室には比

較的多いが、本群では7号墳にのみ認め得る。

ところで、本群の南東、約5.2kmの八女市本に這種石室を内部主体とする真浄寺2号墳が所在するので<sup>⑥</sup>、同石室と平原7号墳石室とを比較しておきたい。内法では、前者は長さ2.24m、巾1.45mと後者に比してひとまわり大きく、特に巾は2倍強となっている。これは、真浄寺2号墳石室では横口寄りに副葬品を置したためのスペースが設けられ、かつ石障によって石室を「T」字形に分割して2体分のスペースが用意されていることによる。従って平原7号墳の場合<sup>⑦</sup>は、1体あるいは単次葬であった可能性が強い。構築手法では、真浄寺2号墳の塗丹された石室周壁は、基部から扁平割石を小口積するのに対し、7号墳では周壁基部は板石を横長に立てており、使用石材も前者に比すれば大き目で、真浄寺2号墳の方が総じて古式の様相を帯びている。なお前者の横口部については未調査のため不明である。

次に副葬品に目を転ずると、既述のように1、5号墳は皆無、3号墳ではガラス丸玉・須恵器臄片、7号墳からはガラス小玉・鹿角装刀子片を検出したにとどまる。盗掘が徹底的に行なわれていることを考慮しても質・量ともに極めて貧弱といえ、当初から副葬品としては武器・装身具等が少量納められた程度であったと思われる<sup>⑧</sup>。けれども、僅少である出土品中で注目されるのは、3号墳出土の須恵器臄片で、該器は第I型式に相当すると見られ、該地域での既知の須恵器中では最古式に属する。這種石室で須恵器が検出されているのは、他に稲童8・21号墳<sup>⑨</sup>、中原8号墳、七双子2号墳の4例が知られているのみで、馬具伴出古墳がまた極めて少ないことと合わせて、這種石室の年代観に示唆する所が大きい。これらのうち、七双子2号墳出土例は第III型式に属して最も新しく、また出土位置は墓道上で、横穴式石室に普遍的に認められる墓前祭等に伴う供献の形態をとっている。他方、稲童21号墳では墳頂部の封土中から第I型式の甕が出土しており、羨道前面を中心として供献される横穴式石室とは様相を異にし、葬送儀礼上でも七双子2号墳に先行する形態と見られる。平原3号墳の場合、その出土位置は不明であるが、稲童21号墳例に近いものと推定される。他の3基についても墓道の形態からみて須恵器を伴わない可能性の方が強く、該地域では6世紀後半以降龐大な量の須恵器が供献されるのとは著しく対照的である。

4基の古墳中、追葬が確認されたのは5号墳のみである。7号墳については、真浄寺2号墳との比較から一応単次葬・1体と考えたい。1・3号両墳については、5号墳石室と略同規模と見られるので、複次葬の可能性がないわけではないが、現状では不明とする以外にない。

4基の先後関係についてであるが、7号墳が他の3基に先行することはまず疑いを容れないところである。1・5号墳は墓壇・墓道プランが類似し、他方3号墳の墓道は4基中では最も整ったものである。占地・開口方向では、5号墳は他に対して、後出する可能性がある。しかし、いづれにしても4墳間に著しい年代差を指摘し得る程の差異は見出せず、相前後して築造されたと見られる。実年代としては、3号墳が臄の型式から大略5世紀後半代に比定されよう。

古墳名	玄室				前庭部			袖石	仕切石	遺体数	備考
	長	巾	高	袖間 石巾	長	巾	高				
平原 1								?	?		
” 3	(1.75)	(1)		(0.45)				○	○		
” 5	1.9	0.86 ~1.67		0.65				○	?	2?	2次葬
” 7	1.7	0.7~ 0.75	0.9	0.3~ 0.4	0.4~ 0.55			○	○		一部丹彩

Tab. 17 平原古墳群石室規模一覧表 (単位はm)

調査した4基の古墳について、上記のごとく理解した上で、次に調査対象とならなかった3基の古墳の概容に触れ、合わせてそこから帰納される本群の全体像について考えてみたい。

2・4号墳は3号墳にそれぞれ北・南接するが、墳丘規模はいずれも低小で、石室構造もまた1・3・5・7号墳と同様に竪穴系横口式石室と推定される。かつ盗掘孔の状況から1・3・7号墳と略同方向に開口するとみられる。従って2・4号墳は、墳丘規模・内部主体ともに調査した4基と同傾向にあると見做される。これに対して6号墳は、本群中では最大の墳丘規模を有し、盗掘により石材を徹底的に抜かれているがその大きさから内部主体が竪穴系横口式石室とは認め難く、略南西に開口する胴張りを有する横穴式石室である可能性が強く、だとすれば本墳は上記6墳に対してその内容は全く異質といえる。胴張りを有する横穴式石室は、該地域に一般的に認められる墓制であり、岩戸山古墳を除けば6世紀初頭から中葉にかけての古墳文化の実態が案外不明であるが、本群の南西約1.4kmの広川町知徳所在の弘化谷古墳が6世紀中葉前後に比定されて現時点では這種石室の中で最も時期的に遡り得るとされているので、6号墳の年代もまた自ずから限定される。従って、6号墳は現存7基中では最も後出することになり、5世紀後半以降殆ど時間的間隔をおくことなく相次いで築造されたと見られる他の6基とは、半世紀以上の時間差を有することになる。

以上から、一見6号墳を盟主としその前面に6基が展開するような分布を示す本群は、構造ならびに築造時期上で、6号墳と他の6基との2グループに分れることが明らかとなったが、ここで問題となるのは両者の関係である。両者を築造した集団については、結論的にいえば系譜的につながらないものと考えられる。すなわち、5号墳で確認されたように追葬を考慮してもやはり6号墳への第1回の埋葬時期とは半世紀におよぶ断絶が認められ、また7号墳の至近で検出された住居址は同墳と大略同時期と見做されるからである。他方1~5・7号墳の内部ではどうであろうか。立地上では、7号墳が麓近くの緩傾斜面に位置する点で他の5基とは異なるが、石室構造上では全く同系に属する以上やはり同一集団によって築造されたと見るべ

きであろう。また、6世紀後半以降のこの地区での古墳の分布は、本書に所収した鈴カ山、山の前両古墳群をはじめとして、数基から成る円墳群が各低丘陵の各尾根筋に位置し、かかる分布状況は各尾根が各集団の奥津域であったことを示唆するものであり、これは上記6墳が同一集団の築造にかかることとの傍証ともなり得る。平野部での農業生産に主としてその経済的基盤をおく家族共同体がそれら集団の実態と見做されるが、家族共同体を構成する単位家族のうちのいくつがこれらの古墳を築造し得たかは、問題の重要性にもかかわらず不明とせざるを得ない。ただここでは、7号墳が1体埋葬の可能性が強く、5号墳で追葬が認められかつ1～5号墳へは多くて各2体程度が埋葬されたに過ぎないと推定されるので、6基全体では最大11人前後の被葬者が想定されること、ならびにこの被葬者数は6世紀中葉以降の該地域での横穴式石室1基あたりのそれに優るとも劣らず、しかも本群ではそれが計6基に葬られているのは、単に石室構造上の制約によるもののみは考え難いことを指摘しておきたい。

他方、6号墳は胴張りを有する横穴式石室としては尾根上の最高所にただ一基で存在しており従って該家族共同体中の1単位家族の墳墓とみられる。これは、大略6世紀後半代を中心とし本墳と一定期間にわたって併存したとみられる鈴カ山・山の前両古墳群では、複数単位の家族が、立地・墳丘規模・石室構造・副葬品等において群内部での格差を有しながらも古墳を築造し得たのとは大きな違いである。古墳群間に認められるこれらの相違は、それらを営んだ各家族共同体内部の諸条件に基因すると思われるが、関連住居址の調査も殆ど行なわれていない現時点では、積極的にこれに立ち入ることは避けたい。

以上、推測に推測を重ねてきたが、ともあれ本調査により、1・3・5号墳は東海大学調査の7号墳石室と同類である竪穴系横口式石室を内部主体とし、須恵器の供献が殆ど行なわれず、胴張りを有する横穴式石室で代表される6世紀中葉以降の該地域の葬・墓制とは異質の内容を示し、かつ筑後の一角でも群集墳の形成が5世紀に遡り、その内部での格差が殆ど認められない等質の様相を帯びることが明らかとなった。

註 ① 拙稿「第12・9号墳の石室構造について」『片山古墳群』所収〈福岡県文化財調査報告書46〉1970年3月。その後、九州各地での調査により、県内では福岡市（市教委文化課塩屋勝利氏御教示）、筑紫郡筑紫野町（国学院大学生赤崎敏彦氏御教示）、鞍手郡宮田町、同郡鞍手町（渡辺正気『銀冠塚』〈福岡県文化財調査報告書28〉1963年3月所収の剣神社古墳群。同群については、1970年11月に小田富士雄氏が発掘調査を実施された）、直方市（同僚の上野精志氏御教示。同氏「福地神社境内3号墳」『遠賀川流域遺跡地名表1』1971年6月）、佐賀県では、小城郡小城町（佐賀大学生井上説男氏御教示）で、這種石室構造に属すると思われる例が相次いで知られている。いずれも報告書が作成されつつあるので、公刊をまち、地名表の充実を図りたい。なお、拙稿の地名表のうち番塚古墳（福岡県京都郡苅田町）を削除する。竪穴系横口式石室では、前壁構造を持たないことを構造上の特色の一つとするからである。この際訂正しておきたい。

- ② 鞍手郡宮田町下有木所在。採土工事に伴ない1970年3月筆者実査。同工事により消滅。
- ③ 遠賀郡岡垣町手野所在——前掲書
- ④ 京都郡勝山町箕田所在——定村貴二「箕田中原古墳群調査報告」〈美夜古文化〉1969
- ⑤ 大分県杵築市本荘所在——賀川光夫・入江英親・小田富士雄『七双子古墳群』〈大分県文化財調査報告書8〉1962年3月。
- ⑥ 岩崎光「八女地方の古墳終末期と副葬」〈九州考古学10〉1960
- ⑦ 内法就中巾が狭いからといって、これが直ちに1体埋葬であったことを意味するのではないことは多言を要しない。
- ⑧ かかる傾向は竪穴系横口式石室では一般的であり、甲冑を出土した、稲童8号墳（横刳板鋳留式短甲1，衝角付冑1——大川清・山中英彦『福岡県行橋市稲童古墳群第一次調査抄報』1965年3月）稲童21号墳（三角板鋳留式短甲1，横刳板鋳留式短甲1，頸甲1，臑当1対，一部金銅装横刳板鋳留式眉尻付冑1——大川清・山中英彦『福岡県行橋市稲童古墳群第二次調査抄報』1965年3月）老司3号石室（短甲1）片山9号墳（横刳板鋳留式短甲2——前掲書）真浄寺2号墳（横刳板鋳留式短甲2——前掲書）が目立つ程度であり、舶載三角縁神獸鏡片等鏡計10面を出土した老司古墳（森貞次郎・岡崎敬・小田富士雄・下条信行・亀井明德・佐田茂『老司古墳』1969年3月）は、前方後円という墳形とともに、這種石室を内部主体とする古墳としては寧ろ異例に属する。
- ⑨ 馬具伴出古墳としては、稲童8号墳（轡・木心鉄板張輪鏝各一对，その他——前掲書）稲童21号墳（轡1・環鈴2，その他——前掲書）
- ⑩ 渡辺正気「弘化谷古墳」〈日本歴史276〉1971年5月
- ⑪ 這種石室への遺体埋葬の状況は  
 単次葬1体——稲童8号墳，同21号墳，下有木古墳，片山12号墳  
 複次葬2体——老司3号石室  
 “ 3体——老司4号石室  
 不明 2体——中原8号墳，老司2号石室，真浄寺2号墳，サコガシラ8号墳，同9号墳，同14号墳，小長崎1号墳  
 （石山 勲）

## VIII 鈴カ山・山の前両古墳群出土須恵器にみられる ヘラ記号について

一連の調査で、夥しい須恵器が出土し、これらには所謂篋記号を有するものが多数含まれて<sup>①</sup>いる。従来、生産遺跡である窯址の調査結果に基づいて、篋記号の意義について言及された論考は多いが、住居址・古墳等の使用場所からの出土資料に基づいて考察したものは比較的少ない。ここでは、鈴カ山・山の前両古墳群出土須恵器における篋記号のありかたと、そこから帰納される二・三について言及したい。

2古墳群のうち、調査し得た計5基の古墳から出土した篋記号を有する須恵器についてまとめると下表のようになる。

	篋記号 図示個数	図示須恵 器総数	図示蓋杯 杯数	蓋杯・杯以外の篋記号を有する器種数
鈴カ山1号墳	53	143	111	提瓶1, 短頸壺1, 高杯1, 平瓶2
2号墳	49	125	81	高杯1, 短頸壺1, 罍1, 把手付碗1
山の前1号墳	14	44	39	提瓶1, 高杯1
2号墳	24	83	63	埴2
3号墳	28	86	48	短頸壺1, 罍2, 直口壺2, 同蓋1, 提瓶1, 甕1

Tab. 18 須恵器ヘラ記号一覧表

篋記号を有する器種としては、蓋杯・杯が圧倒的多数を占め、両器種に限れば25%前後の比率で篋記号が付された可能性があり、他には提瓶・短頸壺・同蓋・高杯・直口壺・平瓶・甕もあるが、いずれも全体からみれば僅少である。また記号は多種多様であるが、いずれも直線数本を組み合わせた程度の単純なものであるので、厳密にこれらを分類するのは困難であるが一応の概数を述べれば、鈴カ山1号墳で28種、鈴カ山2号墳で16種、同3号墳で16種となり、各墳とも多種類の篋記号を有することは留意すべきである。銘記位置は、器表が殆どで、蓋杯・杯では頂部あるいは底部の中心より稍下就中右下に付されるものが多い。これは、銘記者が右利とすれば当然の結果と思われる。内面に付される例は極く僅かで、少数の特定の記号に限られる。

蓋杯・杯のうち、同一記号を有してセット関係にあるものは、19種20セットに及ぶ。セット関係にあるそれぞれは、当然ながら器形・調整・胎土において同傾向にあり、同一工人の手になることを示している<sup>②</sup>。また蓋杯・杯ともに内面に比して器表の方が焼成は良好であり、かつ炎のあたり具合からも所謂重ね焼きではなく、杯に蓋をかぶせた状態で焼成が行なわれたこと

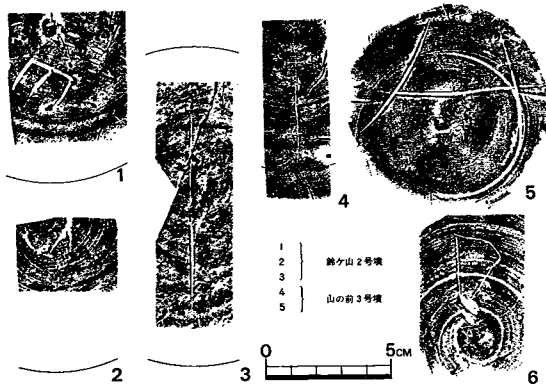


Fig. 112 鈴ヶ山2号墳・山の前3号墳の  
須恵器ヘラ記号拓影（縮尺1/4）

製作用の、接合の際の目印としたのであろう。一方後者は山の前3号墳の有蓋壺で (Fig. 82—59) で、底のX印は蓋部 (Fig. 82—58) 頂部の×印と対応して、既述の蓋杯・杯の場合と同様にセット関係にあることを示すと見られる<sup>⑤</sup>。肩部の篋記号は稍複雑なもので、×印とは明らかに別の意義を有するものであろう。また肩部の記号は×印に比して彫りが深く銘記に時間差が認められるようでもあり注目される。鈴ヶ山2号墳出土の蓋杯 (Fig. 25—13) では、×印とY印とを組み合わせたとような記号が認められる。該器については、セットになるべき杯が採集されていないので確言できないが、あるいは上記の山の前3号墳出土の有蓋壺と同様なあり方を示すのかもしれない。

これまで、篋記号を有する個々の須恵器についてみてきたのであるが、ここでこれらの須恵器が古墳間でいかなる関係にあるかについて少しく触れておきたい。3個体以上にわたって同一記号を有する例は多いが、これらのうちで複数の古墳間にわたって認められる確実な例としては、

- A——（山の前2号墳—10・25・27）  
（山の前3号墳—34）
- B——（鈴ヶ山1号墳—7～9・124・125）  
（鈴ヶ山2号墳—59）

がある。両古墳群の存在が、墓域を異にする2つの家族共同体の存在を意味し、かつ両群を構成する各墳は共同体の各単位家族の墳墓とみることが許されるならば、こうした篋記号のあり方は、同一工人の手になる須恵器が複数の単位家族に供給されたとも見做される。ただし上記2例の場合には、墓前祭への複数の単位家族の参加も想定され得るので、1単位家族にのみ供給された可能性がないわけではない。また、山の前1号墳および同2号墳出土の提瓶 (Fig. 52—41・Fig. 83—69) は、B例に酷似する篋記号を有する<sup>⑥</sup>。ただし、両者は口縁部の形式・調整・

が知られる。以上の篋記号のあり方は、蓋杯・杯に限定すればセット関係にある双方に銘記することを原則としたことを想定させ、また篋記号の意義の一つがセット関係を示すことにあることを思わせる<sup>④</sup>。

1個体に複数の記号が付される例もあり、これには同一記号2個の場合と異なる記号計3個の場合とがある。前者は山の前3号墳の提瓶 (Fig. 83—69) であるが、該器は胴部と頸部とを別途に



焼成・胎土に相違が認められ、前者の方が古式の様相を帯び、記号自体も最中の直線を最初に引き他例とは異なる。従って両者を同一工人の手になるとするには少なからぬ躊躇を覚える。しかし、鈴ヶ山1号墳出土の平瓶 (Fig.16—105, Fig.19—143) と山の前3号墳出土の蓋杯 (Fig.80—21) とにも同一かと思われる記号が付されており、鈴ヶ山・山の前両古墳群にまたがる可能性もあるので一応注意しておきたい。

使用遺跡での篋記号を有する須恵器のあり方の検討の必要性が提起されて久しい。古墳から出土する須恵器は供献されたものである以上、厳密には特定個人あるいは単位家族の所有物とは見做されない点に資料的制約はあるが、これまで述べてきた篋記号のあり方から帰納される篋記号の意義は、

- ① 有蓋器種の場合、セット関係を明らかにする。
- ② 口頸部と胴部とを別途製作する大形器種にあっては、接合の際の目印とする。
- ③ 製作者の識別

の3点に要約され、いずれも製作者側の必要性に基づいて付されたことを意味する。①は、乾燥・焼成時の便を考へてのことと思われるが、結果的には使用者側にとっても役立つ側面がある。②は、製作時のメモ的性格を有するが、なかには消されたものも存在すると思われる。③の場合は、①・②の意義とも重複する場合も十分考えられるが、山の前3号墳の蓋付壺のように単純な意匠の篋記号の場合には、識別のためにさらに別の記号が付されたのであろう。ただし、厳密な意味で製作者にとって何故識別が必要であったかは不明であり今後、須恵器生産体制就中工人(須恵器成形・焼成技術を有する人間)の生産活動が<sup>⑦</sup>いかなる生産組織のなかで、いかなる形態でなされたかの追究の過程で明らかにさるべきであろう。既述したように、両古墳群出土須恵器は、ⅢA・ⅢB・Ⅳ・Ⅴ型式に属するが、篋記号が付されているのはⅢB・Ⅳ型式に限られている。これは、両古墳群でのⅢA型式の須恵器の出土量自体が僅少であることのみによるのではなく、該地域においてⅢB期以降爆発的に須恵器の生産量・古墳への供献量が増大するのと無関係ではなからう。

篋記号は、所謂「窯印」として銘記されたのではないことは既に先学の立証されたところであるが、結果的には生産地同定の重要な手懸りの一つとなる。両古墳群出土須恵器の供給地としては、器形・焼成度からみてその一つに塚の谷4号窯が挙げられることは既述したところであるが、同窯の報告書には各篋記号と須恵器との関連が明示されていないので、単純な意匠の多い篋記号からの同定はかなりの困難である。が、一応参考までに塚の谷4号窯出土篋記号に類似するものを列挙すれば

- 1 鈴ヶ山2号墳—11……………9※
- 2 鈴ヶ山1号墳—91……………17
- 3 鈴ヶ山2号墳—53……………21

## 4 山の前2号墳—12・13・15……………22

山の前3号墳—34

## 5 山の前1号墳—15……………23

※同報告書第25図の番号に一致

がある。1の鈴ヶ山2号墳出土例は蓋杯であるが、塚の谷4号窯の9はカキ目調整が施されているので器種が異なるのかもしれない。篋削りの状況も一致し、ほぼ同一記号と思われるのは4のグループである。5は、記号そのものは類似するが、器形において山の前1号墳出土例は第Ⅳ型式に近い小形のもので、第Ⅲ型式を主体とする塚の谷4号窯出土例とは異なるのかもしれない。この他に類似するものもあるが、一直線等甚だ単純な意匠であるので判断し難い。

また、地域的に異なる筑前国に属するが、筑紫郡太宰府町池田所在の池田遺跡第2・3号住居跡出土の篋記号中に、両古墳群出土例と類似するものがある<sup>⑥</sup>。一つは同報告書第25図の3でこれは、鈴ヶ山1号墳出土の35・36・132・133、山の前1号墳出土の6と類似する。他の一つは第25図の5で、これは鈴ヶ山2号墳の1、山の前1号墳の8、同2号墳の7、同3号墳の2～5に類似する。もっとも、太宰府町に隣接する大野町の牛頸・乙金地区等には多数の窯址群が確認されており、また篋記号自体が単純であるだけに速断はできないが、記号が類似することを指摘しておきたい。帰納される所多く、かつ重要だからである。

註 ① 古墳ではないが和泉国陶邑古窯址群では、篋記号を有する須恵器は僅かであると報告されており（田辺昭三『陶邑古窯址群1』1966年4月）、1号窯で16種類、4号窯で30種類以上の篋記号が確認された筑後の塚の谷窯址群とは様相を異にしている（小田富士雄・藤口健二・石松好雄・真野和夫・松本肇・宮小路賀宏・岩崎光『塚ノ谷窯跡群』1969年3月）

② 逆に、器形・調整法・胎土において同傾向にあるもので異なる篋記号を有するものはなく、この事実は消極的に篋記号が使用者側からの要求に基くものではないことを意味する。

③ 篋記号がない場合でも同様である。

④ 鈴2—22・23、山1—8～11では一方にしか記銘されていない。ただし、後者の篋記号に酷似する記号を有してセットになる例が平原遺跡で確認されている（Fig. 100—1・3）

⑤ 明らかにセット関係にある蓋杯・杯のうち、一方にしか篋記号をもたないものもある。例えば、鈴ヶ山2号墳出土の22・23では一方にしか記銘されていない。また山の前1号墳でも、器形・焼成・胎土から、同一工人の手になるとされる蓋杯5個（Fig. 51—8～10・12・13）杯1個（Fig. 51—11）計6個は同一篋記号計4個を有し、2セット（8—9、10—11）が確認されているが、いずれも蓋と身のどちらか一方のみにしか篋記号をもたない。ただ同例では、身の破片が小さくまた少ないので11以外に身で篋記号を有するものがあつた可能性がないわけではない。また、鈴ヶ山2号墳出土の有蓋短頸壺（Fig. 30—95・96）では壺の底部にのみしか付されていない

⑥ この他、鈴ヶ山2号墳出土の46・48～50（Fig. 26・27）の蓋杯・杯がB例に酷似する篋記号を有する。これらは、B例がⅢの型式に属するのに対して第Ⅳ型式に属するとみられ、従ってその間

に時間差が存することになる。ⅢB型式に属する塚の谷4号窯址からもかえりのある蓋が検出されており、我々は窯址での調査結果に基づいて第Ⅳ型式のものと認知したのではないが、形態的には後出するものと見られる。同記号が2型式にわたって認められる例は、塚の谷4号窯では特に指摘されていないが、陶邑窯址群においては、百年以上の時間差を有するTK208号窯とTK217号窯とにおいて発見されており、田辺氏は「生産者の系統を示すものか」されているが、これにはなお検討の余地があろう。

- ⑦ 従来一般的に古墳時代の窯業に従事する工人は一方で農業を営んでいたとされていたが、小田富士雄氏は、風向の関係から塚の谷窯址群の操業期を「旧暦の夏期後半から秋にかかる頃が最適」とされ、この時期が農繁期前と一致することを実証された（前掲書）。
- ⑧ 前川威洋「住居跡」池田遺跡『南バイパス関係埋蔵文化財調査報告1』1970年3月。（石山勲）

## IX 九州複室構造横穴式石室地名表

## 福岡県

古墳名	地名	参考文献
埴安古墳	筑紫郡筑紫野町杉塚	
王塚古墳	嘉穂郡桂川町寿命	<ul style="list-style-type: none"> <li>川上市太郎「筑前王塚古墳」『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告』第11輯 1935</li> <li>梅原末治・小林行雄「筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳」『京大報告』15冊 1940</li> </ul>
うらんやま古墳	嘉穂郡穂波町	<ul style="list-style-type: none"> <li>穂波町教育委員会『穂波町史』 1969</li> </ul>
竹原古墳	鞍手郡若宮町竹原	<ul style="list-style-type: none"> <li>金関丈夫「鞍手郡若宮町竹原古墳奥室の壁画」『九州考古学』19号 1963</li> <li>森貞次郎『竹原古墳』 1968</li> </ul>
大塚古墳	鞍手郡鞍手町	<ul style="list-style-type: none"> <li>『鞍手郡誌』 28 1963</li> </ul>
銀冠塚古墳	鞍手郡鞍手町八尋大谷	<ul style="list-style-type: none"> <li>渡辺・松岡・小田・永井・柳ヶ瀬「銀冠塚」『福岡県文化財調査報告書』28 1963</li> </ul>
橘塚古墳	京都郡勝山町	<ul style="list-style-type: none"> <li>梅原末治「豊前京都郡の二三の古墳」『中央史壇』9の4</li> <li>梅原末治『大和島庄石舞台の巨石古墳』『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第14冊 1937</li> </ul>
綾塚古墳	〃	〃
庄屋塚古墳	京都郡勝山町下里田	<ul style="list-style-type: none"> <li>小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」『史淵』100号 1968</li> </ul>
稲童1号墳	行橋市稲童石並 粕屋郡古賀町且ノ原	<ul style="list-style-type: none"> <li>森田勉氏の御教示による</li> </ul>
東大谷古墳	福岡市野芥東大谷	
剣塚古墳	福岡市那珂町竹下	<ul style="list-style-type: none"> <li>貝原益軒『筑前続風土記』</li> <li>『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1輯 1924</li> </ul>
五郎山古墳	筑紫郡筑紫野町原田	<ul style="list-style-type: none"> <li>小林行雄編『装飾古墳』 1964</li> </ul>
下馬場古墳	久留米市草野町草野	<ul style="list-style-type: none"> <li>久留米市教育委員会『郷土の文化財』 1967</li> </ul>
前畑古墳	久留米市草野町草野前畑	<ul style="list-style-type: none"> <li>島田貞彦「筑後に於ける二三の装飾古墳の新例」『歴史と地理』14-1 1923</li> </ul>

古墳名	地名	参考文献
葉師下南古墳	久留米市草野町草野葉師下	◦石野義助・武藤直治・宮崎勇蔵「水繩山麓の装飾古墳」『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第13輯 1939
葉師下北古墳	〃	〃
寺徳古墳	浮羽郡田主丸町益生田	〃
地徳狐塚古墳	浮羽郡田主丸町地徳古賀	◦水野貞澄「筑後浮羽郡竹野村知徳古墳」『考古学雑誌』7巻7号 1917
清澄橋古墳	浮羽郡田主丸町石垣清澄橋	◦小林行雄編『装飾古墳』 1964
古畑古墳	浮羽郡吉井町富永	〃
重定古墳	浮羽郡浮羽町朝田	◦高橋健目『日本原始絵画』 1927
楠名古墳	〃	◦石野義助・武藤直治・宮崎勇蔵「水繩山麓の装飾古墳」『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告』13輯 1939
塚花塚古墳	〃	◦小林行雄編『装飾古墳』 1964
狐塚古墳	朝倉郡朝倉町入江	◦渡辺正気・古賀寿『筑前国朝倉郡狐塚古墳』『福岡県文化財調査報告書』17輯 1954
千代田古墳	朝倉郡朝倉町千代田	◦朝倉高等学校史学部「千代田古墳」『埋もれていた朝倉文化』 1969
観音塚古墳	朝倉郡夜須町砥上	◦朝倉高等学校史学部「観音塚古墳」『埋もれていた朝倉文化』 1969
栗田谷1号墳	朝倉郡三輪町栗田谷	◦朝倉高等学校史学部「栗田谷古墳群」『埋もれていた朝倉文化』 1969
2号墳	〃	〃
6号墳	〃	〃
宮地嶽古墳	甘木市宮野湯ノ隈	◦朝倉高等学校史学部「宮地嶽古墳群」『埋もれていた朝倉文化』 1969
甘水古墳	甘木市秋月	◦朝倉高等学校史学部「甘水古墳」『埋もれていた朝倉文化』 1969
丸山古墳	八女市宅間田宇土	◦上滝満次郎「八女郡古墳調査表」『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告』1輯 1925 ◦高橋健目『日本原始絵画』 1927
乗場古墳	八女市吉田	◦小林行雄編『装飾古墳』 1964
塚ノ谷古墳	八女市忠見塚ノ谷	◦小田富士雄他『管の谷窯跡群』 1971
童男山古墳	八女市川崎山内	〃
山ノ前1号墳	八女郡広川町広川	◦本文参照
萩尾古墳	大牟田市東萩尾町	◦小林行雄編『装飾古墳』 1964

古墳名	地名	参考文献
隈古墳	大牟田市隈	
茂登山号墳	大牟田市上内茂登山	◦藤口健二氏のサーベイによる。群としては確認されているが号数は不明。
甘木山7号墳	大牟田市甘木	◦大牟田市教育委員会『大牟田市史』上巻 1965
9号墳	〃	◦〃
釈迦堂F号墳	大牟田市上内	◦〃
G号墳	〃	◦〃
H号墳	〃	◦〃
号墳	〃	◦藤口健二氏のサーベイによる。群としては確認されているが、号数と一致しない。

## 佐賀県

大田古墳	鳥栖市田代本町太田	◦小林行雄編『装飾古墳』 1964
東十郎特別区	鳥栖市神辺町東十郎	◦佐賀県教育委員会『東十郎古墳群』 1966
E号墳	〃	◦〃
〃第4区2号墳	〃	◦〃
〃第4区4号墳	〃	◦〃
〃第4区9号墳	〃	◦〃
伊勢塚古墳	神埼郡神埼町志波屋	◦松尾禎作『佐賀県考古大観』 1957
男女山4号墳	佐賀郡大和村久留間横馬場	◦佐賀県教育委員会『佐賀県の遺跡』 1964
10号墳	〃	〃
22号墳	〃	〃
23号墳	〃	〃
33号墳	〃	〃
36号墳	〃	〃
46号墳	〃	〃
52号墳	〃	〃
島田塚古墳	唐津市鏡今屋敷	◦後藤守一「九州北部古墳の二三」『考古学雑誌』 12-4 1921

## 長崎県

鬼の窟古墳	壱岐郡芦辺町国分木村触	◦梅原末治『大和島庄石舞台の巨石古墳』『奈良県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第14冊 1927
-------	-------------	--

## 大 分 県

古 墳 名	地 名	参 考 文 献
ガランドヤ 1号墳	日田市石井西園	◦鏡山・賀川・小田・金関『大分県日田市法恩寺古墳』1959 ◦賀川光夫「東九州に於ける装飾古墳」『別府大学紀要』3輯 1953
” 2号墳	”	”
法恩寺 3号墳	日田市刃蓮町法恩寺	◦鏡山・賀川・小田・金関『大分県日田市法恩寺古墳』1959
日田穴観音古墳	日田市河野町倉園	◦大分県教育委員会『大分県の文化財』1965
鬼塚古墳	玖珠郡玖珠町小田	◦河野清実「玖珠郡の二大古墳」『大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第11輯 1931
鬼の岩屋古墳	別府市北石垣	◦大分県教育委員会『大分県の文化財』1965

## 熊 本 県

四ツ山古墳	荒尾市大島区笹原山四ツ山神社内	◦大牟田市教育委員会『大牟田市史』上巻 1965
八角目 1号墳	玉名郡南関町八角目峠	
” 2号墳	”	
” 3号墳	”	
塚坊主古墳	玉名郡菊水町江田	◦小林行雄編『装飾古墳』1964
江田穴観音古墳	”	◦梅原末治「玉名郡江田村中小路穴観音古墳」『熊本県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第1冊 1922
伝佐山古墳	玉名市繁根木	
大坊古墳	玉名市玉名	◦田添夏喜『玉名市玉名大坊古墳追加資料』(プリント) 1963 ◦浜田耕作・梅原末治「肥後に於ける装飾ある古墳及横穴」『京大報告』第1冊 1917
永安寺東古墳	玉名市玉名永安寺	◦梅原末治「永安寺東古墳・永安寺西古墳」『京大報告』第1冊 1917
石川山 3号墳	鹿本郡植木町石川	◦田辺・隈・緒方・原口・平岡・栗原「石川山古墳群発掘調査報告」『熊本県文化財調査報告書』第9集 1968
4号墳	”	◦ ”
5号墳	”	◦ ”
鬼の窟古墳	鹿本郡植木町小野	
白塚古墳	山鹿市石	◦原口長之『白塚古墳調査報告』(プリント) 1956

古墳名	地名	参考文献
弁慶ヶ穴古墳	山鹿市熊入町	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 原口長之「装飾古墳弁慶ヶ穴調査報告」『熊本史学』第11号 1957</li> <li>◦ 『鹿本郡志』 1923</li> </ul>
チブサン古墳	山鹿市城西福寺	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 波多叢「肥後国平小城村古墳チブサンの石棺及模様に就て」『考古学雑誌』3-2 1912</li> <li>◦ 梅原・古賀・下林「鹿本郡チブサンの石人とその古墳」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』1925</li> </ul>
馬塚古墳	山鹿市城	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 原口長之『馬塚古墳調査報告』 1955</li> </ul>
釜尾古墳	飽託郡北部町釜尾	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 浜田耕作「釜尾古墳」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第4冊 1927</li> </ul>
万日山古墳	熊本市春日町南長谷平	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 乙益重隆「熊本市万日山古墳」『考古学集刊』3-3 1967</li> </ul>
上御倉古墳	阿蘇郡一の宮町毛野	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 乙益重隆「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告』 1962</li> </ul>
下御倉古墳	〃	〃
大野窟古墳	八代郡竜北村大野	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 三島格「熊本県八代郡大野窟古墳」『九州考古学』19 1963</li> </ul>

※ 松本健郎氏作成の資料をもとに、松本肇・佐田茂が作成



# PLATES



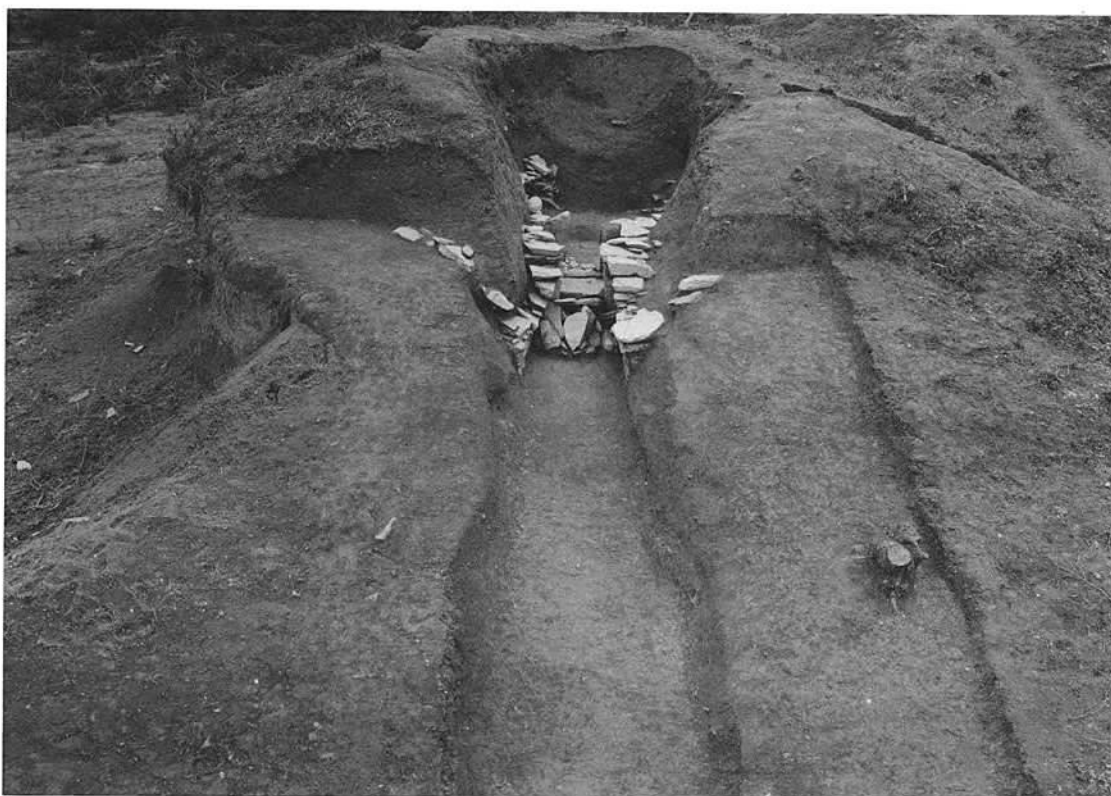
(1) 遠 景



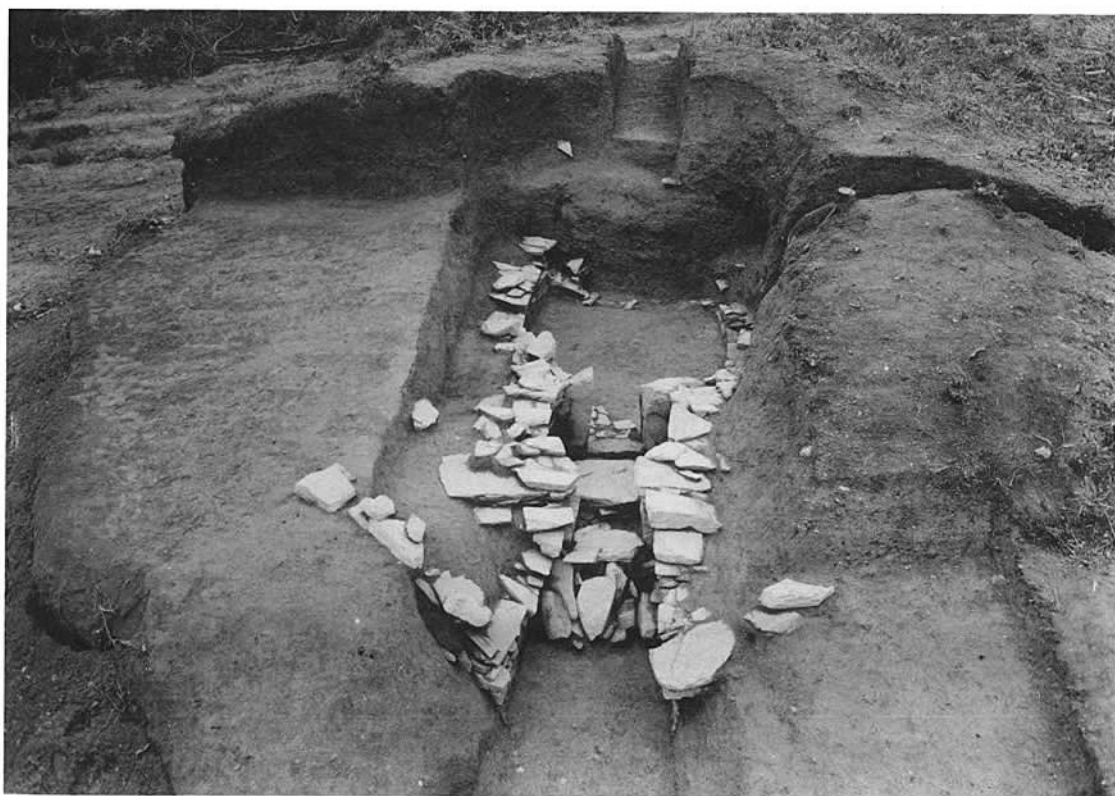
(2) 鈴ヶ山1号墳全景



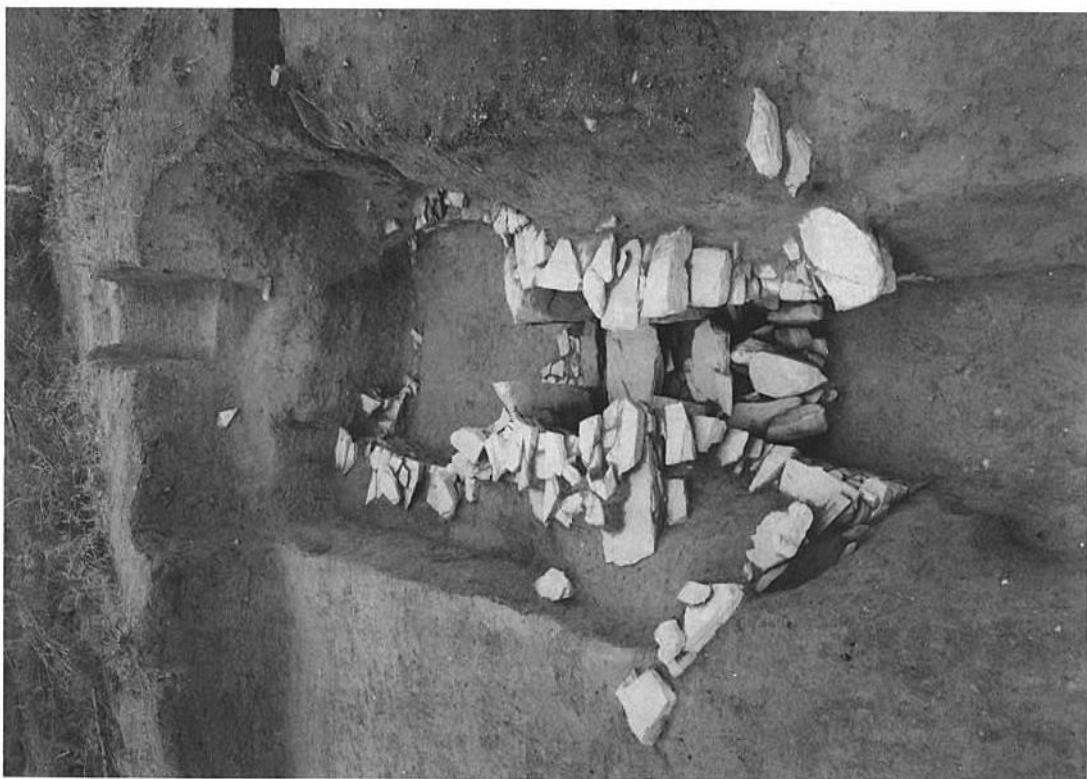
(3) 鈴ヶ山2号墳全景



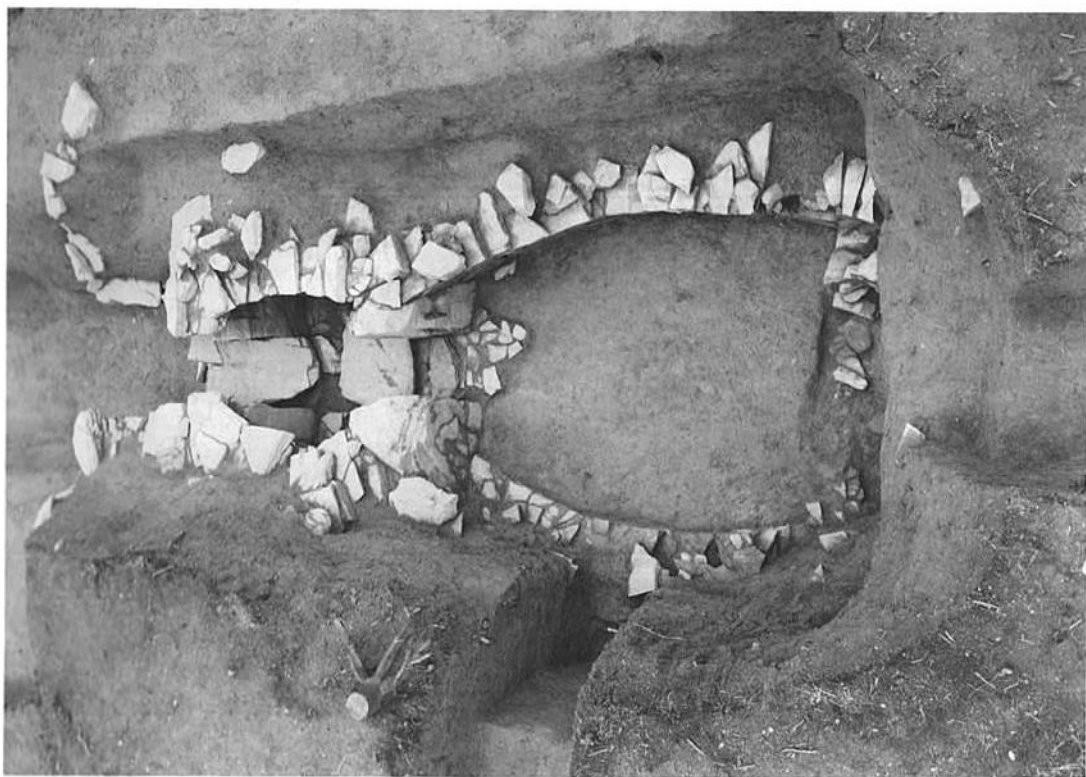
(1) 石室と墓道



(2) 石室と墓塚



(1) 石室全景(西から)



(2) 石室全景(東から)



(1) 羨道閉塞状況



(2) 後室玄門

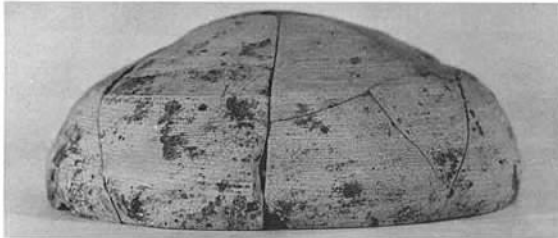




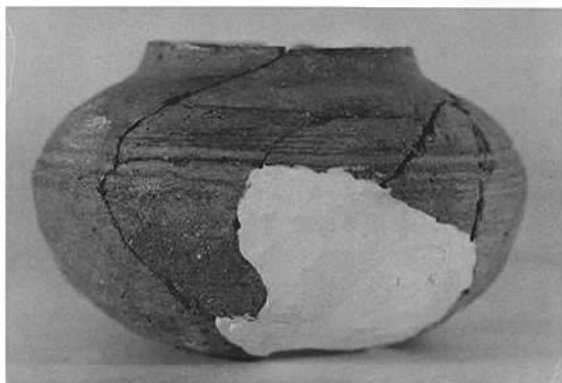
(1) 前室全景



(2) 後室敷石と北側壁

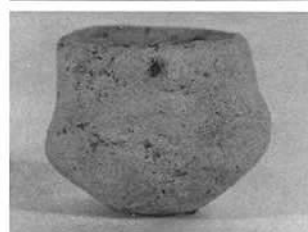


須恵器

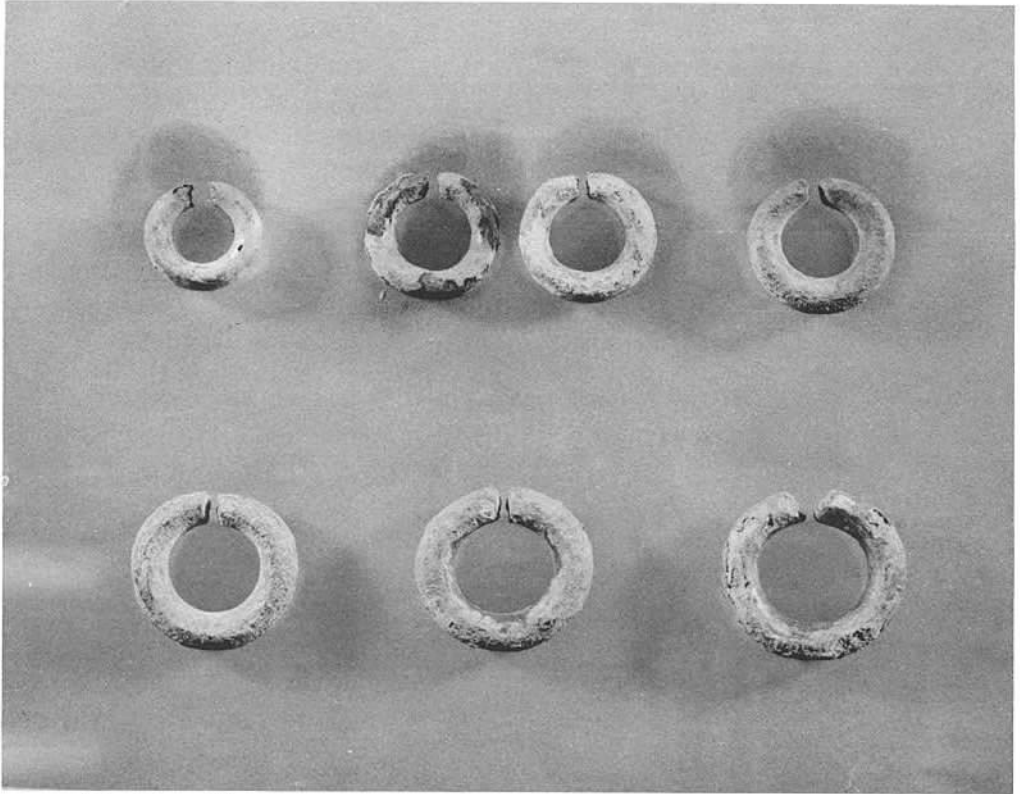


須恵器





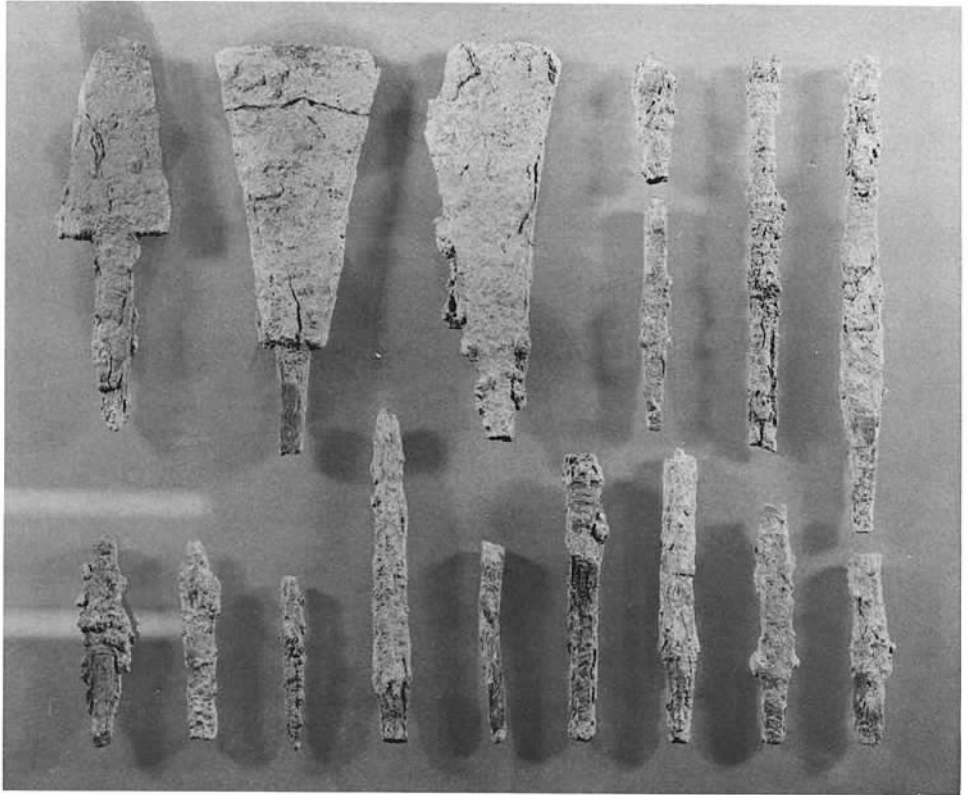
土 師 器



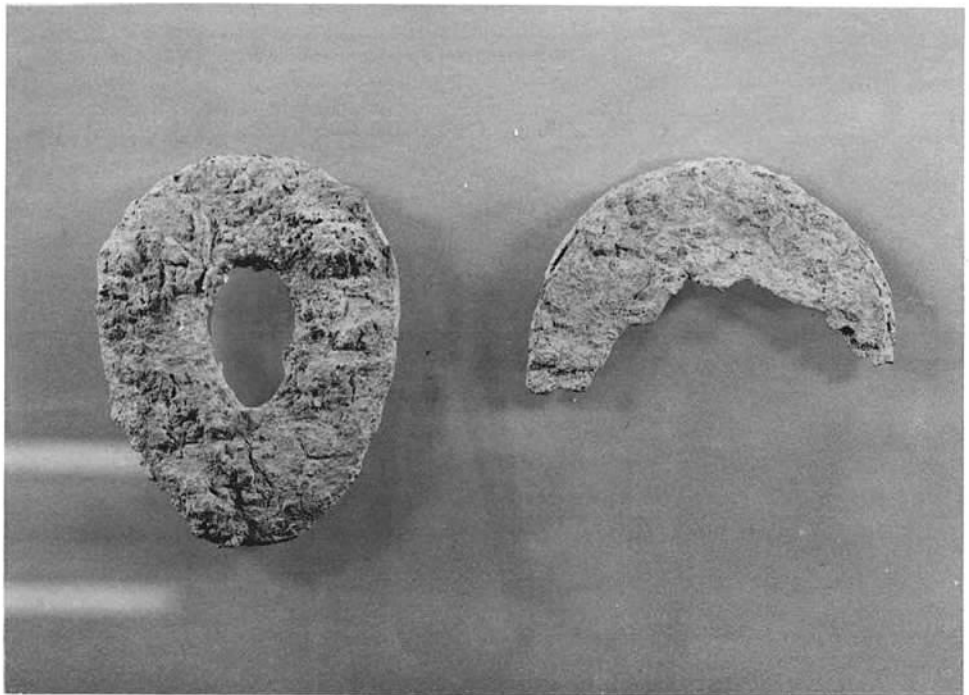
(1) 耳環



(2) 鉸具など



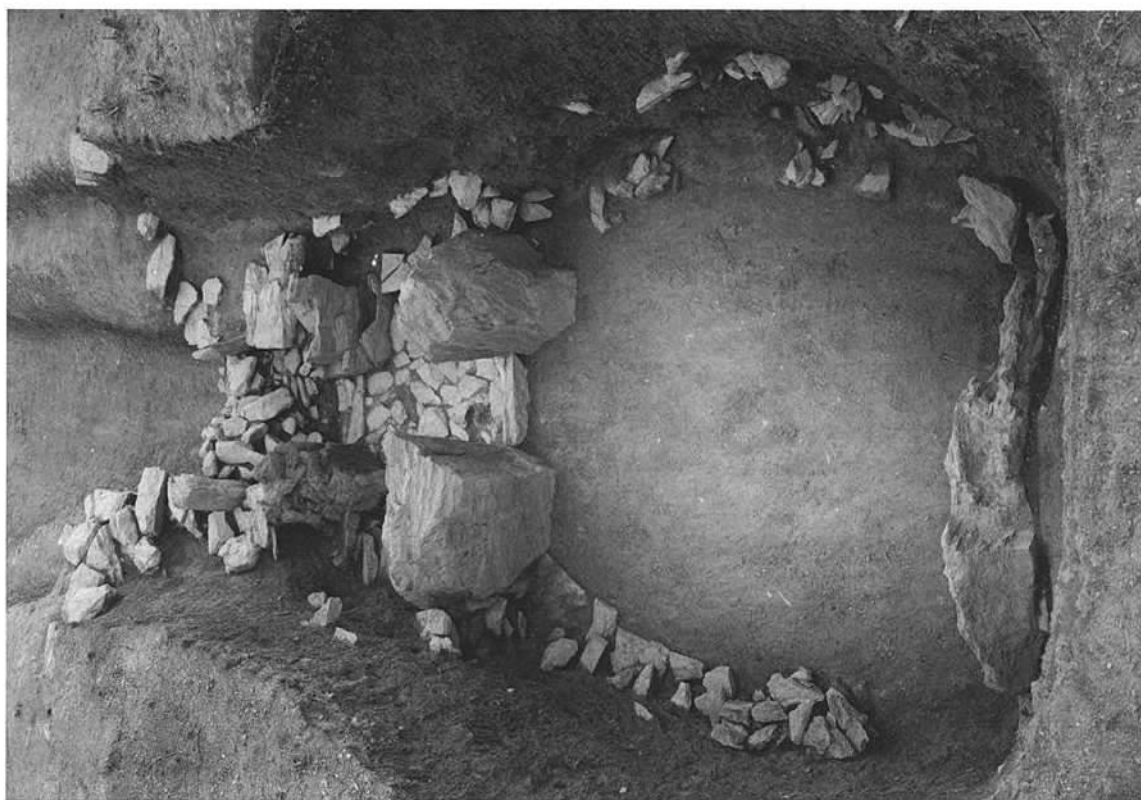
(1) 鉄 鏃



(2) 鐙



(1) 石室と墓道



(2) 石室全景



(1) 羨道閉塞状況

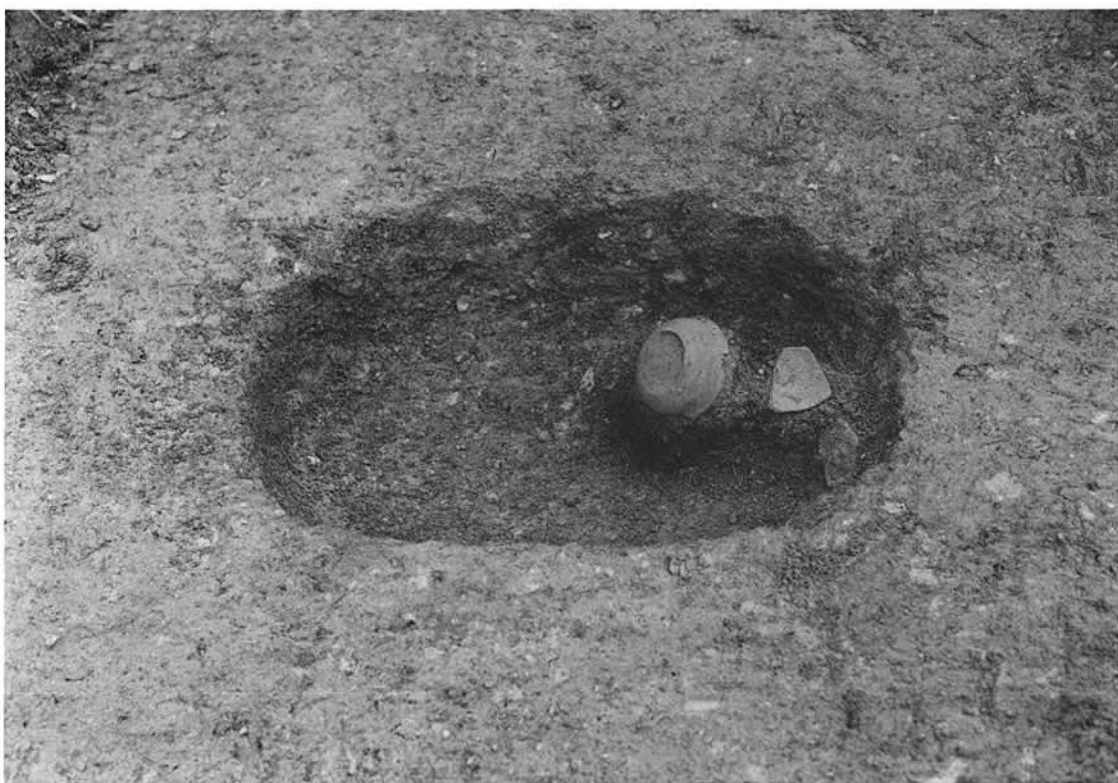


(2) 後室玄門

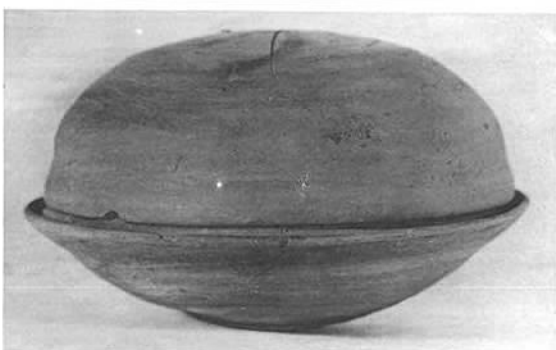
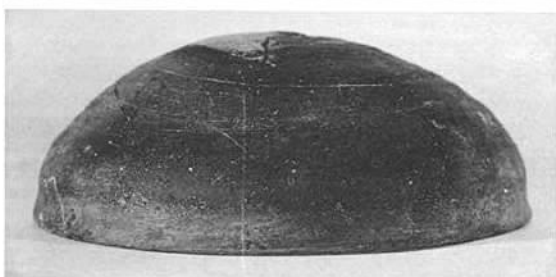
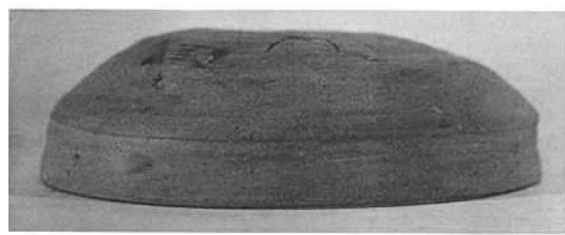




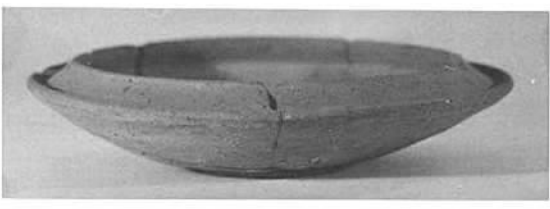
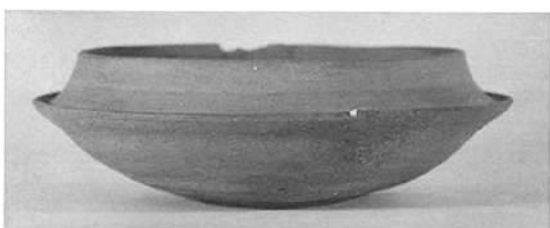
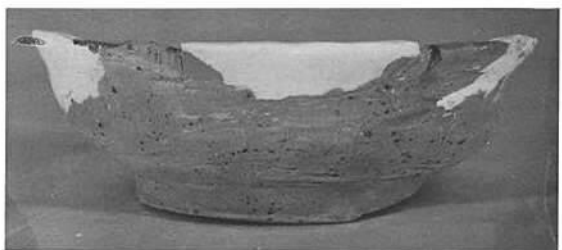
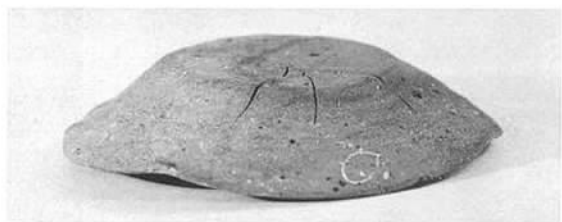
(1) 前室と羨道閉塞



(2) 鈴ヶ山 2 号墳 施火葬墓



須 恵 器



須 恵 器

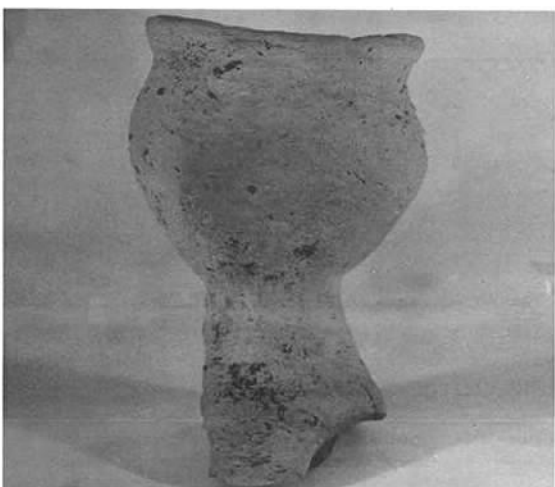
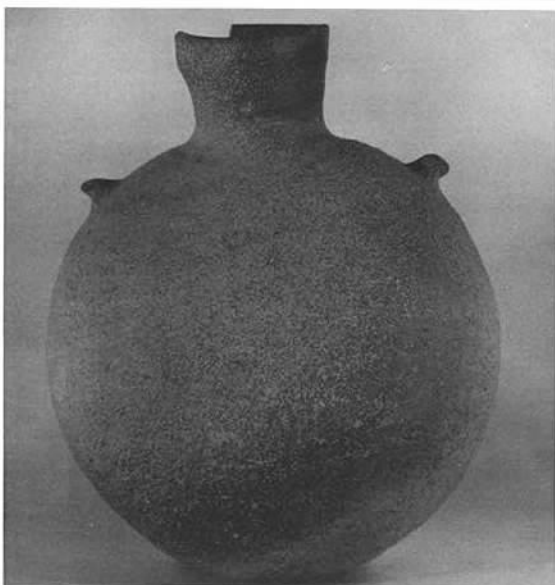




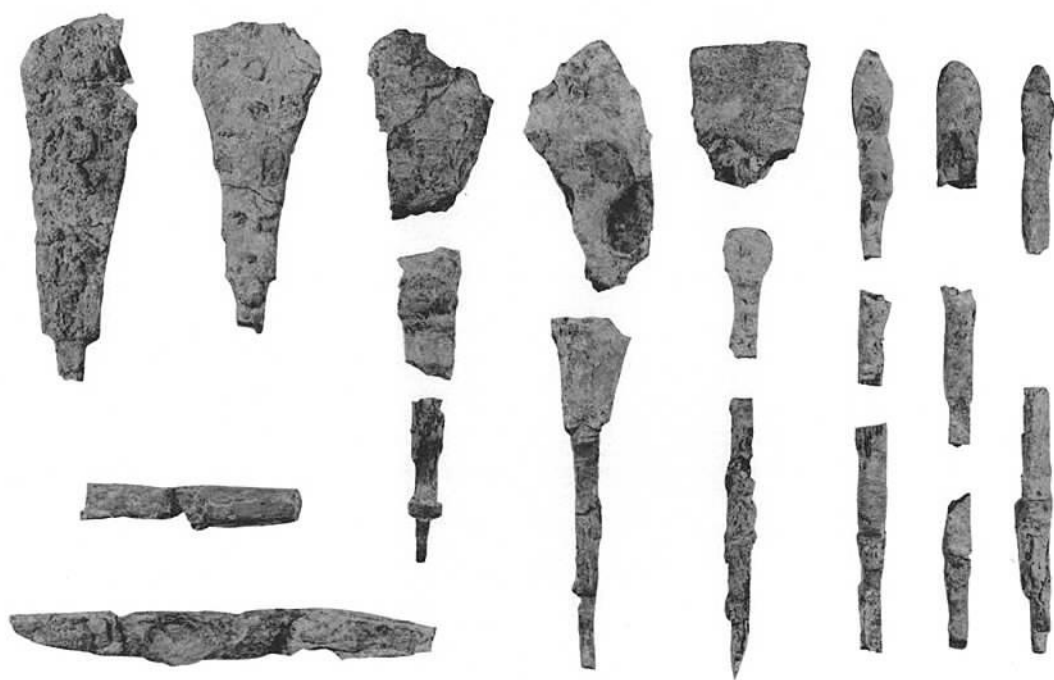
須 惠 器



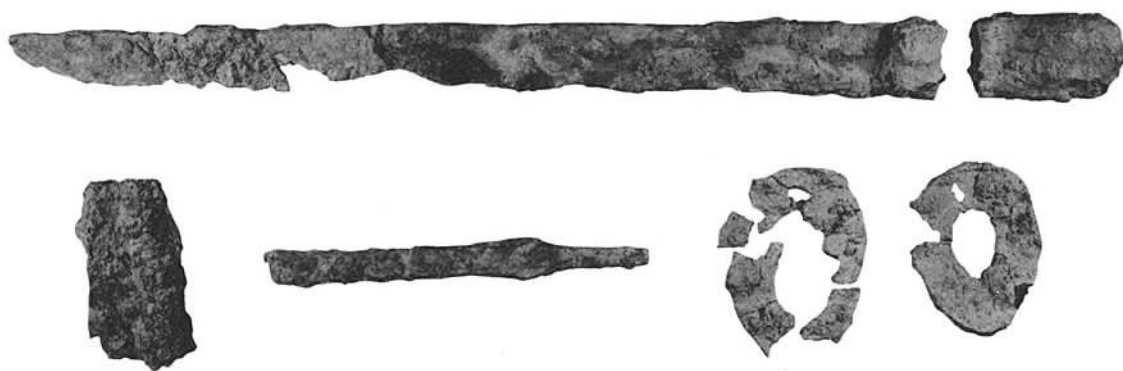
須恵器



須恵器・土師器



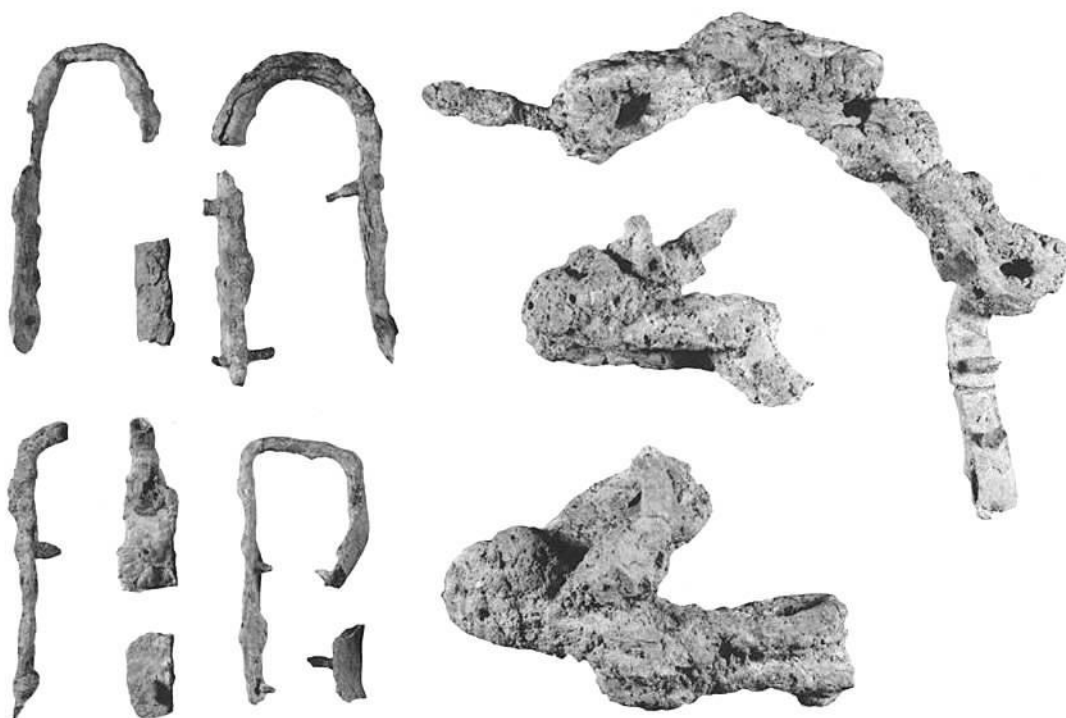
(1) 鉄鏃・鉄刀子



(2) 鉄小刀・鏢・鉄斧・鉄刀子



(1) 座金具・耳環・鉸具



(2) 鈴 など



(1) 鉸具など



(2) 轡など



(1) 遠 景(西南から)



(2) 遠 景(南から)



(3) 近 景(東南から)





(1) 全 景(東北から)



(2) 全 景(東北から)

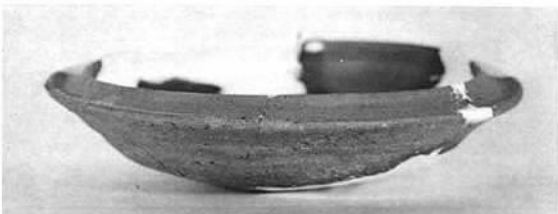
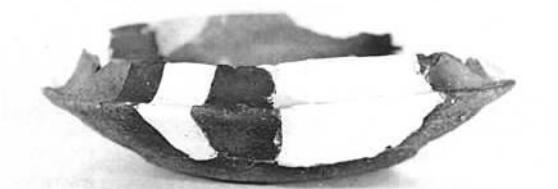
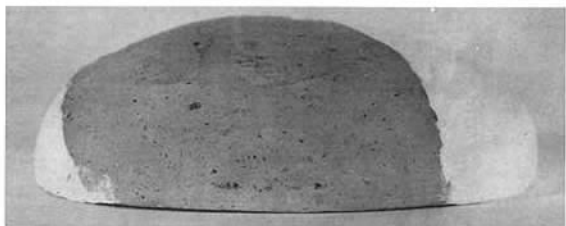
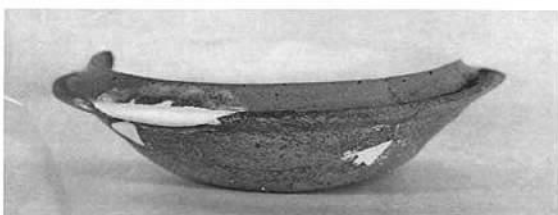




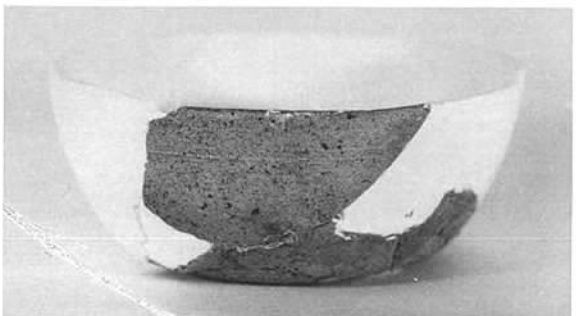
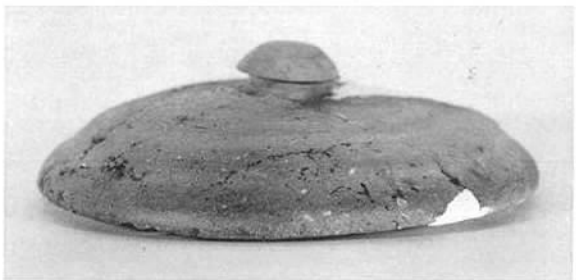
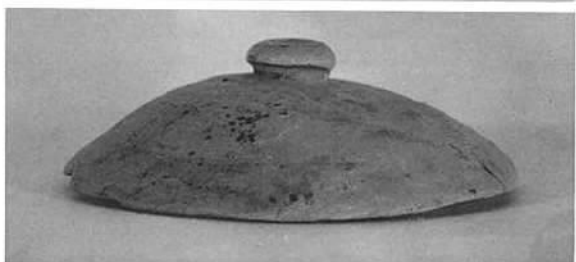
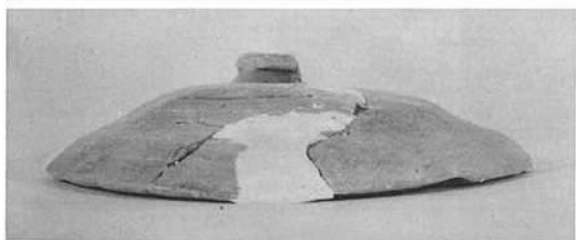
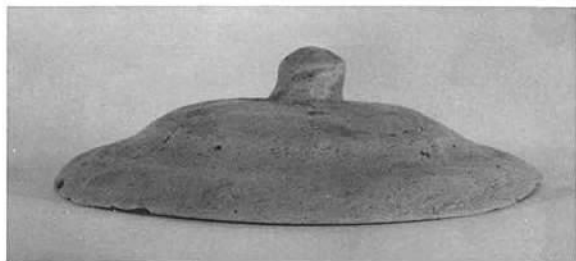
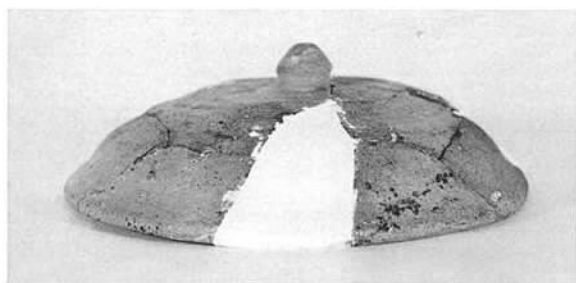
(1) 石室全景(南から)



(2) 石室全景(北から)

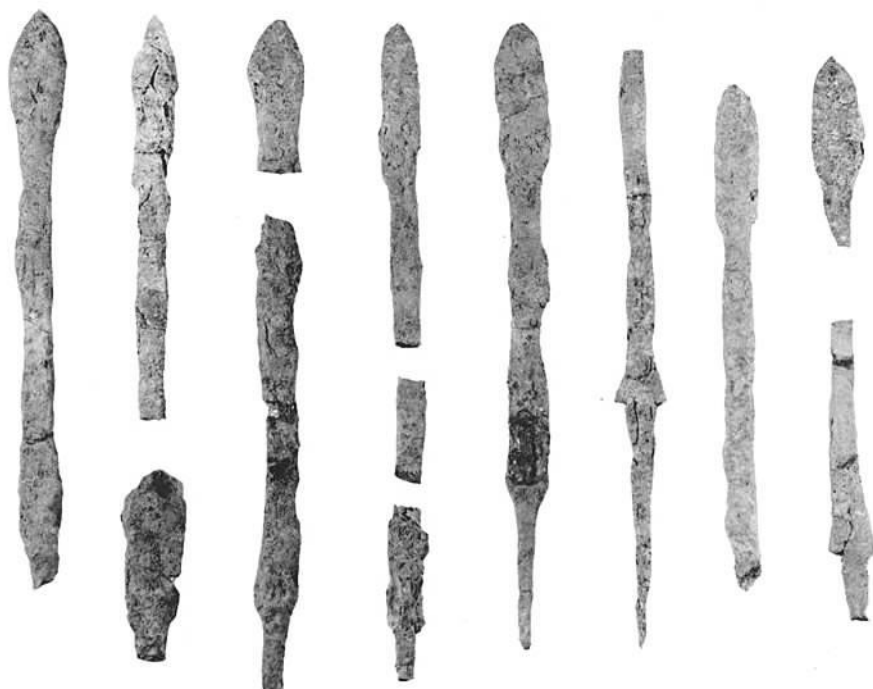


須恵器



須恵器

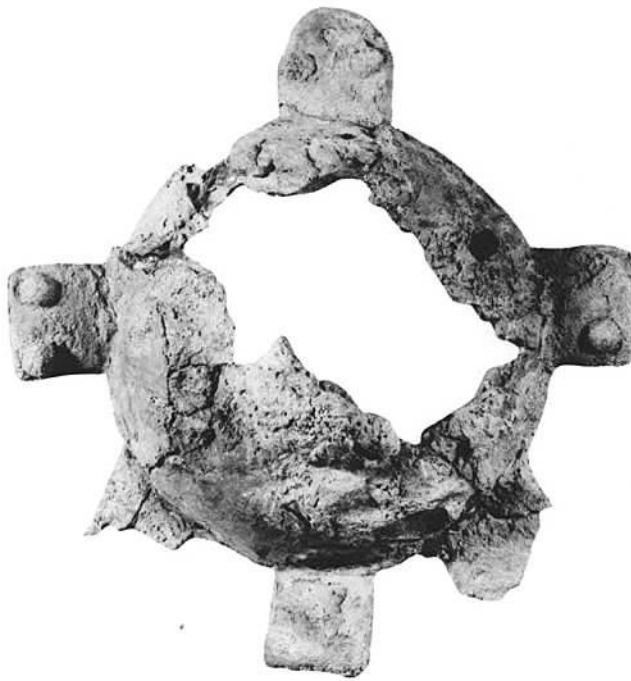
土師器



(1) 鉄 鏃



(2) 鉄鏃・鉄刀子など



(1) 雲珠・辻金具





(1) 兵庫鎖・鐙など





(1) 留金具など



(2) 耳環・空玉



(3) 管玉・小玉



(4) 小玉





(1) 全 景

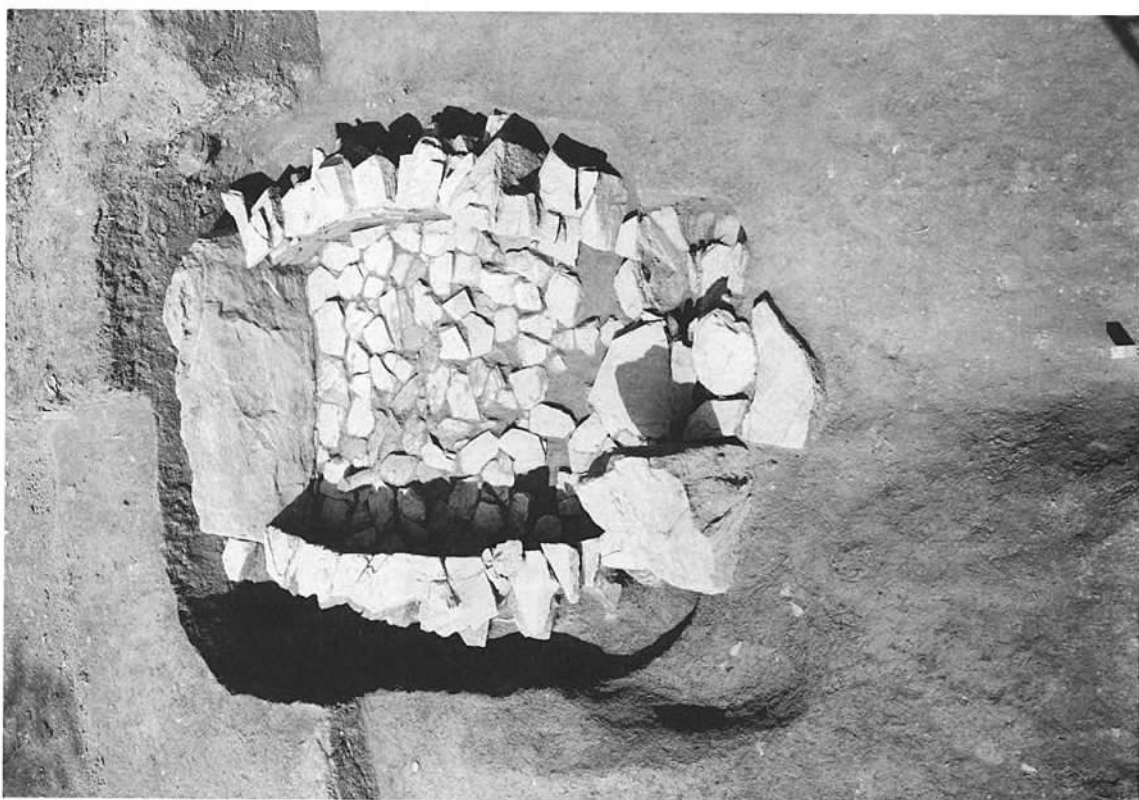


(2) 発掘後の全景





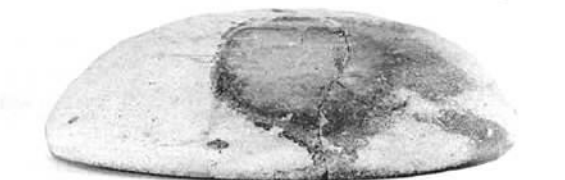
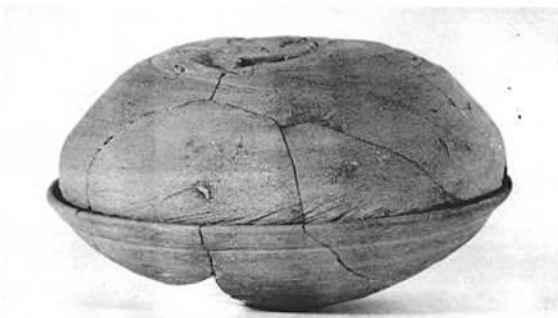
石室全景



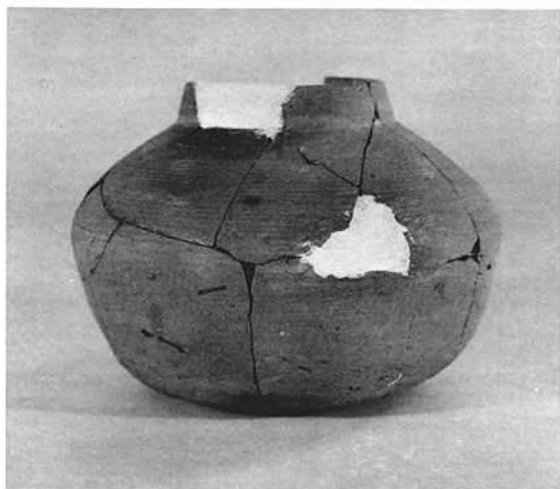
(1) 石室と墓坑



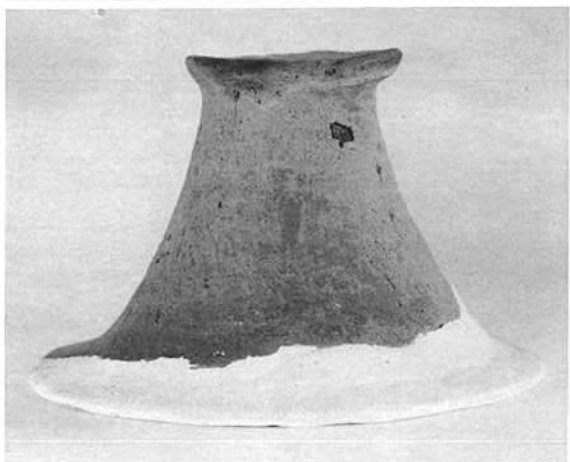
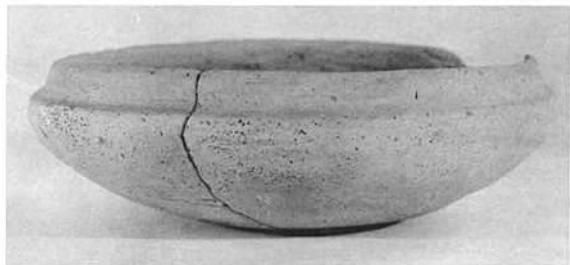
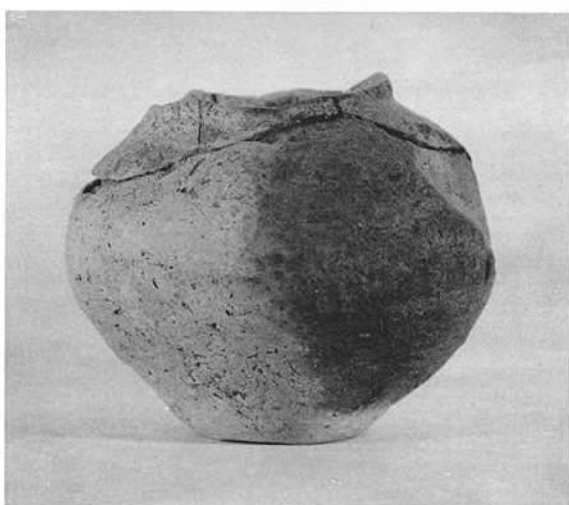
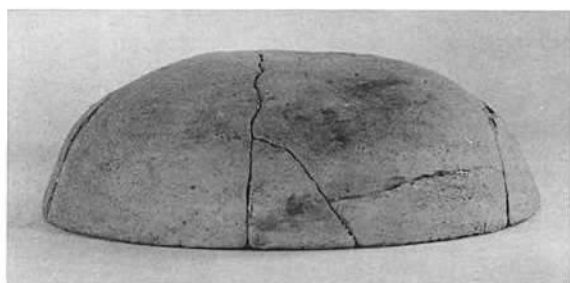
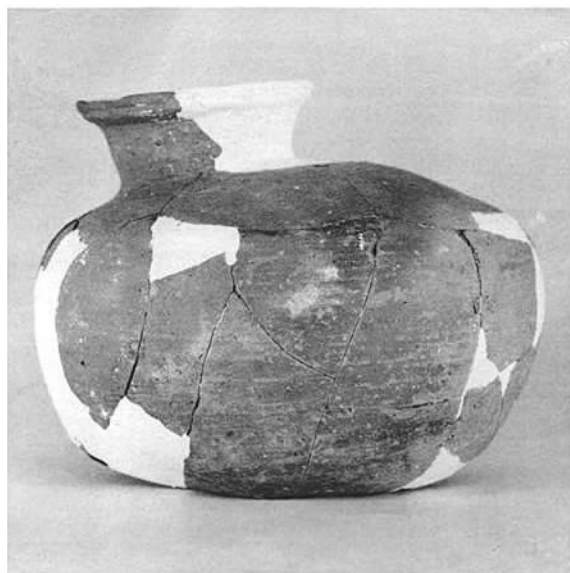
(2) 遺物出土状況



須恵器



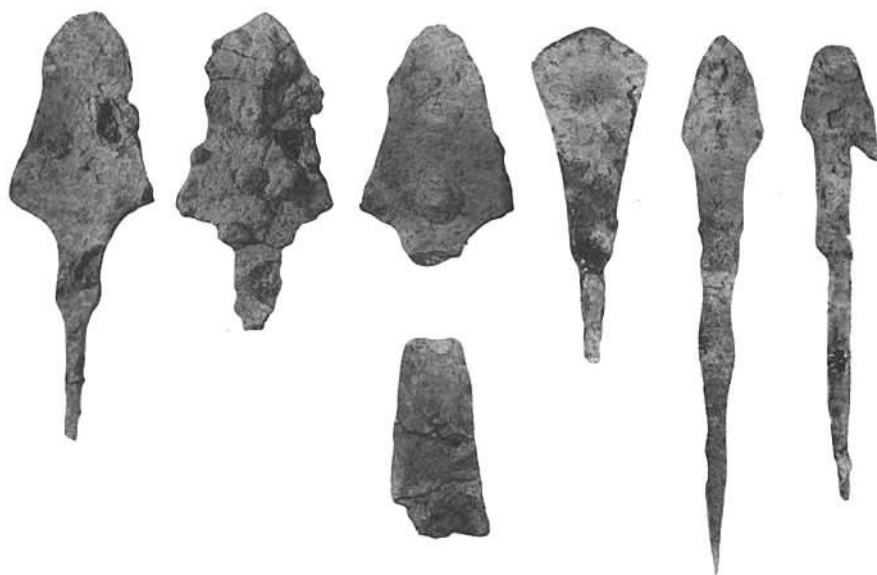




須恵器・土師器



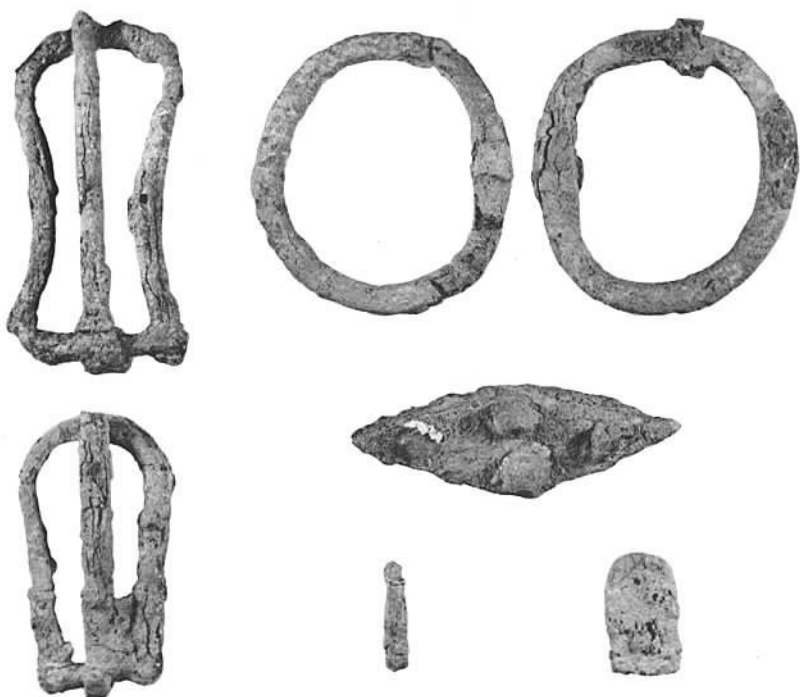
(1) 鐵 鏃



(2) 鐵 鏃



(1) 轡



(2) 鉸具・轡など



(1) 鉄小刀・鉄刀子



(2) 耳環



(3) 小玉



(4) 紡錘車





(1) 遠 景



(2) 全 景



(1) 石室全景



(2) 石室全景



(1) 石室全景

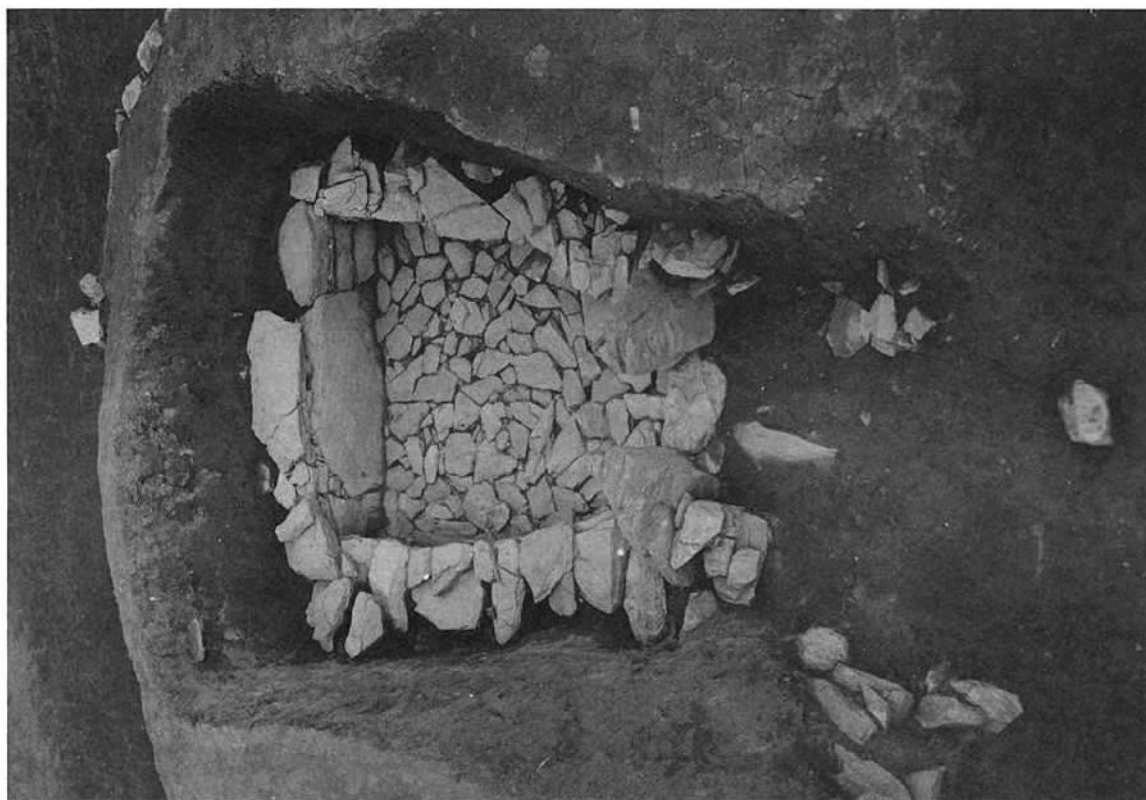


(2) 石室全景

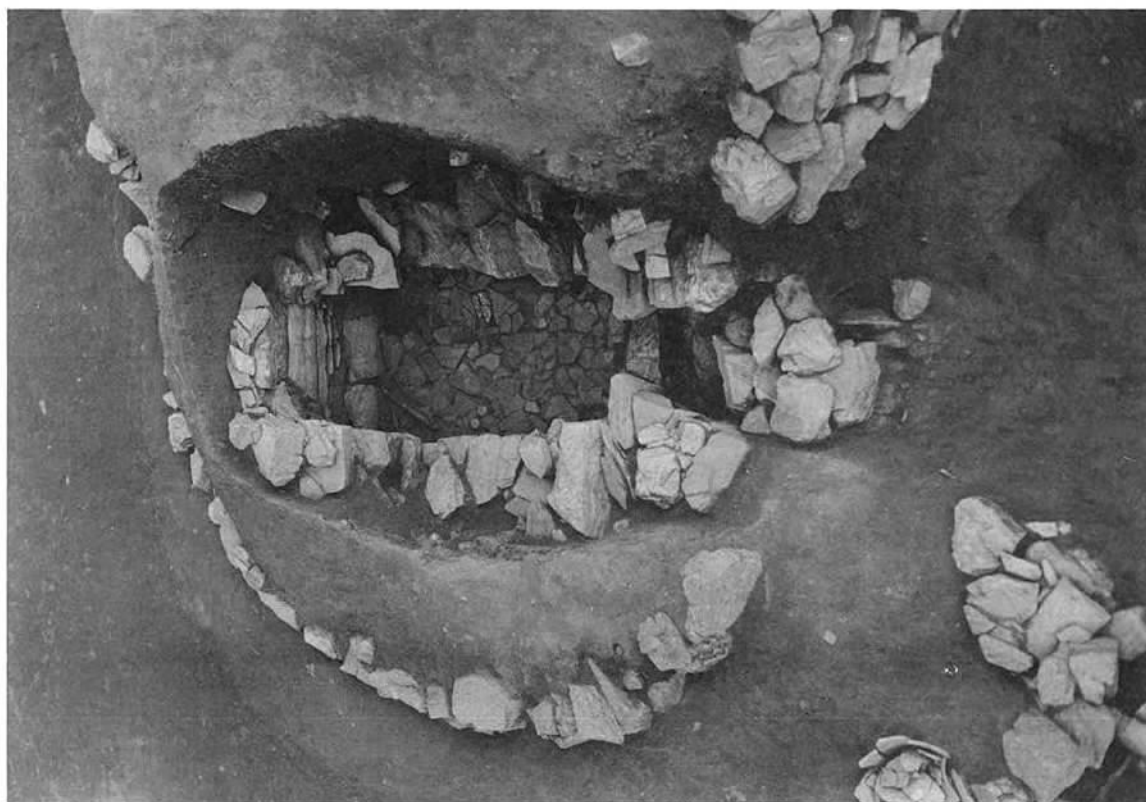


石室全景(北から)

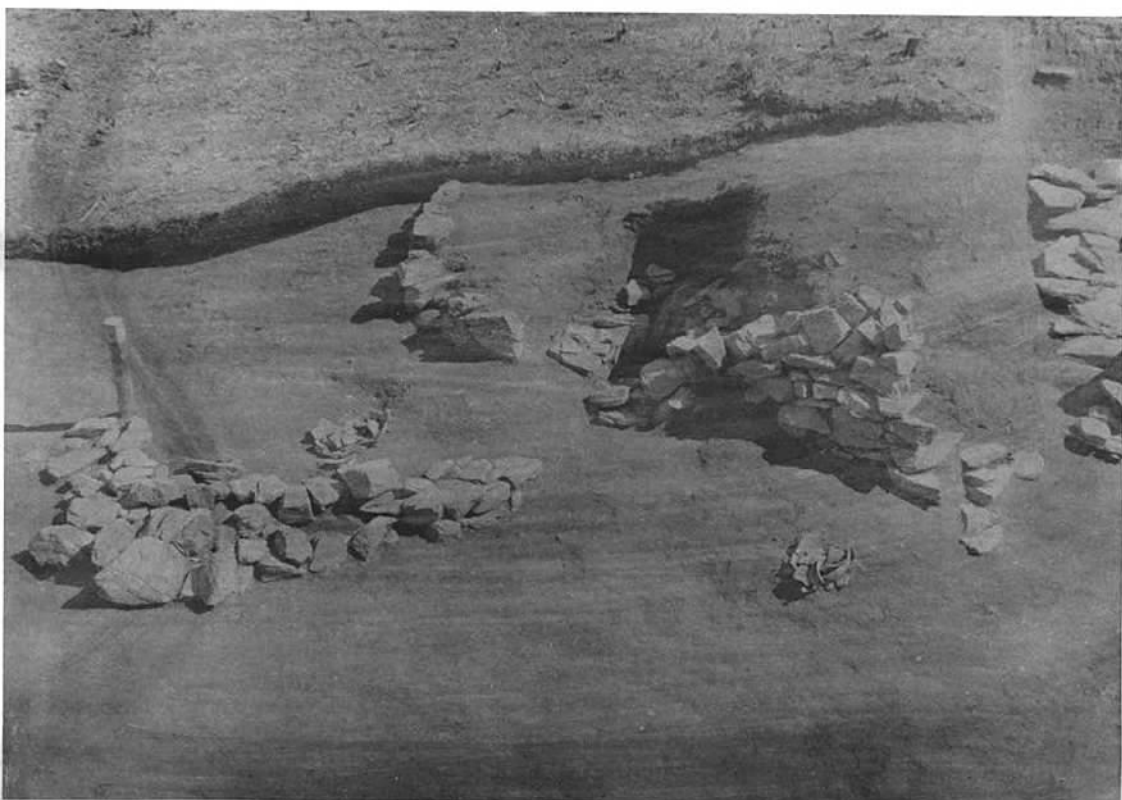




(1) 大石室全景



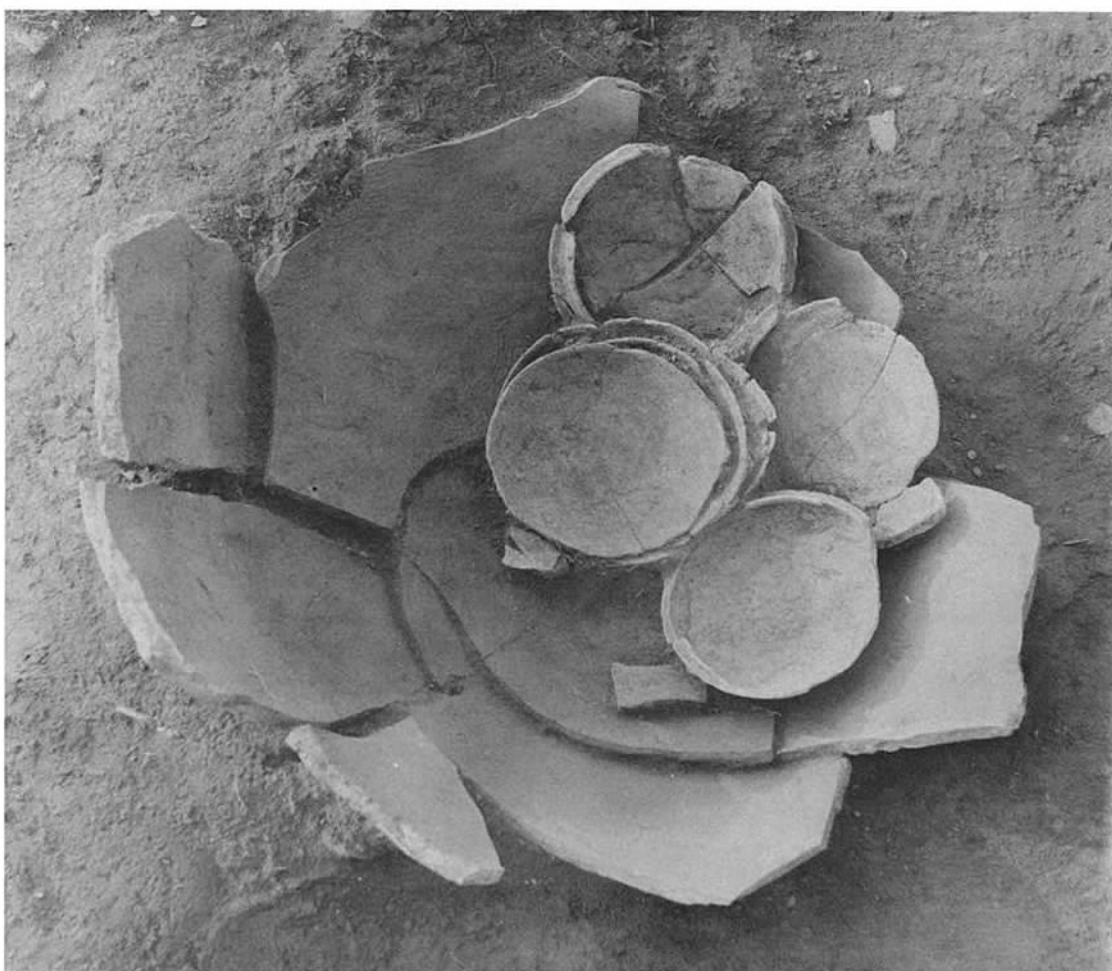
(2) 小石室全景



(1) 石室前面の敷石と須恵器出土状況



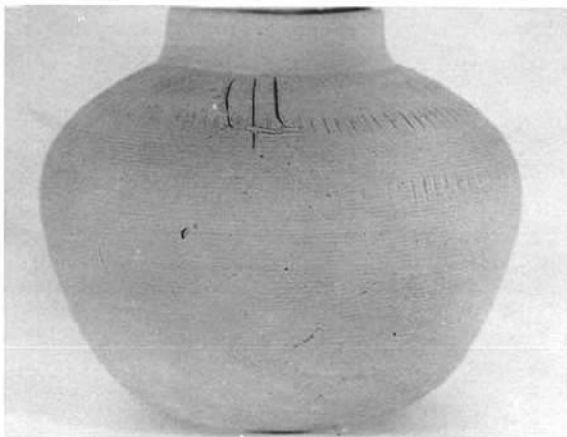
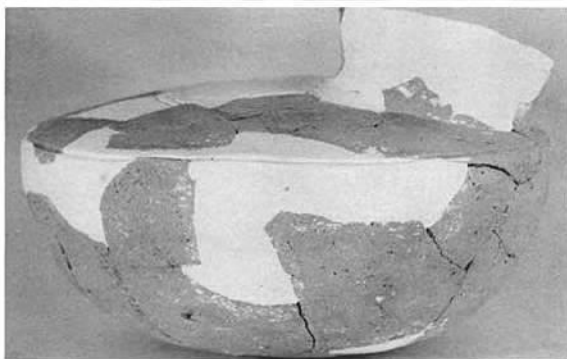
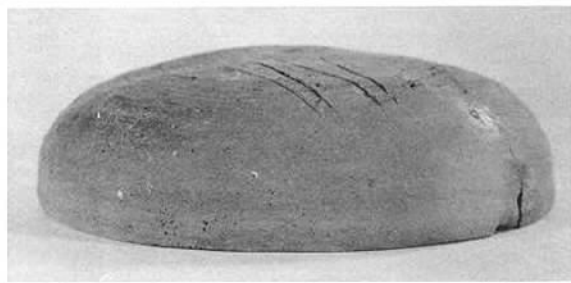
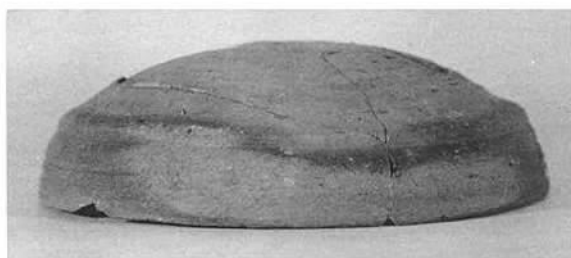
(2) 大石室床面遺物出土状況



(1) 小石室前面須恵器出土状況

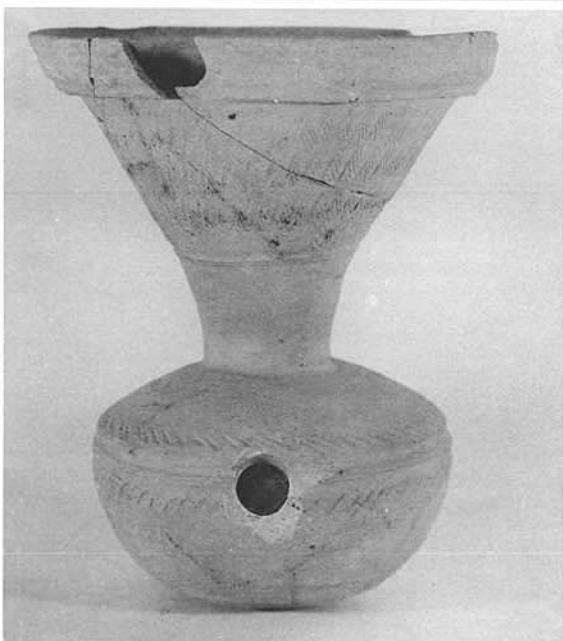
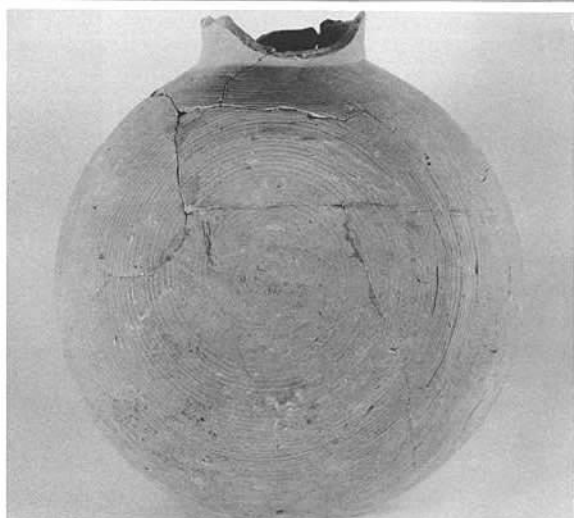
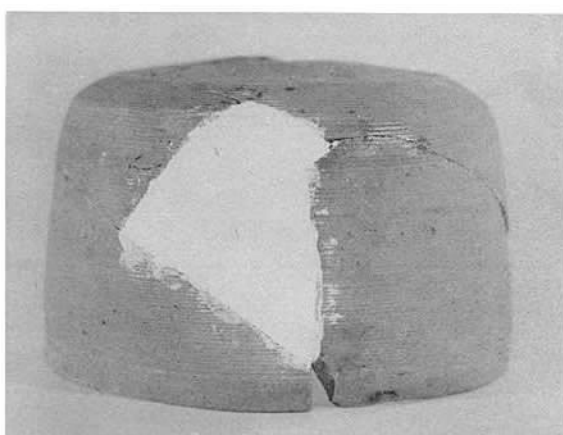
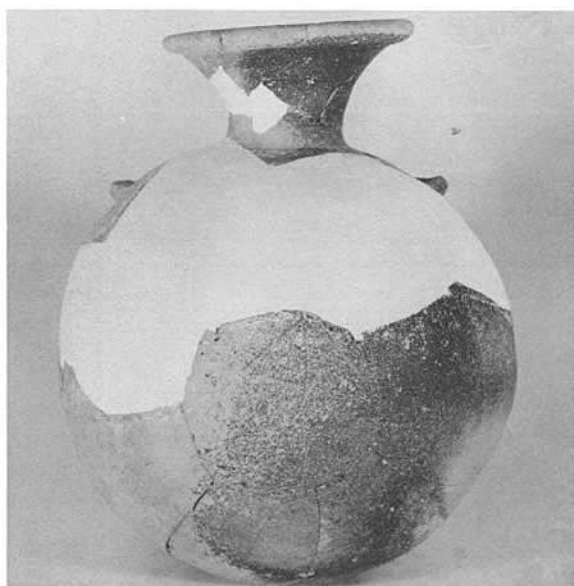


(2) 大石室銅劔出土状況

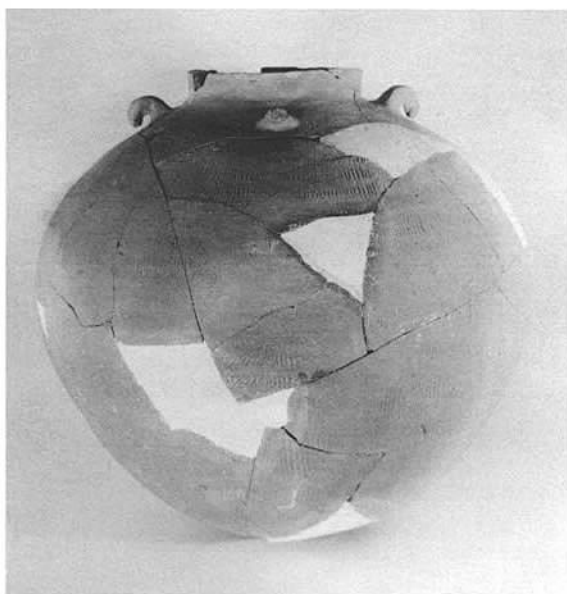


須恵器

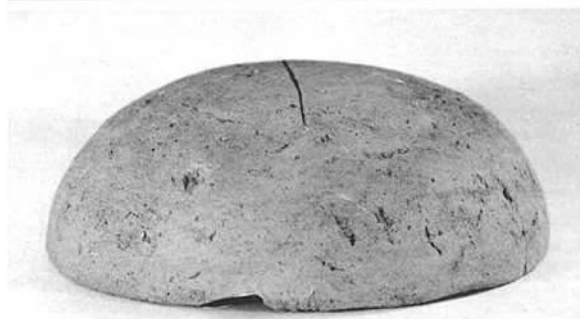
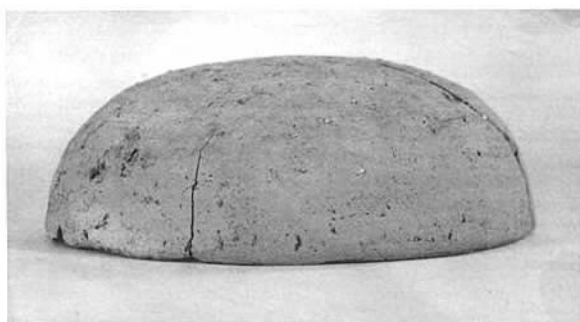




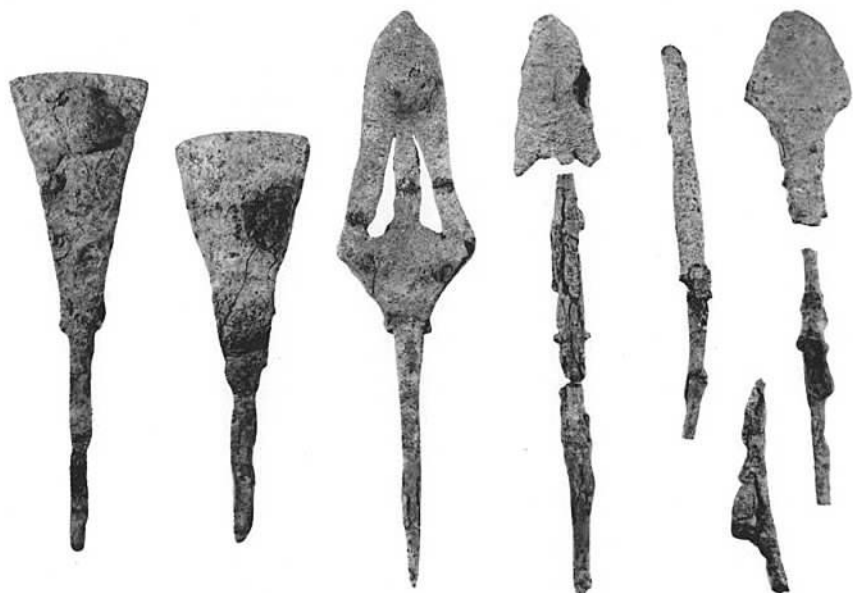
須恵器



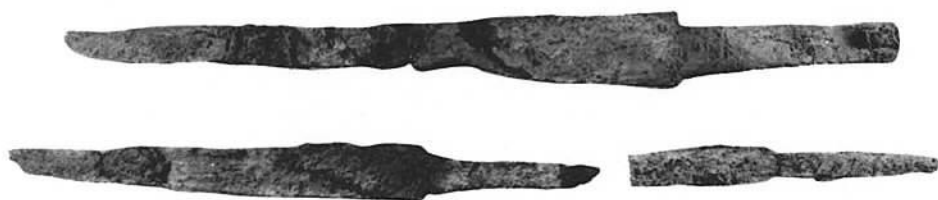
須恵器



土 師 器



(1) 鉄 鍬



(2) 鉄 刀子



(3) 耳 環



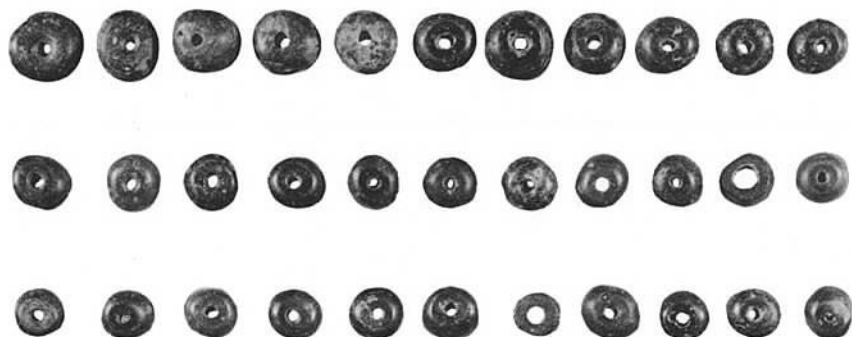
(4) 小 玉



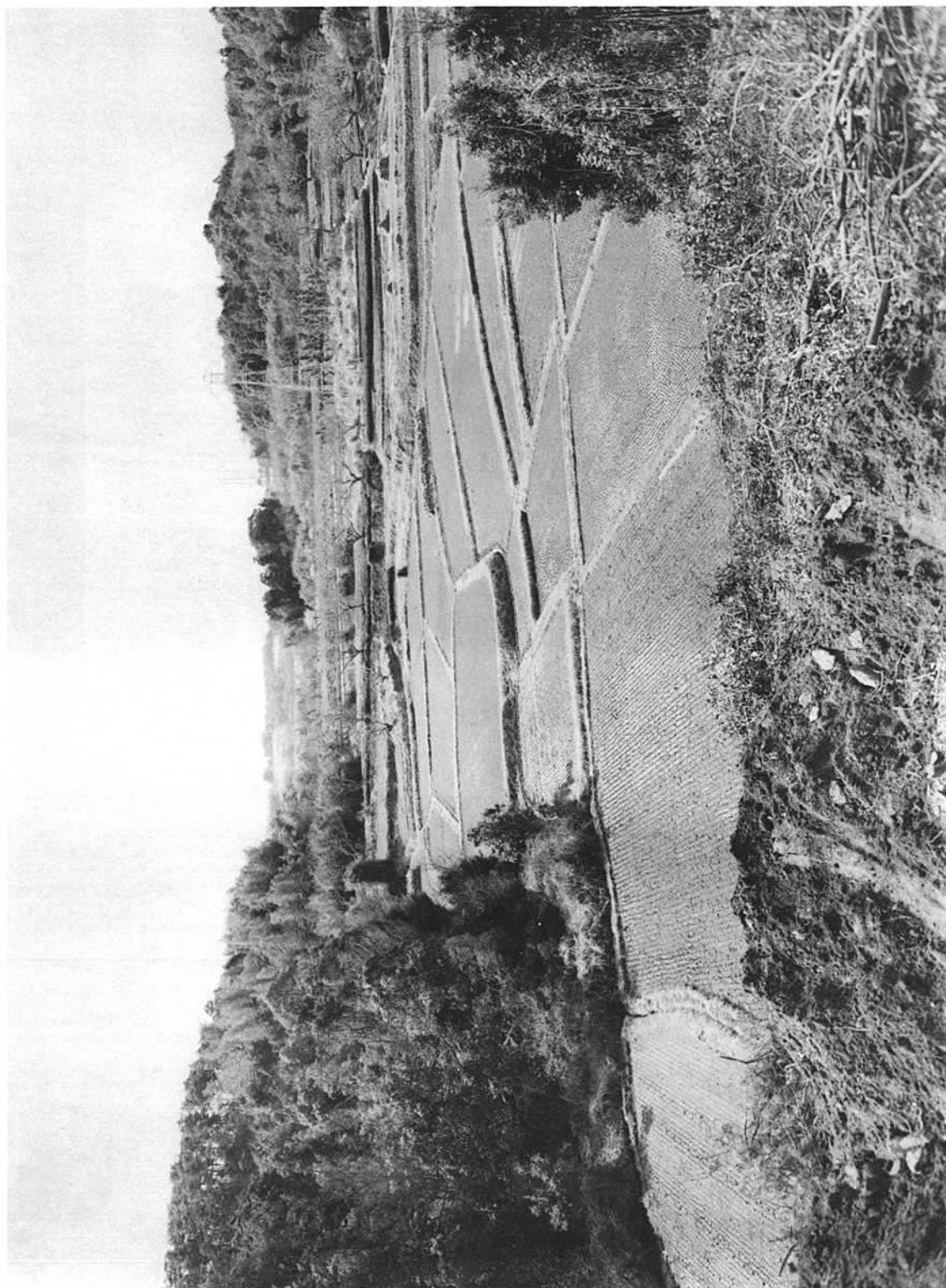
(1) 山の前 3 号墳小石室鉄刀子



(2) 山の前 3 号墳鉄鏃・耳環



(3) 平原 3 号墳小玉

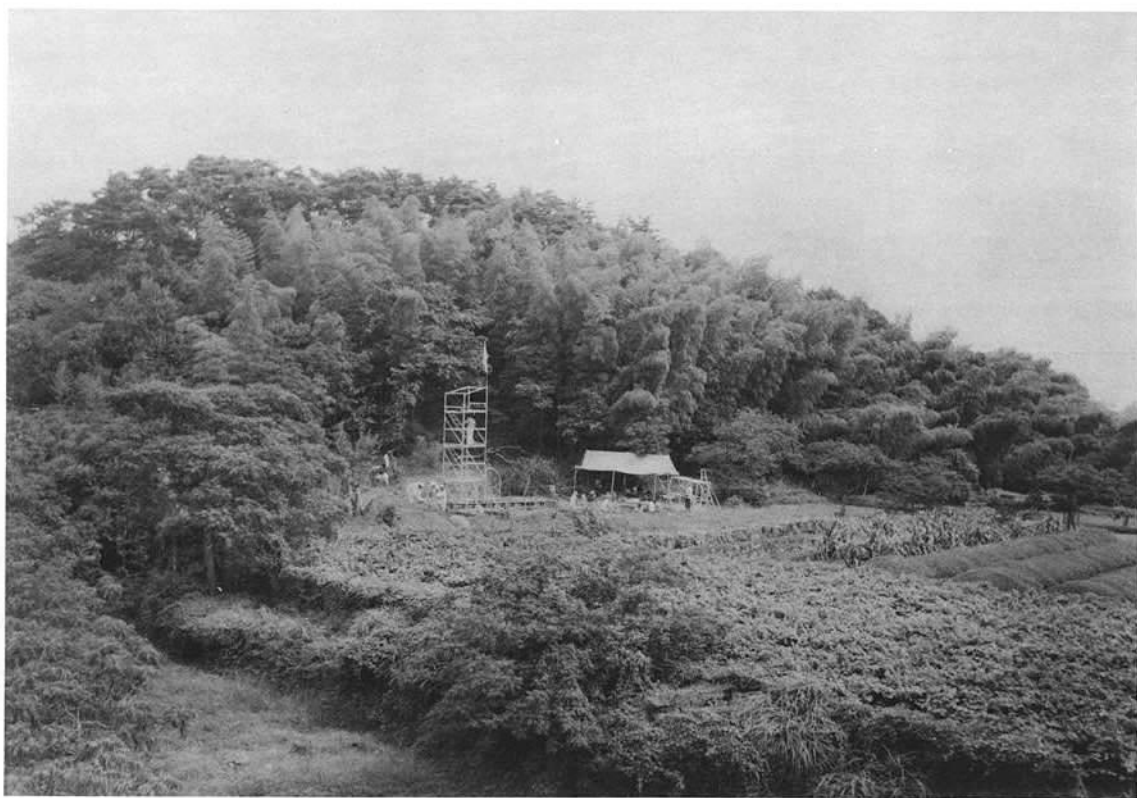


山の前1号墳からみた平原遺跡全景

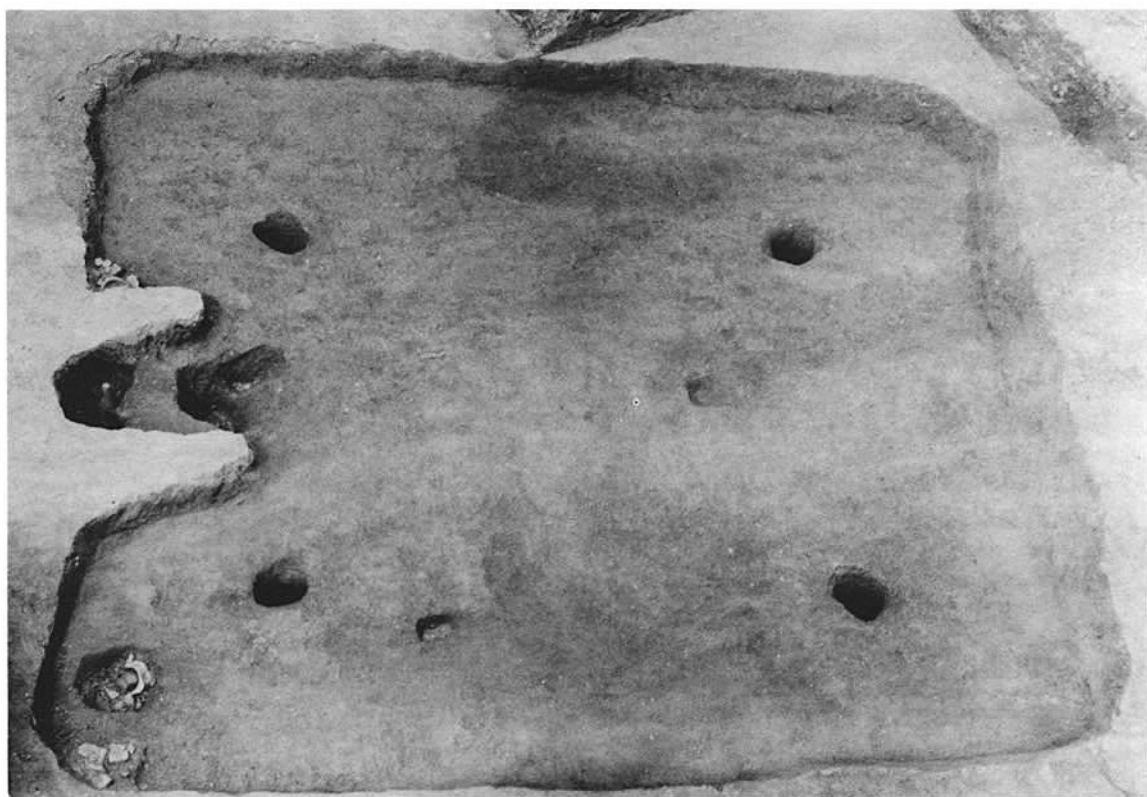




(1) 全 景(西から)



(2) 全 景(北から)



(1) 2号住居跡



(2) 土器出土状況





(1) 1号住居跡



(2) 鉄鏃出土状況



(1) 石室発掘の経過①



(2) 石室発掘の経過②



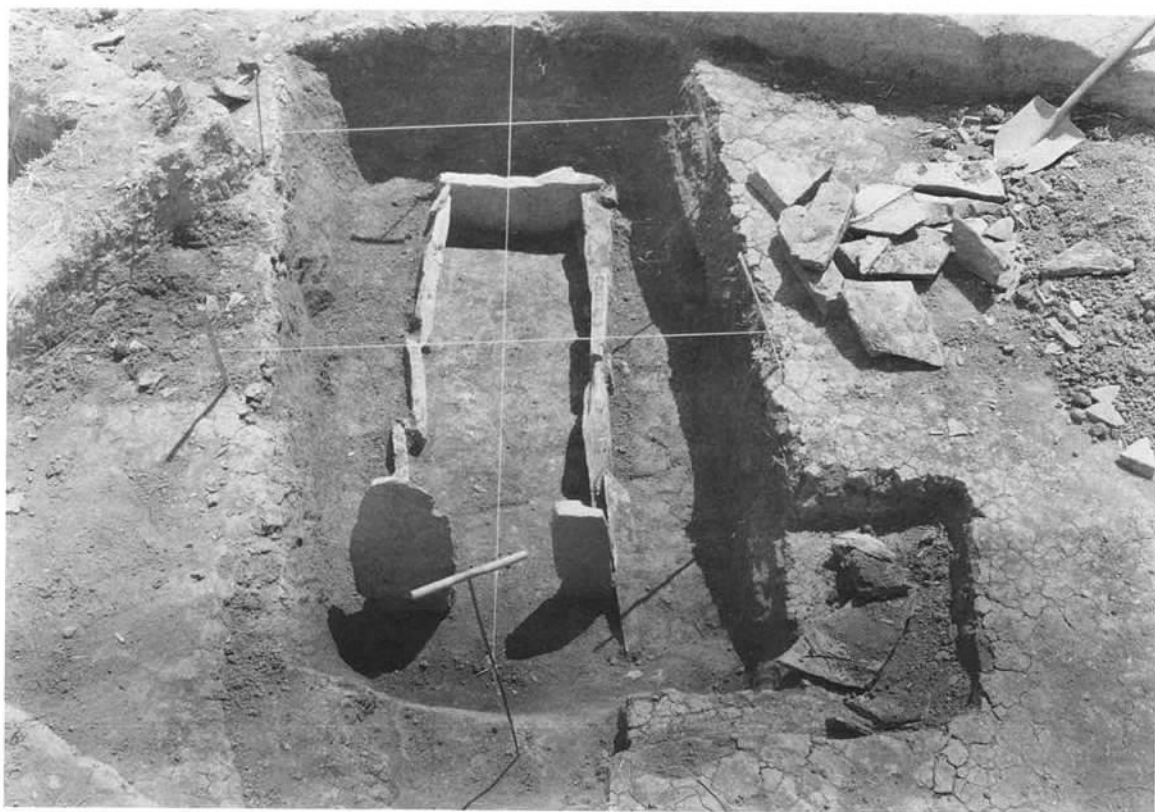
(1) 石室発掘の経過③



(2) 石室発掘の経過④



(1) 石室発掘の経過⑤



(2) 石室発掘の経過⑥





(1) 遠景(南から)



(2) 近景(南から)



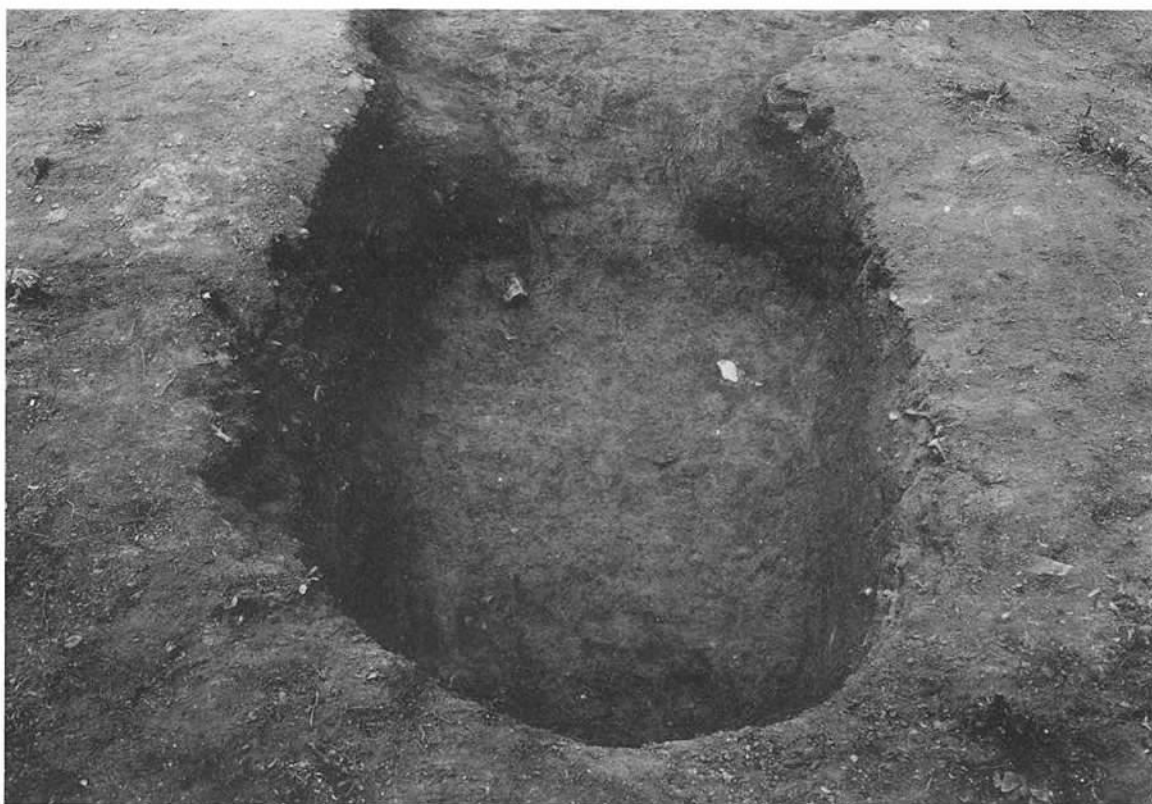
(1) 全 景



(2) 盗掘坑清掃後の全景



(1) 旧地表と墓壇(西から)



(2) 墓壇(東から)





(1) 全 景

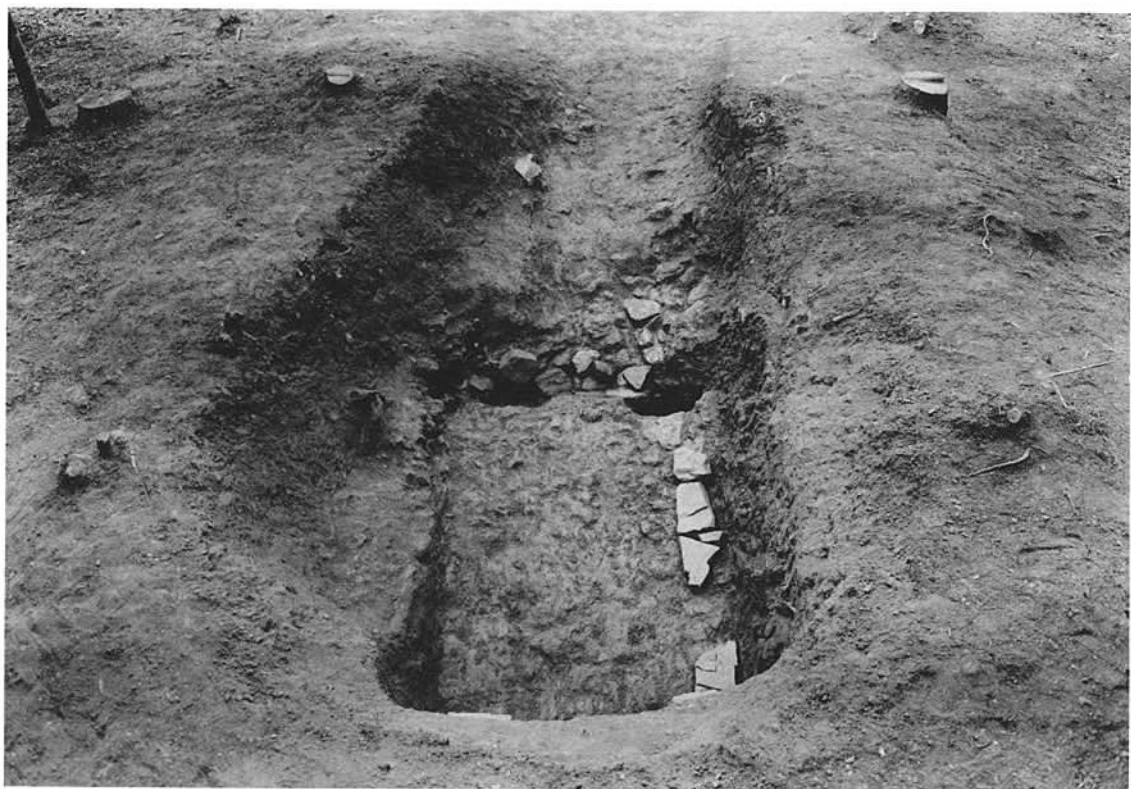


(2) 石室と墓塚





(1) 旧地表と墓壇(西から)



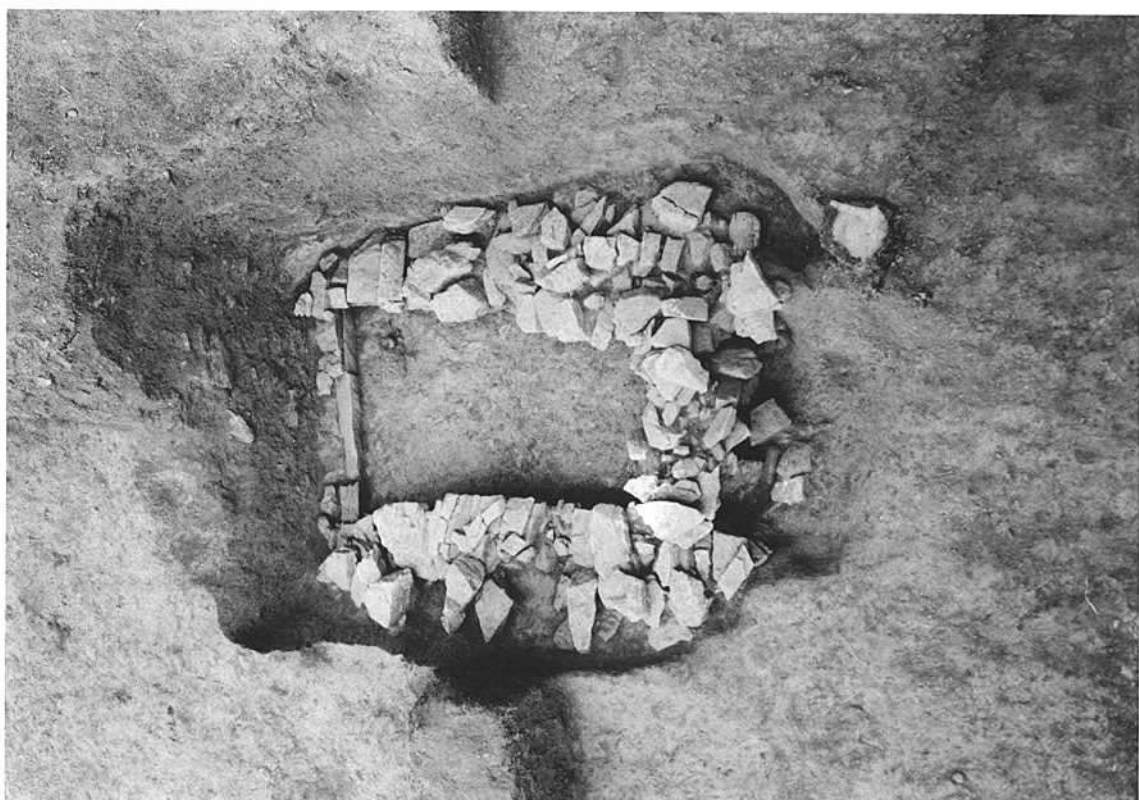
(2) 石室と墓壇(東から)



(1) 全 景



(2) 旧地表と石室



(1) 石室と墓坑(南から)



(2) 石室全景(北から)





(1) 石室全景(西から)



(2) 石室全景(東から)



(1) 石室全景 (北から)



(2) 石室玄門と側壁(南から)

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -Ⅲ-

昭和 47年 1 月 31 日

発行 福岡県教育委員会

福岡市西中洲6街区29号

印刷 株式会社 川島弘文社

福岡市舞鶴1丁目5番6号

九州縦貫自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

— Ⅲ —

(付 図)

1 9 7 2

福岡県教育委員会

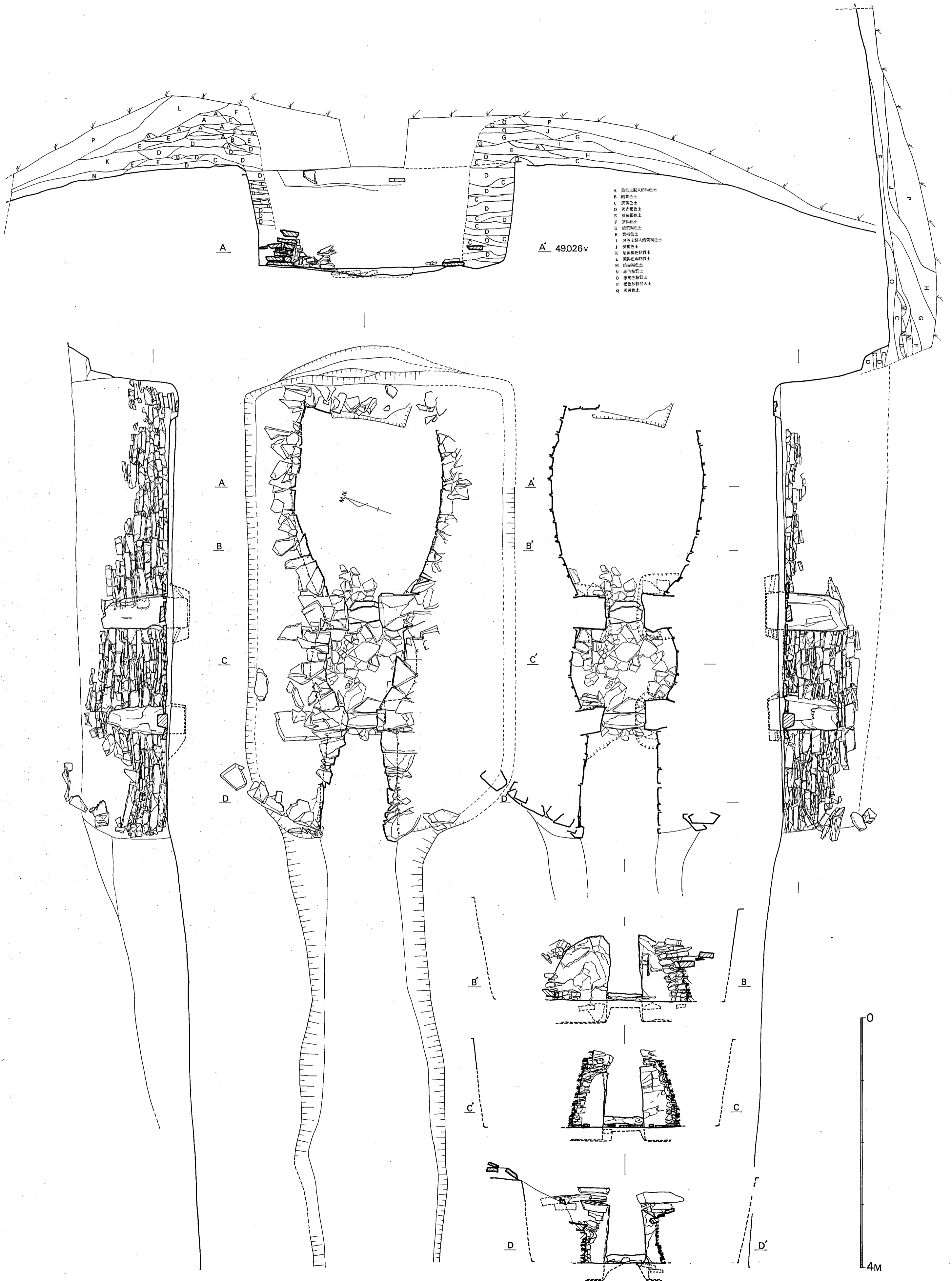


Fig. ① 鈴ヶ山1号墳石室実測図・墳丘断面図（縮尺 $\frac{1}{40}$ ）



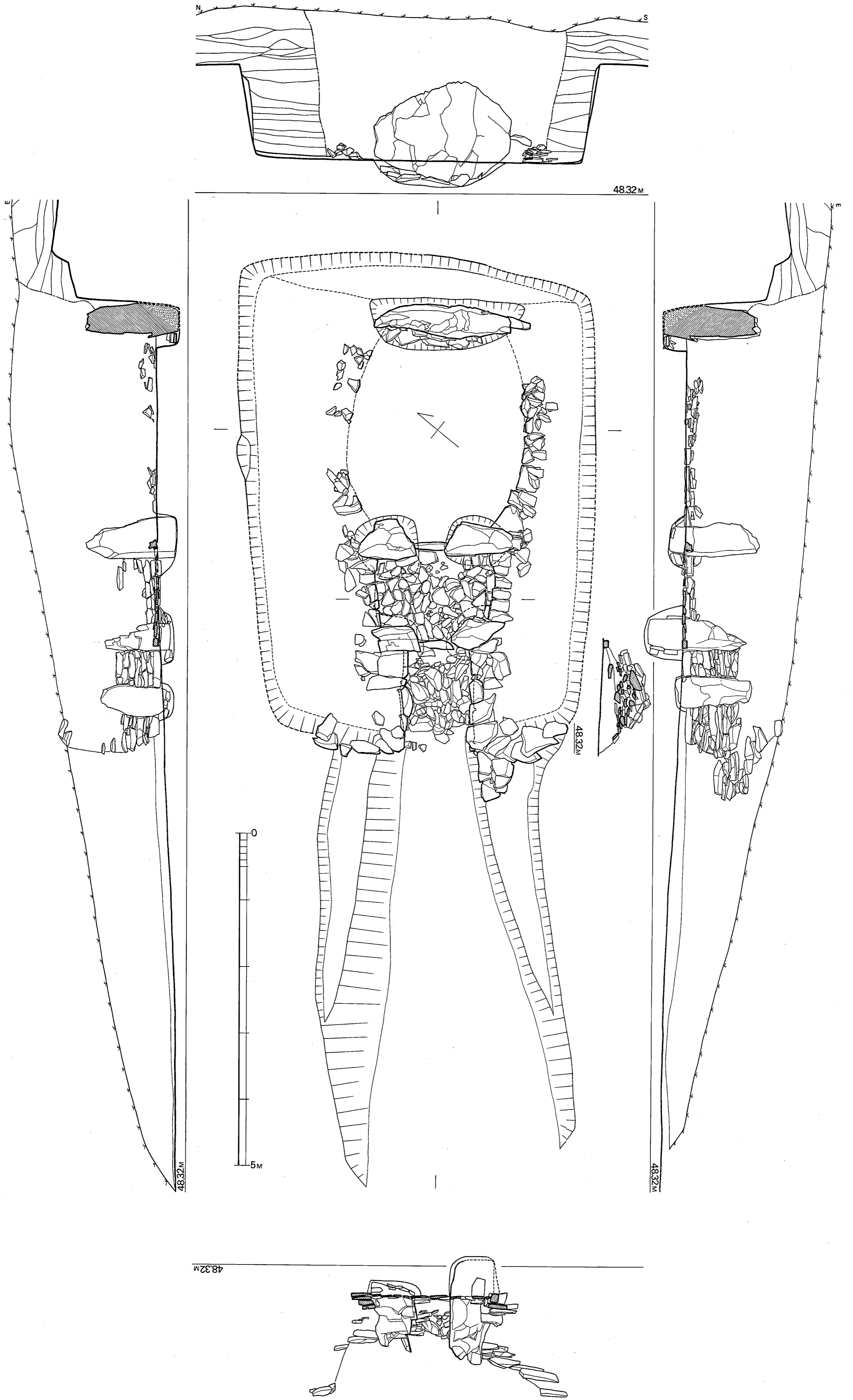


Fig. ② 鈴ヶ山2号墳石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )

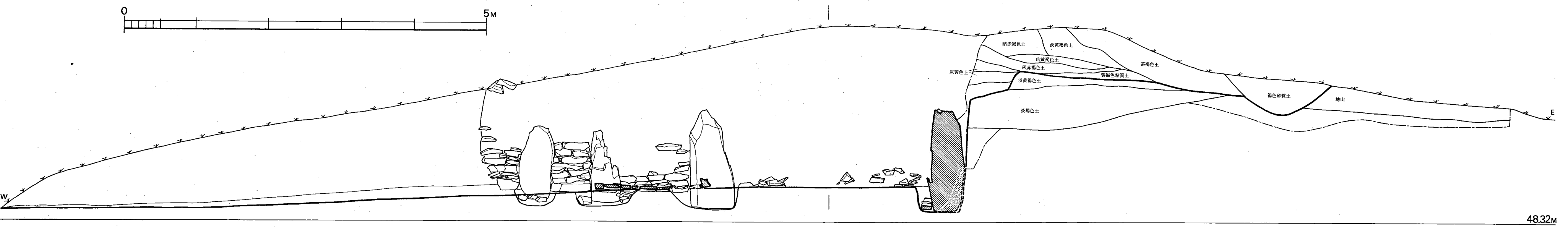
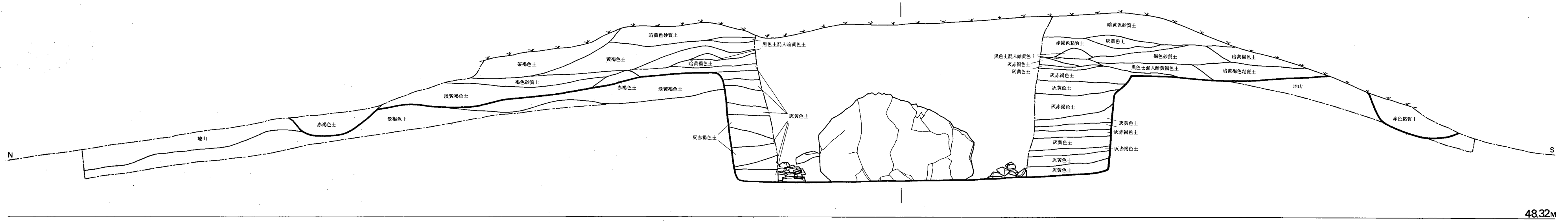


Fig. ③ 鈴ヶ山 2号墳墳丘断面図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )

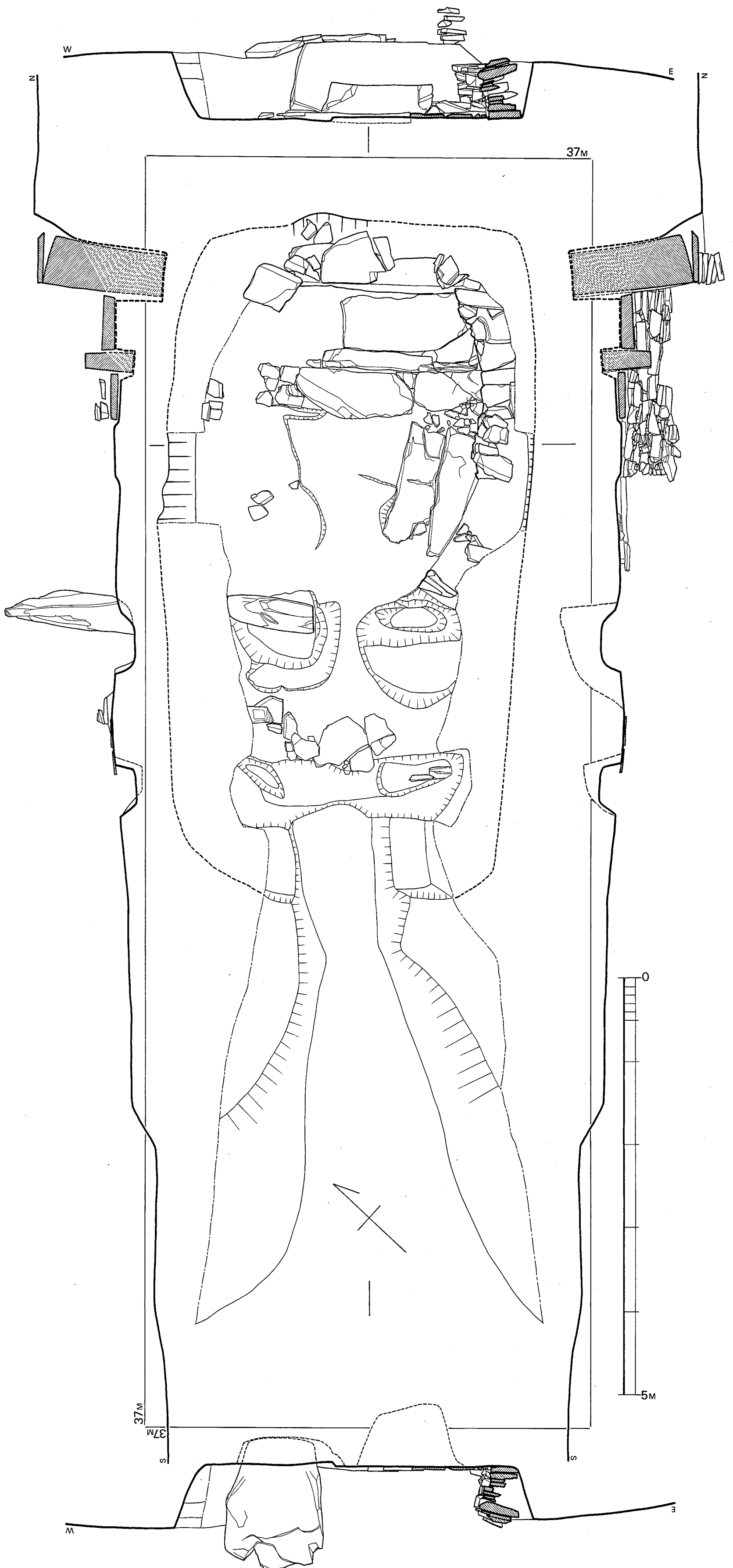


Fig. ④ 山の前1号墳石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )

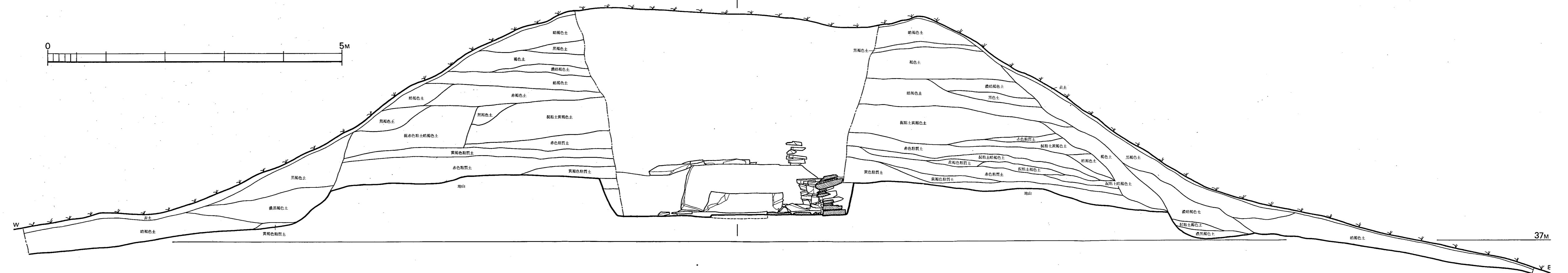
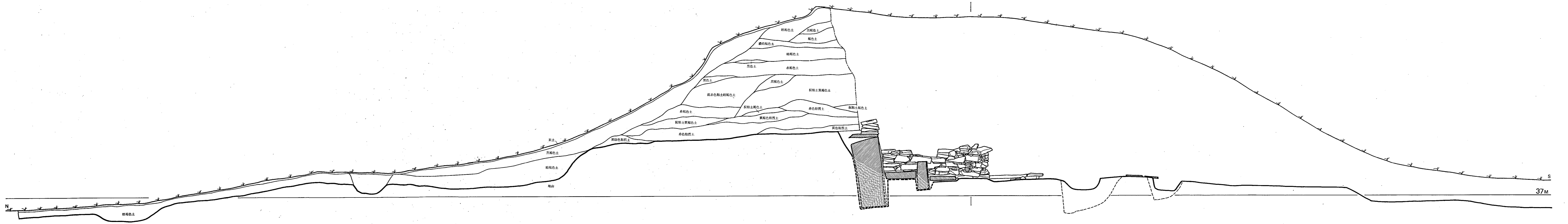


Fig. ⑤ 山の前1号墳墳丘断面図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )

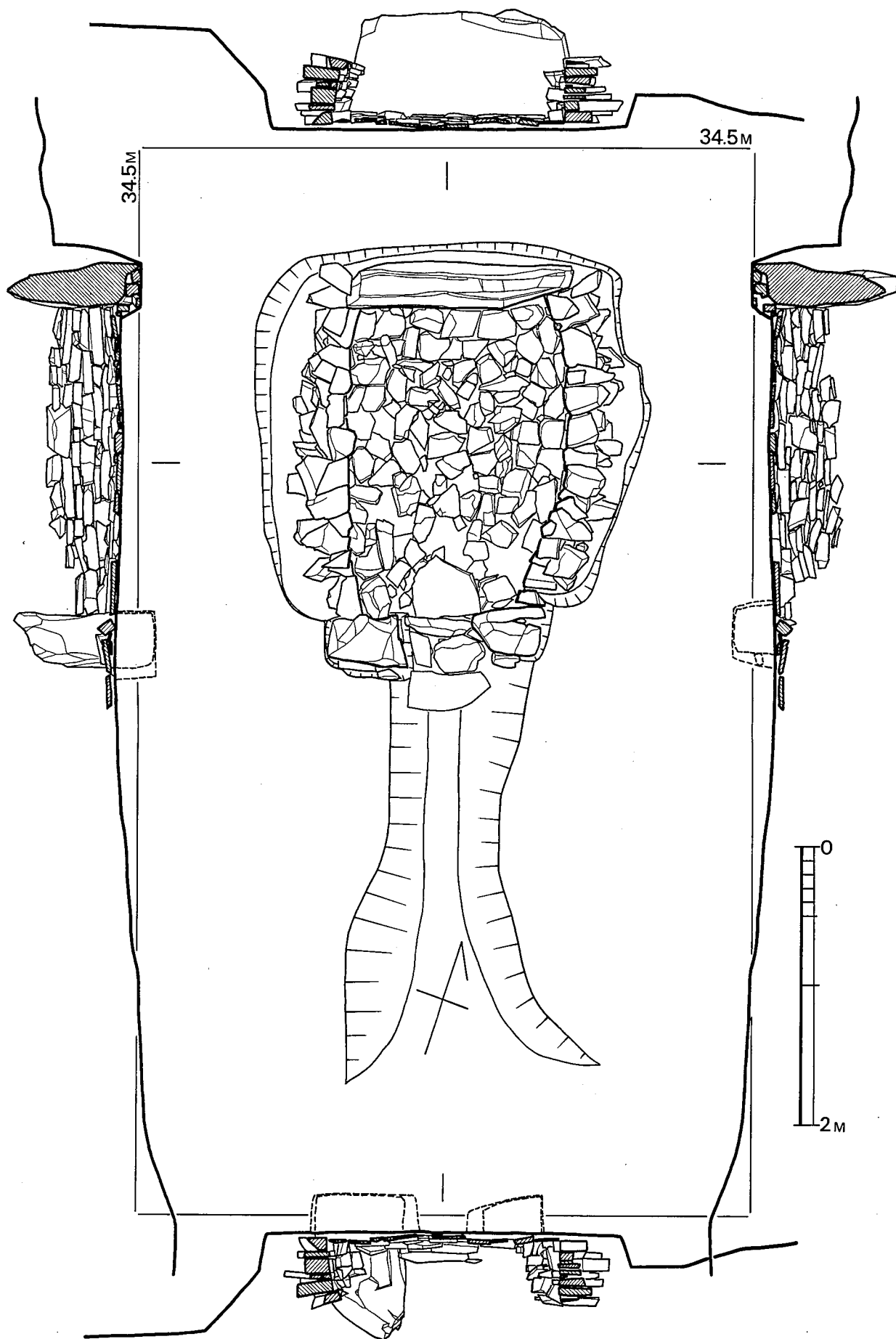


Fig. ⑥ 山の前2号墳石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )

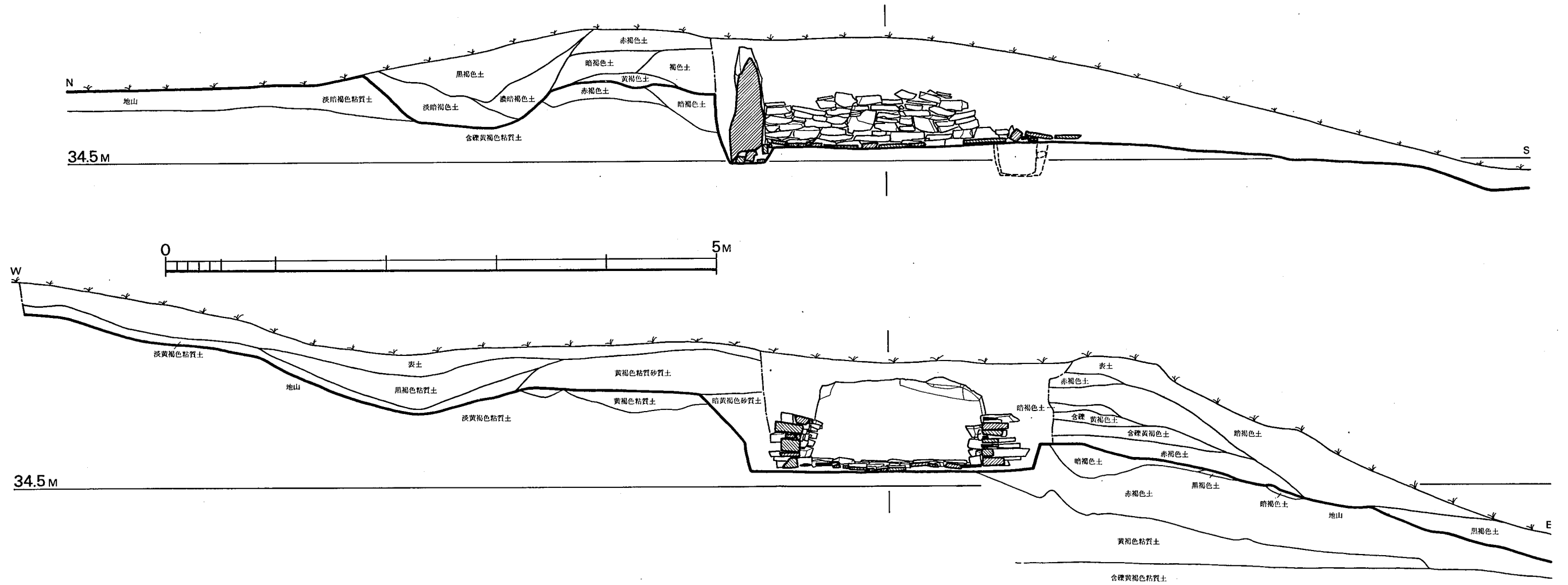


Fig. ⑦ 山の前2号墳墳丘断面図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )



Fig. ⑧ 山の前3号墳石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )

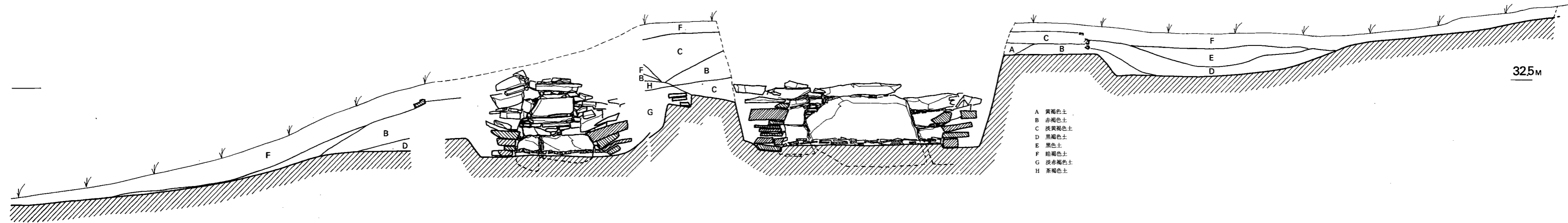


Fig. ⑨ 山の前3号墳墳丘断面図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )



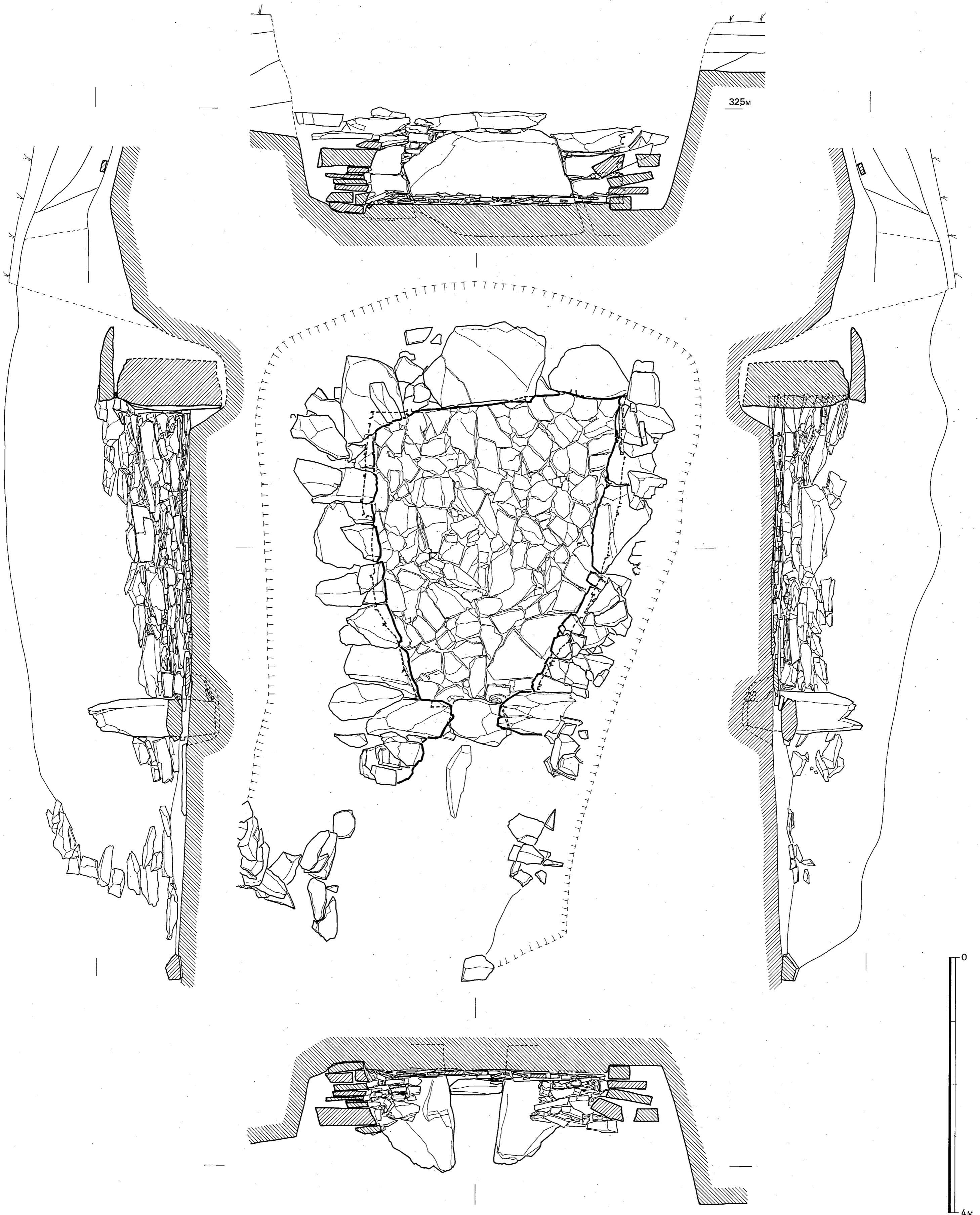


Fig. 10 山の前3号墳大石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )

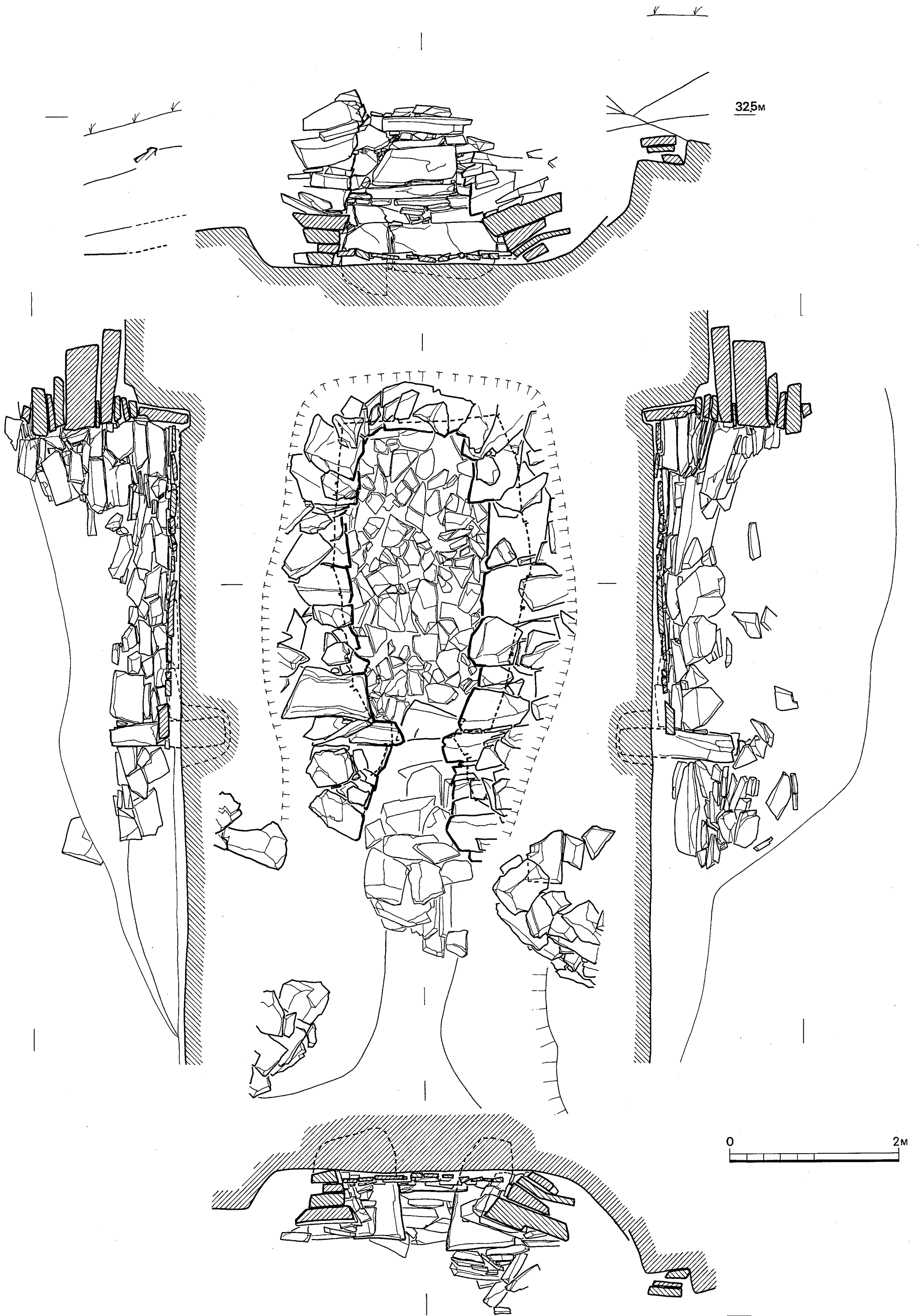


Fig. ⑪ 山の前3号墳小石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )

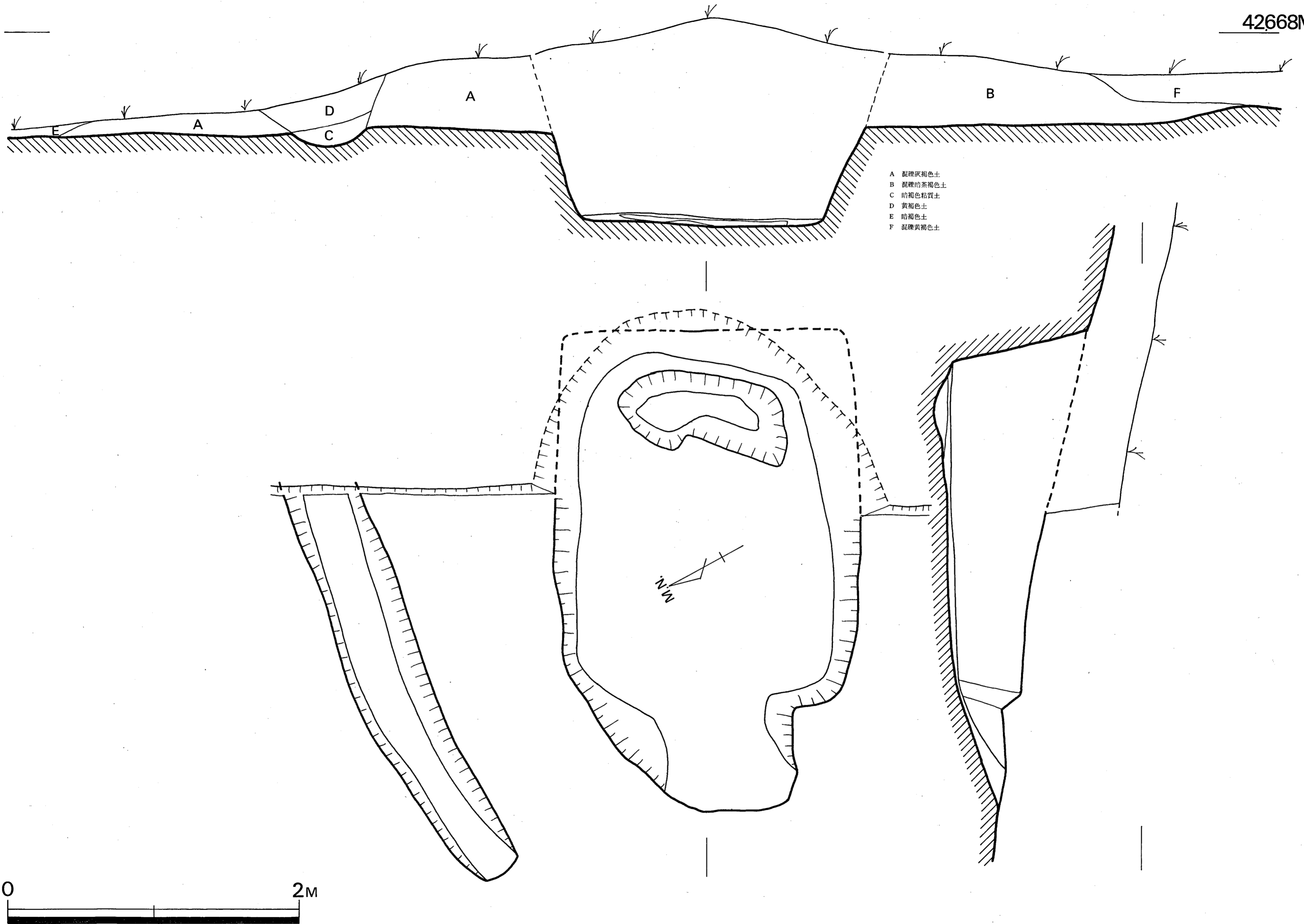


Fig. ⑫ 平原 1 号墳実測図 (縮尺  $\frac{1}{20}$ )

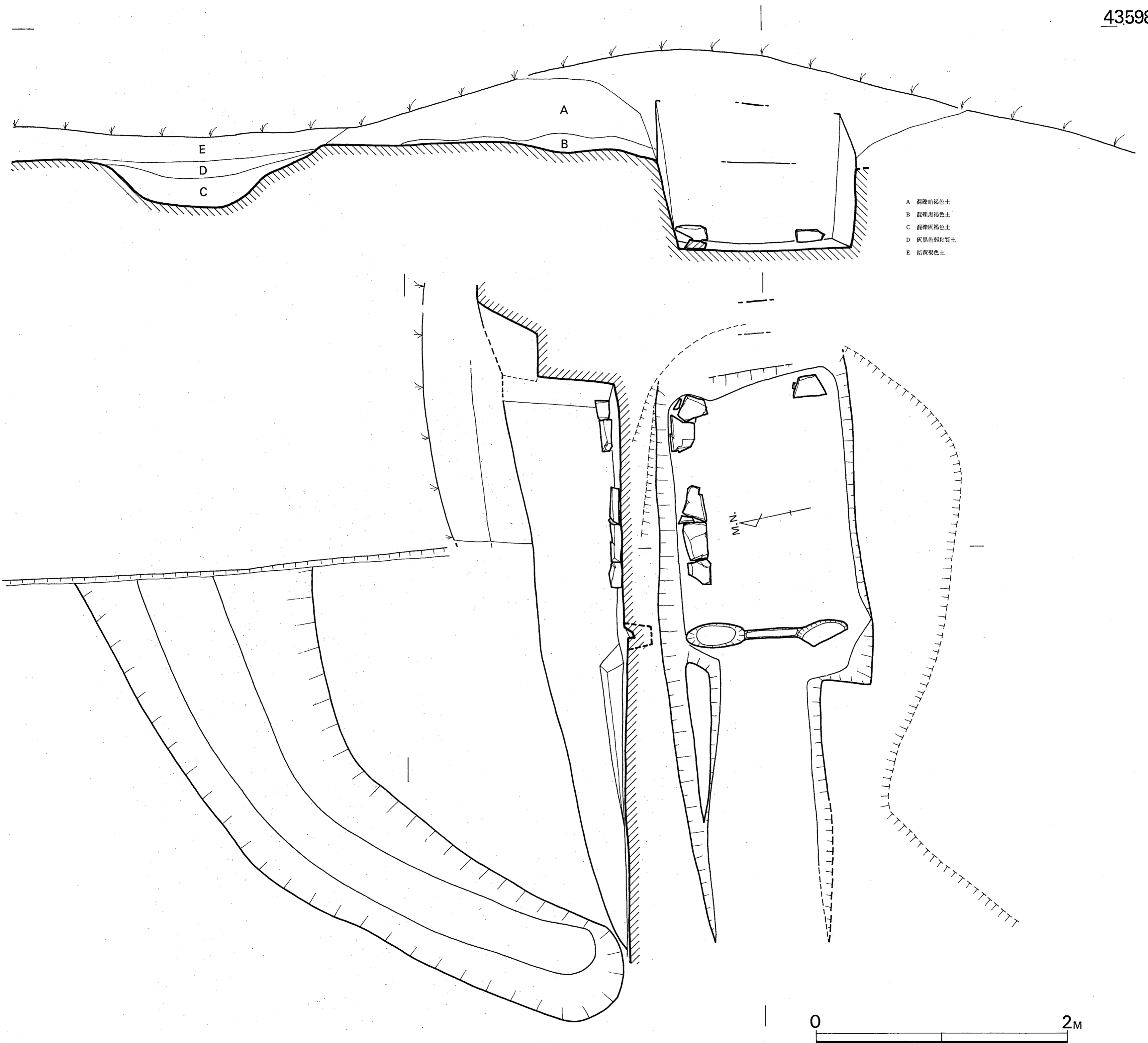


Fig. 13 平原 3 号墳実測図 (縮尺  $\frac{1}{20}$ )

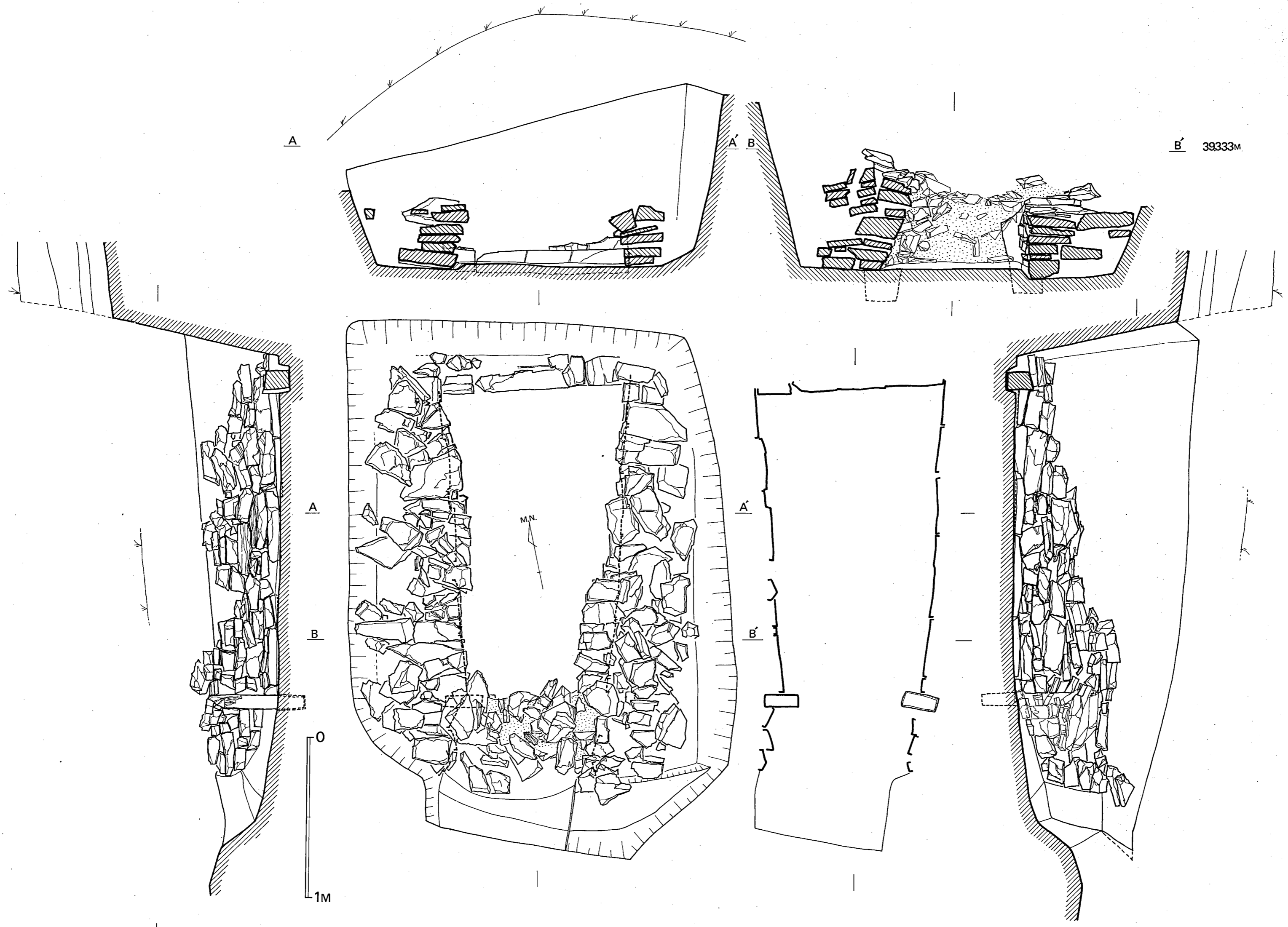


Fig. 14 平原 5 号墳石室実測図 (縮尺  $\frac{1}{20}$ )

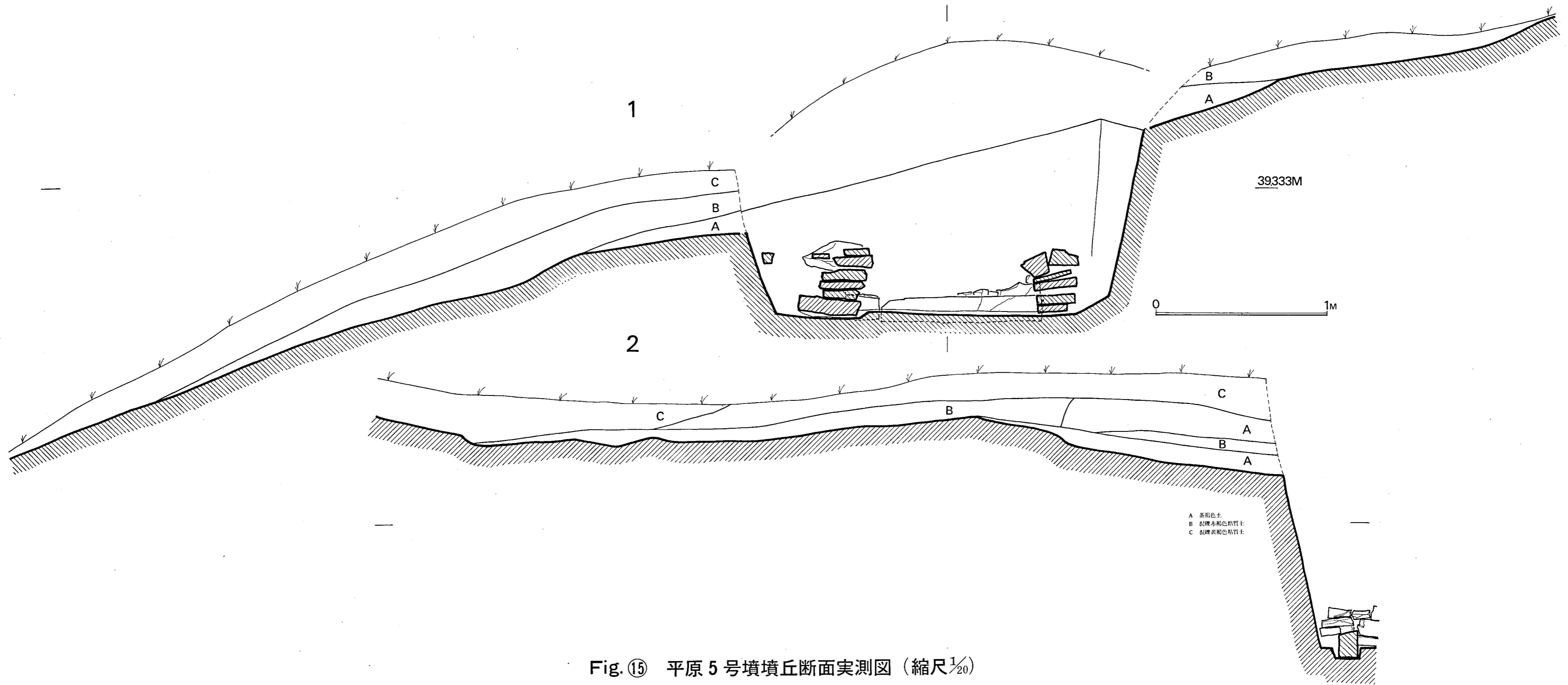


Fig. 15 平原 5 号墳墳丘断面実測図 (縮尺 $\frac{1}{20}$ )

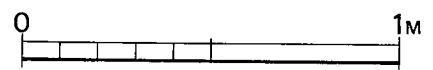
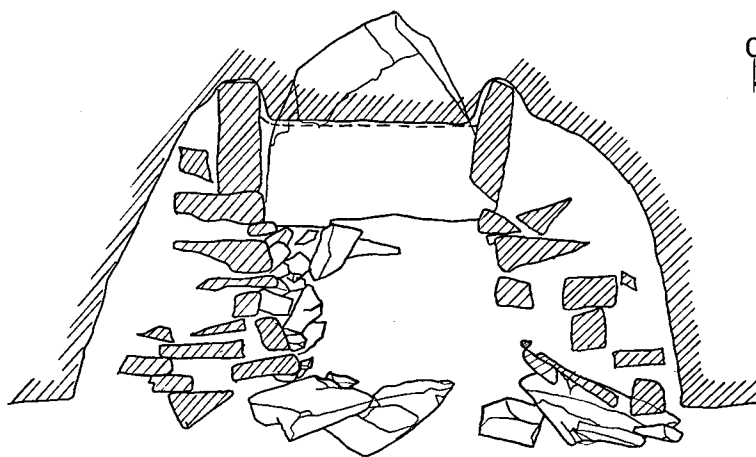
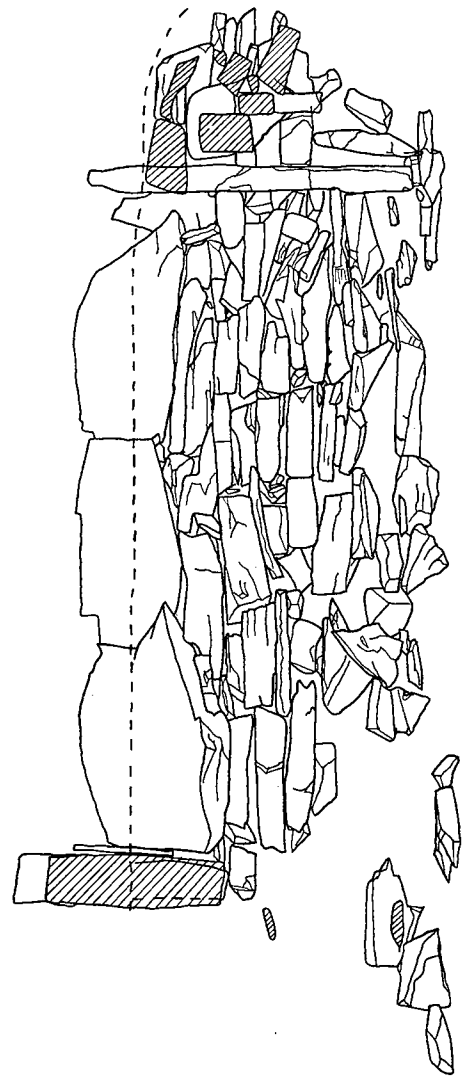
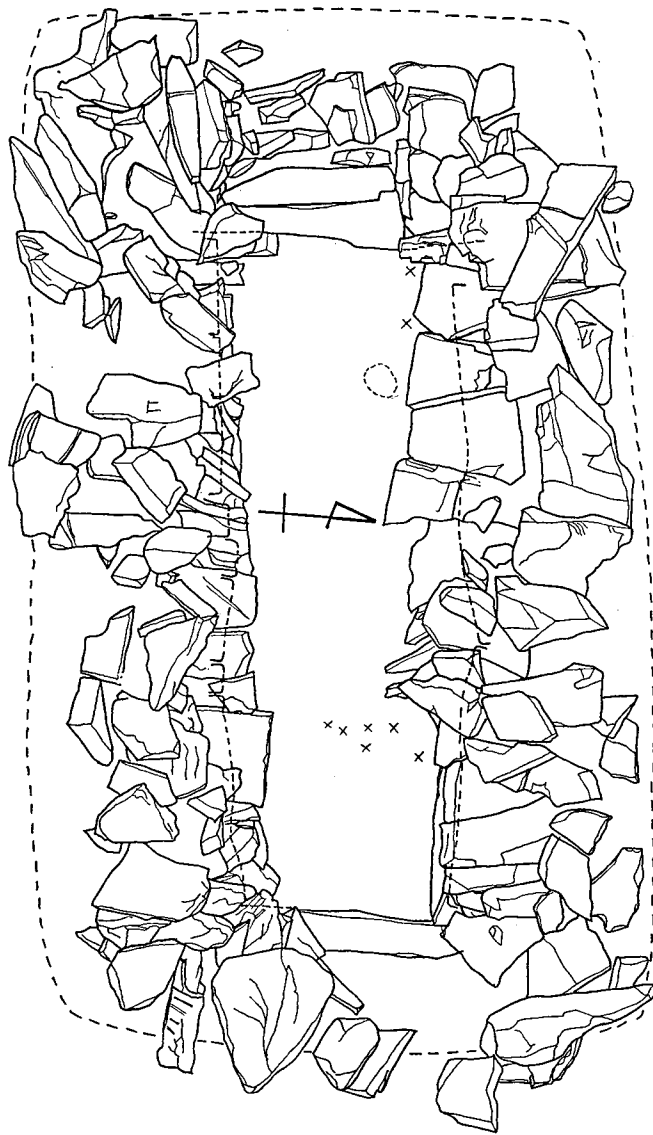
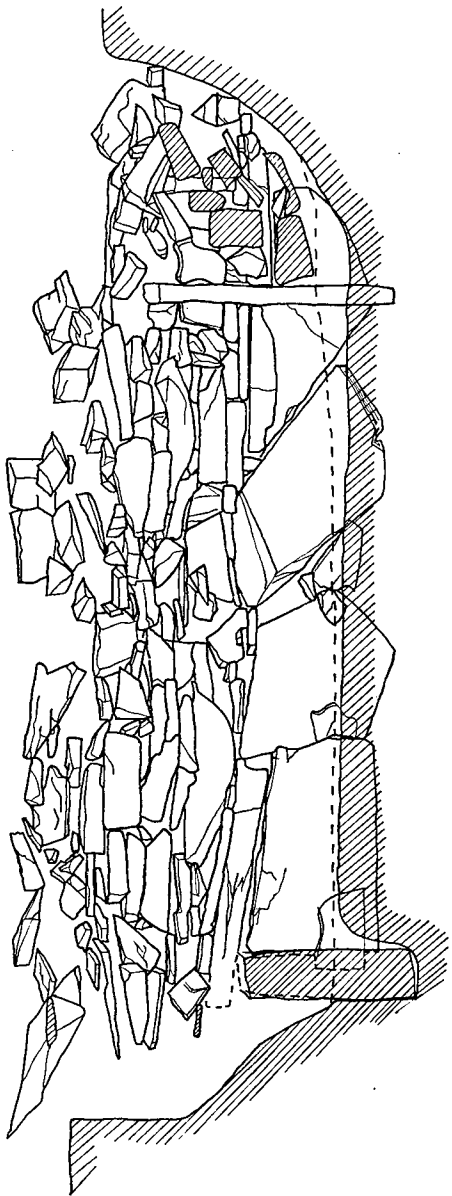
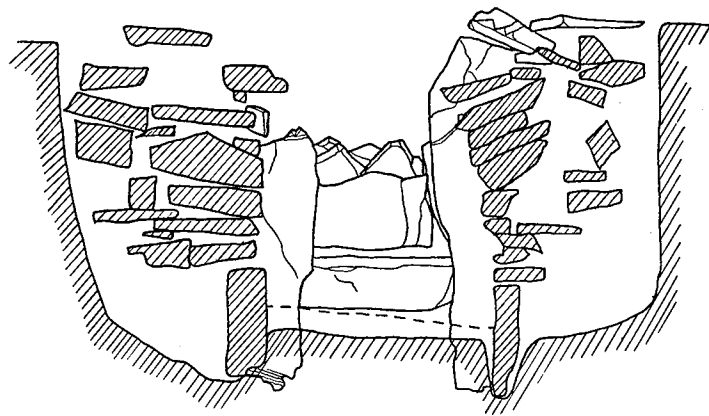


Fig. ⑩ 平原7号墳石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{20}$ )

## 付 図 目 次

- Fig. ① 鈴ヶ山 1 号墳石室実測図・墳丘断面 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )
- Fig. ② 鈴ヶ山 2 号墳石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )
- Fig. ③ 鈴ヶ山 2 号墳墳丘断面図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )
- Fig. ④ 山の前 1 号墳石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )
- Fig. ⑤ 山の前 1 号墳墳丘断面図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )
- Fig. ⑥ 山の前 2 号墳石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )
- Fig. ⑦ 山の前 2 号墳墳丘断面図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )
- Fig. ⑧ 山の前 3 号墳石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )
- Fig. ⑨ 山の前 3 号墳墳丘断面図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )
- Fig. ⑩ 山の前 3 号墳大石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{20}$ )
- Fig. ⑪ 山の前 3 号墳小石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{20}$ )
- Fig. ⑫ 平原 1 号墳実測図 (縮尺 $\frac{1}{20}$ )
- Fig. ⑬ 平原 3 号墳実測図 (縮尺 $\frac{1}{20}$ )
- Fig. ⑭ 平原 5 号墳石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{20}$ )
- Fig. ⑮ 平原 5 号墳墳丘断面実測図 (縮尺 $\frac{1}{20}$ )
- Fig. ⑯ 平原 7 号墳石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{20}$ )